

Annual Report
2015



京都大学
地域研究統合情報センター
年報



CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY

目次

はしがき	2
I 組織の概要	5
1. 沿革	6
2. 組織概要	8
1 運営組織	8
2 研究部門	9
3 図書室	10
4 運営委員会	11
5 協議員会	11
6 スタッフ一覧	12
3. 運営経費	13
II 研究活動の概要	15
1. 共同利用・共同研究拠点としての活動	16
1 共同利用・共同研究拠点	16
2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動	70
3 英国議会資料（BPP）	74
2. 情報資源共有化に向けた活動	75
1 地域情報学の構築に向けた活動	75
2 データベースや情報解析ツール等一覧	77
3. スタッフの研究活動	98
1 個人研究	98
2 外部資金による研究活動	129
4. シンポジウム・ワークショップ・研究会等	135
III 国際交流	147
1. 国外客員教員招へいプログラム	148
2. 学術交流協定	148
3. 国際ハブ形成	149
IV 広報・出版	151
1. 出版	152
1 CIAS叢書《地域研究のフロンティア》	152
2 CIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」	152
3 CIAS叢書サブシリーズ「相関地域研究」	153
4 CIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」	153
5 CIAS Discussion Paper Series	154
6 JCAS Collaboration Series	155
7 地域研究資料集	156
8 スタッフの刊行物	157
2. 情報発信	158
2014年度の記録	161

はしがき

この年報は、発足後9年を経過した京都大学地域研究統合情報センター（以下、地域研）の2014年度における活動をまとめたものです。

地域研は、全国の地域研究者コミュニティの要請に基づいて、2006年度に「全国共同利用施設（試行）」として発足しました。その後、2008年度に（試行）がとれて正式に全国共同利用施設、2009年度からは「共同利用・共同研究拠点」（以下、拠点）として活動を継続しています。

21世紀を迎え、世界が複雑化かつ多様化するにともない、国境や文化圏を越えるヒト・カネ・モノの量・速度が増大し、一地域における災害やテロなどの変動は直ちに周辺地域あるいは全世界に波及するようになってきました。このような地域を超えた課題に対処するため、対象地域名を冠さない研究組織としての地域研は、グローバルとローカルをリンクしながら地域をデザインする新しい地域研究を推進する中核的な役割を果たすことが期待されています。そのために、特定地域を対象とする地域研究組織との地域横断的および関連学問分野の研究組織との分野横断的な研究活動（相関型地域研究）、さらに情報学を駆使した地域研究情報の共有と分析により地域を多角的に捉える手法の確立（地域情報学）をミッションに掲げた研究活動を展開しています。この意味で地域研はユニークであると同時に、京都大学の地域研究の伝統である文理融合と学際型共同研究を通じて、地域研究者を有機的に束ねる研究組織となっています。

相関型地域研究を推進するためには、地域横断的かつ分野横断的な共同研究が不可欠です。地域研では、（試行）の段階から共同研究を活動の中心に据えてまいりました。共同研究は完全公募制とし、学外の有識者を交えた専門委員会による課題の設定と選考を行い、毎年春に開催される合同発表会において、全研究課題の成果公表と検証を実施しています。2014年度は、「〈地域〉を測量（はか）る — 21世紀の『地域』像」、「地域情報学の展開」、「災害対応の地域研究」、「地域研究方法論」の4プロジェクトのもとで、計40件の共同研究を実施し、のべ300名以上の共同研究員が参加しました。相関型地域研究の成果として「相関型地域研究」シリーズの発行を開始し、2014年度は第1巻『記憶と忘却のアジア』を刊行しました。

さらに地域研は、地域研究関連組織が加盟する「地域研究コンソーシアム（以下、JCAS）」の事務局を担っており、その加盟数は2004年度JCAS発足時の46組織から98組織へと拡大しました。JCASのプロジェクトや公募の情報を発信する「地域研究コンソーシアム・メールマガジン」は発刊以来週刊頻度で配信し続け、シンポジウムや研究会の案内、JCAS関連組織プロジェクトや公募情報など、地域研究コミュニティの発展に貢献しています。2014年度に地域研が共催・支援した研究活動や集会の数は70件以上にのぼります。研究対象地域や研究者の世代が多様化するなかで、さまざまな組織やプログラムに所属する若手研究者を共同研究員として数多く迎えている点が、大きな特徴となっています。また大学附

置研究センターであることを活かし、ポスドクや若手研究者に対して研究活動への参加や運営経験の機会を提供し、地域研究の専門家としての実践的な育成にも貢献しています。

地域情報学は、地域研究者・研究組織などが収集・所蔵している文字・画像・動画・音声などの多様な地域研究資源のデータベース化と共有の実現およびデータ分析や知識発見の支援を目的としています。地域情報学の初期の段階において、地域研では、所蔵資料を中心に、公開・非公開を含めて50ほどのデータベースを構築しました。また、その過程で蓄積したデジタル化やメタデータ作成に関する技術や経験を研究コミュニティと共有するために、講習を開催しています。さらに、ネットワーク上に分散している他の研究組織のデータベースとの共有を目指した「地域研究資源共有化データベース」の運用も開始しています。「地域研究資源共有化データベース」は、地域研、京都大学東南アジア研究所、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館の計51データベースの共有化を実現しており、地域研究においては最大規模のデータベース連携と言えます。

このような地域情報学の成果と2009年に実施した外部評価で得た助言をもとに、2010年度より「地域情報学プロジェクト」を立ち上げ、相関型地域研究と情報学を両輪とする独自の研究を積極的に展開しております。本プロジェクトの情報基盤として、個人や小規模研究室などが収集した貴重な地域研究資源のデータベース化と公開を支援するMyデータベース、そこに蓄積されたデータの高度利用を支援するREST型API、さらにデータを空間的・時系列的に可視化・分析する時空間情報処理ツールなどを開発・公開しています。森林写真・儀礼の映像・雑誌記事テキスト・僧侶の移動などの地域研究に関する多様なデータベースが、Myデータベースにより構築されています。またREST型APIを利用して、学術書に付与したQRコードからMyデータベースに蓄積された画像・動画データを表示するマルチメディア刊行物や、イスラム系総合月刊誌『カラム』の画像画面とテキスト画面を連動させた新しいユーザインタフェースなどの開発も進んでいます。新しい動きとしては、現地からのオンライン情報を地図上に表示する「情報マッピング」など、最新の可視化技術を利用したデータベースの開発も進行中です。また、サイバー空間、クラウド、ビッグデータなど、急速な進化と変容を遂げているネットワーク社会に対応した次世代地域研究データベースをめざし、セマンティックWeb、テキストマイニング、人工知能などの技術を駆使した情報システムの研究も始まっています。このように、地域情報学プロジェクトは深化・開花する時期を迎えています。

地域研は、拠点としてのミッションと京都大学が掲げる「先端的、独創的、横断的研究」を着実に推進してきたと自負しております。運営交付金や人員の削減、大学ミッションの再定義を受けた本学教育研究組織改革などにより、12名の定員と1名の戦略定員が全力で運営

してきた地域研の今後は極めて厳しいものとなりつつあります。しかしながら、この難局を乗り切るために、地域研の拠点としての強み・特徴・達成目標を明確化し、これまでに開発した情報システムを駆使した地域研究資源の積極的な発信・活用および研究成果の創出に全力を注ぎ、拠点として、学術への貢献と社会的責務をスタッフ一丸となって果たす所存です。そのためにも、大型予算などの獲得は喫緊の課題であり、東南アジア研究所やアジア・アフリカ地域研究研究科などの学内地域研究関連教育研究組織およびJCAS加盟地域研究関連組織との緊密な協力関係のもとに、地域を越えた課題を軸にした独創的な研究活動の展開が一層重要となります。引き続き学内外からの暖かいご理解とご支援を仰ぎつつ、地域研にたいする皆さまのご支援とご協力を重ねてお願い申し上げます。

2015年6月

センター長 原 正一郎

I. 組織の概要



- 1. 沿革
- 2. 組織概要
 - 1 運営組織
 - 2 研究部門
 - 3 図書室
 - 4 運営委員会
 - 5 協議員会
 - 6 スタッフ一覧
- 3. 運営経費

1 沿革

京都大学地域研究統合情報センター（以下、地域研）は、地域研究に関わる全国の研究組織や研究者のさまざまな共同と協力、地域研究の推進と国内外の研究組織とのネットワーク化を強く求める多くの研究諸組織による尽力を背景として生まれた。設置に至る経緯の詳細は『年報』第1号（2006年度）および第2号（2007年度）に記したため、以下ではその概略を述べるにとどめ、設置されてから2014年度までの経過を中心に沿革を紹介する。

1994年、地域研究企画交流センターが世界諸地域の地域研究に関する共同研究の推進、研究成果の発信を目的に国立民族学博物館に設置された。この民博地域研が現在の地域研の前身である。

国立大学法人化にともない、国立民族学博物館が人間文化研究機構に統合されたため、地域研究の全国的な再編に関わる問題は同機構内に設けられた「地域研究推進懇談会」で検討されることになり、①政策的・社会的ニーズをふまえた地域研究の推進、②学術的な研究のネットワーク化支援をめざした人間文化研究機構への「地域研究推進センター」の設置、③情報・資料の共有化をめざした京都大学への「地域研究統合情報センター」の設置からなるわが国の地域研究推進体制の整備方針がまとめられた。

この方針に沿って、京都大学から「地域研究統合情報センターの新設」が2006年度特別教育研究経費の要求事項として提出され、科学技術学術審議会学術分科会の研究環境基盤部会および総合科学技術会議でのヒアリングを経て、2006年4月、京都大学に全国共同利用施設（試行）として設置されたのが地域研である。前身である国立民族学博物館が大学共同利用機関として設置されていたため、地域研は当初から全国共同利用機能を備えた研究組織として制度設計が図られていた。その後、2007年8月に開催された科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会国立大学法人運営費交付金の特別教育研究経費に関する作業部会のヒアリングを経て「正式に全国共同利用の組織とすることが適切である」との結論が得られ、2008年度から（試行）を外して正式の全国共同利用施設として認められた。

この2008年度は、全国の国立大学附置研究所や学内研究施設としての研究センターのあり方をめぐっ

て、科学技術・学術審議会で検討が始められた年でもあった。その検討結果にもとづいて、2008年7月には学校教育法施行規則が改正され、国公立大学の研究施設を文部科学大臣が共同利用・共同研究拠点として認定するという新たな制度が導入されることとなった。大学に附置された研究所と大学が設置する研究センターというこれまでの枠組みに対して、文科大臣が認定する共同利用・共同研究拠点としての研究所・研究センターおよび大学が設置する研究所・研究センターとに区分するという制度の導入である。地域研は、この制度変更に対応せざるをえなくなり、申請の準備に着手した。申請にあたっては、研究者コミュニティからの支援ないしは要望が必要となり、関連研究組織への依頼を行うとともに、申請に至るには学内でのさまざまなステップを経る必要があった。新たな制度のもとでの拠点認定は2009年度になってからであったが、地域研は全国共同利用施設として認められたばかりであったため、新たにヒアリングをうけて、2009年6月、正式に共同利用・共同研究拠点として認定されることとなった。2006年度の地域研発足に向けた関係諸組織の支援、2008年度の全国共同利用施設認定への支援、2009年度の拠点認定への支援というように、ほぼ2年ごとに組織編成のための申請・審査が繰り返された。そのたびに、関連する諸組織の支援に支えられたことで地域研の今日があるといえよう。

上記のように、何度かの制度面での変遷があったものの、地域研の研究組織は当初から全国共同利用施設として設計されていたため、発足当時から現在に至るまで組織面での大きな変更はない。研究組織としての活動は、「地域相関」「地域情報資源」「高次情報処理（地域情報学）」の3つの研究部門によって設立当初から推進されている。国内客員研究部門は2007年度から客員教員の配置が始まった。国外客員研究部門への教員配置は2008年度から開始し、国際交流委員会を通じて公募されている。また、さまざまな外部資金によって若手研究者を研究員として採用し、その育成を図っている。

地域研発足前後の大きな課題は、地域研究企画交流センターが所蔵していた「京セラ文庫『英国議会資料』」の移転であった。京都大学は、その所蔵施設を附属図書館の地下書庫に新たに設置して、地域研が

その管理と利用を担うことになった。施設の整備や図書書の整理が終了し、京セラ文庫『英国議会資料』の開設式が挙行されたのは2006年11月21日である。その後、学内資金によって同年度内に同資料の19世紀分のウェブ版を、2007年度には20世紀分のウェブ版を導入して、全国の研究者・学生に開かれた共同利用型の資源としてこの資料を活用できる体制を整えることができた。さらに、人間文化研究機構との共同研究や学内資金により、原本の地図・図版などのデータベース化も進めた。

地域研究企画交流センターから継承したもう一つの課題は、地域研究体制の再編・整備の検討の過程で生まれ、全国の地域研究関連組織の連携・共同を目的として2004年に発足していた「地域研究コンソーシアム（JCAS）」の運営であった。地域研は、同センターが担っていたコンソーシアムの事務局機能を継承し、設立以来その事務局を務めて現在に至っている。事務局の運営は地域研の全国共同利用機能の一つとして位置づけられており、地域研究コンソーシアムが実施する研究会、シンポジウム、若手研究者育成などさまざまな事業を全国の地域研究関連組織と共同して実施している。ほぼ週刊頻度で「地域研究コンソーシアム・メールマガジン」を配信し、地域研究コンソーシアムの学術誌『地域研究』を2007年度から再刊し、その発行にも尽力している。また、2011年度に発足した「地域研究コンソーシアム賞」の設置にも貢献した。

稲盛財団が京都大学に寄贈した「稲盛財団記念館」の2階に、吉田キャンパスの仮住まいから全研究スタッフと支援スタッフが移転し、事務担当者が東南アジア研究所等事務室（同記念館1階）に移転したのは2008年12月である。ここは、東南アジア研究所やアフリカ地域研究資料センター、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が所在するところともなり、地域研の移転にもなって地域研究に関連する学内の主要な組織が一カ所に集まることとなった。全国の地域研究の推進を担う地域研としては、この移転を機会に一層の学内協力体制を整え、同記念館を共同利用・共同研究の拠点施設として活用できるようになった。

共同利用・共同研究拠点化に対応し、共同利用研究における公募審査法や成果評価法の透明性を高めるとともに、より適正な外部評価を受けるべく、2009年度には内規を含めて委員会の位置づけなどを明確化した。これにより、2010年度より開始された共同利用研究が、地域研の拠点ミッションに沿い、より実り多いものとなることを企図した。さらに、2009年度末

に実施した外部評価の結果を受け、2010年度から相関型情報学と情報学を両輪とする「地域情報学プロジェクト」を5年計画のセンター内プロジェクトとして発足させた。設立から5年を経て、地域研ならではの研究活動成果を発信する体制をようやく整えるに至った。

2014年度の成果としては、相関型地域研究の成果として「相関型地域研究」シリーズの発行を開始したこと、「アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会（CELAO）」の開催等を通じてラテンアメリカに関する世界との研究ネットワークの形成を進めたことが挙げられる。また、地域研究資源のデータベース化と公開を支援するMyデータベース、そこに蓄積されたデータの高度利用を支援するREST型APIなどの情報システムの改良を進め、さらに「災害関連データベース」や「仏教徒社会の時空間マッピング・データベース」などについても一層の発展をみた。地域研は、京都大学が全学的に掲げる「先端的、独創的、横断的研究」の推進に寄与しつつ、共同利用・共同研究拠点として着実な歩みを重ねているといえよう。

2 組織概要

1 運営組織

地域研究統合情報センター（地域研）は、「地域研究における情報資源を統合し、相関型地域研究を行うとともに、全国の大学その他の研究機関の研究者の共同利用に供すること」（京都大学地域研究統合情報センター規程第2条）を目的に設置された。この設置目的を遂行するために、京都大学は、発足前の地域研設置準備委員会において以下のような設置理念を掲げている。

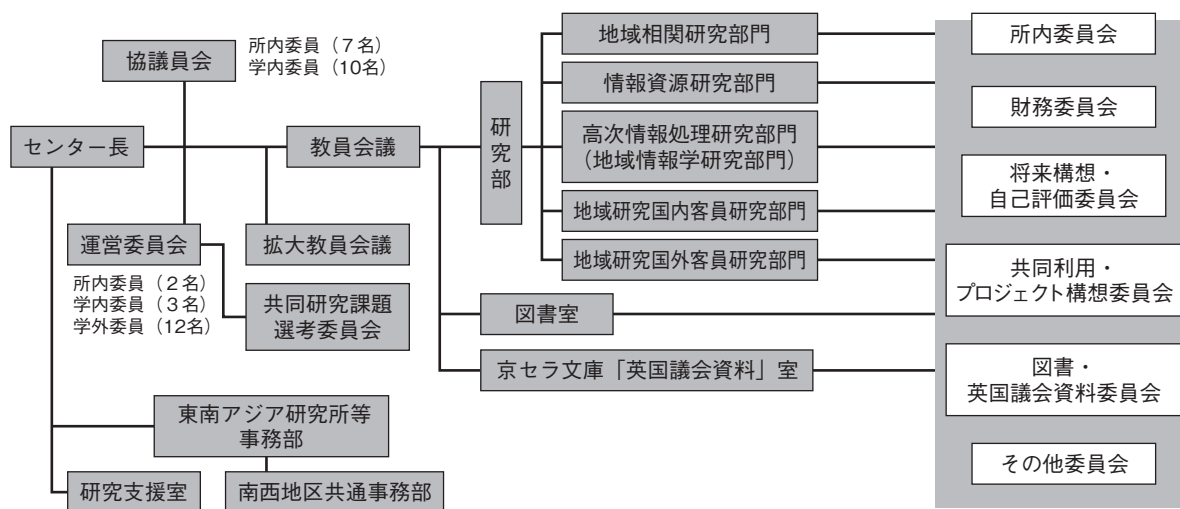
1. 京都大学の基本理念ならびに近年における地域研究の発展を踏まえ、国内外の地域研究への学術的社会的要請に応えるために、世界の多様な地域を対象とした地域研究の研究推進・情報拠点として地域研究統合情報センターを設置する。
2. 京都大学は、「全国共同利用研究を使命とする附置研究所や研究センターの活動を通じて、全国の研究者に開かれた研究拠点としての機能をさらに発展させる」という中期目標に沿って、地域研究統合情報センターを全国共同利用施設として設置し、国内外の地域研究コミュニティに開かれた研究拠点とする。
3. 京都大学がアジア・アフリカ地域等を対象にこれまで築いてきた地域研究の蓄積と伝統に、あらたに地域研究統合情報センターの研究活力を加えて

地域研究の一層の推進を図る。

これらの理念に沿って、地域研は後述する3つの研究部門、2つの客員研究部門および図書室からなる研究組織で発足した。また、組織運営の全般にわたる議決機関・協議機関として、協議員会、運営委員会、教員会議、拡大教員会議が設けられている。

独立部局としての意思決定を担う教員会議（教授・准教授・助教により構成）のみならず、組織運営にとっての重要事項を審議決定する、学内関連部局から選出された協議員と地域研教員からなる協議員会、および2010年4月より共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」に認定されたことに伴う、共同利用・共同研究拠点の企画・運営を担う学内外の地域研究者と地域研教員で構成される運営委員会が、地域研の活動全般にわたる審議機関として組織されている。

また、地域研は、京都大学における他の地域研究専門部局である東南アジア研究所や大学院アジア・アフリカ地域研究研究科との共同・協力のもとに運営されており、これら両部局から選出された兼任教員7名を加えた拡大教員会議を組織し、共同利用・共同研究拠点やその他の研究活動あるいは部局間の連携に関する審議・検討を行っている。



図I-1 京都大学地域研究統合情報センター組織図

独立した事務部はなく、東南アジア研究所、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、アフリカ地域研究資料センターおよびこころの未来研究センターとともに5つの部局合同の事務部として東南アジア研究所等事務部が設置されており、地域研を担当する再雇用職員が配置されている。

なお、全国の地域研究関連組織の連携・協力を推進するために、地域研は、2004年に発足した地域研究コンソーシアムの事務局を務めており、その事務局を担う教員・事務補佐員を措置している。この他、研究活動や運営に関わるセンター内委員会を設けて業務の分担体制をとっている。

2 研究部門

地域研は、設置目的に沿って3つの研究部門と2つの客員研究部門を設置している。各研究部門には、特定の地域を対象に研究する地域研究者と情報学的手法を応用して地域研究に迫ろうとする研究者が配置され、各スタッフが対象としてきたそれぞれの地域に関する研究を深化するとともに、共同研究を通じて、相関型地域研究の推進や地域情報資源の共有化、地域情報学の構築に向けたさまざまなコラボレーションを推進している。

1. 地域相関研究部門

グローバル化の進展のもと、地域間の比較や地域横断的な課題設定による地域研究（相関型地域研究）の必要性が高まっている。この部門では、国内外の地域研究機関との連携を強化し、地域間の比較研究を軸にした共同研究を推進するとともに、多様な媒体を利用した研究成果の公開を行う。教授2名、准教授2名、助教1名が配置されている。

教授 押川 文子	南アジア現代社会研究
教授 Wilhelmus Adrianus de Jong	熱帯林管理、自然資源管理
准教授 帯谷 知可	中央アジア研究、中央アジア近現代史
准教授 村上 勇介	ラテンアメリカ地域研究、政治学
助教 福田 宏	中央ヨーロッパ地域研究、近現代政治史

2. 情報資源研究部門

多様な形態を含む地域研究関連情報を活用する地域研究では、情報資源の概念を深化させ、地域研究コミュニティと研究対象社会の双方がともに情報資源を共有できるシステムの構築が求められている。この部門では、各地域の情報資源の体系的な収集、その蓄積・加工・発信方策の検討、地域研究情報資源の横断的活用に関する研究を行い、地域情報資源の分

散型共有化システムを開発する。教授1名、准教授2名、助教1名が配置されている。

教授 貴志 俊彦	日中関係史、東アジア情報・通信・メディア史研究、移民研究
准教授 西 芳実	東南アジア地域研究、多言語・多宗教地域の紛争・災害対応過程
准教授 山本 博之	マレーシア地域研究、イスラム教圏東南アジアの現代政治
助教 谷川 竜一	アジア近現代都市・地域空間論、建築史・都市史

3. 高次情報処理研究部門

地域研究に関する多岐・多様な情報資源を対象に、情報処理の高度化や高精度化に関する研究を行うとともに、情報学的手法を導入して、情報学と地域研究のコラボレーションによる新しい研究パラダイムの確立をはかり、学際領域としての地域情報学の構築を推進することを目的としている。教授2名、准教授1名、助教1名が配置されている。

教授 原 正一郎	情報学
教授 林 行夫	東南アジア民族誌学、宗教と社会の地域研究
准教授 柳澤 雅之	農業生態学、ベトナム地域研究
助教 亀田 克宙	情報学

4. 国内客員研究部門および国外客員研究部門

相関型地域研究の推進、地域情報資源の共有化、地域情報学の構築のためには、国内外の研究機関との協力・共同が不可欠となる。国内客員研究部門では、以下の教授2名、准教授2名が就任している。

教授 有川 正俊	地理空間情報技術、 (東京大学空間情報科学研究センター教授) 地図学、データベース
教授 幡谷 則子	社会学、市民社会、 (上智大学外国語学部教授) 資源開発

准教授 末近 浩太
(立命館大学国際関係学部准教授)

中東地域研究、
国際政治学、比
較政治学

准教授 渡邊 英徳
(首都大学東京システムデザイン研究科准教授)

情報学、芸術
工学、デザイン

国外客員研究部門では、2014年度招へい予定者が都合により取り止めとなった。

3 図書室

地域研図書室は、京都大学図書館機構に属する部局図書室として、2007年3月に、工学部4号館（現総合研究2号館）地下1階に開設され、地域研の稲盛財団記念館への移転に伴って2008年12月に同記念館1階に移転した。所蔵資料は書庫およびマイクロ資料室（東南アジア研究所と共用）に保管され、受付カウンターは共通資料室（東南アジア研究所と共用）内に置かれている。

地域研図書室は、共同利用・共同研究拠点としての機能を高めるべく、またセンター内部で進めるプロジェクト（相関地域研究プロジェクト、地域情報学プロジェクト、災害対応の地域研究プロジェクト、地域研究方法論プロジェクト）を支援するために、京都大学における地域研究関連部局、特に東南アジア研究所および大学院アジア・アフリカ地域研究研究科と連携しつつ、所蔵資料の拡充に努めている。

図書室の運営は図書BPP委員会が担当している。また、地図資料の共同管理や共通資料室・マイクロ資料室の運用について検討するため、東南アジア研究所と共同で共通資料室運営委員会が設置されている。

図書室のホームページ：

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/library>

1. 所蔵資料

所蔵資料は、旧国立民族学博物館地域研究企画交流センター（民博地域研）が所蔵していた図書、雑誌、マイクロ・フォーム、地図、映像資料などを基盤に、中東、中央アジア、ラテンアメリカなどについて比較的まとまった貴重なコレクションを形成している。また、アメリカ、イギリス、旧ソ連などの外交・政治文書や国際関係分析資料、植民地等関係資料など、系統的な収集にも努めている。雑誌については、政治学、国際関係論などの領域を中心に、基本的な欧文雑誌が大半を占めている。この他に、中央アジアや中東地域の国別地図、エジプト映画・インド（タミル語）映画・タイ映画、マレーシア映画などの映像資料、世界の諸地域の希少資料のデジタル複製版など、多様な情報

資源が含まれる。

また、2008年度には、日本における地域研究のパイオニアのおひとりである故石井米雄京都大学名誉教授の約1万4千冊におよぶ蔵書の一括寄贈を受けた。東南アジア研究のみならず、宗教研究や地域研究の発展に関する貴重な蔵書であり、現在、整理を進めている。

所蔵資料の概要は以下の通りである（2015年3月末、登録済のみ）。

- ・ 図書：総冊数（所蔵ID数）57,169点（うち和書：7,432点、洋書：49,737点）（マイクロフィルム約5,200リール、マイクロフィッシュ約20,000枚を含む）
- ・ 雑誌：総タイトル数1,406点（うち和雑誌557点、洋雑誌849点）
- ・ 映像資料：約2,000点
- ・ 光・磁気媒体資料：約600点
- ・ 地図：3,234枚

地域研の所蔵資料のうち最大のコレクションである英国議会資料約1万3千冊（下院文書1801～1986年、上院文書1801～1922年）については、「京セラ文庫『英国議会資料』」として附属図書館地階で公開している。また、英国議会資料下院文書のウェブ版House of Commons Parliamentary Papers（18世紀～現在）も導入されており、図書室を始め、学内LANでの利用が可能である。同文庫については、II. 1. 3を参照。

2. 2014年度の主な活動

(1) 資料収集：2014年度は、ロシア（中央アジア）の写真集および「コミッサール」「大祖国戦争」等の映画DVDとラテンアメリカ地域の写真集を始め近代中国史関係の資料購入と地域研スタッフの著作物を重点的に揃えたことが特記される。

(2) 資料整理：故石井米雄京都大学名誉教授の個人蔵書については、書庫への配架および請求記号の付与に加えて、登録作業を継続した。

(3) ホームページの改良：図書室の広報充実の観点から、図書室HPの大幅なりニューアルの第一歩として、

主な所蔵資料コレクションについて地域研教員による解説を掲載した。

(4) **未登録資料の登録**：民博地域研から移管された資料のうち未登録のものについての登録作業を継続している。

(5) **データベース化**：2010年度より、情報資源の共有化の観点から「マレーシア映画データベース」「トルキスタン集成データベース」「タイ映像資料データベース」を公開している。

3. 月別利用者数

図書室の月別利用者数は次の表の通り。

2014年度月別利用者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
学内	36	55	48	52	43	32	40	55	29	66	70	66	592
学外	7	11	7	9	14	6	19	6	27	9	12	15	142
計	43	66	55	61	57	38	59	61	56	75	82	81	734

4 運営委員会

全国共同利用施設（試行）として出発した地域研究統合情報センター（地域研）は、全国の地域研究コミュニティの意見を反映し、かつ広くコミュニティに開かれた運営が可能となる体制を当初から整えてきた。また、2008年4月から全国共同利用施設となり、更に、2010年4月には共同利用・共同研究拠点「地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点」に認定された。地域研究統合情報センター規程に基づき、学内外の地域研究の識者によって組織される運営委員会がその機能を担っている。運営委員会は、センター長の諮問による実質的な審議機関として、共同利用・共同研究拠点としての研究の企画や実施、出版、地域研究コンソーシアム（JCAS）などのネットワーク構築、および人事を含む地域研の運営にかかわる重要事項について検討を行っている。

2014年度の運営委員会は、学外の有識者12名、学内の地域研究者3名、地域研教員2名の17名で構成された。学外委員には、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、東京大学東洋文化研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、大阪大学大学院人間科学研究

科、長崎大学熱帯医学研究所、青山学院大学文学部、上智大学総合グローバル学部、日本貿易振興機構アジア経済研究所、国立民族学博物館、国立情報研究所など、国内の主要な地域研究関連研究教育機関の教員に、また学内からは学術情報メディアセンター、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科および東南アジア研究所の教員に委員を委嘱している。

2014年度は、第1回（2014年5月19日）、第2回（同年7月30日）、第3回（2015年2月9日）の3回の運営委員会が開催され、稟議による運営委員会が2回行われた。

各委員会会合での主要議題は、第1回が2013年度の共同利用・共同研究拠点の実施報告、2014年度の共同利用・共同研究拠点の実施計画、第2回が助教人事並びに国外客員人事、2014年度予算、第3回が2014年度共同利用・共同研究報告会ならびに助教人事などである。委員会では、地域研の年度予算の執行計画や決算、概算要求事項などの報告が行われ、地域研から提出した共同利用・共同研究拠点としての研究活動、出版、情報資源共有化、さらに地域研究コンソーシアムにおける役割などについて、忌憚のない、かつ建設的な議論が交わされている。

5 協議委員会

協議委員会は、「地域研究統合情報センター規程」に基づき、地域研究統合情報センター（地域研）の運営の重要事項にかかわる審議機関として設置されている。2014年度の協議委員会は、文学研究科附属ユーラシア文化研究センター、人文科学研究科、地球環境学、アジア・アフリカ地域研究研究科、東南アジア研究所、学術情報メディアセンター、図書館機構、生存圏研究所、理学研究科、経済学研究科の学内他

部局から10名、地域研からセンター長、教授全員、および互選による准教授2名の計17名の委員によって構成された。

協議委員会は、「協議委員会から教員会議に付託又は委任する事項に関する申し合わせ」に基づいて日々の運営にかかわる事項は教員会議に付託または委任しているものの、その他の運営にかかわる重要事項について審議・決定し、地域研という小規模なセンターの

研究活動と運営を支えるという重要な機能を持っている。2014年度には、第1回（2014年5月26日）、第2回（同年7月31日）、第3回（2015年2月13日）、の3回の協議員会が開催され、稟議による協議員会が2回行われた。

各回の主要議題は、いずれも教員人事の基本方針や選考、あるいは予算・決算、概算要求事項、規定改正などである。

6 スタッフ一覧

地域相関 研究部門	教授	押川 文子
	教授	Wilhelmus Adrianus de Jong
	准教授	帯谷 知可
	准教授	村上 勇介
	助教	福田 宏
情報資源 研究部門	教授	貴志 俊彦
	准教授	西 芳実
	准教授	山本 博之
	助教	谷川 竜一
高次情報処理 研究部門	教授	原 正一郎
	教授	林 行夫
	准教授	柳澤 雅之
	助教	亀田 堯宙
地域研究 国内客員 研究部門	客員教授	有川 正俊 (東京大学空間情報科学研究センター教授)
	客員教授	幡谷 則子 (上智大学外国語学部教授)
	客員准教授	末近 浩太 (立命館大学国際関係学部准教授)
	客員准教授	渡邊 英徳 (首都大学東京システムデザイン研究科准教授)
兼務教員		
東南アジア研究所	准教授	甲山 治 小林 知 三重野 文晴
アジア・アフリカ 地域研究研究科	教授	東長 靖
	准教授	片岡 樹 高田 明 山越 言

研究員等	
特任教授／研究員 (特別教育研究(一般))	柴山 守
白眉准教授	王 柳蘭
日本学術振興会特別研究員	岡田 勇
研究員 (特別教育研究(一般))	BOURDON, Julien Robert Gerard
研究員(科学研究)	和崎 聖日 FLORES URUSHIMA, Andrea Yuri
教務補佐員	大岡 宰 須羽 新二
事務補佐員	赤松 陽子 伊藤 ゆかり 大石 聖華 片岡 稔子 川島 淳子 幸田 友紀 小寺 淳子 辛 直美 友井田 貴砂子 中杉 美知子 中村 佳代 西 賀奈子 二宮 さち子 引地 尚子 山口 敏朗

【東南アジア研究所等事務部】(2015年3月31日現在)

事務長	大當 徳則
事務長補佐	豊田 和彦
総務掛 掛長	白石 賢一
主任	芝田 優子
再雇用職員	富坂 進
事務補佐員	日高 未来 中島 由貴
教務掛 掛長	福村 輝美
主任	川野 裕介
事務職員	山崎 景

3 運営経費

地域研究統合情報センター（地域研）の主要な運営経費は2006年度概算要求に基づいて措置された特別教育研究費であったが、2011年度からは特別経費の扱いとなり、2014年度には24,070千円が措置された。

2014年度は、共同利用・共同研究拠点として共同研究の実施、共同利用に供する京セラ文庫「英国議会資料」室の維持・管理と同資料の整備、地域研究コンソーシアムを通じた全国の地域研究関連組織の連携・共同の推進など、引き続き共同利用・共同研究拠点に関連する予算の確保を運営の基本として経費管理を行った。

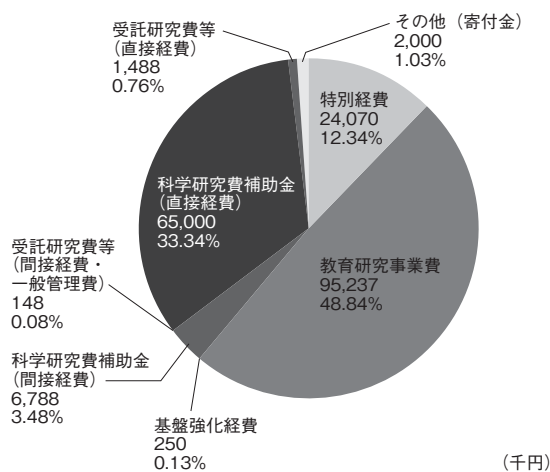
図I-2および表I-1に示したように、2014年度の地域研予算額は、総額194,983千円、その内、科学研究費補助金や受託研究費などの直接経費を除く運営経費は計126,494千円で、2013年度にくらべて約2,218千円の増額となった。科学研究費補助金は、2013年度は69,197千円に対して、2014年度は65,000千円となった。収入のうち、直接経費を除く財源について一般管理費および研究経費として支出された経費別支出額

を示したのが図I-3および表I-2である。

2014年度の研究経費の支出総額は図I-3および表I-2に示したとおり約118,149千円となった。全国共同利用経費として支出されたものには、共同利用・共同研究拠点推進のための経費の他に地域研究コンソーシアム事務局運営に関連する経費などが含まれており、英国議会資料関連経費および資源共有化のための情報基盤整備なども含めて総計すると、約25,005千円が共同利用・共同研究拠点に係る経費として支出された。

図I-2や図I-3に示した研究経費以外に、科学研究費や受託研究費などの直接経費や寄付金も地域研の研究推進に大きな役割を果たしている。

科学研究費による研究課題のなかには、情報資源共有化や地域間の比較研究を課題として掲げているものがあり、これらの課題の実施が地域研のミッション遂行にあたって大きな貢献を果たしている。



図I-2 2014年度地域研予算

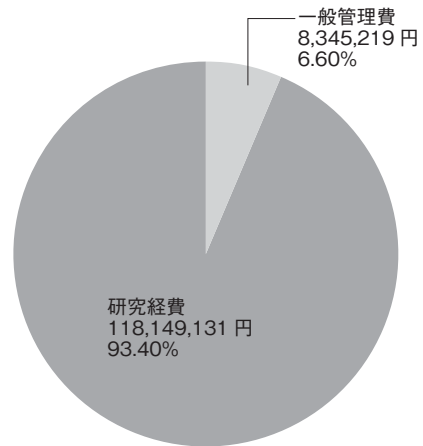
表I-1 2014年度地域研予算 (円)

特別経費	24,070,000
教育研究事業費	95,237,000
総長裁量経費	0
基盤強化経費	250,000
研究支援人材経費	0
科学研究費補助金間接経費	6,788,490
受託研究費等間接経費・一般管理費	148,860
小計	126,494,350
科学研究費補助金 (直接経費)	65,000,000
受託研究費等 (直接経費)	1,488,600
その他 (寄付金)	2,000,000
直接経費の小計	68,488,600
総計	194,982,950

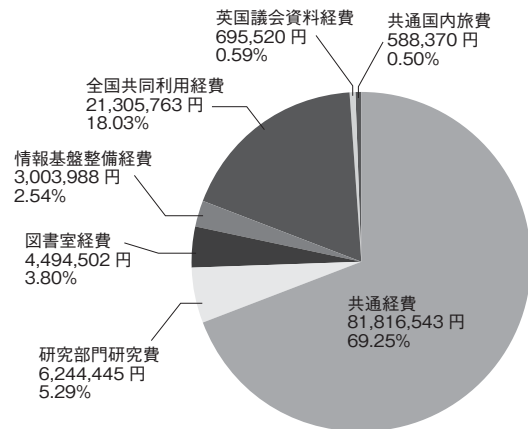
表I-2 2014年度一般管理費・研究経費の費目別支出額 (円)

一般管理費	小計	8,345,219
	共通経費	8,101,850
	共通国内旅費	243,369
研究経費	小計	118,149,131
	共通経費	81,816,543
	研究部門研究費	6,244,445
	図書室経費	4,494,502
	情報基盤整備経費	3,003,988
	全国共同利用経費	21,305,763
	英国議会資料経費	695,520
	国際シンポ開催経費	0
	共通国内旅費	588,370
	総計	126,494,350

(直接経費を除く)



図I-3 2014年度経費別支出額 (直接経費を除く)



図I-4 2014年度研究経費の費目別支出額 (直接経費を除く)

II. 研究活動の概要



1. 共同利用・共同研究拠点としての活動
 - 1 共同利用・共同研究拠点
 - 2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動
 - 3 英国議会資料 (BPP)
2. 情報資源共有化に向けた活動
 - 1 地域情報学の構築に向けた活動
 - 2 データベースや情報解析ツール等一覧
3. スタッフの研究活動
 - 1 個人研究
 - 2 外部資金による研究活動
4. シンポジウム・ワークショップ・研究会等

1 共同利用・共同研究拠点としての活動

関連型地域研究、情報資源共有化の推進および地域情報学の構築をセンターのミッションとする地域研は、共同利用・共同研究拠点として、次の4つの柱を中心に研究活動を展開してきた。

1. 共同研究による研究推進
2. 地域研究情報資源の共有化
3. 英文叢書シリーズなど地域研究の国際発信の強化
4. 地域研究コンソーシアムなど地域研究ネットワーク化の促進

また、公募研究や公募原稿出版の導入、国内外の地域研究者が参加しうる双方向的な情報プラットフォームの構築など、活動の企画、実施、成果刊行と評価のすべての段階において開かれた運営を図るという基本的方針に沿って活動を行っている。

共同研究は、研究代表者の所属にかかわらず完全に公募制度により採用されるプロジェクトである。

1 共同利用・共同研究拠点

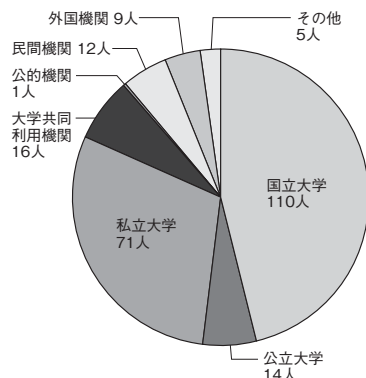
地域研は、共同利用・共同研究拠点として、関連地域研究プロジェクト「〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の『地域』像」、地域情報学プロジェクト「地域情報学の展開」、災害対応の地域研究プロジェクト「強くしなやかな社会をめざして—地域研究の可能性」、地域研究方法論プロジェクトの4つのプロジェクトのもとで、国内外の地域研究機関と連携して共同利用・共同研究を推進してきた。それぞれのプロジェクトのもとに、複数の複合同共同研究ユニットと個別共同研究ユニットをツリー状に配置し、研究対象となる地域や分野を超えた共同研究を実施している(図Ⅱ-4)。複合同共同研究ユニットの研究テーマは地域研究コミュニティの助言および要請を受けてセンターが設定し、個別共同研究ユニットはいずれかの複合同ユニットの研究

テーマのもとに位置づけられる。なお、複合同共同研究ユニットは関連する個別共同研究ユニットに基盤を置きながら運営される。

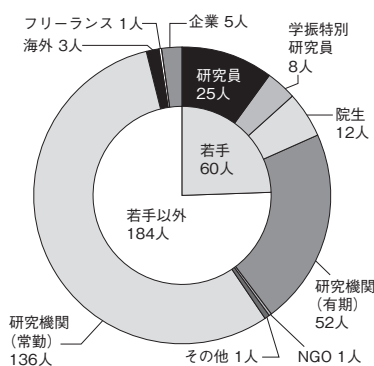
上記4つのプロジェクトは、いずれも基本的に6年間の研究期間により研究が進められている。共同研究員の所属については、図Ⅱ-1及び図Ⅱ-2に示したとおりである。

地域研の特色のひとつとして、地域・分野横断型の関連型地域研究の実施があげられる。共同研究員の研究対象地域については、図Ⅱ-3に示した。

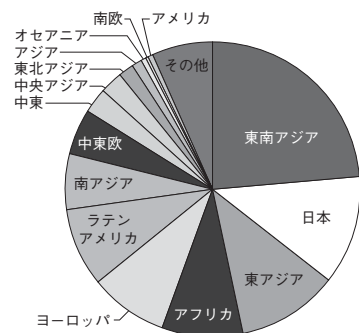
なお、2015年4月26日には、稲盛財団記念館にて、全ユニットによる共同利用・共同研究の2014年度成果報告会が行われた。



図Ⅱ-1 共同研究員所属分布①



図Ⅱ-2 共同研究員所属分布②



図Ⅱ-3 共同研究員の研究対象地域

1. 関連地域研究プロジェクト：〈地域〉を測量（はか）る—21世紀の「地域」像（統括班）

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

1. ポスト・グローバル化期の教育に関する国際比較：新自由主義、子どもの権利、国家の役割の再編
2. 地域内多様性と地域間共通性の比較政治経済分析：ポスト社会主義国を軸として
3. 中東とラテンアメリカにおける体制転換の比較研究
4. ユーロ危機下における南欧諸国のガバナンス変容：東欧諸国との地域間比較の視点から

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

1. 熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究
2. アフリカにおける地域植生と植物利用の持続可能性

3. 宗教実践の時空間と地域

1. 移動と宗教実践：地域社会の動態に関する比較研究
2. 「功德」をめぐる宗教実践と社会文化動態に関する比較研究：東アジア・大陸東南アジア地域を対象として
3. 南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較
4. 宗教実践における声と文字：東南アジア地域からの展望

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

1. 地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積
2. 地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究
3. 学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化

2. 非文字資料の共有化と研究利用

1. 写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析
2. 20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶
3. 集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのデータベース構築

3. CIAS所蔵資料の活用

1. 書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る
2. 『乾隆京城全図』と空間画像史料を用いた「華北・北京歴史データベース」の構築
3. 映画に見る現代アジア社会の課題
4. 脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像

3. 災害対応の地域研究プロジェクト：強くしなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

1. 「小さな災害」アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり：災害地域情報マッピングシステムを活用した社会問題の早期発見・早期対応
2. 社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から

2. 記録・記憶と社会の再生

1. 災厄からの再生のための記録と記憶の〈場〉：災害・紛争後の記憶をつなぐ実践・支援とその可能性
2. 建築を通じたポピュラー文化の記憶の場の構築力の解明
3. メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態

4. 地域研究方法論プロジェクト

1. 地域研究方法論

1. アジアと日本を結ぶ実践型地域研究
2. 物語を基にしたコミュニティづくりを目指す地域研究
3. 官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討

図Ⅱ-4 共同利用・共同研究による4つのプロジェクトと複合および個別共同研究ユニットの構成

1. 相関地域研究プロジェクト： 〈地域〉を測量（はか）る —21世紀の「地域」像（統括班）

◆研究期間

2010～2015年度

◆代表

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

国家をはじめ、人びとはなんらかのシステムのなかに暮らしている。近代は、国民国家を頂点とするピラミッド型の構造をとり、それまでに形成されていた地域世界を国家に回収するように再編してきた。だが、国家や地域の境界を越える人びとの活動が顕著となった今日、既存の統治システムの境界を跨ぐように、あるいは相互に重なるようにしてネットワーク型の社会圏や実践的な共同体を生んでいる。さらに、そのような関係や活動を基盤とする〈地域〉世界も生まれている。こうした現象は、従来の国家統治システムからすれば周縁的な現象であるが、制度の隙間に生じた世界や境域における現象を理解するには新たな「ものさし」が必要になる。地域社会を「包摂と排除」の関係から捉え、〈宗教〉からみた時空間マッピングを作成することや新自由主義の浸透と社会への影響に関して地域間比較研究を行うことは、新たな「ものさし」を探る試みとなる。また、こうした社会政治文化的行為の地盤をなす地球規模の生態システムを個々の生活世界を基礎づける「単位」として再検討し変動する自然資源と地域社会を再考することは、そのような「ものさし」をより包括的なものにする作業を導く。すなわち、複数の個別事例の相関と相対化を通じて、互いに異なる構えをもつ自然科学のアプローチと人文社会科学の思考を交差させて統合する試み、これが本統括班の目的である。国家を超え、あるいは国家間を架橋するような現象の一方で、地球上の国家の数は減っていない。新たな国家は新たな内実を創成しているかもしれない、従来の国家もその仕組みを変えているかもしれない。いずれの場合でも、既存のシステムの周縁に視座を据えることで、制度の中心部分を新たな諸相のもとに照らすことになる。

1. 相関地域研究プロジェクト： 〈地域〉を測量（はか）る—21世紀の「地域」像（統括班）

1. ポストグローバル化期に おける国家社会関係

複合同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

末近 浩太（立命館大学国際関係学部）

仙石 学（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

目的

1980年代以降、世界各地に波及し、各々の社会のあり方を変動させたグローバル化は、今日、踊り場にさしかかっている。一方では、中東革命を筆頭に体制移行・民主化が現在進行形で進んでいる地域・国があり、新自由主義経済路線は基調として様々な地域に影響を与え続けている。情報化も引き続き世界各地での変容を加速させている。だが他方では、「勝者」と「敗者」が明瞭となり新自由主義路線の見直しや反対が広まっているほか、中央アジアなどの旧ソ連圏での権威主義体制の存続や、中東民主化にともなう国家のイスラーム化、ラテンアメリカにおける民主主義体制の後退例などが観察される。本研究は、グローバル化の潮流が前世紀末のような支配的、一方的な傾向ではなくなっている今世紀初頭の位相について、社会変動の中心的力学を生み出す国家社会関係の観点から分析し、今後を展望することを目的とする。実施にあたっては、体制移行・民主化、福祉、教育など、地域横断的な課題設定を行う。

2014年度の 研究実施状況

個別共同研究ユニット毎に研究活動を行うとともに、個別共同研究ユニットを基盤とした研究活動として、「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」研究会を1度実施したほか、関連するセミナーとワークショップを3回開催した。

●第1回（ワークショップ）

2014年7月23～25日

（京都大学稲盛財団記念館）

テーマ：“The Future of Democracy after Neoliberalism: Social Movements in a Globalizing World”

・1日目（7月23日）

“The Diminishing Returns of Transnational Disputes: The Case

of Intellectual Property Rights in Kenya” Nitsan Chorev (Brown University)

“Social Movements and the Rise of Compassionate Democracy” James Jasper (City University of New York)

・ 2日目 (7月24日)

“Social Mobilization and Resource-Based Growth in Peru” Moises Arce (University of Missouri)

“Democratic Deepening in the Age of Neo-liberalism: Comparing Brazil, India and South Africa” Patrick Heller (Brown University)

・ 3日目 (7月25日)

“U.S. Movements in the Great Depression and Great Recession: Why They Took Off and Why They Were So Different” Edwin Amenta (University of California, Irvine)

“Ironies of Neoliberalism: The Shifting Repertoires of Labor Contention in the United States, with Some Implications for Democracy” Kim Voss (University of California, Berkeley)

● 第2回 (セミナー)
2014年11月17日
(京都大学稲盛財団記念館)

テーマ：“Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy” (「現代ラテンアメリカの諸改革：その教訓と課題」)

“La reforma agraria en América Latina: su aplicación en el pasado y lecciones para enfrentar la situación actual de la tenencia de tierra” Sergio Gómez (Asesor de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Alimentación y la Agricultura-FAO para América Latina y el Caribe)

“Participación social en las reformas educativas: el caso de Chile y Mexico” Marcela Gajardo Jiménez (Asesora de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Educación, la Ciencia y la Cultura-UNESCO para América Latina y el Caribe)

● 第3回 (ワークショップ)
2015年3月7日
(京都大学稲盛財団記念館)

テーマ：“Estado y sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, enticidad y descentralización” (「現代ペルーの国家と社会：暴力、エスニシティ、地方分権化」)

“Etnicidad y violencia en el Perú” Jaime Urrutia (Instituto de Estudios Peruanos)

“Genocidio en los Andes: el silencio de los vivos y el grito de los muertos” Artemio Sánchez (Centro de Investigación y Desarrollo Social)

“Gobiernos locales en el contexto de la descentralización” Moisés Palomino (Instituto de Estudios Peruanos)

● 第4回 (「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第13回研究会)
2015年3月29日
(早稲田大学早稲田キャンパス16号館10階社会科学科室)

テーマ：「ラテンアメリカと東欧における『ポスト』ネオリベラル？」

村上勇介「ポスト新自由主義期ラテンアメリカの『右旋回』：ペルーとホンジュラスの事例から」

仙石学「ポストネオリベラル期の制度変革：中東欧諸国における年金制度『再』改革を事例として」ほか

成果

昨年度に引き続き行なった、中東欧とラテンアメリカの比較を主軸とした新自由主義の浸透と政治社会への影響に関する研究成果の検証作業では、新自由主義をめぐる比較の文脈がより明確となった。新自由主義が地域全体に大きな影響を与えたのがラテンアメリカであり、それは、1970年代までラテンアメリカ諸国が追求してきた国家主導型の発展モデルの破綻という共通の背景から新自由主義が深く浸透した。これに対し、中東欧では、国家計画経済から市場経済への転換という体制転換は起きたものの、ラテンアメリカで観察されたような、それまでの体制が破綻した例は、バルト3国に留まり、社会保障などの社会的なセーフティネットはそのまま引き継がれ、新自由主義の影響は限定的であった。それが顕著であったのは、民営化や関税の引き下げ・一律化など一部の側面のみであった。昨年度指摘した、新自由主義の世界的潮流が一段落し、ラテンアメリカではその退潮も見られるようになる今世紀に入ってからの新自由主義的な政策の現れ方の違い (いずれの地域でも、地域内で相違が存在する現象で、各国の政党政治、およびその形の違いから生ずる経路の違い) は、そうした地域的な背景の相違の下で発生していたのである。

前述のような構造的な要因や背景を、地域間の比較あるいは地域内での相違を分析する全体的な文脈として据える重要性は、中東とラテンアメリカの体制転換の比較についても言えることである。「アラブの春」と呼ばれた体制転換への動きは、民主主義的な枠組みに帰着した例はほとんどない状態であるが、他方、旧体制が動揺した国々は、かつて共和制に移行した後、権威主義的な支配体制が確立したところであり、さらに、そうした支配体制の下で、一定の範囲ではあるが、経済の自由化が進められていた。共和制に移行せず、君主制を維持した国々での体制転換への動きは、限定的であった。

1. 関連地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

1. ポスト・グローバル化期の教育に関する国際比較：新自由主義、子どもの権利、国家の役割の再編

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

押川 文子 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

植村 広美 (県立広島大学人間文化学部)

牛尾 直行 (順天堂大学スポーツ健康科学部)

小原 (伊藤) 優貴 (東京大学大学院総合教育研究センター)

日下部 達哉 (広島大学教育開発国際協力研究センター)

佐々木 宏 (広島大学大学院総合科学研究科)

篠原 清昭 (岐阜大学大学院教育学研究科)

杉村 美紀 (上智大学総合人間科学部)

南部 広孝 (京都大学大学院教育学研究科)

針塚 瑞樹 (別府大学文学部教職課程)

南出 和余 (桃山学院大学国際教養学部)

山本 晃輔 (大阪大学未来戦略機構第五部門 未来共生イノベーター博士課程プログラム)

福田 宏 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

グローバル化の進行のなかで、多くの社会において、教育の市場化と競争原理の導入、達成度評価への「国際水準」適用などいわゆる新自由主義的な教育制度が導入されてきた。また、国際社会が提唱する「子どもの権利」概念やそれに基づく基礎教育と知識社会に適応した能力育成の重視も世界各地に拡大している。その一方で、それぞれの社会に根ざしたオルタナティブな教育の試みや、国際競争力強化と固有の文化的価値を掲げるナショナルな教育イデオロギーの台頭現象も、地域的なヴァリエーションをもちつつ展開されている。これまで教育から排除されてきた人々を含めて幅広い層の教育への関心が高まるなかで、ポスト・グローバル化期の教育は、新自由主義的傾向や国際社会の影響力拡大など国家の枠を超える動きと、当該社会の構造的諸要因、権力構造さらに思想状況とがせめぎ合う「場」としての様相をますます強めている。

本研究は上記の認識のもとに、東アジア、東南アジ

ア、南アジア、ラテンアメリカ、中東欧を対象に、今日の教育における重要課題を取り上げながら地域の実態を踏まえて比較検討し、多様な実態に通底するグローバルな共通性と地域的固有の展開の要因を分析することを通じて、教育の地域的発展の型を考察することを目的とする。

2014年度の
研究実施状況

下記の2回のワークショップ形式の研究会を実施した。開催にあたっては、国際比較を可能にするトピックを設定し、それぞれ共催組織を得ることによって個別ユニットのメンバーに加えて幅広い議論が可能になるように工夫した。

● 第1回ワークショップ「ポスト・グローバル化期の大学教授職：アジア・ヨーロッパの概観と事例研究」
2014年10月25～26日
(広島大学国際協力研究科1階大会議室)

共催：広島大学現代インド研究センター、同教育開発国際協力研究センター

趣旨説明：押川文子

南部広孝「大学教授職をめぐる状況に関する分析枠組み：日本の状況をてがかりとして」

黄福涛(広島大学高等教育研究開発センター)「アジア6カ国における大学教授職の国際比較」

コメント：日下部達哉

井上史子(帝京大学高等教育開発センター)「ヨーロッパにおける大学教授資格の導入とその後の変化：オランダを事例に」

コメント：佐々木宏

渡辺雅幸(京都大学大学院教育学研究科博士後期課程)「インドにおける大学教員像の変化」

コメント：小原優貴

関口洋平(京都大学大学院教育学研究科博士後期課程)「ベトナムにおける大学教授職の特質：大学教授の資格要件を手がかりに」

コメント：針塚瑞樹

● 第2回ワークショップ「教育イデオロギーの現在：国家、シティズンシップ、能力主義」
2015年1月24日
(東京外国語大学本郷サテライト)

共催：東京外国語大学現代インド研究センター (FINDS)

趣旨説明：粟屋利江 (東京外国語大学)

森下稔(東京海洋大学)「ASEAN諸国におけるシティズンシップ教育とASEANnessのための教育」

植村広美「中国における『国家発展戦略』としてのESD」

押川文子「アッチャー・パライー (良い教育) と能力主義：近年のインドの教育イデオロギーをめぐる」

コメント：粟屋利江

今年度実施した2回のワークショップは、第1回ワークショップ（大学教授職）では主に教育制度面から高等教育を、第2回ワークショップでは教育理念や社会経済的実態面から初等～中等教育を対象として、グローバル化以降の教育の国際比較を試みた。そのなかで浮かび上がってきたのは、以下の諸点である。

①教育の市場化や「規制緩和」、競争原理導入は、教育における国家の役割の縮小というよりも、強い規制のもとでの選択的・段階的導入によってむしろ国家の役割の再編をもたらしていることが、大学改革や教育理念の再編においても確認された。

②急激な高等教育の拡大のなかで高等教育に期待される役割は変化しており、大学の自治や大学教授職の自律性についての見直しが多く、社会で進行している。注目されるのは、University教授職とCollege教員職の間に明確な役割・身分的な差異のあった地域では、高等教育の高度化要請を背景にCollege教員の研究能力の強化や採用基準厳格化が図られ、両者が未分化であった地域では大学の格付けや教授職のカテゴリー化を通じて研究と教育の再編が起きていることである。知識社会化と高等教育の量的拡大が同時進行するなかで高等教育の機能自体の見直しが試みられているが、その方向は多様であり効果についても試行錯誤が続いていることが各国の事例からも検証された。

③教育理念についても市民性教育や持続的発展など新しい理念の模索が各国でみられるが、政府主導の改革の多くはナショナリズム、「道徳」教育、競争理念導入などと組み合わせられ、「市民」「持続的発展」の概念もそれぞれの国家によって著しくことなっている。理念の検討においては、これらの用語を地域の文脈のなかで再検討することが必要であり、またそのことを通じてグローバル化のなかの教育の変容の地域的実態が明らかになることが確認された。

1. 相関地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

2. 地域内多様性と地域間共通性の比較政治経済分析：ポスト社会主義国を軸として

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

仙石 学（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

◆メンバー

磯崎 典世（学習院大学法学部）

上垣 彰（西南学院大学経済学部）

小森 宏美（早稲田大学教育・総合科学学術院）

月村 太郎（同志社大学政策学部）

林 忠行（京都女子大学現代社会学部）

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究は、社会主義体制が解体した後の中東欧諸国の政治経済の枠組に現れている多様性について、これを他の地域のポスト社会主義国、および社会主義国ではないが、1970年代以降に民主化したラテンアメリカや東アジアの諸国の事例との比較の中で位置づけていくことを、主たる目的としている。

体制転換後の中東欧諸国においては、民主主義と市場経済という大きな枠組こそ共通しているものの、具体的な政治経済にかかわる制度面では国ごとに大きな違いが存在している。だがこのような「地域内における多様性」は中東欧に限られるものではなく、例えば民主化後のラテンアメリカにおいても、政治や経済のあり方には多様な形が見られることが確認されている。さらに加えて、それぞれの地域の中で多様な政治経済の形が見られる一方で、その多様性の中には、中東欧とラテンアメリカそれぞれの地域の相違を越えて同じような状況が現れている場合もあるという、「地域を越えた共通側面」も存在することが確認されている。この「地域内における多様性」と「地域を越えた共通性」との関係、政治経済に関する制度および政策（これはひいては、「国家・社会関係」という抽象的な視点に関して、事実に基づいた具体的な視点から解明する重要な側面となるはずである）に焦点を当てて、実証的および理論的に明らかにしていくことが、本研究の主要な課題となる。

今年度は本研究ユニットと、個別共同研究ユニット「中東とラテンアメリカにおける体制転換の比較研究」（研究代表：末近浩太・村上勇介）との共催により、従前より実施している「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」研究会を1回実施した。概要は以下の通りである。

- 「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」第13回研究会
2015年3月29日
(早稲田大学早稲田キャンパス16号館)

テーマ：「ラテンアメリカと東欧における『ポスト』ネオリベラル？」

村上勇介「ポスト新自由主義期ラテンアメリカの『右旋回』：ペルーとホンジュラスの事例から」

仙石学「ポストネオリベラル期の制度変革：中東欧諸国における年金制度『再』改革を事例として」

ほか、小森宏美、中田瑞穂（明治学院大学）、横田正顕（東北大学）による、論文集への寄稿内容に関する簡単な報告

成果

今年度は上記の研究会において、ネオリベラル的な政策が実施された後の東欧及びラテンアメリカにおける政策対応についての検討を行った。東欧ではネオリベラル的な市場を利用した基金型年金制度の改編に関して、反ネオリベラル的な対応を行ったハンガリー、「プラグマティックなネオリベラル路線」により妥協を通しての制度改編を行ったポーランド、そして教条的なネオリベラル路線を採用したチェコという対比が存在するが、ポーランド以外の国に関してはその持続可能性が問題となっていることが明らかとされた。他方のラテンアメリカにおいては、ネオリベラル的政策への反動から一部の国において急進左派が政権を獲得したものの、ベネズエラのように資源を保有する国を例外として、結局はネオリベラル的な政策を大きく変更することは困難であることが示された。この点を踏まえた議論を通して、現在ではいかなる政党が政権についても合理性に基づいた「現実的選択」としては「穏健なネオリベラル」的な政策をとらざるをえなくなっていることが明らかにされたが、他方で「ネオリベラリズム」の内容は多様であり、どのような「ネオリベラリズム」的政策が追求されるかという点についても検討が必要であることも示された。この点については論文集に寄稿予定の他の原稿（南欧の福祉改革、チェコの家族・教育政策、エストニアにおけるネオリベラリズムの継続）ともあわせてさらに検討を行い、継続

するプロジェクトにおいて論文集としてとりまとめを行う予定である。

1. 相関地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

3. 中東とラテンアメリカにおける体制転換の比較研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

末近 浩太 (立命館大学国際関係学部)

村上 勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

内田 みどり (和歌山大学教育学部)

浦部 浩之 (獨協大学国際教養学部)

遅野井 茂雄 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

吉川 卓郎 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部)

住田 育法 (京都外国語大学外国語学部)

仙石 学 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

高橋 百合子 (神戸大学大学院国際協力研究科)

田中 高 (中部大学国際関係学部)

浜中 新吾 (山形大学地域教育文化学部)

林 忠行 (京都女子大学現代社会学部)

松尾 昌樹 (宇都宮大学国際学部)

目的

本研究は、2010年末からの「アラブの春」と呼ばれる政治変動を経た中東と、発展途上地域においても早く体制転換を経験したラテンアメリカとのあいだで比較研究を実施し、体制転換の過程とその分析枠組みを系統的に探究することを目的とする。具体的には、まず、移行前までの社会経済構造や政治制度・構造を含め、体制転換過程のメカニズムを明らかにする。この作業は、政党、軍、市民社会の3つのテーマにそって実施し、政党や軍などのアクターの戦略、政治制度の特徴、歴史的背景、市民社会の状況を分析する。続いて、体制転換の背景と過程、今後の展望について、地域間の共通性と相違点を究明する。そうした成果は、中東欧・ロシアの事例からも検証される。そして、中東とラテンアメリカの各地域における共通性と相違点をふまえたうえで、地域を超えた共通性や相違の有無を探究し、生じている場合は、その背景や条件、過程を究明する。そのような作業を通じ、両地域の地域性について改めて考察する。

2014年度の
研究実施状況

本年度は、次の通り3回の研究会および研究打ち合

わせ・意見交換を実施した。

●第1回
2014年4月5日
(京都大学地域研究統合情報センター)

研究打ち合わせ・意見交換：2年間の研究計画における役割分担、研究視座、アプローチの確認。

●第2回
2014年7月12日
(東京外国語大学本郷サテライト)

研究打ち合わせ・意見交換：最終成果報告の構想
宮地隆廣 (東京外国語大学)「理性と物語：実証的構成主義の再評価」

●第3回
2014年11月14日
(日本国際政治学会中東分科会、福岡国際会議場)

餅井雅大 (防衛研究所・ゲストスピーカー)「イスラエル国防軍とアイデンティティと軍事史：機関誌『マアラホット』の言説分析」

吉川卓郎「国王陛下の軍隊：ヨルダン・ハシミテ王国の『軍事力』の再検討」

前年度の研究課題であった政軍関係と体制の安定性の関わりについて、中東諸国の事例 (イスラエル、ヨルダン) を取り上げ、学会報告を行った。

成果

3回の研究会・研究打ち合わせ・意見交換を通して、中東諸国とラテンアメリカ諸国における体制転換の歴史的経緯と先行研究および理論的広がりについての議論を重ねた。特に2年目の作業として、具体的な事例研究およびそこから導出された理論的なインプリケーションについての検討に重きを置いた。

第1回研究会では、各メンバーの研究対象地域・諸国について、政治体制とその歴史的変容に関する基本情報を確認・共有した。本共同研究の政党、軍、市民社会という3つの共通視座について、2年目は政党と市民社会に着目し、その実証研究を進めることが再確認された。

第2回研究会では、市民社会、特にラテンアメリカ諸国の先住民運動の事例と、その発生や成否を分析するための理論についての研究報告を行った。宮地隆廣『解釈する民族運動：構成主義によるボリビアとエクアドルの比較分析』(東京大学出版会、2014年)に基づき、比較政治学における実証的構成主義の意義と課題について議論を重ねた。構成主義による社会運動およびその帰結についての分析は、いわゆる「アラブの春」における民主化運動のさらなる理解に向けても新たな視座と方法論を提起するものであることが

確認された。

第3回研究会では、中東諸国の軍組織と兵士のアイデンティティに着目することで、軍が体制の維持にどのような役割を果たしているのか検討した。イスラエル国防軍の起源がイスラエル国家の建国以前にあることを踏まえ、軍事組織による「壮丁を通じた国家形成」と独自の「軍事専門性」の2つが同国の安定を考えるとときに重要であるとされた。他方、ヨルダンについては、「弱国」である同国の存続要因として、従来の研究において等閑視されてきた軍の役割に注目することで再検討された。中東諸国の不安定は「国民と国家の不一致」に起因する薄弱な正当性にある。ヨルダンが経験してきた数々の戦争には常にこの不一致の問題が内包されており、ヨルダン軍は、国民軍よりもむしろ「国王陛下の軍隊」として、その危機を1つずつ除去する役割を果たしてきたことが明らかにされた。

1. 相関地域研究プロジェクト： (地域)を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

1. ポストグローバル化期における国家社会関係

4. ユーロ危機下における南欧諸国のガヴァナンス変容： 東欧諸国との地域間比較の 視点から

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

横田 正顕 (東北大学大学院法学研究科)

◆メンバー

伊藤 武 (専修大学法学部)

小森 宏美 (早稲田大学教育・総合科学学術院)

泰泉寺 友紀 (和洋女子大学国際学類国際社会専修)

竹中 克行 (愛知県立大学外国語学部)

西脇 靖洋 (上智大学グローバル教育センター)

野上 和裕 (首都大学東京大学院社会科学研究科)

平田 武 (東北大学大学院法学研究科)

深澤 安博 (茨城大学人文学部)

細田 晴子 (日本大学商学部)

松森 奈津子 (静岡県立大学国際関係学部)

村田 奈々子 (東京大学大学院総合文化研究科)

八十田 博人 (共立女子大学国際学部)

目的

2009年のギリシャ財政問題を発端とする「ユーロ危機」は、ポストグローバル化時代の象徴としても重要であるが、この問題への取り組みにおいては、独仏のような欧州中核諸国の視点からのユーロ圏全体的分析がなお支配的であり、危機の中心舞台である南欧諸国の実態に注目した研究は希少である。こうした現状を踏まえ、本共同研究では、南欧諸国における社会・経済的利益の表出、媒介、調整の構造が、ユーロ危機の複雑な展開の中で被りつつある変化について、政治学、歴史学、社会学などの研究分野の学際知に基づき、同じく欧州の非中核地域を構成する東欧との地域間比較の視点を取り入れつつ分析を行う。

すなわち本共同研究の目的は、(1) 対象諸国固有の条件と欧州通貨制度に内在する構造的脆弱性との共振作用の発現過程を明らかにし、(2) ユーロ危機下における「恒常的緊縮」という不可避の「外圧」がもたらす(であろう)ガヴァナンス構造の変容を、中長期的射程から比較考察することである。

2014年度の 研究実施状況

本共同研究では2014年12月6日、2015年3月30日の2度にわたって研究会を実施した。また、一部研究員は科研費等を利用して海外調査を実施した。研究会の内容は以下の通りである。

●第1回

2014年12月6日

(京都大学稲盛財団記念館)

八十田博人「ユーロ危機後のイタリアの金融と財政：何が変わった(変わらなかった)か？」

横田正顕「ユーロ危機とデモクラシーの質：スペイン・ポルトガルを中心に」

●第2回

2015年3月30日

(首都大学東京秋葉原サテライト)

出版企画会議：横田正顕、野上和裕、深澤安博、伊藤武、八十田博人、細田晴子、小森宏美、西脇靖洋、秦泉寺友紀、村田奈々子の参加により、本共同研究の最終成果の刊行に関するワークショップ。現時点での寄稿予定者は横田正顕、野上和裕、伊藤武、八十田博人、細田晴子、西脇靖洋、秦泉寺友紀、村田奈々子の8名。

成果

学会報告と研究会が盛んに行われた初年度とは異なり、今年度は初年度の諸報告を基にした成果物の刊行、並びに共同研究期間終了後における出版企画に向けての準備に多くの時間が割かれた。

初年度の研究では、一口に「ユーロ危機」といっても、各国の危機発生の経路、危機の深度、危機の直接的結果について重大な差異があり、それぞれの国における「ユーロ危機」自体の背景にある構造的問題の特定が分析の上で極めて重要なポイントとなることが確認されたが、本年度においてはこの点がさらに深く掘り下げられた。

特に注目されたのは、金融危機と財政危機の組み合わせの違いがもたらす各国政治への影響の違いと、ユーロ危機の波及過程で生じた政党政治の変動幅の違いが何に由来するのかという点であった。ギリシャでは2009年以前の政党システムがほぼ解体的な変化を経験したのに対し、ポルトガルやスペインではむしろ安定的な要素が目立っている。また、変化の側面だけでなく、変化しなかった側面ないしユーロ危機以前から継続している問題とそうでないものの区別が必要であるという認識も共有された。

これとの関連で、スペインにおけるPODEMOSといった新興政党の急浮上や、カタルーニャ独立住民投票

問題が、ユーロ危機の影響という文脈でどの程度理解でき、あるいは持続的な影響を持つのかという点が問題となるが、これらの評価については最終成果物の作成を通じて一定の結論が出るものと思われる。

1. 関連地域研究プロジェクト： 〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

Wil de Jong (京都大学地域研究統合情報センター)

柳澤 雅之 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

赤嶺 淳 (一橋大学大学院社会学研究科・社会学部)

Youn Yeo-Chang (Seoul National University, Department of Forest Science)

Liu Jinlong (Renmin University of China, School of Agricultural Economics and Rural Development)

内藤 大輔 (国際林業研究センター (CIFOR))

山口 哲由 (独立行政法人農業環境技術研究所)

目的

世界は今、自然環境資源をいかに確保するかという大きな課題に直面している。気候変動とその影響、食の安全、飲料水の確保、健康問題、生物多様性の保全等は、国内的にも国際的にも大きな関心事となっている。本複合共同研究「地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦」は、ローカルな人びとの自然環境との実践的なかかわりをベースにした地域研究のアプローチにより、これらの世界的課題の解決に貢献することを目指す。本複合共同研究に含まれる課題としては、自然環境資源とローカルな人びとのかかわりや実践に関するものだけでなく、それらをグローバルな言説や運動とも関連させた課題も考察の対象とする。ローカルな視点からより深く理解すると同時に、グローバルな動きにローカルな実践を位置づけることの重要性を本プロジェクトで示していきたい。内外の萌芽的なアイデアを持つ研究や、より大きな枠組みでの研究ともリンクすることで、議論のためのより大きなプラットフォームを形成し、新たな価値を見出すことを目的とする。

2014年度の 研究実施状況

複合共同研究ユニット「地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦」では、関連する6つのプロジェクトが進行中で、グローバルな課題が3プロジェクトあるほか、アジアを対象とする1プロジェクト、ラテンアメリカを対象とする2プロジェクトがある。また関連

するプロジェクトとして、“Legality of Timber Financing and Trade in the Western Amazon”があり、CIAS共同利用研究の予算をもとに、インドネシア・マレーシア・中国・日本の間における木材のヴァリューチェーンに焦点をあてた国際会議を2015年1月23日にインドネシアのボゴールにて開催した。

成果

複合共同研究ユニットとして、2014年度、国際会議および国内研究会の開催、および出版物の刊行を行った。“Legality of Timber Financing and Trade in the Western Amazon”プロジェクトでは、CIASとMOUを締結しているCIFOR (国際林業研究センター) と共催で、ボリビアとペルー領のアマゾンを対象に、フィールドワークの実施、研究成果を検討する研究会の開催、論文の執筆を行った。また、先述したように、インドネシア・ボゴールにて国際会議を開催し、その後、将来の共同プロジェクトの構想について話し合いを行った。

1. 相関地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

1. 熱帯森林利用のローカル・ガバナンスの可能性に関する地域間比較研究

個別共同研究ユニット

2014年度の
研究実施状況

4回の研究会を開催し、熱帯諸地域における森林と住民の関係について、事例報告にもとづいた討議をおこなった。具体的には、事例の比較検討をとおして、大別して、1)「近代化」とローカル・ガバナンスの基本的条件、2)「住民参加型保全」と研究者の役割、3)ローカルな森林観の3テーマについて議論をおこなった。事例報告の内訳は、アフリカ4例(ギニア共和国、ガボン2例、コンゴ共和国)、東南アジア2例(ラオス、ボルネオ)、オセアニア1例(ソロモン諸島)である。最終研究会では、成果を公刊するために、これまでの議論を踏まえてメンバー各自が執筆テーマの概要を発表し、討議をおこなった。

- ◆研究期間
2013～2014年度
- ◆代表
阿部 健一 (総合地球環境学研究所)
- ◆メンバー
石丸 香苗 (岡山大学地域総合研究センター)
大石 高典 (総合地球環境学研究所)
大橋 麻里子 (東京大学大学院農学生命科学研究科)
小泉 都 (元・京都大学大学院農学研究科)
笹岡 正俊 (北海道大学大学院文学研究科)
嶋田 奈穂子 (京都大学東南アジア研究所)
竹内 潔 (元・富山大学人文学部)
竹ノ下 祐二 (中部学院大学子ども学部)
服部 志帆 (天理大学国際学部)
松浦 直毅 (静岡県立大学国際関係学部)
宮内 泰介 (北海道大学大学院文学研究科)
山越 言 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)
Wil de Jong (京都大学地域研究統合情報センター)

成果

- 1) 地域住民の生活の再構築と研究者の役割
商業伐採、鉱山やダムの開発、土地の商品化、地方都市の形成などの「近代化」は、ボルネオやソロモン諸島(マライタ島)の地域住民にとって、現金獲得機会や交通アクセスの向上をもたらす一方で、飲酒や土地売買をめぐる軋轢などの社会的混乱を惹起している。このような状況に地域住民が対応するためには、都市や現金経済など「近代的」な生活資源とともに、「慣習的」な森林利用や人的ネットワークを選択肢として主体的に生活構築に用いることが可能な社会的条件が必要とされる。地域の状況に応じて、住民が生活を主体的に再構築しうる条件を見だし、政策に関わるアクターに呈示することが、フィールド研究者が果たしうる役割だと考えられる。
- 2) 住民参加型森林保全と研究者の役割
ギニア南東部の森林地域では、森林管理をめぐる「森林保護のために人間活動を制限する」政府系環境研究所の主張と「耕作などによって森林や森林動物は守られている」という人間に馴致された自然を強調する地域住民の言説が鋭く対立している。住民の森林利用に科学的合理性を認めないために、実際には、住民参加型保全が住民を啓蒙と経済的便益配分の対象とみなす傾向が強いことを鑑みると、住民の在来知の言説と「科学的」管理との間の対話は、森林保全における「住民参加」の実現にとって重要な課題である。この課題に対して、フィールド研究者は、住民との対話の必要性を森林保護アクターに呈示するとともに、両者の対話のファシリテーターとしての役割を果たしうると考えられる。

目的

本研究では、アフリカ、東南アジア、オセアニア、南米の熱帯森林帯において、地域住民の社会文化と森林の保護や開発との間に生起している諸問題を比較考察し、グローバルな自然保護や開発の理念が国家レベルの政策過程を介して作動している森林資源管理と地域住民による慣習的な森林利用や森林に対する価値付与との間の懸隔を繋ぐ可能性を探求する。具体的には、森林に関わる地域住民の在来の生業文化や森林観と森林保護活動、商業伐採などの開発、移住政策、土地売買などの外来のインパクトとの諸関係についての諸事例を比較し、地域住民が森林管理に自律的に参画しうる条件を考究する。さらに、森林に関わる住民の生活実践の論理や感性を本質論的に措定することを避けて、外部社会との交渉による変容や地域社会内部の実践と認識の多様性の双方を視野におさめて、地域社会と森林の関係を動的かつ多層的に捉える視座から、研究者のアドボカシーの理論的枠組みを構築する。

一方、ガボン南西部の国立公園周辺の集落では人的構成の流動性が高いため、地域に住む人々における森林に関わる在来知識の蓄積は小さい。このような地域では、霊長類学者は、住民の調査への参画をとおして住民の間に新たな「森林伝統文化」を創出する触媒となり、森林保全への住民の主体的関与を引き出す可能性を持っている。また、一方では、同じ地域における住民参加型保全の推進は、出自や利害が多様な人々を「地域住民」という語で一括りにして「主体的参加を強制する」という矛盾を孕んでいる。このアポリアの解決に対して、人類学者は、地域の人々の間に相互連携が可能である集まりを見いだして、きめ細かで具体的な自主的森林管理の選択肢を、森林保護アクターに呈示しうる。さらに、人類学者と霊長類学者との連携は、森林管理における住民の自律性の創出と主体的関与の実現において有効だと考えられる。

3) ローカルな森林観の考究と研究者の役割

ラオスのいくつかの民族集団は、森を切り拓いて農作を営む一方で、集落付近の森を残して、精霊信仰の対象としたり、先住民を祀ったりして、畏怖の対象としている。これらの農耕民は、あえて森を残すことによって、超自然的存在に人間の行為が監視される状況を作り出していると解釈できる。対照的に、コンゴ共和国の狩猟採集民は、森林に対して、生活の糧だけでなく、精霊を含む他者との多様な交流を無限に提供してくれる豊穡な世界という認識を抱いている。これら二つの事例に見られる森林に対する認識は、「希少性」を前提とする経済的便益や生物学的多様性の観点から「資源」として森林を客体化するグローバルな森林観とは著しく異なる。フィールド研究者が、上のような地域住民の「小さな物語」を森林資源の持続可能性といった「大きな物語」に対置させていく作業は、熱帯森林が人間に対して持っている多様な価値を呈示することになる。

1. 相関地域研究プロジェクト： (地域)を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

2. 地域環境とグローバルな持続可能性への挑戦

2. アフリカにおける地域植生と 植物利用の持続可能性

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

山本 佳奈 (京都大学学際融合教育研究推進センター総合地域研究ユニット臨地教育支援センター)

◆メンバー

伊谷 樹一 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

伊藤 義将 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

大石 高典 (総合地球環境学研究所)

大山 修一 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

木村 大治 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

桐越 仁美 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

近藤 史 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

手代木 功基 (総合地球環境学研究所)

友松 夕香 (東京大学大学院農学生命科学研究科)

原子 壮太 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

平井 将公 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

藤岡 悠一郎 (近畿大学農学部農業生産科学科)

藤田 知弘 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

村尾 るみこ (立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科)

八塚 春名 (日本大学国際関係学部国際教養学科)

山越 言 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

山科 千里 (京都大学アフリカ地域研究資料センター)

目的

政治経済のグローバル化や社会の流動化が進む現代のアフリカにおいて、地域の植生や植物などの自然環境資源は、昔と形を変えつつも、多くの人々の生活基盤となっている。グローバルな変動のなかで、人々の植物利用は画一化する方向に向かうのではなく、ローカルな固有性に根差した動きが多様化する傾向が見いだされる。そうしたなかで自然環境資源の持続可能性を検討するためには、グローバルな変動のなかで発現するローカル性に目を向けていく必要がある。本研究では、アフリカの地域社会でフィールドワークを行う複数の研究者の参加のもと、アフリカにおける植生や植物利用の持続可能性の検討に向け、ローカル・スケールにおける植生の形成プロセスや管理の実践、植物利用の知恵や技術の継承などの実態を明らかにする。そして、データベースの活用や研究発表を通じたアフリカ内外の地域間比較により、ローカルな

事象をグローバル・スケールでの変動プロセスに位置付け、自然環境資源の持続可能性を検討することを目的とする。

2014年度の
研究実施状況

2年計画の終了年である本年度は、2015年度中の成果発表を目指して、研究会の開催とデータベースの構築を進めた。研究会は全5回（うち1回は公開シンポジウム）を開催した。6月30日の第1回研究会では昨年度の活動について整理し、今年度の活動方針およびデータベース構築の進め方について協議した。第2回研究会は7月22日に開催し、「アフリカの植生に関する研究動向の紹介」をテーマに共同研究員2名が発表した。11月18日には第3回研究会を開催し、データベース整備の進捗状況を確認し、成果発表に関する打ち合わせをおこなった。2月14日の第4回研究会は、公開シンポジウムを兼ねて「現代アフリカにおける植物利用と地域植生の持続可能性」というタイトルで開催し、現代のアフリカ社会における植物利用の意味や地域植生の変化について8名が報告した。2月21～22日には第5回研究会「アフリカにおける草本植物の利用：生活史と生育環境からの考察」を開催し、9名が発表した。

成果

第1点目は、持続可能性という視点からアフリカの植物利用と植生管理について再検討したことである。第4回研究会では、半乾燥地から熱帯雨林までアフリカのさまざまな植生帯における植物利用の事例が報告され、植物そのものの特性と地域を取り巻く社会経済状況が相互に関係しながら持続性に影響を与えていることが明らかになった。またグローバルな言説である「持続可能性」や「生物多様性」などの概念と地域の状況とのズレについても指摘された。たとえばカメルーンのカカオ畑やエチオピアのコーヒー園で見られる「意図しない多様性」が十分に評価されていないことが報告された。第5回研究会では、生活史が短く、その繁殖に人や動物が積極的かつ容易に関与しえる草本植物の利用に焦点を絞り、植物の生活史や生育環境といった植物の特徴が、人と植物の関係にどのように影響を与えるのか、「持続的」な利用の可能性について議論をおこなった。

第2点目は、成果発表に向けた準備を進めることができた点である。特に第4回および第5回研究会は学術雑誌への投稿につなげる意図があった。これらの研究

会での議論を踏まえて来年度中に特集号を組むことを企画している。

第3点目は、昨年度に引き続き、アフリカの植生および植物利用のデータベース公開にむけて、整備を進めることができたことである。合計1067のデータについて学名のスペルチェックをおこなうとともに、新体系の植物分類による種名を併記するなど、検索の際にヒットしやすいような工夫を加えた。また、別の研究者のデータについて日本語記載データの英訳も進めた。

1. 関連地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

林 行夫 (京都大学地域研究統合情報センター)

小林 知 (京都大学東南アジア研究所)

◆メンバー

今中 博之 (アトリエ インカーブ)

桶谷 猪久夫 (大阪国際大学国際コミュニケーション学部)

片岡 樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

川田 牧人 (成城大学文芸学部文化史学科)

熊谷 誠慈 (京都大学こころの未来研究センター)

藏本 龍介 (東京大学大学院総合文化研究科)

小島 敬裕 (京都大学東南アジア研究所)

小嶋 博巳 (ノートルダム清心女子大学文学部)

志賀 市子 (茨城キリスト教大学文学部)

菅根 幸裕 (千葉経済大学経済学部)

村上 忠良 (大阪大学大学院言語文化研究科)

守川 知子 (北海道大学大学院文学研究科)

山田 協太 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

山田 仁史 (東北大学大学院文学研究科)

柴山 守 (京都大学国際交流振興機構/地域研究統合情報センター)

原 正一郎 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

人々の暮らしのなかで繰り返される宗教実践が生む時空間と、その実践が創出する共同性や絆の様態と動態を、相関型地域研究の視点から比較検討することにより、宗教および地域の概念を再構築するとともに、研究資源を調査対象地や当該の人々を含めて共有する仕組みを考案する。前複合ユニットでは、国境を越えて広がった宗教的関心にもとづく人の移動、経典や聖具の伝播に焦点をあててそこに生きる人々の視点から地域空間の様態を解明した。その成果を踏まえつつ、概念としての宗教の超越性を前提とせず、宗教に関連した様々なモノやコト(聖地や施設、経典・図像、神話・伝承、宗派・儀礼行為)のマッピングと情報の共有化を推進させることにより、宗教実践の時空間が構築される歴史的な過程とその動態を明らかにする。

2014年度の 研究実施状況

本年度は、3度の研究会を実施した。本ユニットの傘下にある4つの個別ユニットはいずれも今年度で活

動を終える。そのため、3回のうち1回は個別ユニットとの合同開催とした(他ひとつの個別ユニットとは、昨年度に合同で研究会を開催)。

第1回研究会は、2014年6月13～14日に複合ユニットの単独の開催で行った。首狩りという宗教的行為の世界的分布の検討から地域概念の再考を促す講演のほか、明治期に日本からインドへ留学して彼の地の仏教を学んだ学生たちの行動を取り上げ、宗教交流・ネットワークの発展過程の特徴について議論した。また、外部から講演者を招聘し、近世日本の巡礼者の行動とそれを支えた当時の地域社会に関する議論を、定量的データの分析と可視化の方法論を含めて行った。

第2回は、2014年10月18～19日に複合ユニット単独で開催した。複合ユニットのメンバーによる、宗教と社会福祉、障がい者の身体と表現をテーマとする発表およびコメントのほか、外部からゲストスピーカーを招聘し、モンゴルの社会変化とキリスト教改宗者の増加に関する講演を中心とした討議を行った。

第3回研究会は、2014年11月29～30日に個別ユニット「宗教実践における声と文字：東南アジアからの展望」と共催で実施した。個別ユニットは、ユニットの議論の紹介とともに、ミャンマーの僧侶の実践における声を中心とした身体的知と文書に依拠する教養的知の関係性の変化に関する講演を提供した。複合ユニットからは、メンバーの外から招聘した講演者によるモンゴルのシャーマニズムの拡大に関する講演の他、GISを用いた宗教施設の空間分析の方法論に関する講演を提供した。合同開催を通して、複合ユニットのメンバーは、個別ユニットがこの2年間に進めてきた研究テーマに関する理解を深めた。

今年度はまた、第1回研究会において京都府宇治市の黄檗宗万福寺での放生会にメンバーが参加し、日本における華人社会の集合儀礼を参与観察するプログラムを実施した。また、継続中の宗教実践の可視化については実践の諸局面にともなう「移動」の動態と意味を三次元的に表現することを試みた。

成果

2年度目となる本年度では、各自がそれぞれ異なる地域で研究対象として関わる「宗教」を、あらためて総括的に再考する機会をもつことを企図した。すなわち、制度的、学問的概念としての「宗教」の学史的な研究、それに関する言説のレビューとともに、宗教が学知ないし社会的な常識として語られる前段階での状態を、実践そのもののコンテンツを探求するかた

ちで議論を深めた。とりわけ、障がい者の「生の芸術（アール・ブリュット）」の現場から「宗教的なるもの」をみたことは、宗教をめぐる近代的な言説と制度、そして実践との間にある基本的な齟齬を新たに確認する機会となった。また、その齟齬の諸局面において露呈する宗教と福祉の問題群を多角的に検討することができたのは大きな収穫であった。

本ユニットが他の個別ユニット間に通底するように展開させてきた宗教実践の「可視化」については、それぞれに蓄積されている地域ごとのデータにそうかたちで、地図上に多様な時間軸を表現する技法を進展させることができた点では一定の進捗をみたといえよう。しかしながら、地域間比較を可能にするデータベースとして統合的に構成するためのデザインは、データをストックするデバイスとなる My データベースの更新作業との連携もあり、来年度以降に構築されるべき課題として残された。

1. 相関地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

1. 移動と宗教実践：地域社会の
動態に関する比較研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

小島 敬裕 (京都大学東南アジア研究所)

◆メンバー

片岡 樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

兼重 努 (滋賀医科大学医学部)

小西 賢吾 (京都大学こころの未来研究センター)

島村 一平 (滋賀県立大学人間文化学部)

藤本 透子 (国立民族学博物館民族文化研究部)

王 柳蘭 (京都大学白眉センター・地域研究統合情報センター)

林 行夫 (京都大学地域研究統合情報センター)

和崎 聖日 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

近年のグローバル化の進展により、地域や国境を越えた移動の活性化は普遍的な現象となっている。それにとともない、宗教の実践者たちも移動を繰り返し、より広範な地域における人々とネットワークを築くとともに、地域の宗教実践に従来にないダイナミズムをもたらしている。本研究の目的は、こうした流動化が進む現代の地域像を、宗教の視点から読み解くことである。そのためにまず、多様な地域、宗教を研究対象とする研究者が事例を報告し、宗教的職能者を始めとする人や、聖典・図像といったモノの特定地域を越える移動の実態とともに、特定地域を越えるネットワークを明らかにする。次に、こうした移動が生み出す地域の宗教実践の動態や、移動の背景にある動機や社会変動について分析する。最終的には、従来の研究において前提としてきたことがらを異なる角度から再検討するとともに、現代における宗教や地域社会の動態に関する新たなパースペクティブの構築を目指す。

2014年度の
研究実施状況

今年度は3回の研究会を実施した。

●第1回研究会
2014年7月5日

和崎聖日「揺らぐ家族と村落：ソ連解体以後のウズベキスタンにおける海外出稼ぎ労働とその宗教的帰結」
秀村研二 (明星大学)「教会の生き残り戦略：変化する韓国

● 第2回研究会

2014年10月25日

小西賢吾「移動先から帰還する僧侶たち：チベット、ボン教徒ネットワークの変容とその背景」

兼重努「移動する宗教的職能者、請来される神々：西南中国トン族村落社会の事例から」

● 第3回研究会

2015年1月10日

徐亦猛（福岡女学院大学）「現代の中国農村におけるキリスト教の受容：教会の体制を中心に」

片岡樹「タイ国北部山地の観音寺：予備調査中間報告」

藤本透子「『歴史的祖国』への移住とイスラーム：カザフスタンの事例から」

成果

まず、外来の人やモノの移入が地域の宗教実践に変化をもたらす一方で、それは他地域の実践への均質化を必ずしも意味せず、「民族」独自の実践が逆に顕在化する傾向も見られることが明らかになった。たとえば神戸に居住する中国系キリスト教改革宗長老会では、台湾系華人と中国大陸系華人の信徒が、キリストの名のもとに新たな信仰共同体を形成する。またミャンマーの上座仏教徒山地民パラウンの間には、国家中央部のビルマ族の教学寺院に移動した出家者たちが、民族独自の実践を構築する動きが見られる。

次に、他地域または他国に人が流出した後の地域社会に起こりつつある変化が、宗教実践への注目によって内側から明らかにされた。たとえば中国においては、貧富の格差が拡大した結果、漢族農村における多くの若者男性が都市部へ出稼ぎに行き、喪失感を抱いた老人と女性たちの間にキリスト教が浸透した。ウズベキスタンにおいては、旧ソ連解体後、農村における圧倒的多数の庶民に「突然の貧困」がもたらされ、男性の海外就労者が増加した結果、姦通とイスラーム法による婚姻解消というある種の「負」の宗教実践が導かれている。

さらに、移動する宗教職能者を管理する政策には、同一国でありながらも、宗教によって対照的な相違が見られることが浮き彫りにされた。タイの上座仏教徒社会では、近年の社会変動により、寺院が地域の中心としての役割を失い始めてきたと教育省に認識され、道徳教育に従事する僧侶の地方への移動が促進されつつある。その一方で、タイ国北部の大乗仏教系観音寺においては、中国やミャンマー出身の華人比丘尼が重要な役割を果たしており、公認宗教制度の外部で公然と黙認されていることが明らかになった。

1. 相関地域研究プロジェクト：
(地域)を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

2. 「功德」をめぐる宗教実践と
社会文化動態に関する比較
研究：東アジア・大陸東南ア
ジア地域を対象として

個別共同研究ユニット

◆ 研究期間

2013～2014年度

◆ 代表

長谷川 清 (文教大学文学部)

◆ メンバー

飯國 有佳子 (大東文化大学国際関係学部)

片岡 樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

加藤 真理子 (一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン)

兼重 努 (滋賀医科大学医学部)

黄 蘊 (関西学院大学言語教育研究センター)

小島 敬裕 (京都大学東南アジア研究所)

小西 賢吾 (京都大学こころの未来研究センター)

小林 知 (京都大学東南アジア研究所)

志賀 市子 (茨城キリスト教大学文学部)

藤本 晃 (浄土真宗誓教寺)

丸山 宏 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

村上 忠良 (大阪大学大学院言語文化研究科)

吉野 晃 (東京学芸大学教育学部)

林 行夫 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

本プロジェクトは、東アジア・大陸東南アジアの仏教文化圏において「善行の結果として得られる果報」という意味合いで用いられる「功德」を対象とし、それに関わる観念の地域的な広がりや社会的意義、実践形態の多様性について比較を試みた「功德の観念と積徳行に関する地域間比較研究」(2010～2012年度)の問題領域を引き継ぎ、そこで得られた成果と知見をもとに、宗教実践と地域空間との相関性や社会的位相をめぐる諸問題の解明に向けて地域間比較を行うものである。特に、社会文化動態という視角から、以下の検討課題—①「功德」をめぐる宗教実践やそれについての人びとの「語り」(例えば、救済観や災因論との関係など)、②家族・親族・村落・地域社会などの多様な社会空間において宗教実践を通じて生み出される社会的なつながりや共同性のかたち、③関連する宗教施設や儀礼的装置・用具などのバリエーション、④宗教的伝統を異にするコスモロジーや死生観、諸

神霊の混淆・融合・併存の状況等—について比較検討し、「功德」をめぐる宗教実践が地域空間や人びとの日常的な生活世界の構成にいかに関わっているかについて、その動態やメカニズムを明らかにする。

2014年度の
研究実施状況

2014年度は3回の共同研究会を開催し、4つの研究報告及びそれらをめぐって討論を行った。

● 第1回

2014年7月26日

(京都大学総合研究2号館)

飯國有佳子「功德の環流が生み出すもの：ミャンマー・ある家族の布施実践の事例から」

村上忠良「タイ北部シャン仏教徒の儀礼と功德」

● 第2回

2014年11月22日

(京都大学稲盛財団記念館)

小島敬裕「災難と積德行：中国雲南省徳宏タイ族の事例から」

● 第3回

2015年2月5日

(京都大学稲盛財団記念館)

片岡樹「功德の明朗会計：タイ国の中国系善堂から」

成果

東アジア・東南アジアを視野に入れ、地域社会の動態的把握を可能にする視点や枠組みの提示が人文学や社会科学にも求められている。宗教実践は、社会的・文化的システムと密接な関係にあり、人びとの日常的な生活世界において、自己と他者をつなぐ文化装置として、多様な意味世界を紡ぎ出している。歴史的に多様な関係性やつながりのかたちが存在してきた同地域では、今日グローバル化によるローカルな地域社会への浸食作用が増し、人間存在をおびやかす疾病や災害、様々な社会的危機、消費主義の浸透に直面している。それらをふまえて、伝統的なつながりのあり方の再評価や新たに出現しつつある超域的なネットワークの諸特性を解明することの重要性が高まっている。

本プロジェクトでは、「福田」「功德」「積德行」など、従来は仏教学や宗教人類学／社会学的研究において検討されてきた問題群を地域社会／空間のマイクロ／マクロレベルの社会文化動態との関連でとらえなおし、宗教実践の視点から生きられる〈地域〉の総合的把握を試みた。今年度になされた4つの研究報告を通じて、前年度からの検討課題であった2つの問題領域—仏教文化圏における「功德」及び積德行をめぐる宗

教実践の多様性と諸類型の検討、マイクロ／マクロ関係の文脈のなかで作動する宗教実践とローカリティの検討—に対して、民族誌的データをふまえた研究上の進展があった。すなわち、「功德」のマトリクス、積德行における功德の周流が生み出すネットワークと協働性のかたち、危機・災難と積德行、公共的な救済財としての「功德」の蓄積／再配分における宗教的施設の役割の解明がそれである。2年間の共同研究によって明らかにされた理論的な枠組みや個別の事例研究は『積德行と社会文化動態に関する地域間比較研究：東アジア・大陸東南アジア地域を対象として』（長谷川清・林行夫編、CIAS Discussion Paper No.46、2015年）として刊行した。

1. 関連地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

3. 南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

藤原 久仁子 (大阪大学大学院言語文化研究科)

◆メンバー

吉川 卓郎 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部)

久野 聖子 (同志社大学グローバル地域文化学部)

松嶋 健 (京都大学人文科学研究所)

成田 真樹子 (長崎大学経済学部)

安田 慎 (帝京大学経済学部)

目的

2013年7月にクロアチアが加盟したことでEU加盟国は28カ国となり、ユーロ圏も人口3億人を超える規模となった。欧州の平和と民主主義の向上に貢献したとして、EUは2012年にノーベル平和賞を受賞している。

一方、中東・北アフリカ地域で本格化した民主化運動の結果、ヨーロッパのなかでも船で到着しやすい南欧に難民が集中し、欧州経済危機が深刻さを深める状況と相まって、南欧地域にさまざまな社会問題が生じている。本研究の目的は、援助や庇護を求める国内外からの人びとの割合が増大する南欧地域の福祉を、カトリックの慈善事業、民間福祉、フィランソロピー、CSR (企業の社会的責任)、行政、有償・無償のボランティア、投資、サービスなど様々な文脈に属するアクターたちの相互接近に着目しながら検討することを通じて、現代南欧地域の福祉の複合体を明らかにすることである。

2014年度の
研究実施状況

2014年度は研究会を1回実施した。

●2015年3月7日

(京都大学稲盛財団記念館)

“The Role of Social Cooperatives in Mental Health Service in Italy” (Takeshi Matsushima)

“Operation Triton in the Mediterranean: In Framing of Its Uncertainties” (Kuniko Fujiwara)

成果

本共同研究は、福祉の南欧モデルを下支えする家族やコミュニティのあり様それ自体が変わりつつある一方で、難民の大量流入や経済危機という時事的な問題への対処が同時に迫られる南欧地域社会の今を、カトリシズムと福祉ビジネスをキーワードに読み解くことを目的に始められた。初年度は(1)本共同研究で共通して追求できるテーマの設定、(2)分析対象の明確化、(3)地域研究から各学問領域への貢献という視点や役割の共有化を図った。本年度は、帰着点なき進出を繰り返す「通過中」の難民が出会うactorsや、彼らが直面する問題から見えてくるヨーロッパ地域像を描くという、初年度に確認された視点に基づき調査を行い、南欧カトリシズムの二つの事例(イタリアのソーシャル・コーポラティブ、マルタのピースラボとグッドシェパーズ)をもとに皆で議論した。

その結果明らかになったのは、1) EUファンドの獲得をめぐり、福祉の担い手たる第1セクター、第2セクター、第3セクターの協働が推進されていること、2) 産学官民(セクター間)の調整のための中間団体が存在し、3) 大型資金の獲得でより大きな事業が可能になる一方、プロジェクトベースの福祉活動となり、期間満了後の継続性担保が難しくなっていること、4) その隙間を埋めることが期待される宗教的慈善活動もこれらの動きと軌を一にしており、少額の個人献金だけでなくEUファンドや企業からの大型献金及びスポンサーシップの獲得に向け、ソーシャル・エンタープライズの活動を展開するという循環が見られることである。その地域間比較というところまで本年度は進めることができなかったが、本テーマ(地中海地域の福祉ビジネスの展開)について、カトリシズムとイスラームの比較の視点から今後も検討していくことにしたい。

1. 相関地域研究プロジェクト：
〈地域〉を測量(はか)る—21世紀の「地域」像(統括班)

3. 宗教実践の時空間と地域

4. 宗教実践における声と文字：
東南アジア地域からの展望

個別共同研究ユニット

2014年度の
研究実施状況

2014年度は3回の研究会を開催し、研究報告と議論を行った。

●第1回研究会
2014年7月13日

吉野晃(東京学芸大学)「経典読誦と歌唱託宣：タイ北部、ユーミン社会の在来儀礼と新興儀礼における声と文字」
伊藤悟「徳宏タイ社会の死生観の表象：シャマンの憑依うたと上座仏教経典『指路経』の比較」(民族誌映像の紹介を含む)

●第2回研究会
2014年11月29～30日

共催：複合ユニット「宗教実践の時空間と地域」
藏本龍介「『身体知(声)』から『教養知(文字)』へ：ミャンマーにおける仏教的知識の変容プロセスとそのインパクト」
島村一平(滋賀県立大学)「増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ」
柴山守(京都大学)「寺院マッピングのGIS分析について」

●第3回研究会
2015年2月21日

船山徹「中国仏教の経典読誦法はインド伝来か中国特有か：転読と梵唄」
小島敬裕「ミャンマーにおける仏教徒諸民族の在家説法師たち」

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

村上 忠良(大阪大学大学院言語文化研究科)

◆メンバー

池田 一人(大阪大学大学院言語文化研究科)

伊藤 悟(国立民族学博物館)

片岡 樹(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

川田 牧人(成城大学文芸学部文化史学科)

北田 信(大阪大学大学院言語文化研究科)

藏本 龍介(東京大学大学院総合文化研究科)

小島 敬裕(京都大学東南アジア研究所)

小林 知(京都大学東南アジア研究所)

津村 文彦(福井県立大学学術教養センター)

Nathan Badenoch(京都大学白眉センター)

船山 徹(京都大学人文科学研究所)

山根 聡(大阪大学大学院言語文化研究科)

吉本 康子(国立民族学博物館)

林 行夫(京都大学地域研究統合情報センター)

目的

東南アジア地域には、仏教、ヒンドゥー教、イスラーム、キリスト教がそれぞれの時代背景のなかで受容され、土着の宗教世界を大きく変容させてきた。これらの聖典(経典)を有する宗教と共にもたらされた文字は単に音声言語を表記する技術にとどまらず、土着の宗教世界の実践の影響を受けつつ、「書かれたもの」の聖性(正統性)を生み出し、さらに宗教的な領域を超えて、人々の歴史意識や民族意識にも大きな変革をもたらしてきた。本研究の目的は、東南アジアとその隣接地域(東アジア、南アジア)における宗教実践における口承と書承の関わりについて、①東南アジア地域内の比較研究と、②東南アジアと隣接地域(東アジア、南アジア)との比較研究を行うことである。特に本研究では、声から文字へ、紙から電子メディアへ、秘匿されたものから公共のものへ、あるいは呪術から合理的な精神へとといった一方向の過程ではない、声と文字の輻輳的な関係に着目する。

成果

2年間の研究会での口頭発表と議論から明確になった点は以下の通り。

①言語をめぐる諸行為の関係性

声と文字をめぐる「読み/語り」関係性について(川田、小島、伊藤、村上)、口承的で自由な「語り」から固定されたテキストの「読み」へという一方通行的な傾向よりも、テキストに従属しない「読み」や、テキストに従いながらの「語り」といった豊かな言語行為の様態があることが共通点として明確となった。また、スーフイズム文学の著作にみられるインド音楽や土着の口承テキストの要素の指摘も(北田)、「書くこと」と「奏でること」・「語ること」の関係性の深さを示唆している。

但し、このような言語をめぐる諸行為の関係性に対して、近代に生じている「身体知」の「教養知化」の影響(藏本)を見逃すことはできない。

②媒体(メディア)間の相互性

物質性(聖像や身体)に関わる語りや文字・図像について、聖像についての語りやそれを集めた奇跡譚

集（書かれたテキスト）は聖像信仰という一つの宗教実践を構成するモノ-コト-コトバの連鎖の一端を担っていること（川田）、図像化され断片化された文字（図像も含む）を身体に刻み込むことが、タブーを伴う呪的効果や美的効果を含んだタイの刺青文化を構成していること（津村）から、声・文字といった媒体のみならず、モノや身体といった媒体との相互関係の把握の重要性が明らかとなった。

③ オーラリティとリテラシーの輻輳

様々な読みの可能性に開かれた漢文経典（片岡）、漢文経典におけるインドの音調の取り込みの試み（船山）、朗誦される仏教書（小島、伊藤、村上）についての研究から、オーラリティとリテラシーを対立的なものとして単純に捉える言語観を批判し、声と文字に関わる行為が有するコンテクストを視野に入れた「言語する languaging」（J. McDaniel 2008. 片岡論文からの引用）現場への視座の重要性が明らかとなった。

2. 地域情報学プロジェクト： 地域情報学の展開（統括班）

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

地域研究の課題の一つは、変化・連動し影響しあう地域の理解である。そのためには「比較」を通じて各地域の個性をより明確に把握するとともに、地域と地域がどのように相互に「関係」しながら世界の一部を構成しているかという視点が不可欠である。この「比較」と「関係」というキーワードは情報学的手法の展開が期待される場所である。

しかし、情報学は明確なノルムと手続きによりデータを計量的に処理することを目指しているのに対して、地域研究を構成する人文学研究領域では定性的あるいは非数値的な内容を解釈的に処理することが多く、統計処理などに代表されるコンピュータ処理には馴染みにくい。これが相関型地域研究への地域情報学の展開が困難な原因の一つであると考えられる。

一方で、人文学史資料であっても時空間属性や主題（人物、事件、事象等）に注目した計量化はある程度可能であり、地域情報学ではその研究を継続している。同時に地域研究においても基本史資料のデジタル化が進んでおり、情報学的分析の素地が整いつつある。

そこで本統括班では、地域情報学および地域情報資源共有に関わる複合研究プロジェクトとの協働により、これまでの成果を駆使しつつ、相関型地域研究への地域情報学からの展開の可能性を試みる。

2014年度の 研究実施状況

本統括班のもとに、『『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開（代表：原正一郎）』、「非文字資料の共有化と研究利用（代表：貴志俊彦）」、「CIAS所蔵資料の活用（代表：柳澤雅之）」の3つの複合班を配置した。ただし独自の研究活動は実施しなかった。

詳細は各複合班の報告を参照。

①「『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開」複合班

- ・「地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積(代表：関野樹)」および「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究(代表：山田太造)」については各報告を参照。
- ・研究者あるいは小規模プロジェクト等が収集した地域研究資料の蓄積・公開・利活用を支援する「Myデータベース」について、構築過程の見直しと簡素化を進め可用性の向上を目指した。
- ・次世代資源共有化システムモデルとしてRDFを基盤とした情報システムの研究開発を進めた。具体的には総合地球環境学研究所の「地球環境学リポジトリ事業」とのコラボレーションにより、歴史地名辞書データベースのSPARQL End PointとAPIの構築を試みた。さらに人間文化研究機構研究資源共有化事業とのコラボレーションにより、上記歴史地名辞書データベースを、CiNii等の論文データベース、国文学研究資料館および国立歴史民俗博物館のデータベース、京都府立総合資料館所蔵の歴史文書のデータとセマンティックWeb技術により相互に関連させ、関連する情報を抽出する試みを行った。
- ・空間情報処理ツール(HuMap)の機能拡張(基礎地図の座標系の多様化)を継続した。
- ・カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のOPACを本センター資源共有化システムと共有化した。さらに人間文化研究機構の資源共有化システムから本センター資源共有化システムへの接続を開始した。
- ・「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開(東南研)」研究成果国際共有化班とのコラボレーションにより、旧ソ連、外邦図、アジア一般地図データベースの改修と統合検索システムの構築を継続した。

②「非文字資料の共有化と研究利用」複合班

- ・非文字資料の研究利用方法を共同討議
 個別研究ユニット「写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析」との共同で、2015年3月15日、広島で公開シンポジウムを開催した。

個別研究ユニット「20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」と共同で、9月3～10日ロシアサハリン州で、現地研究者と学術交流を進めるとともに、初歩的ながら図画像資料を用いたフィールドワークを実践した。

京都大学人文科学研究所所蔵の「華北交通写真群」の写真資料の本年度課題分のデジタル化を実施し、メンバー内ではあるが、すべてのデジタル化写真の共有をはかった。

・非文字資料の共有化の試みを公開

公益財団法人東洋文庫等との連携により、戦前の写真、写真帳、画報類のウェブ・アーカイブを公開した。本年度は、雑誌『北支』および写真帳『亜細亜大観』のデータベースを公開した。

・機関とデジタル・アーカイブの研究連携を協議

非文字資料データベースの連携(統合)を進めるため、米国ラファイエット大学から来訪した2名の研究者とともに、統合システムの方法について共同討議するとともに、今後の協力が約束された。

③「CIAS所蔵資料の活用」複合班

2014年度の複合共同研究では、発見のツールとしてのデータの可視化と、可視化によって得られたヒントを検証可能な研究分析ツールをデータベースに組み込んだ統合型データベースの構築について検討するため、首都大学東京のwebデザインを専門とする渡邊英徳研究室および東京大学史料編纂所の山田太造氏と共同して、フィールド・データベースを題材とした研究を進めた。東京および京都で個別の研究打ち合わせを3回開催し、その成果を2015年2月12日に京都大学で報告した。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

石川 正敏（東京成徳大学経営学部）

桶谷 猪久夫（大阪国際大学国際コミュニケーション学部）

川口 洋（帝塚山大学経営情報学部）

五島 敏芳（京都大学総合博物館）

後藤 真（人間文化研究機構資源共有化プロジェクト）

関野 樹（総合地球環境学研究所）

内藤 求（株式会社ナレッジ・シナジー）

山田 太造（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

林 行夫（京都大学地域研究統合情報センター）

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

「地域の知」に関する情報学的な手法の開発を試みる。そのため、これまでの時空間属性に加えて、語彙の構造に注目した地域情報学の構築を目指す。複合研究ユニットとして、以下の2点に主眼を置く。

①地域情報学の地域研究への展開

複合および個別研究ユニットから幾つかのテーマ（例えばフィールドノートや記述疫学）を選び、地域研究情報基盤を構成するMyデータベース、REST形式API、共有化メカズム、時空間情報処理ツール等を駆使したデータ収集、組織化、計量化、可視化、分析等を主体とした、情報学パラダイムに基づく地域研究を推進する。

②研究プロジェクト等とのコラボレーション

これまでの地域情報学では未着手であったテキストデータの処理と曖昧な時空間表現に関する研究に着手する。テキストデータには5W1Hに関する多様な記述が含まれているが、これらを識別するマークアップ（あるいは準ずる記述）と構造化（意味的な関連づけ）を施さなければ、コンピュータによる処理は困難である。また識別できたとしても「頃」や「辺り」など曖昧な表現のままでは利用できない。これらをどのよう

に処理したら良いか、語彙および時空間の視点から実証的に研究を進める。

2014年度の
研究実施状況

各個別ユニット「地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積（代表：関野樹）」、「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究（代表：山田太造）」と共同で5回の研究会と、各研究テーマを自由に討論するための研究懇談会を7回開催した。本年度は、個別ユニットとの合同だけでなく、外部の研究組織との共催による研究会を実施した（第2回、第4回、第5回）。

●第1回研究会

2014年5月10日

テーマ等：H-GISにかかる研究情報資源の状況（報告4件）

●第2回

2014年7月19日

テーマ等：地名にかかる情報技術に関する研究会（報告5件）
共催：国立情報学研究所公募型共同研究「GeoNLPプロジェクト：自然言語文を対象とした地名情報処理とコミュニティの展開」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源共有化事業委員会

●第3回

2014年10月17日

テーマ等：地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究（報告4件）

●第4回

2015年2月13日

テーマ等：セマンティックWeb技術特集（報告8件）
共催：国立情報学研究所 武田研究室

●第5回

2015年2月27日

テーマ等：国内外のDH連携と京大のDHの可能性（報告3件）
共催：京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文科学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」

●研究懇談会

2014年4月22日（2件）、6月21日（5件）、8月4日（6件）、9月5日（1件）、11月29日（2件）、12月12日（2件）、2015年3月24日（4件）

成果

- ・「地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積（代表：関野樹）」および「地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究（代表：山田太造）」については各報告を参照。
- ・研究者あるいは小規模プロジェクト等が収集した地域研究資料の蓄積・公開・利活用を支援する「My

データベース」について、構築過程の見直しと簡素化を進め可用性の向上を目指した。

- ・次世代資源共有化システムモデルとしてRDFを基盤とした情報システムの研究開発を進めた。具体的には総合地球環境学研究所の「地球環境学リポジトリ事業」とのコラボレーションにより、歴史地名辞書データベースのSPARQL End PointとAPIの構築を試みた。さらに人間文化研究機構研究資源共有化事業とのコラボレーションにより、上記歴史地名辞書データベースを、CiNii等の論文データベース、国文学研究資料館および国立歴史民俗博物館のデータベース、京都府立総合資料館所蔵の歴史文書のデータとセマンティックWeb技術により相互に関連させ、関連する情報を抽出する試みを行った。
- ・空間情報処理ツール（HuMap）の機能拡張（基礎地図の座標系の多様化）を継続した。
- ・カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のOPACを本センター資源共有化システムと共有化した。さらに人間文化研究機構の資源共有化システムから本センター資源共有化システムへの接続を開始した。
- ・「ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開（東南研）」研究成果国際共有化班とのコラボレーションにより、旧ソ連、外邦図、アジア一般地図データベースの改修と統合検索システムの構築を継続した。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

1. 地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

関野 樹（総合地球環境学研究所）

◆メンバー

奥村 英史（株式会社ヒューマンオーク）

加藤 常員（大阪電気通信大学情報通信工学部）

久保 正敏（国立民族学博物館）

星川 圭介（富山県立大学工学部環境工学科）

山田 太造（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター）

米澤 剛（大阪市立大学大学院創造都市研究科）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

地域情報学については、これまで時空間情報解析ツールHuTime/HuMapを中心にツールの開発が進められ、地域研究をはじめとする様々な分野でこれらのツールを使った研究が展開されている。その一方で、時空間情報の解析に必要な基盤的な情報の不足が明らかになってきた。つまり、HuTime/HuMapで用いるデータを生成するには暦や地名に関する情報が必要であり、また、データを表示するにはその背景となる時代区分や行政界などの情報が必要になる。さらに、特定の研究課題や材料について論じるためには、それぞれのテーマに沿った年表や地図などのデータが用いられる。

本研究は、地域研究者が持つ「知」を結集し、これらの基盤情報を様々な地域や時代およびテーマについて収集・提供することにより、「地域の知」を時間軸や空間軸に沿って比較・検証するための共通の足場を構築しようとするものである。これにより、地域情報学の学問的、社会的な新たな役割を見出すことを目指す。

2014年度の 研究実施状況

研究会を5回開催するとともに、研究上のアイデアや課題を自由に討論する場としての研究懇談会を7回開催した。本年度は、関連する複合ユニットや個別ユ

ネットとの合同だけでなく、外部の研究組織との共催による研究会を実施し（第2回、第4回、第5回）、多様な参加者からの報告や議論を交えることで、地域の時空間基盤情報を地域研究以外の研究分野にも幅広く提供するという本研究の意義を実践することができた。なお、研究会、研究懇談会の詳細および第2回研究会の報告書をWebページにて公表している（<http://www.h-gis.org/>）。また、本研究の成果となるいくつかのデータベースおよびソフトウェアを本年度新たに公開した。

● 第1回研究会
2014年5月10日

H-GISにかかる研究情報資源の状況（報告4件）

● 第2回研究会
2014年7月19日

地名にかかる情報技術に関する研究会（報告5件）

共催：国立情報学研究所公募型共同研究「GeoNLPプロジェクト：自然言語文を対象とした地名情報処理とコミュニティの展開」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源共有化事業委員会

● 第3回研究会
2014年10月17日

地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究（報告4件）

● 第4回研究会
2015年2月13日

セマンティックWeb技術特集（報告8件）

共催：国立情報学研究所 武田研究室

● 第5回研究会
2015年2月27日

国内外のDH連携と京大のDHの可能性（報告3件）

共催：京都大学人文科学研究所・共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」

● 研究懇談会（報告件数）

2014年 4月22日（2件）、6月21日（5件）、8月4日（6件）、9月5日（1件）、11月29日（2件）、12月12日（2件）、2015年 3月24日（4件）

成果

(1) データフォーマットとデータ構築方法の確立／データ収集

当初計画において1年目に構築することとなっていたデータエディタが、本年度6月によりやく公開された。また本年度は、セマンティックWeb技術に基づく設計等、昨年度の研究成果を踏まえ、地名や暦に関するデータの収集や加工、および、既存のソフトウェア（HuTimeなど）をこれらのデータに対応させるための

設計（HuTime +RDFa）と改修を行った。

(2) データの提供と利用事例の収集

昨年度より公開されている暦に関するデータベース（暦変換サービス）、昨年度提案された暦の識別子や暦カタログの機能をセマンティックWeb技術と連携させ、Web上で特定の日を識別する仕組み（日のURI）を構築した。これにより、インターネット上に散在するデータを日付により相互に連携させる仕組みが整った。

地名情報に関しては外部を含む3つの研究組織の共催で「地名にかかる情報技術に関する研究会」を開催し、緯度経度などの座標との対応付け、地名データの抽出、地名同士の時空間的な関係の表現など、さまざまな技術的な課題について検討するとともに、歴史地名の活用事例や人権問題といったデータ公開・提供にかかる実務的な問題への取り組みについて相互に情報を交換した。

さらに、人間文化研究機構・研究資源共有化事業において、本研究の地名辞書データを、CiNii等の論文データベース、国文学研究資料館および国立歴史民俗博物館のデータベース、京都府立総合資料館所蔵の歴史文書のデータとセマンティックWeb技術により相互に関連させ、関連する情報を抽出する試みがなされた。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）
1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開
2. 地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究
個別共同研究ユニット

2014年度の
研究実施状況

複合共同研究ユニット「『地域の知』の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開」および個別共同研究ユニット「地域に関する時空間基盤情報の収集・蓄積」との共同で、研究会を5回開催（うち4回共催）し、人文科学領域における時空間情報処理の可能性について、多様な研究領域の研究者が、考え方や問題点を共有し、研究の方向性を見出すことを目的とした研究懇談会を7回開催した。

- ◆研究期間
2013～2014年度
- ◆代表
山田 太造（東京大学史料編纂所前近代日本史情報国際センター）
- ◆メンバー
大向 一輝（国立情報学研究所）
小野原 彩香（同志社大学大学院文化情報学研究所）
清野 陽一（奈良文化財研究所）
関野 樹（総合地球環境学研究所）
永崎 研宣（人文情報学研究所）
深川 大路（同志社大学文化情報学部）
柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）
帯谷 知可（京都大学地域研究統合情報センター）
原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）
柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究では、地域研究に関するテキスト資料を対象として、そこからトピック（ここでは共起する語彙により特徴付けられるカテゴリを指す）を検出し、トピックの時空間的变化を追跡することで、事象の時空間的構造を明らかにするデータ工学的な手法の確立を目指す。特に以下の2点に着目する。

- 1) 地域研究史資料テキストからのトピック検出および時空間変化追跡手法の確立：テキストから特徴語（テキストを特徴付ける語）を抽出し、同質な特徴語をクラスタリングすることでトピックを検出する。特に、時空間語彙に着目した特徴語のクラスタリングを行うことで、トピックの時間的・空間的遷移を追跡する。
- 2) トピック追跡をもとにした地域に関するデータの構造化：上記の成果をもとに、データ間において潜在的に形成されるリンクを構造化する。このとき、セマンティック web（Webページに記述された内容をコンピュータ分析できるように記述する方法および分析法）の表現方法を利用することにより、トピックとその時空間変化、さらには地域研究史資料を、再利用や他の目的で使用可能かつ意味構造を表現しうる形式で表現する。

●第1回研究会
2014年5月10日
(京都大学稲盛財団記念館)

テーマ：H-GISにかかる研究情報資源の状況
「学認」に対応した京都大学デジタルアーカイブシステム、他3件

●第2回研究会
2014年7月19日
(国立情報学研究所)

テーマ：地名にかかる情報技術に関する研究会
共催：国立情報学研究所公募型共同研究「GeoNLPプロジェクト：自然言語文を対象とした地名情報処理とコミュニティの展開」、大学共同利用機関法人人間文化研究機構・研究資源共有化事業委員会
資源共有化における地名の役割と時空間への展開、他4件

●第3回研究会
2014年10月17日
(京都大学稲盛財団記念館)

共催：京都大学人文科学研究所共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」
地域研究データにおけるトピックの検出と時空間変化に関する研究、他3件

●第4回研究会
2015年2月13～14日
(国立情報学研究所)

テーマ：セマンティックWeb技術特集
共催：国立情報学研究所 武田研究室
LODAC Project/DBpediaなどLODの話題、他7件

●第5回研究会
2015年2月27日
(京都大学人文科学研究所)

テーマ：国内外のDH連携と京大のDHの可能性
共催：京都大学人文科学研究所共同研究班「人文学研究資料にとってのWebの可能性を再探する」
京都大学研究資源アーカイブの活動と京都大学デジタルアーカイブシステム、他2件

成果

本年度は、昨年度に引き続き、研究目的で掲げた「1)

地域研究史資料テキストからのトピック検出および時空間変化追跡手法の確立」を深化させ、さらに、「2) トピック追跡をもとにした地域に関するデータの構造化」についての検討を進めた。特に以下の3点を重点的に推し進めた。

a) トピック検出の深化

昨年度までに進めたフィールドノートのテキスト内に潜在するトピック（潜在的トピック）の検出をさらに深め、分析を行う上で不要である語彙を除去し、再度検出されるトピックの分析を行った。ここで、分析を深化させるためトピック数を増加もしくは減少させた。これにより、フィールドノートの内容と検出されるトピックの関係を洗い出すことができた。

b) 地名の抽出

昨年度まではフィールドノートの各場面の空間的特徴として大まかな空間情報を与えていた。より細かく空間情報を付与するため、テキスト内に出現する地名を抽出するための手法について検討した。

c) 地域に関するデータの構造化・表現手法

フィールドノートの各場面を特徴づけるためのデータ構造を設計し、その表現方法について検討を進めた。特に表現方法として、データの利活用を高めるために、セマンティックwebの手法を用いたデータモデリングを行った。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

1. 「地域の知」の情報学：時間・空間・語彙に注目した地域情報学の展開

3. 学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

市川 哲（立教大学観光学部）

及川 茜（神田外語大学外国語学部）

黄 蘊（関西学院大学言語教育研究センター）

横田 祥子（滋賀県立大学人間文化学部）

亀田 堯宙（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

地域誌（地域研究の論文）を研究対象の地名により地図上にマッピングして表示することで、地名から学術研究の動向（どのような研究が行われているか）や研究者情報（誰がどのような研究を行っているか）を検索できるようにし、特定地域に関する地域研究の知見の蓄積（＝「地域の知」）を統合的に可視化するシステムを開発する。細分化された分野ごとになされる学術研究の蓄積を、地理情報を活用して研究対象地域ごとに分類することで、特定地域に関する情報の全体像を把握する助けとなる。これにより、研究者による研究成果の相互参照を助けるだけでなく、研究者以外で特定地域の情報を必要とする人々（たとえば報道、外交、行政、企業などの各分野の実務者）が地域研究の知見を活用しやすくなることが期待される。

2014年度の 研究実施状況

マレーシアに関するオンラインメディアのうち主要なものを選定して、日々更新される記事を自動収集して蓄積し、記事名、執筆場所、掲載時刻、記事本文などの項目によって記事が検索できる仕組みを構築した。また、これらの情報を京大地域研で作成・公開しているMyデータベースによりデータベース化し、どの項目をどのように記述すると利用しやすいデータベースになるかを検討した。また、現地語に通じていない人でも内容によって記事が分類できる初歩的な情報

処理を行う方法として、(1) 記事の署名に書かれている地名に加えて本文中で言及されている地名から抽出するようにし、また、(2) 特定のテーマに関する記事を集めたいときにどのようなキーワードを設定すればよいかがわかるように本文中のキーワードによる選択を随時修正できる仕組みにした。

成果

今年度は、マレーシアの地域を限定して主要なオンライン情報を収集し、簡単なデータベースを作成して、データの収集・整理の簡便さとデータベース利用の際の都合の噛み合わせを検討した。以下のマレーシア・サバ州で発行されているオンライン情報の毎日の記事リストを作成し、Myデータベースによりデータベース化した。

- ・『Daily Express』（コタキナバル、英語・マレー語・カダザン語）
- ・『New Sabah Times』（コタキナバル、英語・マレー語・カダザン語）
- ・『Borneo Post』（コタキナバル、英語・マレー語・カダザン語）

これらのデータベースをもとに、キーワードを組み合わせて事前に登録したテーマごとに記事を利用者の携帯端末にメールで自動配信する仕組みを作り、試験運用を開始した。緯度・経度情報を伴った地名一覧を用意し、オンライン情報配信サイトをいくつか指定すれば、関心を持つテーマに関する記事を自動で抽出してメールで配信する仕組みが比較的簡便に形成できることがわかった。

各地域研究者が研究対象地域ごとに情報収集の仕組みを作り、統合することで世界全体を対象にしたオンライン情報としての「地域の知」の収集・蓄積が可能になるのではないかと考えられる。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

2. 非文字資料の共有化と研究利用

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

石川 禎浩（京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター）

小野寺 史郎（埼玉大学教養学部）

川島 真（東京大学大学院総合文化研究科）

呉 孟晋（京都国立博物館学芸部）

小林 聡明（慶熙大学哲学科）

白山 眞理（日本カメラ博物館）

孫 安石（神奈川大学外国語学部）

瀧下 彩子（公益財団法人東洋文庫）

武田 雅哉（北海道大学大学院文学研究科）

田島 奈都子（青梅市立美術館）

陳 來幸（兵庫県立大学経済学部）

丸田 孝志（広島大学大学院総合科学研究科）

谷川 竜一（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

非文字資料は、地域や歴史の記憶としてだけでなく、人々の集合的記憶を反映させており、近年その学術利用の価値が再認識されている。本プロジェクトは、歴史学、美学、カルチュラル・スタディーズ、表象文化論、メディア論などのディシプリンを連携させて、地域研究における非文字資料の研究や解釈の方法について共同討議することを目的とする。この複合プロジェクトでは、東アジアを事例としつつも、その他の地域との比較検討を進めている。

なお、本プロジェクトでは非文字資料の表現手段やその効果が、特定の政策や機構、メディアやテクノロジーによって規定されるだけでなく、その底流には、人びとのアイデンティティや集合的記憶、国家観や時代認識など、さまざまなファクターが深くかかわってきたことに留意したい。こうした観点から、非文字資料の解釈や分析の方法論について検討を加えるとともに、非文字資料共有化の枠組みについても討議を進めたいと考えている。

2014年度の
研究実施状況

(1) 非文字資料の研究利用方法を共同討議

- ・個別研究ユニット「写真雑誌に見る第二次世界大

戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析」との共同で、2015年3月15日、広島で公開シンポジウムを開催した。

- ・個別研究ユニット「20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶」と共同で、9月3～10日ロシアサハリン州で、現地研究者と学術交流を進めるとともに、初歩的ながら図画像資料を用いたフィールドワークを実践した。
- ・京都大学人文科学研究所所蔵の「華北交通写真群」の写真資料の本年度課題分のデジタル化を実施し、メンバー内ではあるが、すべてのデジタル化写真の共有をはかった。

(2) 非文字資料の共有化の試みを公開

公益財団法人東洋文庫等との連携により、戦前の写真、写真帳、画報類のウェブ・アーカイブを公開した。本年度は、下記の成果のとおり、雑誌『北支』および写真帳『亜細亜大観』のデータベースを構築し、公開した。

(3) 機関とデジタル・アーカイブの研究連携を協議

非文字資料データベースの連携（統合）を進めるため、米国ラファイエット大学から来訪した2名の研究者とともに、統合システムの方法について共同討議するとともに、今後の協力が約束された。

成果

- ・2015年3月15日に広島で、同月17日に京都で共同研究の途中経過の成果報告をおこなった。多くの参加者からは、原爆や戦争をめぐる記録の重要性とともに、それらの記憶化を継続させるためのメソッドづくりの重要性が指摘された。その両面から、首都大学東京渡邊英徳氏が開発されたヒロシマ・アーカイブ、ナガサキ・アーカイブには強い関心が寄せられた。
- ・出版物としては、非文字資料研究（画像、写真、音声等）をめぐる3冊の研究成果を刊行した。白山真理の『〈報道写真〉と戦争』は、名取洋之助・木村伊兵衛・土門拳ら報道写真家たちの実像に迫り、日本の報道写真（ルポルタージュ・フォト）がどのように生まれ、それらがいかに戦争と関わったのかについて読み解く。貴志俊彦『日中間海底ケーブルの戦後史』は、残された文字記録と、音声による記憶との相互補完性について検証するために、1976年日中間海底ケーブル建設事業をトピックとして取り上げた。貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編『記憶と忘却のアジア』のうち、坂部、泉水、

貴志各論考は、満洲、沖縄、華北の記憶化の定位過程と同時に、忘却過程を重視し、記録の両面性について喚起する。

- ・公益財団法人東洋文庫との共同作業により、雑誌『北支』全ページ画像データベース（2014年4月7日公開）及び写真帳『亜細亜大観』データベース（2015年3月31日公開）を構築した。この2つのデータベースにより、グラフ雑誌や写真帳の公開の2つのモデルを提示できたと考える。同時に、異なったアプリケーションを利用した図画像データベースを統合化する方法が課題として浮かび上がった。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）
2. 非文字資料の共有化と研究利用
1. 写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析
個別共同研究ユニット

- ◆研究期間
2013～2014年度
- ◆代表
杉村 使乃（敬和学園大学人文学部）
- ◆メンバー
池川 玲子（実践女子大学）
加納 実紀代（敬和学園大学人文社会科学研究所）
神田 より子（敬和学園大学人文学部）
桑原 ヒサ子（敬和学園大学人文学部）
平塚 博子（日本大学生産工学部）
松本 ますみ（室蘭工業大学工学研究科）
貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

戦時下において、雑誌やポスターに見られる写真やイラストなどの非文字メディアは、各国の戦争の大義を国民に確信させ、戦争へと動員するうえで大きな役割を果たした。またこれらは、各国の民族政策やジェンダー秩序、また「国民」形成を正当化するうえで大きな役割を果たしてきた。本研究グループは、主に第二次世界大戦下、イギリス・アメリカ・中国・ドイツ・日本において刊行された女性雑誌・一般大衆誌に掲載された表紙・グラビア写真や諷刺画などを一次資料とし、そのジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行う。連合国・枢軸国、双方のメディア戦略を調査した上で、大衆メディアにおける非文字資料の表象分析を行い、ジェンダーとエスニシティの交錯を考察する。また、収集した非文字資料の分析方法と共有化に向けての方法論を模索する。

2014年度の
研究実施状況

科研費基盤研究（C）「大衆メディアに見る第二次世界大戦期と戦後秩序の中のジェンダー・エスニシティ」と連携し、関連分野の研究者を交えた公開の研究会を2回、またシンポジウムを1回開催した。内容（メンバーのみ記載）については以下の通り。

- 定例研究会
2014年7月26～27日
（敬和学園大学新発田学術センター）

テーマ「第二次世界大戦前、大戦中、そして戦後におけるジェンダー秩序の変化と戦争の影響、またメディア表象における変化」

- 松崎洋子「*Ladies' Home Journal*誌に見る1950年代白人既婚女性の表象」
- 平塚博子「第二次世界大戦後の*LIFE*におけるジェンダー表象」
- 松本ますみ「占領者日本の「支那」女性像と抗戦中国の女性像：『北支画刊』・『北支』と『良友』から考える」
- 杉村使乃「戦時下・戦後におけるジェンダー秩序とメディア表象：イギリスの場合」
- 桑原ヒサ子「ドイツ人女性たちの、第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして戦後」
- 神田より子「表紙に見る『アサヒグラフ』1935-1950」
- 加納実紀代「玉碎神話の形成とジェンダー・エスニシティ：『サイパン玉碎』の黒髪の女をめぐる」
- 池川玲子「1940年代日本映画に見る戦闘系制服美女：女子通信隊員から婦人警察官（*歴史用語として使用）へ」

- 神奈川大学非文字資料研究センター租界班 第46回研究会（拡大例会）
「図像資料の研究を考える：戦争と生活」
2014年12月6日
（神奈川大学横浜キャンパス）

杉村使乃「『ピクチャー・ポスト』に見る第二次世界大戦下のニッポン」

松本ますみ「占領者日本の「支那」女性像と抗戦中国の女性像：『北支画刊』・『北支』と『良友』から考える」
コメンテーター：加納、池川、孫安石（神奈川大学）

成果

本共同研究はこれまで研究課題「第二次世界大戦下の大衆メディアにおけるエスニシティ・ジェンダー表象」に取り組み、日本、ドイツ、アメリカ、イギリス、中国各国において刊行された女性雑誌・一般大衆誌のジェンダー・エスニシティ表象を分析し、国際比較を行ってきた。欧米アジアの媒体を広く扱うことで、戦時下において同じ画像が異なる場所で発行された雑誌に掲載されたり、異なるトリミングやキャプションを用いて、全く異なる文脈で読者に提供されたりしていることが明らかになった。

2014年度は、時系列を1950年代まで伸ばし、戦時下に「国民」として動員された女性やマイノリティについて、戦後、ジェンダーや人種・エスニシティの平等がすすんだのか、また、戦時中の女性・民族政策が戦後のジェンダー秩序や「国民」形成にどのような影響を及ぼしたのかをメディア表象分析を元に検討した。ほとんどのメディア表象では、戦時中、積極的に労働力として動員された女性たちの「女らしさ」への回帰が顕著である。また、アメリカの『ライフ』誌では、利便化された家事用品を駆使するアメリカ人主婦の

他国の女性たちに対する優位性を強調することで、バックラッシュを曖昧にするような表象も見られた。本年度、特に着目したのは、広島・長崎への原爆投下と冷戦下における核開発競争、そして核の「平和利用」におけるジェンダー・エスニシティ表象である。これに関してはシンポジウム「Remapping Hiroshima: 『ヒロシマ』を（再）マッピングする：核時代の到来・起点としての『ヒロシマ』」（2015年3月15日、広島市まちづくり市民交流プラザ）を開催し、日本、アメリカ、イギリスのメディア表象分析について報告した。また、ヒロシマ、ナガサキ・アーカイブ主宰の渡邊英徳氏（首都大学東京システムデザイン学部）を招聘し、「核」の表象と記憶について現在に至る視野で討論することができた。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

2. 非文字資料の共有化と研究利用

2. 20世紀前半のサハリン島に関する歴史的記憶

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

鬼内 勇津流（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

◆メンバー

井濶 裕（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

丹菊 逸治（北海道大学アイヌ・先住民研究センター）

土屋 範芳（東北大学大学院環境科学研究所）

三木 理史（奈良大学文学部）

目的

20世紀前半はサハリンにとって、激動の時代であった。すなわち二度にわたって日露・日ソ間の戦場となり、その都度国境線が大きく変わったのである。それと同時に、住民構成も大きく変わった。そのため、サハリン島には、日本によって建立された記念碑と、ロシア・ソ連によって建立された記念碑の両方がある。また、日本国内にも、サハリン・樺太史にまつわるさまざまな記念碑が建立され、現存するものもあれば、すでに現存しないものも存在する。これらは、それぞれの社会の中に歴史的な記憶をとどめるために機能した。本研究は、そうした20世紀前半のサハリン島史にまつわる島内、および日本国内の記念碑等のありかた、およびそこから読み取れる日本およびロシアにおける歴史伝承のされ方を読み解くことを目的とする。また、併せて、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターが最近入手した、北サハリンの油田開発に関する写真帳を学際的に分析し、その忘れられた記憶の読み解きを試みる。

2014年度の 研究実施状況

2014年度は、研究会を2回開催した。

第1回（11月1日、札幌）は、前年度に引き続いて北サハリンの油田開発史を取り上げ、2本の研究発表のほか、この分野における代表的研究書『北樺太石油コンセッション1925-1944』の著者村上隆の没後10年を記念してその合評会を行った。

第2回（2月16日、札幌）は、少し間口を広げ、保障占領期の北サハリンにおける司法、戦前の樺太・北海道絵はがきに描かれた少数民族、および、ニシンの産

出における北海道（とくに後志地方）と樺太、および関東など消費地との相互関係を取りあげた報告がなされた。

なお、この回はロシアの研究者を招き、記念碑の問題など、日露それぞれの歴史の記憶に関わる共通のテーマを設定して意見を交換することを考えていたが、諸般の事情から実現できなかったことは残念である。

この他、前年度に引き続いて、画像・地図資料をウェブサイト上のデータベースで公開する仕事を進め、北樺太の2種類の写真帳、および保障占領時代の測量に基づいて編集された地図を追加収録した。なお、このウェブサイトは、ロシア語を併記するなど、国際的に利用されることを想定して作成している。

また、研究終盤の2015年初めになって、日本カメラ博物館に北サハリン保障占領関係の写真アルバム8冊が収蔵されていることがわかり、その調査を実施した。

成果

北樺太の石油開発の初期において、ロシア側ではスタハーエフ商会が重要な当事者企業と目されてきたが、その実態はほとんどわかっていなかった。今回、E. パールィシェフの研究は、この会社が第一次大戦中に露亜銀行などの融資を受けて急成長したものであること、内戦期におけるこの会社と日本の資本との関係を、三菱の文書など具体的な史料によって裏付けるものであった。

また、井澗は、これまでほとんど利用されてこなかった、ソ連政府に移管されて現在はウラジオストクの文書館が収蔵する保障占領期北樺太の裁判記録を利用し、正教会との関係に見える日本の軍政統治の一端を明らかにした。なお、最近注目されつつある日本軍の軍法会議の史料としても、きわめて少ない実例として重要と思われる。

この他、今年度、スラブ・ユーラシア研究センターが入手した戦前の樺太2万5千分1地図を検討したところ、オハとその周辺を1920年代に測量して作成した8枚組は、これまで存在が知られていないものであることが判明したため、これを速やかに紹介し、公開することにした。

丹菊は、札幌市立中央図書館で公開されている絵葉書データベースを題材に、樺太先住民の絵葉書写真の特徴や、北海道で製作された絵葉書との親縁性を指摘した。

日本カメラ博物館所蔵の北サハリン保障占領関係ア

ルバムは、撮影日時、場所、撮影者等のデータを欠くものが多いが、軍当局の指示で作成された記録写真とみられ、発端となった尼港事件への対応から、ソ連政府委員に引き継ぎをして撤退するところまでを含むこと、一部を除いて多くがまだ知られていない写真であることを確認した。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

2. 非文字資料の共有化と研究利用

3. 集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのデータベース構築

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

福田 宏（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

池田 あいの（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

岡本 佳子（東京大学大学院総合文化研究科）

神竹 喜重子（一橋大学経済研究所ロシア研究センター）

河瀬 彰宏（国立国語研究所コーパス開発センター）

中村 真（大阪大学大学院文学研究科）

半澤 朝彦（明治学院大学国際学部）

松本 彰（元新潟大学人文学部）

棟朝 雅晴（北海道大学情報基盤センター）

吉村 貴之（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

目的

本研究ユニットにおいて主眼としたのは、国民形成における音楽の機能を検証することである。1990年代より盛んに行われるようになったナショナリズム研究により、人文社会科学一般において国民（民族・ネイション）に対する構築主義的な理解が定着したと言えるだろう。それと共に、歴史学の分野においても国民史を批判的に再検討し、脱構築する作業が行われてきた。だが、音楽については十分に検討されていないように思われる。とりわけ、中・東欧のように、国民楽派と呼ばれる潮流が生じた地域では、芸術としての音楽が別格扱いされ、脱構築の対象から外されてきたのではないだろうか。以上の問題関心を元に、本研究ユニットでは、音楽学・歴史学・政治学・情報学の各分野の研究者10名に参加をお願いし、中・東欧地域を軸としつつ、音楽の学際的比較研究を展開した。

2014年度の 研究実施状況

二年目となる本年度においては、ワークショップを2回開催したほか、京都大学アカデミックデイへの出展、実験的試みとしてのチェコ民謡470曲のMusicXML化を実施した。一年目に引き続き、ディシプリンの違いをどう乗り越えるかという点が大きな課題となったが、それに加えて地域ごとの違い（正確には、どの地域を専門とするかによって研究者による音楽に対する認識

が相違していること）という点も露わとなった。逆に言えば、このことは、音楽研究における学際的・地域横断的アプローチがまだまだ不足している点を示している。本研究ユニットでは、予定していた成果（以下参照）を挙げることができたので、今後は、他の科研グループ（例えば、伊東信宏氏を代表とする科研「東欧演歌研究」）や出版計画（例えば、本研究ユニットのメンバー半澤朝彦氏を中心とする「国際政治と音楽」の出版計画）などと連携を図りつつ、音楽分野における地域研究を発展させていきたい。

成果

本研究の主たる成果は、2015年3月に出版した『国民音楽の比較研究に向けて：音楽から地域を読み解く試み』（福田宏・池田あいの編著、CIAS Discussion Paper No.49）である。本ディスカッション・ペーパーには、国民音楽を分析する上でのキータームである国民楽派概念についての2論文、中・東欧およびロシア地域の事例研究としての5論文、地域情報学の知見を生かした2論文、の計9論文を掲載した。特に、最後の2論文については、地域情報学分野において音楽を扱ううえで貴重な示唆を含んでおり、今後の新しい方向性を示したという意味で貴重である。すなわち、河瀬論文は、日本民謡を計量的に分析する手法について人文社会科学系の研究者にも分かりやすい形で紹介すると共に、その手法がチェコなど中・東欧の民謡分析にも応用できる点を指摘した。また、岡本論文は、プラハとブダペストの音楽データベースを活用し、19世紀末から20世紀初頭に至るオペラ上演の動向を比較分析している。河瀬論文は情報学の立場から音楽にアプローチした論考であるが、岡本論文は、音楽史の立場から情報学の成果を活用した論考である。さらに、河瀬論文において提示された手法を元に、宇津木嵩行氏（中央大学理工学部）の協力を得て、チェコ民謡を電子データ化する試みも実現することができた。

3. CIAS所蔵資料の活用

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

柳澤 雅之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

山口 哲由（独立行政法人農業環境技術研究所）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

帯谷 知可（京都大学地域研究統合情報センター）

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

京都大学地域研究統合情報センター（CIAS）が所蔵する、映像・画像・フィールドノート・古文書・公文書・新聞情報・統計資料等の研究資源を利用した研究を進めることを目的とする。その時、情報学の技術を援用した新しい地域研究（地域情報学）の展開を念頭に置き、CIAS所蔵資料だけではなく他の資料と組み合わせた新しい研究の展開や、データベースを活用した新しい研究アプローチの検討をも含む。これらを通じ、地域研究の促進に必要な、データの収集、共有、分析、発信の方法を検討し、地域情報学の展開を促進することが本複合共同研究ユニットの目的である。

2014年度の 研究実施状況

本年度の複合共同研究では、発見のツールとしてのデータの可視化と、可視化によって得られたヒントを検証可能な研究分析ツールをデータベースに組み込んだ統合型データベースの構築について検討するため、首都大学東京のwebデザインを専門とする渡邊英徳研究室および東京大学史料編纂所の山田太造氏と共同して、フィールド・データベースを題材とした研究を進めた。東京および京都で個別の研究打ち合わせを3回開催し、その成果を2015年2月12日に京都大学で報告した。

成果

フィールド・データベースを題材に、発見のツールとしてのデータの可視化と、可視化によって得られたヒントを検証可能な研究分析ツールをデータベースに組み込んだ統合型データベースの構築について検討

した。フィールド・データベースの特徴をいかすためには、地形図との重ね合わせが特に重要であり、GoogleEarthが提供する画像だけでなく、地形図を含む他の地図との重ね合わせが可能なシステムを導入した。また、テキスト分析のひとつの手法である共起する語彙の抽出を行い、関連する語彙が明瞭に区分できるよう可視化を行った。これにより、たとえばゴムという同一語彙であっても、文脈によって異なる使われ方をしていること、その文脈例として、開拓地で新たに導入されたゴムが広域かつ単独で栽培される場合や、すでに高木となった古いゴムが繁茂する2次林の中で栽培され、生業の一部として根付いている場合等があること、そして、本研究の可視化とテキスト分析でそうした文脈を抽出できることが明らかとなった。

さらに、他の財源とも合わせる形でデータ入力を進め、これまでインドネシア・スマトラ島の記録だけがデータベースとされていたが、フィリピン、ラオス、南ベトナム、中国沿岸部の情報を追加することができた。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

3. CIAS所蔵資料の活用

1. 書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

帯谷 知可（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

坪井 祐司（公益財団法人東洋文庫）

兔内 勇津流（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

藤本 透子（国立民族学博物館）

柴山 守（京都大学国際交流推進機構／地域研究統合情報センター）

原 正一郎（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究は、京都大学地域研究統合情報センター（以下、CIAS）においてデータベース整備が進められているCIAS所蔵資料「石井米雄京都大学名誉教授蔵書コレクション」（以下、「石井コレクション」）および「トルキスタン集成」を主たる素材として、基本的には書誌情報に基いて構築されるようなコレクション・データベースを、図書館的な書誌情報検索にとどまらない新しい形へ、地域情報学の最先端の議論やツール開発などとも連携しながら、地域研究に携わる者が積極的に関わることによって、より地域研究にとって意味のある形へと展開させていく方向性を探ることを目的とした。さらに、これら2つのコレクション個々のデータベース化の成果を取りこみつつ、地域情報学的な書誌情報データベース構築の手法のひとつとして一般化することも視野に入れた。

2014年度の 研究実施状況

2014年度は、2014年3月に公開された「石井コレクション」データベースの事例を参照しながら、2013年度に書誌情報整備をおおむね終了した「トルキスタン集成」データベースのリニューアルについて具体的な検討を進める形で活動を行った。CIAS内で地域情報学プロジェクトとも連携して随時研究打ち合わせを行ったほか、以下の通り研究会を2回開催した（うち第2回研究会は本個別ユニットの2年間の活動のとりまとめとして開催）。また、以下に具体的に示すように、ディスカッション・ペーパーの刊行ならびにCIAS地域情報学プロジェクトとの連携のもと「トルキスタン集成」

データベース・リニューアル版の作成を行った。

●第1回研究会

2014年7月29日

（京都大学稲盛財団記念館）

帯谷知可「トルキスタン集成の分類カテゴリーの統一について」

同「トルキスタン集成DBリニューアルに向けて」

ディスカッション

●第2回（拡大研究会）

2015年2月12日

（京都大学稲盛財団記念館）

「書誌情報データベースの新しい形を模索する—『石井米雄コレクション』と『トルキスタン集成』の事例から」（CIAS地域情報学プロジェクト研究会「データの可視化と問題発見」と合同開催）

帯谷知可「書誌情報データベースの可能性を探る：『石井米雄コレクション』と『トルキスタン集成』の事例から」

亀田亮宙（地域研）「外の知識から見た『トルキスタン集成』」

ディスカッション

成果

2年間の活動によって、本研究では地域情報学の進展をふまえた新しい形の書誌情報データベースの方向性に関連して、以下の知見を得た。

(1) 地域研究にとって重要な資料コレクションのデータベース化を前提とするなら、そこに含まれる個々のコンテンツの重要性に加えて、さまざまなキーワードの連鎖や連関（キーワード・ループ）によって検索を行いつつ、コレクションの中を探索することは、そのコレクションが内包する意味世界を探索することにつながり、単なる書誌情報検索を越えて、そのコレクションをめぐって地域研究にとって意味のある発見ができる可能性がある。

(2) そのためにはまず書誌情報の整理が必要であり、さらにそのコレクションに見合ったキーワード群を設定することが重要である。

(3) キーワード群の設定のためには、そのコレクションに見合った分類カテゴリーの導入と、書誌タイトル等の語彙分析を組み合わせる方法がさしあたり有効であると考えられる。このキーワード群の設定のしかたが地域研究者と情報学研究者とのコラボレーションの見せどころである。

(4) 書誌情報に時空間情報（出版地・出版年や何らかの事柄の生起した場所・年月日など）を加えておくことで地域情報学的なツールを応用した分析が可能となり、コレクションの多角的把握のためにも有益である。

このような方向性は、「石井コレクション」データベースならびに「トルキスタン集成」データベースの構築過程で地域研究者と情報学研究者が協働するなかで、さまざまな試行錯誤とフィードバックから得られたものである。「石井コレクション」データベースは、石井米雄氏の書齋を再現したバーチャル書架を準備し、ツリー構造によって示されるオントロジー的なキーワード連鎖（書誌タイトルの語彙分析と図書分類カテゴリーの導入によってキーワード群が形成されている）によって、バーチャル書架とキーワードの間を行き来しながら書誌情報検索を行うバーチャル図書館として構築されている。DVDによりスタンド・アロンでも検索を可能にしたという特徴を持つ。一方、「トルキスタン集成」データベースは、①巻別検索、②キーワード検索、③時空間情報の利用、④参加型の試み、の4つの選択肢をもつものとしてリニューアル版の構想を固めた。①はこれまで存在しなかった、全巻を通じた書誌情報の整備・統合を実現させたもの、②は同データベース試行版をもとにした従来型のキーワード入力検索に加えて、キーワード連鎖（書誌タイトルの語彙分析と「トルキスタン集成」編纂当時のテーマ分類の適用によって主たるキーワード群を形成することを想定）による検索手法を検討したもの、③は時空間情報からコレクションを多角的に分析しようとする試み、④は現代の視点からコレクションを見直す試みである。「トルキスタン集成」データベースでは書誌検索の後、さらにPC上で資料PDFの閲覧が可能である（京都大学内限定）。リニューアル版は2015年度に公開し、順次機能を追加していく予定である。

また、本研究の成果の一環として、2015年2月12日の拡大研究会の記録という形でディスカッション・ペーパー1点（帯谷知可編『書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る』CIAS Discussion Paper No. 51）を刊行した。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

3. CIAS所蔵資料の活用

2. 『乾隆京城全図』と空間画像史料を用いた「華北・北京歴史データベース」の構築

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

北本 朝展（国立情報学研究所）

◆メンバー

西村 陽子（公益財団法人東洋文庫）

貴志 俊彦（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究の目的は、CIASと国立情報学研究所（NII）との共同研究を通して、

- (1) CIAS所蔵データである「戦前期絵はがきデータベース」
 - (2) NIIのデジタル・シルクロード・プロジェクト（以下DSR）がデータベース化した公益財団法人東洋文庫所蔵の北京および華北地方の古写真
 - (3) 京都大学人文科学研究所が所蔵する「華北交通株式会社」撮影写真資料
- という三種の資料群を対象とし、
- (ア) 華北地域の古写真の活用・読み解き方法に関する検討
 - (イ) 特に北京に関する古写真の詳細な読み解きとデータベース化

に関する研究を進めることにある。特にNIIがすでにデジタル化と幾何補正を行って「古都北京デジタルマップ」として公開した1750年の北京古地図である『乾隆京城全図』（以下、古地図）を用い、古地図と古写真を相互参照して読み解く手法を開拓する。また、その結果をデータベース化することで、絵はがき・古写真・古地図という空間情報を含む画像史料（空間画像史料）から北京の景観や都市機能を抽出し、歴史データベースとして蓄積・利用できるようにする。

2014年度の
研究実施状況

本年度は2つのテーマについて研究を進めた。第一に、古写真の読み解きを支援するツールとして、モバイルアプリ「メモリーハンティング（メモハン）」を正式にリリースした。これは、モバイル端末のカメラ上に古写真を半透明で表示して撮影することで、古写

真の撮影場所に関するメタデータと撮影場所の現在景観とを同時に取得できるという機能を備える。このアプリを東京および北京でテストし、古写真の撮影場所特定に成功しただけでなく、インドネシア・アチェと神戸においては大規模災害前後の景観変化を調べる目的にも利用した。これらの結果には報道各社も関心を持ち、ウェブメディアも含めて合計8件の記事で紹介された。第二に、古写真の読み解きに関する研究として、CIAS所蔵資料「華北交通株式会社写真（以下、華北交通写真）」のデジタル化済み資料の後半部分（全36,534点のうち昨年検討済みの14,158点を除く22,376点）を検討するとともに、北京の古写真を抽出して「メモハン北京」プロジェクトを立ち上げ、北京市内にある華北交通写真の撮影場所が、現在でも特定可能であることを明らかにした。照合に於いては、メモハンを使うことにより、古写真に写し込まれた樹木一本のレベルで詳細な比較対照が可能になる。この成果は、メモリーハンティングのページに蓄積されており（<http://dsr.nii.ac.jp/memory-hunting/>）、将来的には「華北交通写真データベース」の一部として稼働させる予定である。

成果

・モバイルアプリの開発

Android版モバイルアプリ「メモリーハンティング（メモハン）」を2014年12月にGoogle Playで正式に公開し、これまでに100回以上のダウンロードがあった。本アプリの基本となるアイデアは「アクティブ・ファインダー」、すなわちカメラのファインダー上に撮るべき写真のガイドを表示するというものである。そのガイドとして古写真を半透明で表示すれば、古写真と現在の景観との変化を記録する目的に利用でき、しかも撮影時のメタデータが古写真の撮影位置と撮影方向を記録することになる。昨年度に構築したバージョン1の問題点を解決するバージョン2を今年度に開発し、すべての機能が一通り動くようになった段階で一般に公開した。またアプリを実際に利用する実験をアチェ、神戸、東京、北京で行い、アプリが目的通りに使えることを示しただけでなく、アプリが文化を越えて楽しさを生み出すことを確認した。なお、アチェおよび神戸での実験では、京都大学地域研究統合情報センターの西芳実氏および山本博之氏の協力を得た。

・古写真の読み解き

華北交通写真のうち、北京の旧城内・城外および郊外の写真を抽出し、写真の台紙に記されたキャプ

ションに基づいてメタデータを整備し、位置情報を付与して「メモハン北京」プロジェクトを立ち上げて実証実験を行うことにより、メモハンを用いることで古写真の同定作業が効率的に行えるだけでなく、樹木一本のレベルでの同定まで可能であることが明らかになった。これらの北京写真の同定作業を通して、華北交通写真に写し込まれた北京の風景が、たとえ大幅に変わっていたとしても特定の一点が一致すれば他の部分の変化が明らかになることや、例えばキャプションに「地安橋際火神廟」と記されただけで照合は困難と想定された寺廟であっても、ファインダー上で古写真と比較することで、実際には現存することなどが判明した。また、旧城内の写真照合においては、近年の開発前の状況が記された『乾隆京城全図』の電子地図が極めて有用であり、スマホ上でメモハンアプリ上に写し出してGPSを使用することにより、『乾隆京城全図』上の位置と現在位置の関係が容易に把握できるため、『乾隆京城全図』に書き込まれた建築形状と比較しつつ、華北交通写真においてどの建物を撮影されているかまで容易に判明することが明らかになった。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

3. CIAS所蔵資料の活用

3. 映画に見る現代アジア社会の課題

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

篠崎 香織（北九州市立大学外国語学部）

◆メンバー

及川 茜（神田外語大学外国語学部）

小野 光輔（株式会社和エンタテインメント）

野沢 喜美子（株式会社プレノンアッシュ）

深尾 淳一（映画専門大学院大学）

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

デジタル・通信技術の進展により、個人の問題意識や表現欲求を表明するうえで映像が一般的な媒体となり、国境や言語を越えて相互参照される機会とその即時性が急増した今日、映像が製作された社会的文脈を踏まえて映像を読み解くリテラシーがますます重要となっている。本研究は、東南アジア地域を事例とし、同地域が政治・経済・文化面で大きな影響を受けてきた中華世界、インド、日本、イスラム圏との相互交流・交渉も考慮しつつ、映画という媒体を通じて社会の課題とそれへの取り組みがどのように表現されているかを明らかにする。またその結果を踏まえて、地域研究の専門性を活かした映画データベースのあり方を検討し、映像資料を通じて地域研究の成果を発信する可能性を探る。これらの作業を行う上で本研究は、CIAS所蔵のマレーシア地域映画コレクションを資料として活用するとともに、データベース開発のための基礎的な素材として同所蔵のマレーシア映画データベースを活用する。

2014年度の 研究実施状況

研究会4回、公開シンポジウム4回（うち2回は日本国内の国際映画祭と連携）を行い、書籍・論文などを出版した。

【研究会】

●第1回

2014年9月13日

（国際交流基金）

東南アジア各国の映画事情と現代社会についての紹介

報告者：山本博之、坂川直也、岡田知子、宮脇聡史、西芳実、篠崎香織、長田紀之、平松秀樹

●第2回

2014年11月26日

（国際交流基金）

篠崎香織「シンガポール映画事情：『他者』に映し出される自画像」

平松秀樹「タイの映画事情」

●第3回

2015年1月21日

（国際交流基金）

長田紀之「ミャンマーの映画事情：客体から主体へ」

山本博之「マレーシアの映画事情：ヤスミン後のマレーシア映画」

●第4回

2015年3月23日

（国際交流基金）

岡田知子「カンボジア映画事情：『ボル・ポト映画』について」
西芳実「インドネシア映画事情：世界にさらされる小さな英雄たち」

【公開シンポジウム】

映画祭との連携を通じて、また独自に参考上映を行うことにより、異なる地域を専門とする研究者が映像資料を共有したうえで、地域に固有の文脈や論理を括りだすとともに、地域横断的に共通する社会的課題の抽出を試みた。

- ・シンポジウム「親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語」（2014年8月4～5日、芝蘭会館山内ホール）
- ・公開ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」（2014年9月10日、京都大学稲盛財団記念館）
- ・公開ワークショップ「映画『ジャングル・スクール』が拓くフロンティア：シネマと地域研究のマリアージュ」（2014年9月15日、キャナルシティ博多貸会議室、協力：アジアフォーカス福岡国際映画祭）
- ・シンポジウム「女の幸せは旅したい」（2015年3月12日、大阪歴史博物館、共催：大阪アジア映画祭、大阪歴史博物館）

【出版】

共同研究員による書籍・論文の出版。

- ・山本博之『映画から世界を読む』（情報とフィールド科学1）京都大学学術出版会、2015年。
- ・及川茜「李永平『大河盡頭』の寓意」、『野草』94号、2014年8月、pp.148-168。
- ・及川茜「日本人の性的表象：南洋を描いた中国語小説」、『相関地域研究1 記憶と忘却のアジア』青弓社、2015年。
- ・篠崎香織（曾士才、三尾裕子ほかとの共著）「日本華僑華人学会創設10周年記念シンポジウム『華僑華人研究の回顧と展望』」『華僑華人研究』11、2014年、pp.56-92。

成果

1年目（2013年度）は、マレーシア地域映画コレクションを基盤にデータや資料を拡充するかたちで研究を進

め、マレーシア地域の映画に表れる社会の課題を分析した。これを比較のための参照軸とし、2年目となる今年度は研究対象を東南アジア諸国に拡大し、映画に表れる社会の課題を分析した。共通して見られる課題として、戦争、災害、テロ、政治的な抑圧などの負の歴史の再解釈とそれを踏まえた現在の社会の意味づけ、男性のみ・女性のみの家づくりや家族における性別役割の相対化など多様な家族像の模索が挙げられる。また全体的な傾向として、これまでほとんど映画に描かれてこなかったり、マジョリティの物語の背景として客体として描かれたりすることが多かったマイノリティ（文化的少数派、辺境地の社会、外国人労働者など）が、主体として表象される作品が増えてきている。これに関して東南アジアそのものが、映画大国の作品の一背景から自らの物語を構築する主体へと立場を変えつつあるという状況もある。映画データベースの多くは、CIASのマレーシア映画データベースを含めて、タイトルや制作者・俳優の名前で検索する仕組みとなっている。これに対して、社会の課題を関連しうるキーワードに置き換え（1本の作品の中には通常複数の課題が重複して存在する）、それらのキーワードを作品と関連付けることにより、キーワードから作品を検索するような映画データベースを構築することにより、映画を通じた地域研究の成果の発信が可能になるとと思われる。

2. 地域情報学プロジェクト：地域情報学の展開（統括班）

3. CIAS所蔵資料の活用

4. 脱植民地化期の東南アジア・ムスリムの自画像と他者像

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

坪井 祐司（公益財団法人東洋文庫）

◆メンバー

金子 奈央（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）

國谷 徹（上智大学）

篠崎 香織（北九州市立大学外国語学部）

ファリダ・モハメド（東京外国語大学外国語学部）

深見 奈緒子（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

光成 歩（東京大学大学院総合文化研究科）

モハメド・ファリド（Institute of Islamic Understanding, Malaysia）

ジュリアン・ブルドン（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

京大地域研（CIAS）が所蔵・公開しているジャウイ（マレー語のアラビア文字表記）の雑誌『カラム』の記事データベースを利用した研究を行う。1950～69年にシンガポールにて出版された月刊の総合誌『カラム』は、欠号率が極めて低い状態でCIASに所蔵されており、その記事はマレー語雑誌データベースの一部として公開されている。本研究はこのデータベースを活用するもので、以下の二点の目的をもって進められる。第一は、『カラム』の総合的な研究に向けた基盤の整備である。具体的には、現在のデータベースを改良することで技術面から研究の利便性を向上させる。それとともに、一般公開形式のジャウイの講習会を開催してジャウイに関心を持つ研究者のネットワークを深化させる。第二は、『カラム』を利用した国際共同研究の推進である。これまで進めてきた『カラム』に関する共同研究の成果を踏まえて、特にマレーシア・シンガポールとの国際共同研究を重点的に進める。『カラム』の資料的価値は地元の研究者からも評価されている。このため、両国の研究機関・研究者との提携により資料としての『カラム』の総合的・多角的な利用を図る。

2014年度の 研究実施状況

データベースの構築およびそれを利用した研究の両面から活動を行った。データベースに関しては、記事の翻字・データ入力を進め、記事本文の検索やワード

クラウドによる検索などが可能な「カラム雑誌記事データベース」を作成・公開した。それとともに、デジタル・アーカイブ構築に関してマレーシアの諸機関との協力体制を築いた。その過程で、東京国際ブックフェアにおける資料のデジタル化に関する公開セミナー（2014年7月）、マレーシア国立図書館、言語図書館における会議（11月）、デジタル・アーカイブに関する地域研における公開セミナー（12月）を開催した。ジャウイ講習に関しては、12月にマレーシアの専門家を招いてジャウイ教育の方法論についての研究会を行った。

くわえて、各共同研究員による『カラム』の内容の検討および研究報告を進めた。成果としては、『マレーシア研究』第3号に『カラム』に関する4本の論文をまとめた特集を組んだ。さらに、8月にはマレーシアにおける国際学会でパネルを組み、現地の研究者と議論を行った。2015年3月には『『カラム』の時代VI：近代マレー・ムスリムの日常生活2』（坪井祐司・山本博之編著、CIAS Discussion Paper No.53）を刊行し、最新の研究成果をまとめた。

成果

データベースについては、これまでの記事のタイトルの検索にくわえて、記事本文の単語やワードクラウドによる検索が可能になり、各号の表紙から記事を読みだすことができるようになるなど、利用の便宜が大幅に向上した。

内容の分析については、雑誌論文における特集企画やディスカッションペーパーの発行、国際学会での発表を通じて、『カラム』の資料としての位置づけを明らかにした。『『カラム』の時代VI』では、イラスト、写真、広告、投書などに焦点をあて、当時のマレー語雑誌の持つ大衆的・読者との双方向的性格を明らかにするとともに、読者として想定される主に都市部のマレー・ムスリムの世界観や近代社会のなかで宗教的な正しさを模索する姿を描いた。『マレーシア研究』における特集号では、記事内容の言説分析を通じてシンガポールのムスリム知識人の思想を明らかにした。彼らは、イスラムにもとづく改革を主張して既存の政治・宗教指導者たちを批判したが、その方法論は近代の国家制度の枠組みの中で宗教の権限を強化し、非ムスリムも含む多民族社会のなかでムスリムの地位を確保するというものであった。こうした近代主義的なイスラムのあり方はマレーシアにおける国際学会でも関心を持たれており、現在のマレーシアのイスラムを理解するうえで重要である。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強くしなやかな社会をめざして —地域研究の可能性（統括班）

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

大矢根 淳（専修大学人間科学部）

峯 陽一（同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科）

渡邊 英徳（首都大学東京システムデザイン学部）

谷川 竜一（京都大学地域研究統合情報センター）

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

災害とは日常生活の延長上にあり、それぞれの社会が抱える潜在的な課題が外力によって露呈した状態である。そのため、災害対応においては、被災前の状態に戻すことではなく、被災を契機に明らかになった社会の潜在的課題に働きかけ、よりよい社会を作ることが期待される。そのためには被災前を含む社会の状況を把握することが不可欠であり、この点において災害対応と地域研究が結びつく意義がある。本プロジェクトでは、(1) 制度面を中心にした災害・紛争への早期対応や復興過程における社会の再編、(2) 記録・記憶を通じた社会の再生・再編の二つの側面から、強くしなやかな社会づくりに資する学術研究としての「災害対応の地域研究」の提示をめざす。

2014年度の
研究実施状況

主に2つの複合ユニットの研究代表者を通じて本統括班にかかわる複合・個別ユニットの研究進捗状況を共同研究員が共有した。また、センターの「災害対応の地域研究」プロジェクトと共催で研究会を実施し、センターの「災害対応の地域研究」叢書シリーズの第3巻を刊行した。

成果

災害の被害を先進国型と途上国型に分けて捉えると、両者の違いは住民や資本の蓄積の様子と耐震の技術や制度によって決まり、先進国型では人的被害が小さく経済被害が大きいのに対し、途上国型では人的被害が大きく経済被害が小さい。アジアの多くの地域は途上国型だが、近年ではアジアの経済成長が著しく、アジア各地で都市型の生活様式がとられるようになって

てきていることもあって、アジアの災害では人的被害も経済被害も大きい状況が生じている。しかも、アジアの災害では被災地の被害が大きだけでなく、社会的流動性が高いため国境を越えて影響がアジア全域に及ぶ。日本ももちろんその例外ではない。

防災のあり方についても、先進国のように世界標準モデルを採用した防災の世界と、伝統的なアジアの防災の世界の二つが見られる。しかも、この二つの防災の世界は先進国と途上国に分かれているのではなく、同じアジアの国の中でも、そして同じ首都に住んでいても、世界標準モデルの防災の世界に住む人と伝統的なアジアの防災の世界に住む人が同居しているのが今日のアジアの防災状況である。

国境を越えた人の移動が盛んである今日、防災や災害対応を国別に進めてきた従来の方法は十分ではない。国境を越えて防災や災害対応の経験や知識を共有するコミュニティづくりが求められている。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強くしなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

災害や紛争は、個人や社会が直面する目前の差し迫った人道上的危機であり、直接被害を受けていない地域を含む外部社会から解決のための働きかけが行われる。また、災害や紛争の被害はしばしば複合的な形であられるため、要因の究明や対応にあたっては、多様な専門性が求められる。このような意味で、災害や紛争に対応する現場は文化的背景や専門の異なる人々が協業する場となっている。

本プロジェクトでは、以上のことを念頭に置きながら、紛争・災害への早期対応や復興過程における社会の再編について、実務者や現地社会との連携を視野に入れながら研究を行う。とりわけ、災害や紛争の現場となっている地域社会に関する地域研究の知見を踏まえることで、業種や専門性、地域を越えて理解される情報や技術を提供する方法を検討する。

2014年度の 研究実施状況

- ①京大地域研の地域情報学プロジェクトとの共同により、インドネシアの事例を中心とする「災害と社会地域情報マッピングシステム」ならびにラテンアメリカの事例を中心とする社会紛争データベースとそれに基づく社会紛争マッピングシステムの開発を順次進めた。
- ②京大地域研の「災害対応の地域研究」プロジェクトとの共同により、東南アジア諸国における紛争や災害からの復興の事例を広義の災害対応と捉えなおしたうえで、地域社会の外部の関与者が当事者としてどのような役割を果たしうるかを検討し、その成果を商業出版として発表した。
- ③紛争や災害により断絶しがちな地域社会のアイデンティティの再編を助けるための個人端末ツールとして、国立情報学研究所北本朝展研究室との共同によ

り、スマホアプリ「アチェ津波被災地メモハン」を制作した。

成果

上記のデータベース等の開発を進める過程で、防災・人道支援・国際協力等の実務家が地域研究者により収集・分析された地域情報を活用する上での課題が整理された。多様な情報を一元的に保存・表示する総合的なデジタル・アーカイブのほかに、利用者や利用目的に即して用途と情報の種類と量を限定したスマホ・アプリの必要性が確認され、スマホアプリの公開に至った。

また、地域と時代を越えて紛争や災害からの復興の経験を共有するための方法を検討した。東南アジアについて復興における外来者の役割を検討し、また、アジアについて複数地域間における災いの記憶・記録を検討し、その成果を出版によりまとめた。

【出版】

- ・ 牧紀男・山本博之編『国際協力と防災：つくる・よりそう・きたえる』（災害対応の地域研究3、京都大学学術出版会、2015年）
- ・ 貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編著『記憶と忘却のアジア』（相関地域研究1、青弓社、2015年）

【ウェブ公開（データベース等）】

- ・ スマホアプリ「アチェ津波モバイル博物館」
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_atmm.html
- ・ スマホアプリ「アチェ津波被災地メモハン」
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_memohunt.html

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強しなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

1. 「小さな災害」アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり：災害地域情報マッピングシステムを活用した社会問題の早期発見・早期対応

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

服部 美奈（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）

牧 紀男（京都大学防災研究所）

Muhammad Dirhamsyah（シアクアラ大学津波防災研究センター）

山田 直子（佐賀大学国際交流推進センター）

山本 理夏（特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパン）

渡邊 英徳（首都大学東京システムデザイン学部）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

地震や津波といった、広範囲に影響を及ぼし被害が甚大な災害への対応は、予防や事後の対応を含めて研究や制度設計が集中的に行われてきた。これに対して、人々が日々直面し、死者はなくても地域社会の生活基盤に致命的なダメージを与える大水や地崩れといった「小さな災害」に対応するための研究や制度設計は、もっぱら工学的な見地から行われてきた。他方で、大きな災害の被害は災害が起こる前に社会が抱える潜在的な課題に集中的にもたらされている。日常的に発生する「小さな災害」とそれへの対応を観察することを通じて社会の潜在的な課題を事前に発掘し、早期に対応することは、大きな災害への対応を十全に行う上で重要である。

本プロジェクトでは、2004年スマトラ島沖地震津波を契機に開発された「災害と社会 情報マッピング・システム」を応用して、日常的に発生する「小さな災害」をモニタリングし、「小さな災害」への早期対応を促すシステムを開発することで、大規模な災害への準備を促すとともに、地域社会の問題への対応の遅れが紛争に発展することを予防することをめざす。

昨年度の成果を踏まえて、京大地域研「災害対応の地域研究」プロジェクト、同・地域情報学プロジェクト、京大地域研と学术交流協定を締結しているインドネシアのシアクアラ大学津波防災研究センター等と連携して、それぞれ研究を進めた。①2004年スマトラ沖地震津波の経験の風化という課題に対しては、被災の痕跡が失われた地域で災害に対する一般住民の意識を維持するためのツールとして、スマホアプリ「アチェ津波モバイル博物館」を開発した。②「小さな災害」への対応については、JSTさくらサイエンスプランによりアチェ州から招聘されたインドネシアの大学生に対して被災から20年目を迎えた阪神淡路大震災の被災地での研修を実施したうえで、小規模災害の防災施策についての意見交換会を実施した。③「災害と社会 情報マッピング・システム」をさらに発展させ、「小さな災害」の発生状況をモニターするために州レベルの地方紙『スランビ・インドネシア』のオンライン記事を自動収集するシステムBeritaKUを開発し、「小さな災害」の動向をモニターするための地域名やキーワードの設定の調節に関する実験を行なえる環境を整えた。

成果

2004年スマトラ島沖地震津波の最大の被災地となったインドネシア・アチェ州では、被災から10年目を迎えて「災害からの復興」が社会全体の共通の課題でなくなる中で、地域経済格差が新たな社会紛争の火種となる可能性が生まれている。そこでは、スマトラ沖地震津波の被災と復興の経験を文化資産として次世代や世界の他地域に継承・発信することが、地域防災のみならず地域経済振興の観点からも重要であると意識されるようになってきている。こうした課題に応えるべく本プロジェクトでは多言語スマホアプリ(①)や防災教育アプリ(②)を開発し、インドネシア社会ならびに日本社会のそれぞれで一定の反響を得た(報道①)。

また、日常的に発生する「小さな災害」に対する日頃の備えを整えることが大規模災害時の対応に役立つという知見がアチェ州の専門家や大学生の間にも共有されるようになり、日本の防災施策への関心も、防波堤や避難棟のようなハード面の準備だけでなく、避難訓練や防火用水の準備などのソフト面に対する関心が生まれるようになってきていることが明らかに

なった(公開シンポジウム、報道②)。

新規に開発したオンライン記事自動収集システムBeritaKUは、地方紙を対象にオンライン記事の自動収集を行い、さらに地域名やキーワードを柔軟に設定することが可能としたことで、地域社会の特性に応じて「小さな災害」をモニターする環境を整えた。

【スマホアプリ】

- ①「アチェ津波モバイル博物館」(Android版)
- ②防災教育アプリ「TSUNAMI DATANG!」(プロトタイプ公開)

【報道】

①スマホアプリ開発について

日本語紙12件、インドネシア語紙9件、英語紙1件、テレビ1件

- 2014年12月14日、日本経済新聞「スマトラ沖地震の津波 被害・復興記録アプリで閲覧」
- 2014年12月16日、京都新聞「スマトラ津波復興アプリに『震災被災地でも活用を』京大准教授開発 街並み写真や証言写真」
- 2014年12月25日、NHKニュースおはよう日本「インド洋大津波の記憶伝えるアプリ 京大開発」
- 2014年12月27日、朝日新聞(天声人語)「津波の記憶をとどめる」
- 2015年1月12日、Kompasテクノ面「日本の研究者がアチェの津波に関するアンドロイド・アプリを制作」(Doktor Jepang Ciptakan Aplikasi Android “Tsunami Aceh”)
- 2015年1月31日、朝日新聞「インド洋大地震・津波から10年 現地で薄れる防災意識」

ほか

②スマトラ津波被災地の大学生による日本の防災に関する研修活動について

- 2015年1月18日、日本経済新聞「神戸の復興 歩いて学んだ 大津波被災インドネシア人学生『母国に生かす』」
- 2015年1月30日、Serambi Indonesia「八つ橋に見た日本のおもてなし」(Yatsuhashi, Timphan ala Japan)
- 2015年2月12日、Serambi Indonesia「メモリーハンティング、アチェから京都へ」(Memory Hunting, dari Aceh ke Kyoto)
- 2015年2月14日、Serambi Indonesia「被災後の神戸の復興をこの目で見て」(Mengintip Kebangkitan Kobe Pascabencana)

• 2015年3月1日、*Lintas Gayo* 「ガヨから日本の神戸へ」

【公開シンポジウム】

京都=アチェ国際ワークショップ「スマトラ大津波から10年：情報コミュニケーション技術を活用した防災実践と展望」(2015年3月21日、京都大学)

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強しなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

1. 災害・紛争と復興

2. 社会紛争の総合分析に基づく 解決・予防の研究：ラテン アメリカの事例から

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

村上 勇介（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

幡谷 則子（上智大学外国語学部）

浜口 伸明（神戸大学経済経営研究所）

宮地 隆廣（同志社大学グローバル地域文化学部）

和田 毅（東京大学大学院総合文化研究科）

目的

本研究の目的は、地域研究統合情報センターが進めている、ペルーを中心としたラテンアメリカの社会紛争データベースとそれに基づいた社会紛争マッピングシステムをもちいて、社会紛争にかんする総合的な分析を実施するとともに、社会紛争の克服に向けての提言、将来における発生の予測や予防のためのシステムや社会制度について考察することを目的とする。ラテンアメリカ各国の社会においては、歴史的に抱えてきた格差と貧困の問題が、1980年代から90年代のネオリベラリズムの時代をへて増幅される現象が例外なく観察されてきた。それを背景として、社会紛争がいずれの国でも増加する現象が発生し、ガバナビリティにかかわる焦眉の課題となっている。本研究は、ラテンアメリカの主要な事例を比較研究する作業をつうじ、社会紛争の原因と過程について総合的に分析し、その知見を、前出の社会紛争のデータベースとマッピングシステムをもちいて検証する。そして、その結果をもとに、社会紛争の克服のための提言や、社会紛争の予測・予防のためのシステムや社会制度への手がかりを探究する。

2014年度の 研究実施状況

本年度は、次の通り、3回の研究会・ワークショップ、研究会・セミナーを実施した。

● 第1回研究会・ワークショップ
2014年7月23～25日
(京都大学稲盛財団記念館大会議室)

テーマ：“The Future of Democracy after Neoliberalism: Social Movements in a Globalizing World”

・7月23日

“The Diminishing Returns of Transnational Disputes: The Case of Intellectual Property Rights in Kenya” Nitsan Chorev (Brown University)

“Social Movements and the Rise of Compassionate Democracy” James Jasper (City University of New York)

・7月24日

“Social Mobilization and Resource-Based Growth in Peru” Moises Arce (University of Missouri)

“Democratic Deepening in the Age of Neo-liberalism: Comparing Brazil, India and South Africa” Patrick Heller (Brown University)

・7月25日

“U.S. Movements in the Great Depression and Great Recession: Why They Took Off and Why They Were So Different” Edwin Amenta (University of California, Irvine)

“Ironies of Neoliberalism: The Shifting Repertoires of Labor Contention in the United States, with Some Implications for Democracy” Kim Voss (University of California, Berkeley)

● 第2回研究会・セミナー
2014年11月17日
(京都大学稲盛財団記念館)

テーマ：“Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy” (現代ラテンアメリカの諸改革：その教訓と課題)

“La reforma agraria en América Latina: su aplicación en el pasado y lecciones para enfrentar la situación actual de la tenencia de tierra” Sergio Gómez (Asesor de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Alimentación y la Agricultura-FAO para América Latina y el Caribe)

“Participación social en las reformas educativas: el caso de Chile y Mexico” Marcela Gajardo Jiménez (Asesora de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Educación, la Ciencia y la Cultura-UNESCO para América Latina y el Caribe)

● 第3回研究会・ワークショップ
2015年3月7日
(京都大学稲盛財団記念館)

テーマ：“Estado y sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, entidad y descentralización” (現代ペルーの国家と社会：暴力、エスニシティ、地方分権化)

“Genocidio en los Andes: el silencio de los vivos y el grito de los muertos” Jaime Urrutia (Instituto de Estudios Peruanos)

“Etnicidad y violencia en el Perú” Artemio Sánchez (Centro de Investigación y Desarrollo Social)

“Gobiernos locales en el contexto de la descentralización” Moisés Palomino (Instituto de Estudios Peruanos)

今年度は、昨年度の成果を基に、主としてペルーとボリビアの社会運動データの分析とその比較を実施する予定であったが、関係者の異動などの事情により、比較分析を実施することができなかった。他方、ペルーの社会紛争に関する基礎データの整理が基本的にはほぼ完了し、ペルーの事例に関する分析を進めることができた。

ペルーの社会紛争については、天然資源開発に関連した紛争が多く発生しており、それに関する先行研究は、天然資源の開発収益から得られる地方交付金が多い地域ほど、社会紛争が発生する傾向を指摘している。しかし、前年度の報告で指摘したように、天然資源の開発収益による地方交付金は、説明要因として、一定の有効性を持っていることが確認できる一方、紛争が多発する地域と少ない地域といった地域差が考慮されていない限界がある。

そこで、今年度は、先行研究を踏まえつつ、農業生産活動の重要度（開発による負の影響）、貧困度、過去における天然資源開発の経験の有無、天然資源の開発収益による地方交付金の程度、天然資源開発に反対する左派系政治勢力の存在の有無、の5つの要因が社会紛争の発生頻度に与える影響について、社会紛争の発生する頻度の高い地域のあいだでの比較分析を行なった。

その結果、基本的な要因として最も重要なのは、過去における天然資源開発の経験の有無であることが判明した。具体的には、1990年代よりも前から天然資源開発の経験を有している地域では、貧困度や天然資源の開発収入による地方交付金の程度、左派系政治勢力の存在といった要因は重要な影響を持たない。唯一重要なのは、農業生産活動の重要度である。つまり、農業生産に負の影響が出るのが懸念される場合に、社会紛争が発生する。これに対し、1990年代以降に天然資源開発が進んだ地域では、貧困度、天然資源の開発収入による地方交付金の程度、左派系政治勢力の存在が社会紛争の要因として重要である。

2. 記録・記憶と社会の再生

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

谷川 竜一（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

社会の記録としての文化や集合的記憶は、グローバル化などの変化を乗り越えるための各社会内における紐帯として重要な役割を担うと同時に、新しい世代にとっては自己の社会を硬直させる足かせともなりうる。本プロジェクトではそうした矛盾を意識しながらも、文化や記憶は各社会が自立性を維持しながら、危機やめまぐるしい変化を乗り越えるために不可欠なものとして捉える。具体的には、紛争、災害、社会間の対立や格差などに見舞われた社会において、有形無形の記録・記憶の収蔵庫が編み出され、活用される事例を、個別研究と協働して考察する。記録や記憶の確立（時に忘却）の手法を、レジリエンスとしての社会再生・再編に結びつける実践的な手立てとして提案する。

2014年度の 研究実施状況

本年度は、本複合研究下に所属する3つの個別ユニットのうち、「災厄からの再生のための記録と記憶の〈場〉：災害・紛争後の記憶をつなぐ実践・支援とその可能性」（代表・寺田）、「建築を通じたポピュラー文化の記憶の場の構築力の解明」（代表・山中）の2つが最終年度を迎えた。従ってこれら2つの個別ユニットは成果のまとめの年にあたり、そのサポートを行うと同時に、各会合での成果共有や社会的な還元に向けた考察を進めた。

一方、当複合研究に属するもう1つの個別ユニットである「メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態」（代表・王）は、1年目であり、そこで出て来た論点や視点などを、その他2つの個別ユニットの研究と関係づける枠組みづくりを行った。

これらを踏まえつつ、複合ユニットにおける成果としてミュージアムや社会復興における記憶などのテー

マにし、共同研究の知見や方法論を用いながら成果還元を行った。

成果

本年は、論文5本、冊子2冊、シンポジウム1回が主な成果である。以下より詳細に述べる。

本年は、個別ユニット代表者との連携を深めながら、ユニット間での具体的な成果や実際の方向の共有を企図した。記録・記憶に関する議論で共通しているのは、いずれも記憶や記憶のみを扱うのではなく、それをやりとりする人、収蔵する博物館、あるいは伝達するためのメディア等の媒体など、それらを広く対象として考察している点である。例えば、「災厄からの再生のための記録と記憶の〈場〉：災害・紛争後の記憶をつなぐ実践・支援とその可能性」ユニット（代表・寺田）では、記憶が造られる場を広く捉え、記憶の〈場〉をメディアととらえながら、それがもつ限界と可能性に着目するものである。この点は、「建築を通じたポピュラー文化の記憶の場の構築力の解明」（代表・山中）ユニットにおいて、ミュージアムに展示されるポピュラー文化やその記憶だけでなく、ミュージアムの展示空間や建築形状まで含めて読み解き可能なメディアとして捉え、地域社会との関係メカニズムを探る視点と接続する。また、「メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態」（代表・王）では、記録や記憶の生成過程を検討する際に、地域社会やメディアだけでなく、研究者までを含み込んでいる点で、前2つのユニットの成果を踏まえつつ、さらに眼前の問題としての記憶のポリティクスに迫るものでもあった。こうした点を共有しつつ、記録・記憶と社会の再生に関する知見を共有することができた。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強くしなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

2. 記録・記憶と社会の再生

1. 災厄からの再生のための記録 と記憶の〈場〉：災害・紛争 後の記憶をつなぐ実践・支援 とその可能性

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

寺田 匡宏（総合地球環境学研究所）

◆メンバー

亀山 恵理子（奈良県立大学地域創造学部）

川喜田 敦子（中央大学文学部）

清水 チナツ（せんだいメディアテーク）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

災厄からの再生を目指して記録と記憶を行う活動に関しては、近年新しい動きが進んでいる。それらはミュージアムやアーカイブのような具体的な場所の中で営まれる場合もあるが、ネット上で行われたり、語り継ぎや聞き取り・聞き書きのように人々のつながりの中で実践されたりしている場合もある。それらの実態を広く〈場〉ととらえ、その実践のありかたを、組織の形態や支援者も含めたそれを取り巻く人々のネットワークの様態からとらえることで、自然災害やその他の災厄からの再生と強靱でしなやかな社会の構築の方法と可能性を探る。

2014年度の 研究実施状況

本年度も昨年度に引き続いて〈場〉についての理論的考察とメンバーがこれまで研究してきた具体的な場に即した事例研究を行うとともに、それをもとにした成果の取りまとめと出版のための準備を行った。研究会の開催実績は下記のとおりである。

●第1回研究会

2014年5月23日

寺田匡宏・縄田浩志「できたこととできなかったこと、伝わったことと伝わらなかったこと：展示「砂漠を生き抜く」と出版『砂漠誌』を通じて」へのコメント

※共同研究「メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態」との共催

●第2回研究会

2014年12月17日

出版企画「災厄からの立ち直り（仮）」に関する打合せ

●第3回研究会

2015年2月26日

北野央氏（せんだいメディアテーク）+清水チナツ氏「せんだいメディアテークという場における記憶：『3がつ11にちをわすれないためにセンター』と展覧会『想起と記憶』をめぐる」

成果

①〈場〉と記憶についての理論的整理の成果として、フランス・アナール派第3世代のピエール・ノラの『記憶の場 *Les Lieux de memoire*』の再検討を改めて行い、記憶の場という発想が、近代が依拠してきた「歴史」と「空間」という二つの基本的概念に代わる概念として提唱されていることを確認した。また「歴史」と「空間」は西洋的概念でもあるが、それに代わって「記憶」と「〈場〉」という概念を用いることで、非西洋における過去表象をより広くとらえることができる可能性についても確認した。②具体的な〈場〉の事例研究としては、東ティモールにおける復興と記憶、フィリピンにおける人道援助と社会とのかかわり、アチエにおける内戦と津波災害の記憶の相違、ドイツにおけるホロコーストの記憶をめぐる理論的展開の歴史、東日本大震災におけるせんだいメディアテークの役割について検討を行った。その中からは、災害や紛争後の記憶をつなぐためには博物館やメモリアルのような特定の場所だけではなく、広くネットワークのようなものまでを含む〈場〉が重要であること、その〈場〉がより良いものとして機能するための条件として当事者だけではなく非当事者も関わりうることや、その〈場〉にかかわる構成員が〈場〉をメディアとしてとらえ、それがもつ限界と可能性に自覚的であることが明らかになった。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト：
強くしなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

2. 記録・記憶と社会の再生

2. 建築を通じたポピュラー文化
の記憶の場の構築力の解明

個別共同研究ユニット

◆研究期間
2013～2014年度

◆代表
山中 千恵（仁愛大学）

- ◆メンバー
- 伊藤 遊（京都精華大学国際マンガ研究センター）
 - 表 智之（北九州市漫画ミュージアム）
 - 村田 麻里子（関西大学社会学部）
 - 脇田 貴文（関西大学社会学部）
 - 谷川 竜一（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究は、戦争や災害等「負の記憶」を留める場所（「記憶の場」）や、開発によって失われた風景や文化がドラマ・映画・マンガなどのメディアにより表象され、観光化されることで生じる記憶の政治学を分析するものである。特に、ミュージアムという場に注目しつつ、これを進める。分析を通して、グローバル化時代における集合的記憶の重層的な構築過程を明らかにし、また、現代社会において空間や場所がいかに再配置されようとしているのかを検討する。

2014年度の
研究実施状況

昨年度（2013年度）末に出版した『マンガミュージアムに行こう』においてポピュラー文化と地域振興の関連やその特性をレビューしたが、本年度はそうした視点をさらに深めながら、ポピュラー文化ミュージアムが地域にもたらす意味や効果といったものをより具体的に検討するために、地域の動向の把握や建築分析などに力を入れた。前者では、近年日本において特に活発な活動を行っている熊本において、関係者を招きシンポジウムを開催した。後者では日本における大型マンガミュージアムを設計している組織設計事務所である日本設計において、マンガミュージアムの設計経験を持つ建築家にインタビューを行った。そして2014年7月には、京都精華大学におけるマンガ学会の年次集会において経過報告発表を行うことで研究のアピールと方向性のブラッシュアップにつとめるとともに、2015年1月に仁愛大学において熊本と同規模の

シンポジウムを行い、研究成果の発信や連携推進を行った。

成果

2014年度は上記のように、研究グループを中心とした関係者による研究会を2ヶ月毎に1回開催しながら、100人を超える大型のシンポジウムを2回（熊本、福井）、学会発表（マンガ学会、京都精華大）を1回、国内の関連インタビューを2回（東京、熊本）行った。

近年の日本におけるポピュラー文化ミュージアムのなかでも、マンガミュージアムに対する一般的な期待は強い。地域振興、文化振興、あるいは地域のコミュニティの核として、はたまた「クールジャパン」といったややナショナルスティックな役目をもった旗手として、様々な文脈から設立が望まれている。一方マンガミュージアムの来館者の調査を進めていると、マンガの愛好者やコレクター、一般の読者たちといったレベルでは、マンガそのものを生活文化として消費しながら、常に自らの記憶や体験と照らし合わせて楽しむ姿が多く見られる。つまり、マンガを取り巻く側の要望とそれを消費する側との接合面が、マンガミュージアムであるわけである。こうした点を反映させ、企画者、マンガ関係者、その双方を跨ぐ方々をシンポジウムに招聘して議論を深めることで、マンガというポピュラー文化によって地域振興を行うのではなく、地域こそが豊饒なマンガ文化を育む揺りかごとなる可能性が示唆された。その旨を論じた論文及びインタビュー集として『日本マンガミュージアム2』（谷川竜一・山中千恵・伊藤遊・村田麻里子編、CIAS Discussion Paper No.52、2015年3月）を、そしてポピュラー文化プロデューズと建築の相互関係に関する成果として「韓国漫画映像振興院における来館者調査：来館者の物理的・社会的・個人的コンテストをめぐって」（山中千恵・村田麻里子・伊藤遊・谷川竜一、『人間学研究』13、2015年、pp.47-64〔査読付〕）を出版することができた。

3. 災害対応の地域研究プロジェクト： 強しなやかな社会をめざして—地域研究の可能性（統括班）

2. 記録・記憶と社会の再生

3. メディアの記憶をめぐるウチとソト：多声化社会におけるつながりと疎外の動態

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

王 柳蘭（京都大学地域研究統合情報センター）

◆メンバー

飯田 玲子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

李 仁子（東北大学教育学研究科）

紺屋 あかり（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）

瀬戸徐 映里奈（京都大学大学院農学研究科）

中山 大将（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

縄田 浩志（秋田大学国際資源学部）

村上 直之（元・神戸女学院大学）

矢内 真理子（同志社大学大学院社会学研究科メディア学専攻）

砂井 紫里（早稲田大学イスラーム地域研究機構）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

無意識的・意識的に貯蔵される記憶は、時と場合によってさまざまな“リアリティ”（現実）を作り上げるが、そのダイナミックな様相を、越境者社会、災害に直面した地域、変容をとげる伝統社会を対象に、記録・記憶をめぐる当事者・地域住民、多様なメディア（新聞、テレビ、インターネット、博物館）、当事者と外部をつなぐ役割をもつ研究者、これら三者の相互作用とそれによって生み出される“リアリティ”（現実）と記憶の生成過程を、ウチとソトという社会的境界の変動をキーワードにして明らかにする。とりわけ、記憶や記録に動員される多様なメディアの運用の在り方、それを取りまく地域住民・市民のみならず、研究者の実践的役割についても批判的に検証していく点において、表象される側／する側といった二元的な議論を越えて、研究者の立ち位置や葛藤も考慮に入れた地域や民族の複数性や多声性、自他像研究を越えた新しい地域研究やフィールドワーク、多元的な知の継承の在り方について学術的地平を開くものである。

2014年度の 研究実施状況

研究会は計3回実施し、以下について議論と問題意識の共有化を行った。

- ①研究者を現場から離れた客観的な存在として位置づけるのではなく、研究者自身が当事者とメディアとの板ばさみのなかで展開するコミュニケーションの可能性、あるいはディスコミュニケーションの葛藤、問題点をあぶりだし、研究者間の課題の共有化を図った。
- ②上記三者間によって生み出されるリアリティの構築過程を分析し、社会的境界（ウチとソト）の変動、疎外が生み出される要因や政治的経済的文化的力学を解明した。
- ③既存のメディアは災害、周縁的マイノリティを一元的に他者化していく危険性をはらむなかで、地域と外部をつなぐ研究者が多声化する社会をいかに豊かにかつ動的に記述・記録していくことが可能か、個別の事例研究を通して、相互参照した。

成果

- ①博物館における伝統の記憶、相互作用と他者理解をテーマに、研究者、博物館、当事者との板ばさみのなかで展開するコミュニケーション、伝統の継承の可能性、ディスコミュニケーションの葛藤、問題点をあぶりだし課題の共有化を図った。「砂漠を生き抜く：人間・動物・植物の知恵」という博物館企画展示において一般市民のもつ“異文化観”をどう打ち破ることができたか、メディアとどのようなやりとりがあったか、展示を通じて研究者が学んだこと、研究者の果たす役割について議論した（縄田浩志）。
- ②テレビや新聞といったメディアによって作り出される“リアリティ”の構築と疎外の動態について日本を題材に原発（福島）や食（ムスリムのハラール食品）にまつわる報道のあり方を分析し、もっともニーズを必要とする市民や当事者を疎外し、“公益性”のもと情報を一元化、断片化する報道のあり方と問題点、こうした状況下における研究者の果たす役割について議論した（矢内真理子、砂井紫里）。
- ③当事者社会が利用する多様なメディア、さらに当事者社会内部における多様なウチとソトの社会的境界の生成過程について、戦後樺太の経験と東北の被災地を事例に比較研究を行った。被災地内部における当事者間の記憶の選択の多様性と首尾一貫しない地域住民の声の様相、ソト（非被災地、東京）の者が支援の回路を通じてウチ（被災地）の者として受け入れられるプロセスを議論し（李仁子）、また、サハリン残留日本人を対象に、ソトとウチの境界線が政治的社会的要因によって変動する事例を、とくに戦後樺太の複数性という点から議論した（中山大将）。

1. 地域研究方法論

複合共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2015年度

◆代表

山本 博之 (京都大学地域研究統合情報センター)

◆メンバー

西 芳実 (京都大学地域研究統合情報センター)

村上 勇介 (京都大学地域研究統合情報センター)

柳澤 雅之 (京都大学地域研究統合情報センター)

目的

さまざまな研究者によって行われている地域研究の手法を個々の研究者の「名人芸」として済ませるのではなく、対象地域や分野の違いを超えて共有・利用が可能になるような形に洗練させるための基礎的な調査を行う。2013年度までの3年間に行われた地域研究方法論の共同研究では、主に大学院教育における地域研究の方法について検討し、その結果を雑誌『地域研究』(第12巻第2号)の「総特集 地域研究方法論」で発表した。本共同研究では、引き続き大学院教育における地域研究のあり方について具体的な事例に即して検討を続けるとともに、(1) 多様な専門性を持つ研究者が協働する仕組みとしての地域研究の歩みを踏まえた地域研究の意義と方法、(2) 研究者以外の専門家・実務者による成果の活用を意識した地域研究の方法、(3) 自身が社会生活する存在としての地域研究者の生活と研究の両立などの諸課題についての検討を通じて、学術研究と社会のそれぞれにおける地域研究(者)の位置づけを考える。

2014年度の
研究実施状況

本テーマに参加する個別ユニットの代表者と個別に研究打ち合わせ等を行うことを通じて、地域研究が置かれている課題とそれへの対応について検討した。また、地域研究コンソーシアム(JCAS)の地域研究方法論部会と連携して、JCAS加盟組織のネットワークを活用した研究集会・ワークショップ等を開催した。JCASおよび個別ユニット「官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討」と共同で実施した公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」についてはJCASコラボレーションシリーズにより報告書を刊行した。JCAS次世代ワークショップで

は「キャリアパスとしての有期雇用を考える」を共催し、企画者らより報告書が刊行された。

成果

政府・マスコミ・学術研究などの従来の情報の発信源の権威が低下し、他方でインターネットに代表される情報発信の経路の多様化を迎え、「正しさ」を決められないという状況を迎えている。他方で、こんなところに日本人がいるのかと思うような世界の隅々にテレビカメラが入り、インターネットを通じて世界各地から情報が発信され、今日の世界について過剰な情報が溢れる中で、情報は「わかりやすさ」によって淘汰されていくことになる。しかし、わかりやすい情報だけでは複雑な世界の現実を捉えることはできない。多種多様な情報を収集・整理し、それをもとに世界のあり方を捉えるには、媒体ごとにどのように情報が発信されているかを理解するとともに、それらの情報をもとにどのようにして現実世界の様子を捉えるかという工夫が必要になる。本複合ユニットでは、メディアによる情報の発信と受信、現場での協働を通じた実践知の把握、情報をもとにした物語の読み解きの3つの角度から、「地域研究的想像力」のあり方について検討した。また、本複合ユニットが共催したJCAS次世代ワークショップ「キャリアパスとしての有期雇用を考える」では、「有期雇用」という働き方を歴史的な文脈や世界の多文化的環境の中に置いて捉え直すことで、期限つきで関わるという状況がより多くの知識や技能の獲得や能力の発揮に結びつく可能性や、それを可能にする人々や社会の工夫について検討した。討論を通じて、社会の中で自分の価値が何かを常に考えるという方向と、自分が価値を持つ社会はどのような範囲で、それはどのような性格の社会なのかを考えるという方向の2つのアプローチの違いが明らかになった。

4. 地域研究方法論プロジェクト

1. 地域研究方法論

1. アジアと日本を結ぶ実践型地域研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

安藤 和雄 (京都大学東南アジア研究所)

◆メンバー

市川 昌広 (高知大学教育研究部)

辰巳 佳寿子 (福岡大学経済学部)

中村 均司 (元・京都府丹後農業研究所)

南出 和余 (桃山学院大学国際教養学部)

目的

離農、離村の問題は、日本に固有の問題ではなく、今やアジアの開発途上国でも共通する問題となりつつある。アジアに先駆け日本農村がこの問題に取り組んできた。過疎地、若者の離農、離村、限界集落と呼ばれる「在地」で暮らすこの問題に直面している当事者たちによるインフラ整備や経済問題という従来の農村開発アプローチとは一線を画した文化的なアプローチによる「在地の自覚」に依拠した地域再生の取り組みが日本の各地で起きている。

本研究では、ミャンマー、ラオス、ブータン、バングラデシュ、インドなどのアジア諸国の大学関係者、NGOなどの農村開発関係者を招聘し、日本のNPO、地方自治体、大学などの各団体と草の根の農村開発に関する国際会議とPLA（参加型学習と実践）調査を共同実施することで、アジアから学び、アジアには日本の問題を発信するという、相互啓発による新しい農村開発の可能性を模索する実践型地域研究を実施する。

2014年度の 研究実施状況

本プロジェクトは、東南アジア研究所実践型地域研究推進室が実施している研究プロジェクト（科研、東南アジア研究所共同研究、地（知）の拠点事業、SPIRITなど）との共同により、以下の研究活動を行った。2014年度の8月、12月を除く毎月末に東南アジア研究所実践型地域研究推進室が主催する京滋フィールドステーション月例研究会にて、実践型地域研究について議論をすすめた。また、7月の約1ヶ月間、2015年2月の10日間に、ブータンの王立ブントラン大学シェラ

ブツェ大学の若手研究員4名と5名をそれぞれ招へいし、京都府南丹市美山町知井振興会傘下の佐々里地区にて知井振興会、佐々里自治会との協働により、アクション・リサーチとして、様々な地元住民、学生ボランティアらとの交流事業、集落住民の参加による話し合い形式のワークショップ、問題発見型のPLAを実施した。11月15～17日に京都府南丹市美山町知井地区で第6回「文化と歴史そして生態を重視したもうひとつの草の根農村開発に関する国際会議 in 美山町」を開催した。この事業にはミャンマー（1名）、ラオス（4名）、ブータン（1名）、バングラデシュ（1名）、インド（1名）が参加した。15日は公開の地元住民参加型シンポジウム「アジアの村で何が起きているのか!？」、16日は美山町知井地区での地域活性に関するPLAを実施した。参加者による集落でのPRAと地域活性に関する個別事業報告会を参加型ワークショップによって実施した。17日は学生ボランティア、会議発表参加者らと総合討論を午前中に開催しオープンな意見交換会をもった。また、実践型地域研究における調査手法の開発として12月と3月バングラデシュのハティア島にてサイクロン被災について現地のNGOとともに村人の対応や知恵を、改良PRAにより調査実施した。

成果

アジア諸国における過疎化、離農、離村、高齢化による限界集落等々の問題へのアプローチは、現象の科学的説明とともに、解決策を実践的に行っていくことが強く求められている。地域の現場での直観的な問題の理解から、克服への道筋を、問題解決の実践に具体的に参加する人々がたてて、実践を通じて解決策を具体的に模索しつつ、現象を科学的に分析して、第三者に説明するという、問題群を中心にした実践から分析へという、従来の地域研究や既存学問がとってきた方法論を逆さまにする方法論が有効となろう。このことによって問題解決に具体的に参加したいと願っている一般の人々の「善意の力」をも巻き込む参加型の地域研究が具体的に模索される。本研究では、特に、アジアの若い人々、日本の若い人々の「善意の力」を実践に生かせるアクション・リサーチを地域研究として成果として提示したいと願っている。

2013年度と2014年度の7月、8月、2月に実施したアクション・リサーチでは佐々里集落の人々とブータンの若手研究員のボランティア的な交流活動やミニ・ワークショップ、訪問聞き取りのPLAによって、ブータンの若手研究者には、日本の過疎、高齢化の実態を

知ってもらうことができ、佐々里集落の人たちには、ブータンの人々の開発や暮らしに関する考え方に直接接してもらうことで、過疎、離農の問題がブータン、日本のそれぞれの固有問題でないという自覚を生むことができた。

また、2013年度と2014年度のそれぞれ11月に実施した高知県大豊町と京都府南丹市美山町での国際会議では、ネパール、ミャンマー、ブータン、バングラデシュ、ラオスの農村開発の諸問題、亀岡市、南丹市美山町知井地区、山口県阿武町、高知県大豊町での地域振興の事例が発表され、過疎化、離農の問題がもはやアジアにおいてはグローバルな問題となっていることと、日本の各地での取り組みから地域連携の重要性が認識された。そして、怒田集落での意見交換から、学生の力を本研究のようなワークショップの場でも発揮される工夫が必要であるとの指摘を受けて、2014年の美山町では学生ボランティアのセッションを設けて発表と議論を行い、意見交換を行った。

美山町佐々里集落、大豊町怒田集落のいずれの活動も地元新聞（京都新聞、高知新聞）に大きくとりあげられ、特に、2013年7月、8月のブータンの若手研究者の佐々里集落での活動については、10分前後の特集が、夕方の関西テレビのニュースで生まれ、社会的な反響があった。

バングラデシュのハティア島で行った実践型地域研究調査手法は従来の参加型調査PRAに参加型ワークショップを付加し調査結果の評価をインフォーマントに行ってもらった。十分なインフォーマントである村人の参加意識を高める調査手法としての可能性を確認することができた。

4. 地域研究方法論プロジェクト

1. 地域研究方法論

2. 物語を基にしたコミュニティづくりを目指す地域研究

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

笠井 賢紀（龍谷大学社会学部）

◆メンバー

岩佐 奈々子（北海道大学大学院教育学院）

内尾 太一（特定非営利活動法人「人間の安全保障」フォーラム）

打越 正行（特定非営利活動法人社会理論・動態研究所）

栗田 健一（新宿区新宿自治創造研究所）

嶋原 敦子（仙台高等専門学校）

原 めぐみ（大阪大学大学院人間科学研究科）

目的

本研究の目的は、地域コミュニティ構成員の物語収集を通じてそのコミュニティの展望を見出すための地域研究の方法論を探求することである。

物語を研究の中心に据えるナラティブ・アプローチは盛んであり、個々人の心理学的分析に留まらず、人生史等の物語に埋め込まれている社会や文化を浮き彫りにするために活用されてきた。本研究はさらに一歩進み、物語の形成過程自体をコミュニティとしての今後の展望を考える素材とすることを試みるものである。

語りは、語り手と聞き手が同一であっても様々な要素（語りの場、語り手と聞き手との関係性、語り手の置かれている状況等）によって異なる。こうした諸要素による語りの変化はエラーとして研究素材から排除される傾向が強いが、本研究ではそうした矛盾をはらむ変化も重要な素材と捉える。物語形成過程で生じる矛盾のあり方から、構成員の過去から現在における価値判断基準の変化を追い、将来の展望を見出す。

2014年度の 研究実施状況

本年度は、当初計画通り3回の公開研究会（公開講座・シンポジウム含む）を開催した。12月12日、2月7～8日、3月22～23日の3日程で開催された研究会等では、各共同研究者から研究の進捗状況が報告されるとともに、共同研究テーマに関する闊達な議論がなされた。滋賀、沖縄、宮城で行われた3回の研究会は、いずれも共同研究者の主たるフィールドを巡る旅でも

あり、各地で語りの場に現に共同研究者たちが足を踏み入れ、現場で、語りについて語るという貴重な機会となった。

12月12日の研究会に続く公開シンポジウムは、外部から中村八千代氏、Maribeth G. Berdejo氏、Rhea de los Reyes氏、沖浦真弓氏をパネリストとして迎えて、笠井が進行を務め、「人生の物語と社会：フィリピンの社会的起業UNIQUEASEの例を中心に」と題して開催された。本シンポジウムは33名の一般参加者を数え、各パネリストの人生史の語りや聴衆の人生史の語りを引き出す等、本研究の目指すアクションリサーチ的な相互作用を生むものであった。

成果

2年度間にわたる本共同研究は目的に即して方法論構築を探究してきた。共同研究者たちは都市下層、移民、まちづくり団体、被災地、先住民、地域通貨共同体といった多様な地域コミュニティを対象としたフィールドワークを重ねてきた。これらの物語に関する調査過程自体が地域コミュニティづくりに貢献するアクションリサーチの要素を体現しており、本研究が志向した方法論の萌芽が見られる。

たとえば、まちづくり団体を対象とした研究では大学・行政・地域の三者協働による物語構成のための拠点とその運用スタッフを設置し、2年度間で約500名の「語り手」が訪れた。記録・再構成された物語が地域住民に還元されることで、物語の共約を巡る動きが見られ、共約過程によってコミュニティづくりが促進された。

さらに、同事例から、物語構成を促す要因として「コミュニティ・リーダー」、すなわち、地域コミュニティにおいて様々な人々を物語の構成主体として役割づけてつないでいく者の重要性が明らかにされた。こうしたコミュニティ・リーダーを育成するために大学の教育現場のみならず地域住民を対象とした場合にもPBL（課題発見・解決型学習）が有用であることが示唆された。

また、被災地を対象とした研究では、地域の子もたちによる「新しい民話」の創造や、花（椿）を中心としたコミュニティづくりなど、いずれも物語と地域コミュニティづくり（復興）との直接的関係が見て取れた。ここでは、物語創造に関わることによるコミュニティ意識の向上や、物語モチーフを活用することによる共約可能性の増加といった方法論の基礎が見いだされた。

4. 地域研究方法論プロジェクト

1. 地域研究方法論

3. 官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討

個別共同研究ユニット

◆研究期間

2013～2014年度

◆代表

立岩 礼子（京都ラテンアメリカ研究所）

◆メンバー

伊藤 未帆（東京大学教養学部）

狐崎 知己（専修大学経済学部）

鈴木 茂（東京外国語大学大学院総合国際学研究院）

幡谷 則子（上智大学外国語学部）

宮原 暁（大阪大学グローバルコラボレーションセンター）

西 芳実（京都大学地域研究統合情報センター）

山本 博之（京都大学地域研究統合情報センター）

目的

本研究は、日本の官公庁・民間企業・マスコミ等の現場において、いかなる地域研究の成果が必要されているかという実社会における地域研究のニーズを分析した上で、当該分野の実務者に対して地域研究者による研究成果をいかなる形で発信すべきかを検討する。

今日、地域研究の重要性はますます高まっており、外交を担う外務省などの官公庁をはじめ、海外に進出する民間企業、海外事情を報道するマスコミにとっては、諸外国の地域事情は重要な情報であることは明白である。さらに言えば、そうした情報は単なる統計あるいはデータとして提示されるだけでは不十分で、交渉相手あるいは関心地域の歴史や文化への理解を深め、日本との相互理解のもとに共存する世界を構築するために援用されるべきである。その意味で、地域研究者による研究成果が果たすべき役割は大きいはずである。しかしながら、現状では、こうした研究成果が十分に実務者に活用されとは言い難く、ましてや交渉や取引あるいは取材の現場を通して社会に還元されているとは考えにくい。

従って、本研究では、官公庁・民間企業・マスコミ等の実務者が必要としている地域研究による成果を分析し、その発信方法の改善の可能性を検討する。

本年度は、昨年度リストアップした日本の官公庁・民間企業・マスコミ等の現場におけるインフォーマントと個別に研究会を開いた。官公庁からのインフォーマントは日本政府関西担当大使三輪昭氏、民間企業からは三菱商事（株）グローバル渉外部部長秋山諭宏氏及び次長梨本博氏、マスコミからは毎日新聞外信部記者米村耕一氏、朝日新聞大阪社会部記者武田肇氏、NHK衛星放送記者立岩陽一郎氏、アジアプレス・インターナショナル代表ジャーナリスト石丸次郎氏に協力を願った。また、NPO法人からは、調査報道アイ・アジア（i Asia）及びFM わいわいの金千秋氏に協力を得た。

今年度前半は、昨年度から活発な意見交換が進んだマスコミ関係者との協働で、公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」の準備として5月28日を皮切りに複数回の研究会を実施し、7月26日に公開シンポジウムを大阪・中之島で開催し、レイシズムについて世界の現場から、そして日本の現状も視野に入れつつ市民とともに考える場を持った。

また、7月7日には三菱商事本社にて、上記インフォーマント2名へのヒヤリングを実施した。三菱商事の海外調査の方法、商社による地域研究の成果の利用状況、地域研究者との協働の可能性について、情報の提供および意見交換を行った。

さらに、10月9日には外務省大阪分室（大阪合同庁舎4号館4階）にて日本政府関西担当大使へのヒヤリングを実施した。大使の三輪氏からは、外務省と研究者の連携について詳細な助言をいただいた。

成果

本研究では、官公庁・民間企業・マスコミ等の実務者が必要としている地域研究による成果を分析し、その発信方法の改善の可能性を検討した。

官公庁との連携としては、外交情報の収集・分析を専門に行う国際情報統括官組織（Intelligence and Analysis Service）である国際情報局や次官級とのコラボレーションを実現することが重要であり、突発性の高い国際問題に対して、どんな地域研究者が協力できるかを見えるようにするためのコンタクト・ポイントを設定する必要があることがわかった。また、専門調査員派遣制度を効果的に活用するべく、帰国者と派遣予定者との意見交換会などの開催なども必要であ

ることも明らかになった。

企業との連携においても、やはり地域研究者のリストが求められた。企業は独自の方法で収集現場の生の情報や限定された地域の情報を深く追究しているため、その地域を大局的に理解し、関心国の周辺地域の反応と日本との関係において状況を理解する上で、地域研究者のニーズがあることが明らかになった。今回の研究会の成果として、地域研究コンソーシアム（JCAS）2014年度年次集会においてインフォーマントの登壇の可能性を探った。残念ながら、今年度は実現に至らなかったが、来年度以降でJCASに限らず、企業との連携の場の実現を目指すべく提言を行ってきたい。

マスコミ関係者との連携は、公開シンポジウムの準備、実施を通じて地域研究による成果の発信方法の幅を広げる突破口を作ることができたと言える。また、アジアプレス・インターナショナルを通じて、地域研究者によるYahooの国際ニュースへの投稿が実現する運びとなった。

2 地域研究コンソーシアムの運営体制と活動

地域研究統合情報センター（地域研）には2006年より地域研究コンソーシアム（JCAS）事務局が設置されている。JCAS発足当時46だった加盟組織数は、2015年3月末日現在98に達した。

JCASの運営は、13の幹事組織を中心とする運営委員会、理事会、および事務局が協力して行っている。地域研は、運営を担う幹事組織のひとつとして、事務局機能に加えて、ホームページの維持・管理、ニューズレターと和文雑誌『地域研究』の刊行を担うとともに、2014年度は情報資源部会、広報部会、年次集會部会、社会連携部会、地域研究方法論部会の幹事役も務めた。

発足以来、試行錯誤を経ながら運営の基本的な枠組みができあがったことを受けて、JCASは、2010年度には、幹事組織以外の加盟組織を広く巻き込み、ネットワークを活用して共同や連携を進めていく新しい段階に入った。従来の「次世代支援」に加え、「共同企画研究」「共同企画講義」「学会連携」「オンデマンド・セミナー」「特定課題研究」の各種公募プログラムの拡充や、一層の発信力の強化に努めることとなった。2011度には地域研究コンソーシアム賞（JCAS賞）が設置された。

事務局は、地域研究の設計、共同研究の推進、学会との連携、社会への還元、活動内容の発信というJCASの5つの重点分野の活動を日々支えている。2014年度は、メールマガジン「JCAS News」を50回配信し、ほぼ週刊の頻度で地域研究関連のシンポジウム・研究集會の案内、地域研究コンソーシアムと関連組織による多様な研究プロジェクトや研究員の公募情報を掲載した。また、2014年度には研究集會やプログラム12件を主催・共催し、広報協力は55件に達した。

2014年度のJCASの主な活動は以下の通りである。

1. 年次集會およびコンソーシアム・ウィーク

年次集會は2014年11月1日、日本貿易振興機構 アジア経済研究所において開催された。午前中の総会では、年間の活動紹介、次世代ワークショップ報告に加えて、第4回地域研究コンソーシアム賞の授賞式ならびに受賞者によるスピーチが行われた。午後には一般公開シンポジウム「地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン」が行われた。このシンポジウムでは、産業・企業の実証分析の系譜を発展途上国に関する日本の地域研究のユ

ニークな伝統と位置付け、フィールドワークに基づいて経済現象を分析してきた研究者が、自身の経験を踏まえて、地域研究の視点からの産業・企業研究の可能性と、フィールドワークとディシプリンの関係について報告した。フロアから様々な質問や意見が出され、活発な議論が行われた。

コンソーシアム・ウィークのプログラムとして、上記の総会・一般公開シンポジウムのほか、次世代ワークショップ「アフリカにおける開発と障害」（2014年10月31日、日本貿易振興機構 アジア経済研究所。次世代支援プログラムによる）が開催された。

2. 地域研究コンソーシアム賞

第4回（2014年度）JCAS賞の選考結果は次の通り。

- *研究作品賞授賞作品：末近浩太著『イスラーム主義と中東政治：レバノン・ヒズブッラーの抵抗と革命』（名古屋大学出版会）
- *登竜賞授賞作品：塩谷哲史著『中央アジア灌漑史序説—ラウザン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』（風響社）、高橋美野梨著『自己決定権をめぐる政治学—デンマーク領グリーンランドにおける「対外的自治」』（明石書店）
- *研究企画賞授賞活動：谷垣真理子（代表）「国際研究プロジェクト『華南研究の創出』（『変容する華南と華人ネットワークの現在』（風響社）
- *社会連携賞授賞活動：アジアプレス・インターナショナル「報道ウェブジャーナル『アジアプレス・ネットワーク』における現代アジア報道」

3. 公募プログラム

- (1) 次世代支援：毎年募集している次世代地域研究ワークショップについては、2014年度は「自由課題・自由開催」、「東南アジア地域研究枠」、「境界研究」、「年次集會開催枠」、「異文化・教育枠」、「地域研究方法論枠」の6つの枠が設定・募集され、採択となった次の7件が開催された。（参照：<http://www.jcas.jp/about/jisedaiws.html>）
- ①自由課題・自由開催枠：「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容」（2015年1月11日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）
「スプロール化した都市の中の隠された智慧—東南アジアにおける都市の『無秩序』を考える」（2015

年1月30日、総合地球環境学研究所)
「ユーラシアにおける境界と環境・社会—学際的対話による包括的な『境界』知の獲得」
(2015年2月7日、奈良女子大学)

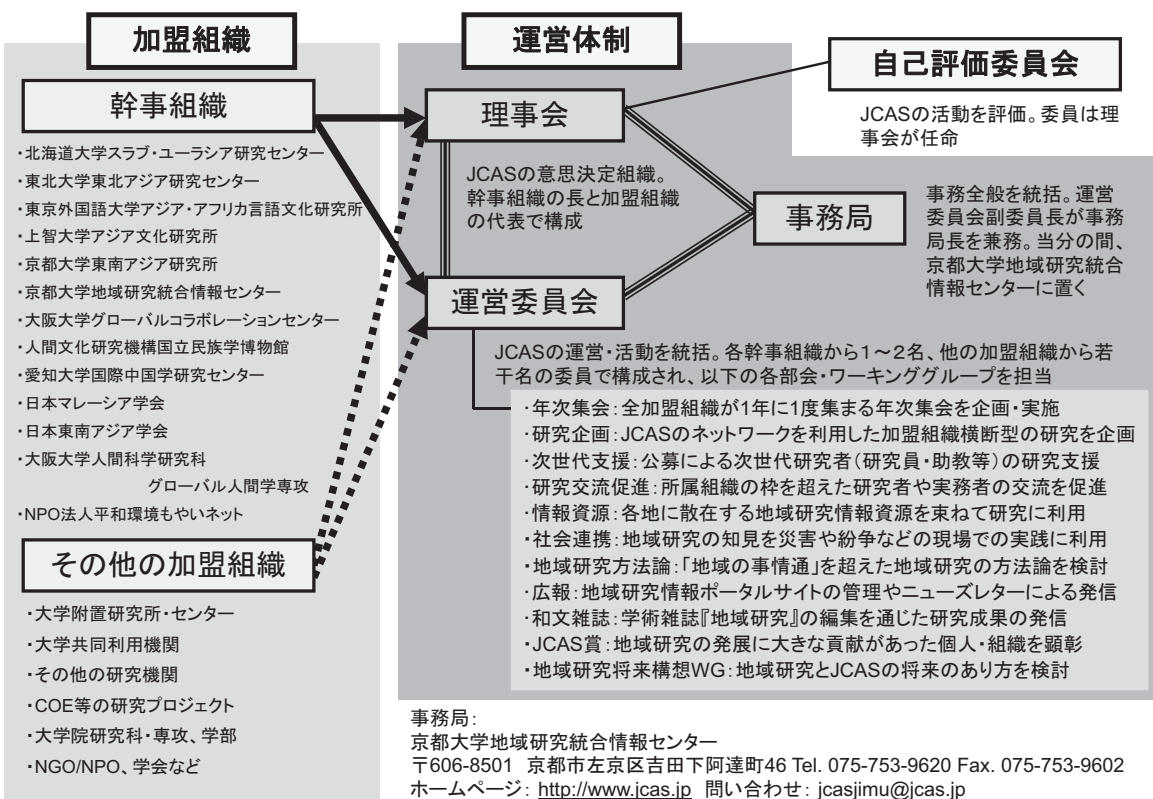
②異文化・環境教育枠：「抵抗と解放の身体—ブラジル伝統芸能『カボエイラ』による対話と実践—」(2014年9月5～7日、9日、目黒区東山住区センター・他、9月12～14日、京都大学稲盛財団記念館・他)

③年次集会開催枠：「アフリカにおける障害と開発」
(2014年10月31日、日本貿易振興機構 アジア経済研究所)

④東南アジア地域研究枠：「変容するランドスケープ—熱帯アジアでの社会生態システムの理解に向けた共同研究」(2015年2月9日、総合地球環境学研究所 講演室)

⑤地域研究方法論枠：「キャリアパスとしての有期雇

運営体制：地域研究コンソーシアム(JCAS)の組織



図II-5 地域研究コンソーシアムの運営体制 (2015年3月現在)

表II-1 2014年度地域研究コンソーシアム公募プロジェクト (地域研の共催分)

次世代ワークショップ	「近現代モンゴルにおける人間=環境関係の変容」
	「スプロール化した都市の中の隠された智慧—東南アジアにおける都市の『無秩序』を考える」
	「ユーラシアにおける境界と環境・社会—学際的対話による包括的な『境界』知の獲得」
オンデマンド・セミナー	「災害対応の国際協力を考える～ 2004年スマトラ島沖地震・津波被災地の現場から～」
	「国際理解—『紛争』を通して見る世界」
社会連携	「災害対応の地域研究」プロジェクト
	「難民支援に関する法曹界・地域研究者・市民社会の連携」プロジェクト
	「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」プロジェクト
	「地域研究が創る次世代型環境教育」プロジェクト
	「女性研究者のライフ・キャリアネットワーク」プロジェクト
	「地域研究者のキャリアデザイン」プロジェクト
地域研究方法論	「地域研究の過去と将来」プロジェクト
	「災厄と記憶の地域研究」プロジェクト
	「日本発・地域研究」プロジェクト
	「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」プロジェクト
	「物語を基にしたコミュニティづくりを目指す地域研究」

用を考える ―世界と日本の経験をつなぐ―」(2015年2月18日、東京大学)

(2) オンデマンド・セミナー：JCASのネットワークを活用して社会からの要望に応じてセミナー等に地域研究の専門家を派遣するもの。2014年度は次の3件が実施された。

- ①「災害対応の国際協力を考える～ 2004年スマトラ島沖地震・津波被災地の現場から～」に西芳実氏(京都大学地域研究統合情報センター)を派遣(2014年7月19日、京都大学稲盛財団記念館)
- ②「国際理解―『紛争』を通して見る世界」に山田真弓氏(大阪大学グローバルコラボレーションセンター)を派遣(2014年9月12日、百合学院高等学校)
- ③「異文化が運ぶメッセージフィールドワークの挫折と学びを通して」に王柳蘭氏(京都大学白眉センター)を派遣(2014年12月18日、京都市立西京高等学校)

(3) 特定課題研究：JCAS加盟組織からの要請に基づき、加盟組織が公募する共同研究の募集・選考・実施にJCASが協力するもの。2014年度は、地域研究統合情報センターの共同研究「災害対応の地域研究」ならびに「地域研究方法論」の2つの共同研究プロジェクトの公募に協力した(下記4.(2)、5.(1)参照)。

(4) 共催企画：JCAS加盟組織等からの要請に基づき、JCASが共催の形で協力するもの。2014年度は次の2件が実施された。

- ①「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2014年度夏期国際シンポジウム 危機の30年：第一次～第二次世界大戦期ユーラシアにおける帝国・暴力・イデオロギー」(主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2014年7月10～11日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター))
- ②「北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター2014年度冬期国際シンポジウム 境界(ボーダー):ユーラシアで交差する動力」(主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、2014年12月4-6日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

4. 社会連携

JCASは、災害・紛争への対応、地域研究の成果の

社会での活用、地域研究者のライフとキャリアの3つを柱として、社会連携を推進している。

(1) JCAS社会連携プロジェクト：地域研究による社会連携の担い手や分野を拡大する目的でJCAS加盟組織から社会連携活動を募集し、JCAS社会連携プロジェクトとして登録するもの。2014年度は以下の6件が登録された(継続分含む)。

- ①「災害対応の地域研究」プロジェクト
- ②「難民支援に関する法曹界・地域研究者・市民社会の連携」プロジェクト
- ③「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」プロジェクト
- ④「地域研究が創る次世代型環境教育」プロジェクト
- ⑤「女性研究者のライフ・キャリアネットワーク」プロジェクト
- ⑥「地域研究者のキャリアデザイン」プロジェクト

(2) 共同研究プロジェクト公募：地域研との共催により地域研究の社会連携に関する共同プロジェクトを募集し、採択されたプロジェクトをJCAS社会連携プロジェクトとしても登録するもの。2014年度は「災害対応の地域研究」プロジェクト(テーマ1：災害・紛争と復興、テーマ2：記録・記憶と社会の再生)を実施課題として募集を行い、1件が採択された(実施は2014年度)。

5. 地域研究方法論

2013年度、「地域研究の過去と将来」、「日本発・地域研究」、「災厄と記憶の地域研究」、「アジアと日本を結ぶ実践型地域研究」、「物語を基にしたコミュニティづくりを目指す地域研究」の5つのプロジェクトを立てて、あらたな活動段階に入った。

(1) 共同研究プロジェクト公募：地域研との共催により地域研究の方法論に関する共同プロジェクトを募集するもの。2014年度は「地域研究方法論」プロジェクト(テーマ：地域研究方法論)を実施課題として募集を行い、1件が採択された(実施は2014年度)。

6. 出版物

(1) 15巻1号および16巻1号の編集を行った。

(2) ワーキング・ペーパー(JCAS Collaboration Series)：以下の3点が刊行された。

- ①JCAS Collaboration Series No. 9：飯塚宜子・王柳蘭

編『子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか 感じ方の育みと総合的理解の視点』

- ②JCAS Collaboration Series No. 10:宮原暁・山本博之・石丸次郎・立岩礼子・西芳実編『JCAS公開シンポジウム報告書 世界はレイシズムとどう向き合ってきたか 地域研究とジャーナリズムの現場から』
- ③JCAS Collaboration Series No. 11:川上桃子・塩谷昌史・柳澤雅之編『JCAS公開シンポジウム報告書 地域から研究する産業・企業 フィールドワークとディシプリン』
- (3) ニュースレター: No. 17およびNo. 18を発行した。

地域研究コンソーシアム・ホームページ

<http://www.jcas.jp/>

3 英国議会資料 (BPP)

英国議会資料 (British Parliamentary Papers, BPP) として知られている資料集成は、英国議会下院・上院に提出された文書を会期ごとにまとめた資料集成であり、19世紀初頭から本格的に編纂され今日にいたっている。法案、省庁報告書、各種の委員会等報告書、領事報告や関連資料、通商統計、人口センサスなど内容は多岐にわたり、この時代のイギリスの位置を反映して、連合王国内のみならず、アジア、アフリカ等の世界各地についての記述が多数含まれている。19世紀以来、英国議会資料は多くの研究において基本資料の一つとして利用されてきたが、関連する多様な資料が発掘され利用可能になるにしたがって、議会提出を前提として集積され編纂された近代イギリスの「情報群」のあり様を問う資料としても、近年あらためてその資料的価値が見直されてきた。また、通商統計やセンサスなど長い期間にわたって時系列分析が可能な統計などが多く含まれているのも特色である。

現在、地域研究統合情報センター (地域研) が所蔵している英国議会資料約12,000冊は、英国商務省が保存していた下院文書1801年～1986年、上院文書1801年～1922年のほぼ完全な集成である。1998年に京セラ株式会社から国立民族学博物館地域研究企画交流センター (当時) に寄贈され、同センターにおいて公開に必要な修復・保全措置を施したのち、2000年度から「京セラ文庫『英国議会資料』」として公開されてきた。2006年4月、地域研の設置とともに同資料は京都大学に移管され、地域研が所蔵・管理運営を担当する体制のもとに京都大学附属図書館に恒温恒湿設備をもつ文庫室を設置し、引き続き「京セラ文庫『英

国議会資料』」として公開している。地域研は、その設置直後から、全国共同利用施設として、資料原本の保安全管理と一般公開とともに、近年開発されたウェブ版の導入やデータベース化を通じたあらたな利用方法の提供、共同研究やワークショップを通じた研究活動の推進に重点をおいた活動を行っている。

1. 資料の公開：「京セラ文庫『英国議会資料』」開設とウェブ版の導入

膨大な資料の活用にはウェブ版House of Commons Parliamentary Papers (HCPP) が威力を発揮する。地域研では、19世紀から現在にいたるウェブ版を導入し、ウェブ版と原本閲覧を同時に可能とする体制を整えている。ウェブ版は、学内LANで公開しているほか、地域研図書室および附属図書館に設置されているコンピュータを通じて学外にも公開している。

2. 地図・図版のデータベース化とウェブ上での公開

英国議会資料には、多数の貴重な地図や図版が含まれている。地域研では地図データベース (第一期) を作成し公開している。今後、これを継続するかは検討中。

3. 共同研究による研究利用の促進

内外の研究者に地域研所蔵の原本集成の利用を促進することを目的として、共同利用・共同研究拠点の公募型共同研究の一環として「CIAS所蔵資料の活用」枠を設置し、本資料を活用した研究の促進を図っている。



英国議会資料検索ページ



所蔵されている英国議会資料

2 情報資源共有化に向けた活動

1 地域情報学の構築に向けた活動

世界の諸地域の様子や動向をどのようにすれば捉えることができるのか。これは、人類が自分たちと異なる人々への関心に向けたときから取り組んできた課題であり、グローバル化が進む現代世界でますます重要性を増している課題である。この課題に対して、学術研究の分野では、統計資料や公文書・手記などの文献資料を使ったり、重要人物から聞き取り調査したりする方法を工夫し、各国の公文書や統計資料・主要新聞、そして研究書や研究論文を収集してきた。これらの資料や分析方法の重要性は今後もなくなることはないが、今日では、世界の新しい状況に対応して、従来の資料収集や分析方法・公開方法に加えて次の四つの工夫が必要になると考えられる。

第一は、国境を越えた動きを捉えて提示する工夫である。今日では、国境を越えた人や物や情報の動きが容易になり、大量の動きが見られる。従来の国別の情報も依然として重要だが、国別とは別の枠組みで情報を収集・整理して提示する仕組みも必要である。公文書や統計資料は国別に様式や詳しさが異なっており、そのまま繋げることができないこともあるため、様式や詳しさが互いに異なる情報をどのように繋げるかという工夫も必要となる。また、国境を越えて移動し、繋がる人や物や情報をどのように捉え、どのように提示するかという工夫も必要である。

第二は、図画・映像・建築物・音楽などの情報を利用する工夫である。統計資料や文献資料は依然として基本的な情報だが、社会が多様化し、情報技術の発達により様々なメディアが登場したこともあり、図画・映像・建築物・音楽のように従来は各専門分野でのみ使われてきた情報も取り入れて人々の暮らしや考え方を捉える必要がある。これらの資料をどのように処理すれば機械的に検索できるようになるのか、そしてそのような検索により人々の動きや考え方がどのように明らかになるのかは、現代世界を捉える上で重要な課題である。

第三は、多種多様かつ大量の情報の中から人々の暮らしや考え方を浮かび上がらせる工夫である。情報通信とりわけインターネットの発達に伴い、大量のデータが容易に利用可能となった。ただし、その多くは構

造化されていないため、情報量が増えることが対象への理解の促進とは直接結びつかない。また、一時的な情報が多いため、長い時間をかけて解析しても状況が変化してしまって解析結果が意味を持たなくなることもある。このような構造化されていない巨大なデータ（ビッグデータ）を短時間に処理し、対象の傾向を大掴みで読み解くことも、今日の社会では多くの分野で必要とされている。

第四は、研究対象である現地社会の人々が利用できる形でデータベースを作成し、公開するという点である。研究（観察）する側とされる側が明確に区別される時代は幕を閉じ、今日では研究する側とされる側が「地続き」になっている。外部の観察者から向けられた関心や視線がその社会の自画像に影響を及ぼすこともあり、どのようなデータベースを構築するかは、純粋に学術的な関心の問題では済まず、自分と相手を含む社会的な関心とも密接に関わる問題である。データベースの使用言語を英語や現地語にするだけでなく、データベースの設計段階から現地社会と共同で取り組むことも必要となるだろう。

これらの四つの課題に対して必ずしも十分に納得のいく答えが得られているわけではないが、地域研究統合情報センターは、地域情報学プロジェクトのもと、各スタッフがそれぞれの研究関心に即して具体的な資料をもとにデータベースを作成しながらこれらの課題に取り組んでいる。地域研究者が試行錯誤を重ねながらデータベースを構築しているために手間はかかるが、上記の四つの課題を技術的に解決することだけを目指してはならず、現地社会や研究者を含む利用者にとって意味がある形で利用されるデータベースを目指して模索を続けている。

実験的なものを含め、地域研究統合情報センターで作成・公開しているデータベースには以下のものが挙げられる。

- 研究上の利用とともに、現実社会で専門家や一般利用者にも使えるものとして設計されているもの。スマトラの災害 (①~⑩)、旧社会主義諸国の選挙・政党 (⑪)、パルーの反政府武装闘争 (⑫)、

大陸部東南アジアの寺院・出家行動 (14~15)、斑鳩の地域資料 (16) に関するデータベースやシステムがあり、災害に関するデータベースやシステムの一部はすでにインドネシアの防災教育や災害ツーリズムの分野で実際に活用されている。

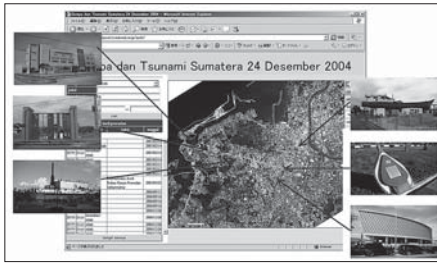
- また、寺院・出家行動のデータベースはタイの研究者や仏教団体と共同で研究が進められている。
- 世界的に貴重な資料をデジタル化により共有化するもの。『トルキスタン集成』(17)、マレー・イスラム雑誌『カラム』(18)、QALAM雑誌記事データベース (19)、タイ映像資料データベース (20)、タイ語三印法典 (21~22)、貝葉文書 (23~24) など、当時の時代と社会を知る貴重な現地語資料でありながら、体系的に収集・整理されていなかった資料を収集・デジタル化したデータベースや、地域研究統合情報センターが原本を所蔵している英国議会資料の利用を助けるデータベース (25) がある。『カラム』データベースは、マレーシアの国立図書館や言語出版局との共同によりマレーシアの教育で活用されている。
- 個人研究者が収集・蓄積した研究資料を整理し、個人研究者の経験や思索の体系化と可視化を試みるとともに、個人研究者の研究情報を共有可能にするもの。高谷好一京都大学名誉教授が収集されたフィールドノートや山田勇京都大学名誉教授が撮影された世界の森の景観に関する写真コレクション等を可視化したフィールド・データベース (26) や、故石井米雄名誉教授の蔵書を中心とする研究資料を整理した石井米雄コレクション (27) がある。布野修司氏の世界建築データベース (28) は、書籍とデータベースを統合した先駆的なフィールド・データベースである。
- 映画、ポスター、建築、音楽など、人々が日常生活の中で見聞きしたり利用したりすることで人々の行動や考え方に影響を与えているものの、従来の研究では十分に利用されてこなかった形態の情報のデータベース。インド、タイ、マレーシアの映画 (29~31)、満洲国ポスター (32)、戦前期東アジア絵はがき (33)、アジア建築(都市環境文化資源) (34) がある。画像を視覚的に検索したり分析したりする方法や、映画を「物語」として提示したり検索したりする方法が模索されている。
- 中国をはじめとする東アジアの現代史に関するデータベース。柏原英一写真帳 (35)、『亜東印

画輯』(36)、『北支』(37)、『亜細亜大観』(38)、北京特別市市政公報 (39)、上海租界工部局文書 (40)、中国関係アーカイブ (41)、モンゴル人文社会系定期刊行物 (42) のデータベースがある。

また、地域情報学プロジェクトでは、データベース作成支援、データベースの統合検索、データの可視化・分析のため、以下のようなシステムやツールを作成・公開している。

- データベース構築支援：データベースに関する専門的な知識や技術を必要とせずに、データベースの構築と公開を実現できるMyデータベース (43)。
- データベース統合：インターネット上に分散しているデータベースの統合検索を目指した地域研究資源共有化データベース (44~45)。
- 時空間情報処理ツール：時間処理も可能な地理情報の可視化・分析ツール用HuMap (46) および時間情報の可視化・分析用ツールHuTime (47)。
- 地域情報学基礎データベース：地域情報学を支える歴史地名辞書データベース (48)、暦間の日付変換ツール (49)、および地図データベース (50)。
- オントロジーツール：語彙の意味・構造に注目してデータを関連付けることにより、資料群を可視化したり検索したりするツールであるトピックマップの研究。その具体例としての、日本図書館協会 (51) および国立国会図書館 (52) の件名標目表、農林水産関連分野の語彙集 (AGROVOC) (53)、世界各地の民族・社会・文化に関する文献語彙集 (HRAF) (54)、マンガ『花より男子』各言語版のトピックマップ (55)。

2 データベースや情報解析ツール等一覧



①アチェ津波モバイル博物館システム

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）の被災と復興過程について、現地語メディアでの報道記事や写真を地図上で表現し、それらをスマートフォンなどの携帯端末で参照可能にすることで、バンダアチェの街並みに重ねて被災と復興過程を記録・参照することができるようにしたシステム。

<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>
短縮URL： <http://goo.gl/8NBhm>



②アチェ津波モバイル博物館（スマホ版）

被災と復興の10年にわたる景観の経年変化を示す画像資料を収蔵したアプリ。AR（仮想現実）表示機能により、位置情報をもとに、現地周辺の過去の景観を現在の街並みと重ねて見ることができる。モバイル端末を使って町全体をオープン博物館にする取り組み。

【シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア・アチェ州）との共同開発】

http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_atmm.html



③アチェ津波被災地メモリーハンティング

アチェの津波被災地の変化を写真で探るプロジェクト。過去の写真を手掛かりに現在の景色を探しにでかける。津波直後の風景を半透明で浮かび上げらせ同じ構図で写真撮影。撮影画像を他のスマホと共有して、被災地の「いま」の記録づくりに参加。街の景観の変化を記録、景観の歴史を共有するコミュニティづくり。

【シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア・アチェ州）および国立情報学研究所・北本朝展准教授との共同開発】

http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_memohunt.html

http://dsr.nii.ac.jp/cgi-bin/memory-hunting/map_project.pl?projectID=9&lang=ja



④2004年スマトラ沖地震・津波関連記事データベース

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）に関するインドネシアおよび近隣地域の現地語メディアでの報道記事を、記事中の地名をもとに地図上に表現したデータベース。

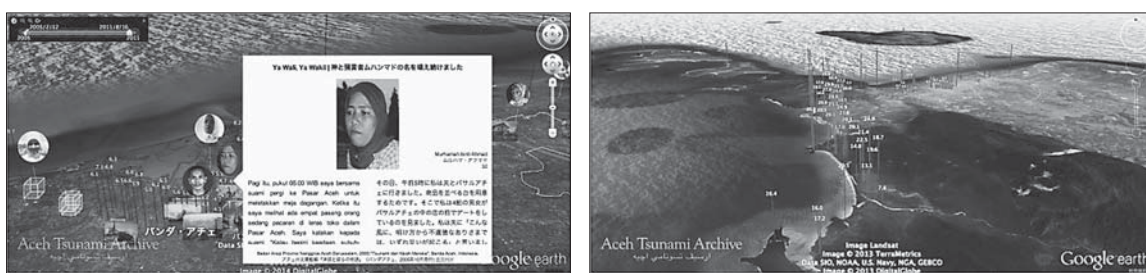
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>
 短縮URL： <http://goo.gl/8NBhm>



⑤2004年スマトラ沖地震・津波画像データベース

2004年12月に発生したインド洋津波（スマトラ島沖地震・津波）の最大の被災地となったインドネシア共和国アチェ州の被災と復興の過程を撮影した写真を、地理情報により地図上で表現したデータベース。

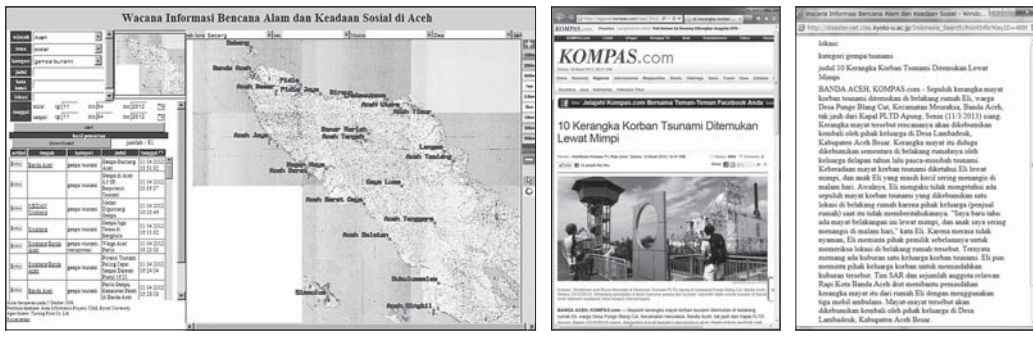
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Aceh/>
 短縮URL： <http://goo.gl/8NBhm>



⑥アチェ津波アーカイブ（可視化型データベース）

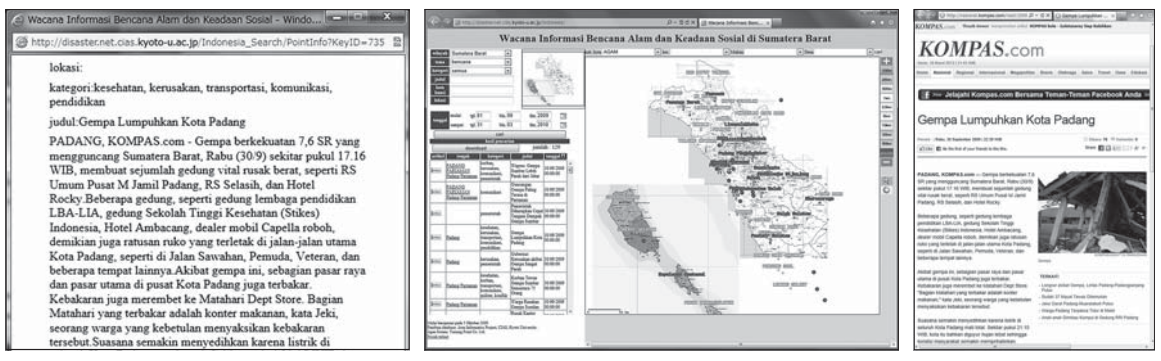
津波災害を生き延びた被災者の証言や被災直後から収集された写真をGoogle Earthの立体地形に重ねて閲覧することができる。画面左上のタイムスライダーを操作することによって、時系列に沿った絞り込み表示も可能。また、Google Earthにも過去の衛星画像が収録されているので、津波前後の変化、そして街が復興していくようすを、時空を越えて体感することができる。その他、津波遡上高、世界から現地に届いた支援の手をあらわす光の線などの多様な資料が掲載されている。

【首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発】
<http://aceh.mapping.jp/>



⑦災害と社会 情報マッピング・システム

新聞社などによってオンライン上で発信される報道記事を自動で収集し、記事中の地名をもとにテーマ別に地図上で表現するシステム。災害発生直後に被害の広がりや救援活動の概要を把握することなどに役立つ。現在はインドネシアの全国紙の記事をもとに、アチェ州と西スマトラ州について、自然災害、紛争・事件、選挙などのテーマで記事を収集し、提示している。
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia/>
 短縮URL : <http://goo.gl/6MByS>



⑧2009年西スマトラ地震関連記事データベース

2009年9月に発生した西スマトラ地震（バダン地震）に関するインドネシアの現地語メディアでの報道記事を、記事中の地名をもとに地図上で表現したデータベース。
<http://disaster.net.cias.kyoto-u.ac.jp/Indonesia/>
 短縮URL : <http://goo.gl/6MByS>



⑨バンダアチェ今昔写真集メモリーハンティング

1950年代から地元新聞社の写真記者が収集していたバンダアチェ市の風景写真コレクションからバンダアチェ市の代表的建造物や街路の写真88点を参照画像として収めたメモハン。2004年スマトラ島沖地震・津波被災前のバンダアチェの姿と今のバンダアチェの景観を比較することができる。
http://dsr.nii.ac.jp/cgi-bin/memory-hunting/map_project.pl?projectID=7&lang=ja



⑩アチエ津波アーカイブ（スマホ版）

津波災害を生き延びた被災者の証言をデジタル地球儀上で表現したアプリ。
津波遡上高や被災直後の写真記録などとあわせて閲覧でき、空間的な広がりを感じながら被災の概況と被災体験を知ることができる。
【シアクラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア・アチエ州）および首都大学東京・渡邊英徳研究室との共同開発】
http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/bosai/app_archives.html



⑪神戸被災地メモリーハンティング

阪神・淡路大震災20年を機に、被災直後から現在までの変化を写真でたどる試みを開始。神戸市がオープンデータとして公開した阪神・淡路大震災「1.17の記録」を活用し、アプリ上で写真を重ね合わせることを可能とした。公開された写真の中から、空撮写真や集会の写真などを除き、さらに区ごとのプロジェクトを立ち上げた。なお位置情報については、esriジャパンオープンデータポータル「阪神・淡路大震災の記録」想定撮影位置データを一部利用している。また位置情報がわからない写真については、区役所の位置を初期値として設定。今後はこのアプリを使って現地を巡りつつ、写真と構図が一致する場所をみんなで探し、疑似的定点観測に基づく地域写真アーカイブを作っていきたいと考えている。
<http://dsr.nii.ac.jp/memory-hunting/>



⑫ポスト社会主義諸国選挙・政党データベース

ヨーロッパの旧社会主義国を対象に、選挙制度、主要政党の綱領と変遷、最近20年間の選挙結果を数値等で表現して比較可能にしたデータベース。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Post
短縮URL： <http://goo.gl/yTeHT>



⑬センデロ・ルミノソ・マッピング

ペルーで1980年に武装闘争を開始した反政府武装集団センデロ・ルミノソに関するデータベース。この可視化コンテンツでは、活動のカラー別に色分けしたアイコンをGoogle Earthに時空間マッピングし、ズームイン・アウトやタイムスライダー操作によって、センデロ・ルミノソの活動の推移を俯瞰できるようにしている。

【首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発】

<http://peru.mapping.jp/>

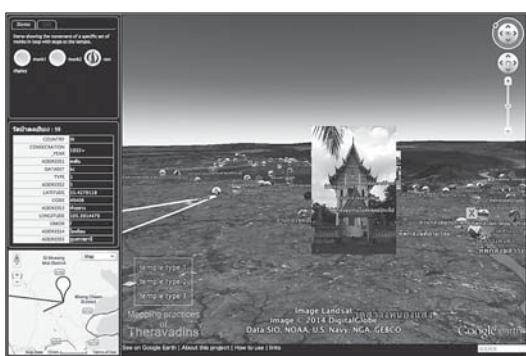


⑭大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング・データベース

上座仏教徒が集住する西南中国を含む東南アジア大陸部の上座仏教寺院と出家者に関するデータを現地調査によって収集し、マッピング・データベースとして統合したもの。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000209SEthertemple

短縮URL : <http://goo.gl/8ZRZK>

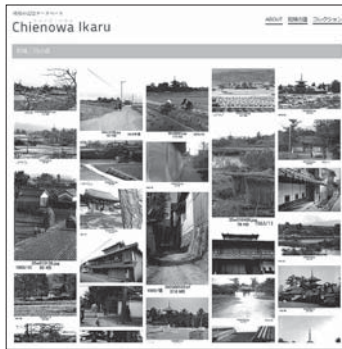


⑮寺院マッピング

ミャンマーにおける寺院と僧侶の社会距離を視覚的に提示したデータベース。本コンテンツでは、寺院名、緯度、経度、写真のファイル名といった文字情報をGoogle Earth上にマッピングし、地理的關係や僧侶の移動軌跡等をインタラクティブに表示している。

【首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発】

<http://temple.mapping.jp/>



⑩チエノワイカル

斑鳩町立図書館・聖徳太子歴史資料室と連携し、「斑鳩の記憶」アーカイブ化事業として、斑鳩町住民が所蔵する斑鳩に関する古い写真や映像、その他の地域資料を、郷土史家の方々や学術機関、アーティスト等と連携しながら、調査・収集・公開を行っている。本ウェブサイトをその成果公開の場として、アーカイブの一部を閲覧できるように整備を進めており、キーワードに応じた抽出、地図からの絞り込みが可能。

<http://archive-ikaruga.org/>



⑪「トルキスタン集成」データベース

「トルキスタン集成Туркестанский сборник」とは、ロシア帝国の中央アジア征服の後、トルキスタン総督府（1867年タシュケントに設置）初代総督に任ぜられたカウフマン К. П. фон Кауфман（1818-1882、総督在任期1867-1882）の命により編纂が開始された、全594巻に及ぶ中央アジア関連資料集成である。

「トルキスタン集成」は、編纂当時の単行本、新聞・雑誌記事、統計、地図、図版など、多様な形態と内容の刊行物を含む、中央アジア関連資料の一大コレクションである。そこに含まれる資料は、21世紀の今日においてもなお中央アジアに関する貴重な情報を私たちに与えてくれる。

2014年度には「トルキスタン集成」データベースのリニューアル版の公開準備を整えた。これまで存在しなかった全594巻を通じた巻別インデックスを整備し、その他にも地域情報学の進展をふまえた試みとして、キーワードの連鎖による検索、時空間情報を活用した検索、ユーザー参加の試みなど、順次機能を追加していく予定である。

<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/turkestan/index.html>

項目	内容
bilangan (number)	01
tahun (year)	1947
month (month)	12
page	23
File Name	1947_v01_No.01_24
PDF Link	http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/www/data/Waktu/pdf/1947_v01_No.01_24.pdf
ruangan (column)	Tjenita Pendek
penulis/editor (author)	R.D. Muswi
judul (article)	Aroes Mengalir



⑫『ワクトゥ』雑誌記事データベース

『ワクトゥ』雑誌記事データベースは、写真を多く使ってインドネシア国内外の時事を紹介した写真週刊誌『ワクトゥ』（1947～1958年、メダン発行、インドネシア語、ローマ字使用）の創刊号から1958年2月分までの全記事をPDF化し、ローマ字による記事索引システムを備えたデータベースである。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Waktu



⑱『カラム』雑誌記事データベース

『カラム』は、1950年代～60年代のマレー世界（現在のインドネシア、マレーシア、ブルネイ、シンガポール、タイ南部を含む地域）におけるムスリム社会の動向を理解するうえで重要な史料だが、ジャウィ（マレー語のアラビア文字表記）で表記されているためもあり、利用が限られていた。複数の機関に所蔵されている『カラム』をもとに欠号率が極めて低いコレクションを作り、デジタル化してマレー語雑誌記事データベースとして全誌面を公開している。

地域研のMyデータベースを基盤として活用し、「ジャウィ文献と社会」研究会がローマ字版とジャウィ版の比較閲覧やワードクラウドによる検索など、工夫したインタフェースを提供している。

<http://majalahqalam.kyoto.jp/>



⑳タイ映像資料データベース

京都大学東南アジア研究所がタイ国で収集した映像コレクション（ラーマ7世博物館所蔵の王室記録映画をふくむVCD、DVD化された劇場用公開映画、民俗芸能、ドキュメント、仏教僧による説法など約800タイトルおよび映画ポスターと関連書籍）、さらに地域研究統合情報センターの同コレクション（342タイトル）、合計1100点余りのタイトルについてのタイ語（一部は英語）データベース。時代は1925年から現代までをカバーする。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003THAI



㉑タイ語三印法典（王立研究所版）

1805年に現ラタナコーシン（バンコク）王朝ラーマI世（1782-1809）の勅命によってアユタヤ滅亡時に残された諸法典の写本に基づいて編纂された14世紀中葉から19世紀初頭までの法令・布告集成の全文データベース。本データベースは、2007年タイ国王立研究所刊行の写本から作成した用例索引*The Computer Concordance of the Law of the Three Seals: Revised Version* (Amarin Printing and Publishing, 2008) にもとづくもので、36,242用例、見出し語19,579語が含まれる。

<http://area.net.cias.kyoto-u.ac.jp/ktsd/>
 短縮URL : <http://goo.gl/H62JQ>



②タイ語三印法典（タマサート大学版）

1805年に現ラタナコーシン（バンコク）王朝ラーマI世（1782-1809）の勅命によってアユタヤ滅亡時に残された諸法典の写本に基づいて編纂された14世紀中葉から19世紀初頭までの法令・布告集成の全文データベース。本データベースは、タマサート大学写本廉価版から作成されたThe Computer Concordance of the Law of the Three Seals, 5 vols. (Amarin Publications, 1990) にもとづくもので、239,576用例を含む。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003gissv

短縮URL: <http://goo.gl/WrvdH>



③貝葉文書

「タム文字写本文化圏」（タイ東北部、ラオス、ミャンマー、中国雲南省南部）に分布する地域史料である貝葉文書のデータベース（公開準備中）。

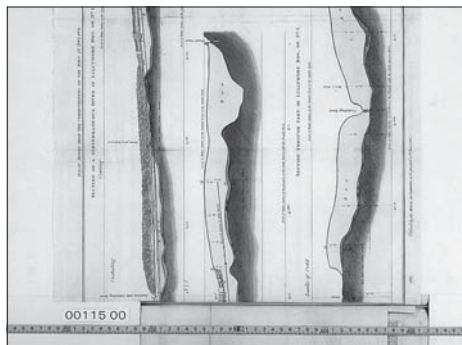


④東北タイ南部貝葉データベース

東北タイ南部の貝葉文書のデータベース。標準タイ語の浸透により急速に失われつつある地方の言語と文化の保護を目的として、地方言語により記された古文書・写本の画像形式での保存と公開を行っている。

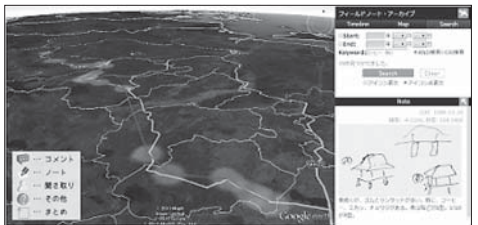
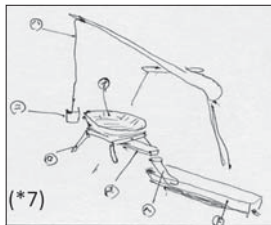
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvDefault.exe?DEF_XSL=default&GRP_ID=G0000208&DB_ID=G0000208bailanit&IS_TYPE=csv&IS_STYLE=default&EXTEND_DEFINE=&EXTEND_STYLE=default

短縮URL: <http://goo.gl/Rce0S>



㉔ 「英国議会資料」 図版データベース

地域研所蔵の英国議会資料のうち地図・図版をデータベース化したもの。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003BPP
 短縮URL : <http://goo.gl/6fgTp>



㉕ フィールドノート・データベース

東南アジアを中心に、主に自然科学系の研究者の現地調査によって得られたフィールドノートの記録をデータベース化し、さまざまな他の情報と組み合わせることで新たな地域研究資料として利用することを目的としたもの。
 【首都大学東京大学院システムデザイン研究科渡邊英徳研究室との共同開発】
<http://fieldnote.mapping.jp/>



㉖ 道は、ひらける — 石井米雄と東南アジア研究 (石井米雄コレクション)

故石井米雄・京都大学名誉教授 (1929-2010) により、1957~2010年までに収集された図書・研究資料や調査地で撮影された写真などの集成である石井米雄コレクション、映像「道は、ひらける：石井米雄と東南アジア研究」、「石井米雄の歩んだ道」、「石井米雄がうみだした著作」から構成されるデータベースである。図書・冊子体では約10,000点のうち、2,567点、抜刷・研究資料等6,906点、写真資料約5,000点が検索でき、東南アジア地域研究やタイ史・法制度研究、言語研究に重要な資料群を含む。また本データベースは、仮想書架やPC上で動作する書誌情報から抽出されたキーワードにもとづくオンロジック検索が可能である。
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/collection/>
 本データベースは、平成26年度日本学術振興会科学研究費・研究成果公開促進費（データベース）の助成を得て構築した「東南アジア地域研究史資料集成データベース」の一環である。「東南アジア地域研究史資料集成データベース」では、下記のURLから今後以下のデータベースを公開予定である。
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/database/category/seas-db.html>
 ・19世紀バンコク水路・灌漑・家屋配置資料（約8,000点）
 19世紀末ラタナコーシン（バンコク）朝中心部の地籍・郵便台帳の資料で、特に運河水路の当時の状況や各家屋の管理状況が把握できる。
 ・ハノイ遺蹟拓本資料（約2,500点）
 ベトナムの首都ハノイの中心部におけるDen, Dinhなどに設置されている遺蹟拓本の資料集成である。



⑳布野修司・世界建築データベース

滋賀県立大学の布野修司教授による世界の建築に関するデータベース。現在、『グリッド都市』（布野修司、ヒメネス・ベルデホ著、京都大学学術出版会、2013年）に掲載された図版のみ閲覧可能となっている。これは、京都大学が所蔵するフィールドでの調査記録を広く社会に還元するために京都大学学術出版会と共同して進めているプロジェクトの一環である。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003gridcity

短縮URL： <http://goo.gl/x6Nkn>



㉑インド（タミル）映画データベース

地域研が所蔵するタミル語映画コレクション（1960年代～1990年代）の目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003TAMIL

短縮URL： <http://goo.gl/nZplm>

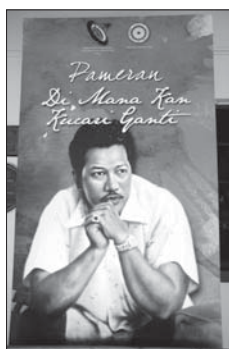


㉒タイ映画データベース

地域研が所蔵するタイで作成された劇場映画コレクションの目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003THAI

短縮URL： <http://goo.gl/8mgfB>

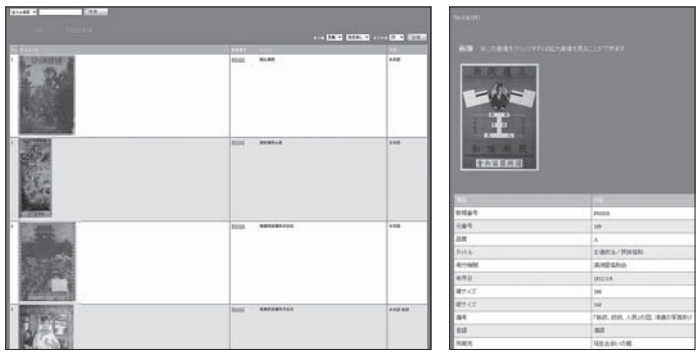


㉓マレーシア映画データベース

地域研が所蔵するマレーシアで作成された劇場映画およびテレムービー（CDで販売される劇映画）のコレクションの目録およびジャケット写真のデータベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003Malaysia

短縮URL： <http://goo.gl/SLWuB>



③②満洲国ポスターデータベース

1925年9月26日から1941年12月8日までの満洲に関するポスターおよび宣伝ビラの画像データベース。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000021MAN
 短縮URL : <http://goo.gl/EzIVB>



③③戦前期東アジア絵はがきデータベース

第二次世界大戦終了以前に発行された日本内地、朝鮮半島、台湾、満洲、樺太、南洋等における絵葉書の画像データベース。継続更新中。
http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000022PPC
 短縮URL : <http://goo.gl/snc73>



③④アジア都市環境文化資源データベース

アジア近代建築研究者のネットワークであるmAAN、東京大学生産技術研究所・村松伸研究室、京都大学地域研が共同し、アジアの都市部に存在する近代建築を中心に、都市環境文化資源を登録したデータベースである。データ登録・管理は、地域研のMyデータベースシステムを通じて行っている。
<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta/G0000204UECR>
 短縮URL : <http://goo.gl/AHkjf>



⑤ 柏原英一 (1914~2009) 写真帳

本写真帳は、漢口に駐留していた部隊の報道部員であった柏原英一氏(1914年生~2009年没)が整理し保管していたものである。写真の大部分は昭和13年(1938年)から昭和17年(1942年)に華中地域で撮影され戦後しばらく経ってから写真帳に整理されたものと思われる。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib2/>



冊	収録年	収録地域	収録年	収録地域
第1冊	1924	大正13(支那)	大正14(支那)	1924.8-1925.12
第2冊	1925	大正15(支那)	昭和2(支那)	1926.1-1927.6
第3冊	1928	昭和3(支那)	昭和4(支那)	1927.7-1928.12
第4冊	1929	昭和5(支那)	昭和6(支那)	1929.1-1930.6
第5冊	1931	昭和6(支那)	昭和7(支那)	1930.7-1931.12
第6冊	1932	昭和7(支那)	昭和8(支那)	1932.1-1933.6

⑥ 『亜東印画輯』データベース

大連に拠点を置いた亜東印画協会が1924年から1944年頃まで月刊で発行していた、『亜東印画輯』写真帳データベース。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib3/>



⑦ 『北支』データベース

戦中の国策会社華北交通株式会社が発行したPR用のグラフ誌『北支』(1939年6月1日~1943年8月1日)の雑誌データベース。

<http://124.33.215.236/research/hokushi/hokushi.php>



⑳ 『亜細亜大観』 データベース

亜細亜写真大観社の編纂・刊行による市販の写真帳『亜細亜大観』（1935年～1942年）の写真帳データベース『亜細亜大観』は、大連に拠点を置いた亜細亜写真大観社が1926年から1940年頃まで発行した月刊の写真帳である。写真帳の台紙にはモノクロプリントが貼り付けられており、写真1枚ごとに短い解説文がつけられている。10枚を1セットとして、1ヶ月に1回、会員向けに配布されたようである。

日本人カメラマンが、中国・朝鮮半島・モンゴル・チベットなどの風俗や民情、自然風景、歴史的建造物などを撮影したものであり、当時の様子を伝える貴重な資料である。

<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib4/>



㉑ 『北京特別市公署市政公報』 目次検索データベース（1938～1944年）

戦時期における北京特別市公署（のち市政府）が発行した『市政公報』（1938年1月～1944年9月）の記事件名データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020BJG

短縮URL： <http://goo.gl/7TQH0>



㉒ 上海租界工部局警務処文書件名索引データベース（1894～1949年）

上海共同租界でイギリスが中心となって運営した「租界工部局」に関する文書を中心とした書誌データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020SGH

短縮URL： <http://goo.gl/hYnYG>

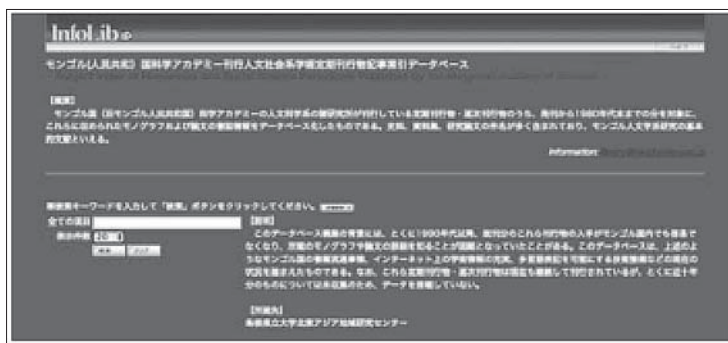


④スタンフォード大学フーヴァー研究所中国関係アーカイブ件名索引データベース

スタンフォード大学フーヴァー研究所が所蔵する約4500点の中国関係のアーカイブの件名データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020HOV

短縮URL : http://goo.gl/Hqo4j

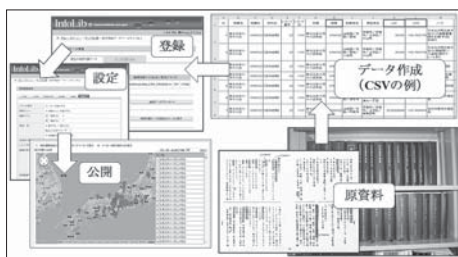


④モンゴル（人民共和）国科学アカデミー刊行人文社会科学系学術定期刊行物記事索引データベース

モンゴル国科学アカデミーの人文社会科学系の諸研究所が刊行している定期刊行物・逐次刊行物のうち1980年代末までの書誌データベース。

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000020MGL

短縮URL : http://goo.gl/n0rAD

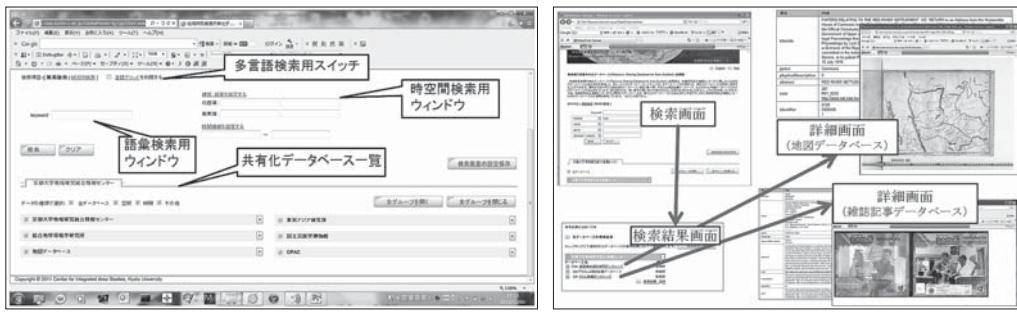


④MyデータベースサービスおよびREST型API

MyDatabase Service and REST like API

データベースを公開するためには、データベースシステム・サーバ装置・ネットワーク機器などに関する専門技術や知識が必要であり、研究者個人がデータベースを公開することは容易ではない。「Myデータベース」は、データベースシステムの管理・運用法を見直して、研究者個人によるメタデータの定義・修正、検索機能の設定、検索画面の作成などを簡単にできるようにしたサービスである。幾つかの条件を満たしたCSVファイルあるいはXMLファイルと画像等のデータさえ用意できれば、あとは「Myデータベース」の指示に従って操作するだけで、自分用のデータベースを作成し公開することができる。このサービスは、平成25年度中に提供を開始する予定である。

「Myデータベース」は個人によるデータベース構築を容易としている反面、画面構成や検索機能は制限されている。この短所を補うためにREST型のAPIを公開している。JavaScript等からAPIを利用することで、研究目的に適した検索や画面を構築することが容易となる。



④地域研究資源共有化データベース (Resource Sharing Database for Area Studies)

地域研究資源共有化データベースは、インターネット上に分散している地域研究関連データベースの統合検索を目指した情報システムである。通常の語彙検索に加えて、地図を利用した空間検索とタイムラインを利用した時間検索も可能である。本システムでは、地域研の17データベース（地図データベースを含む）、東南アジア研究所の5データベース（地図データベースを含む）、総合地球環境学研究所の5データベース、国立民族学博物館の19データベース、およびOPAC（地域研、東南アジア研究所、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東京外国語大学、カリフォルニア大学バークレイ校東アジア図書館）5データベースの合計51データベースの統合検索が可能となっている。

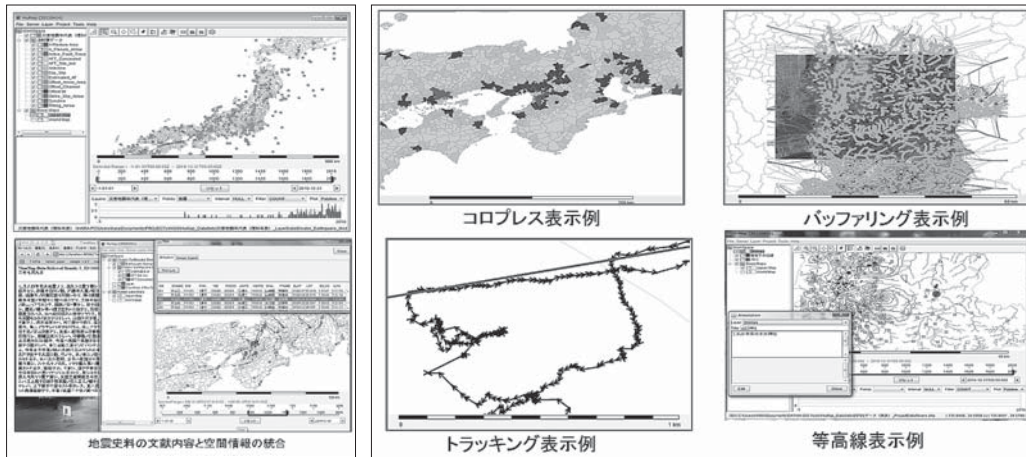
<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder/cgi/Start.exe>



④地域研究資源共有化データベース：多言語対応試行版 (Resource Sharing Database for Area Studies: Multilingual Trial Version)

地域研究資源共有化データベースに共有化されているデータは、英語・タイ語・ロシア語などさまざまな言語で記述されているため、例えば、日本語で検索すると英語データベースではヒットしないという問題がある。「地域研究資源共有化データベース：多言語対応試行版」は、言語グリッド (<http://langrid.org/jp/>) のサービスを利用して地域研究資源共有化データベースに翻訳機能を加えた実験システムである。実験版のため動作が不安定になる場合があるが、ご利用ください。

<http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/GlobalFinder-lg/cgi/Start.exe>

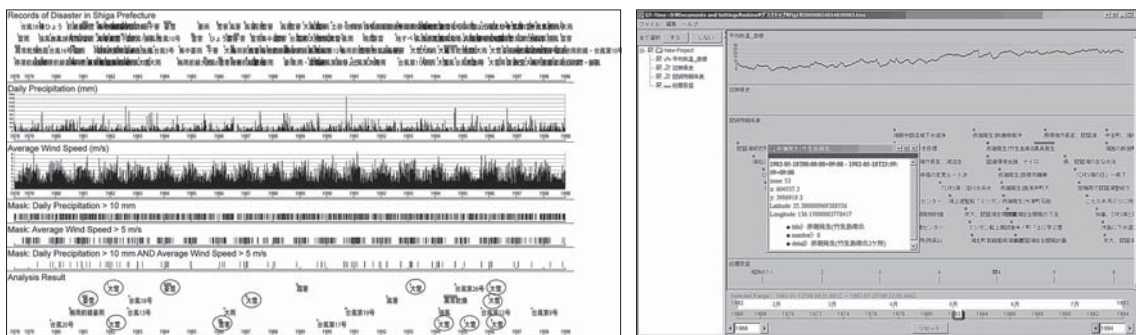


④GISシステムをベースとした多機能連携型データベース作成ツール：HuMap (Humanities Map)

HuMapは、H-GIS研究グループ (<http://www.h-gis.org/>) が中心となって開発を進めている空間情報処理ツール (GIS) である。最初のHuMapは、カリフォルニア大学バークレイ校を中心とした国際コラボレーションであるECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative) とシドニー大学のTimeMap Projectが開発したTimeMapをベースとしていたが、TimeMapには時間情報を処理できるという優れた特徴があるものの、可視化ツールにすぎず、空間情報処理ツールとしての機能は限定されていた。そこでTimeMapの時間処理という特徴を生かしつつ、本格的な空間情報処理ツールの開発を目指した。最新版HuMapのソースコードは完全にオリジナルであり、Webサイトからダウンロードして自由に利用することができる (無料)。地域研究や看護学などの様々な学問分野で活用されるようになってきた。HuMapは以下のような機能を持っている。

- ① 複数のレイヤを重ね合わせて空間情報を可視化する機能
- ② データビュー上における図形のズームイン・ズームアウト機能
- ③ データビュー上の指定した時空間内にあるフィーチャを検索して表示する機能
- ④ 簡易検索およびSQL検索機能
- ⑤ 基本的なレイヤ間論理演算機能 (ユニオン、インターセクト、マージ、クリップ)
- ⑥ 複数の座標系への対応
- ⑦ 基本的な空間演算機能 (指定された点列間の距離・面積・重心の計算、デイズルプ、バッファ)
- ⑧ コロプレスマップ機能
- ⑨ ヒストグラム表示機能
- ⑩ フィーチャに関する外部情報へのURLを介したアクセス機能
- ⑪ アニメーション機能
- ⑫ アノテーション機能
- ⑬ トラッキング機能
- ⑭ ネットワーク表示機能
- ⑮ データクリアリングハウス連携機能

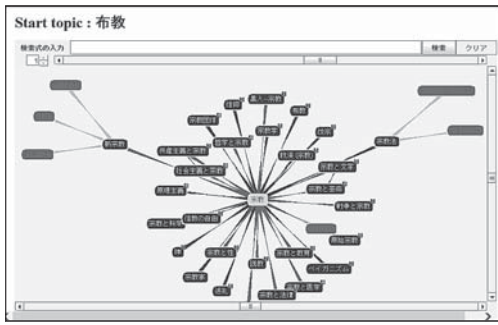
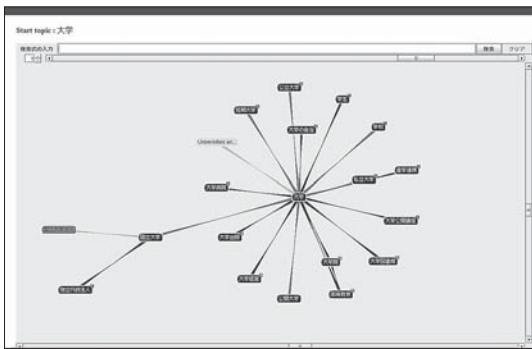
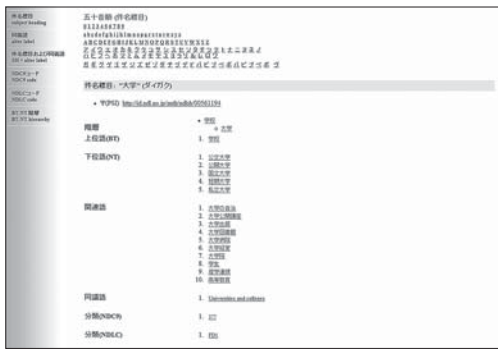
<http://www.h-gis.org>



④年表重ね合わせ分析ツール：HuTime (Humanities Time)

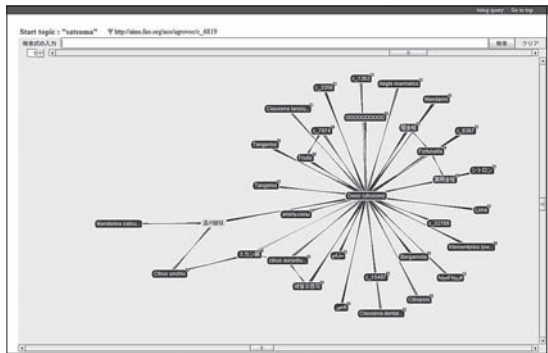
年表を基本とした新しい時空間情報処理ツール。テキスト・数値・画像などの多様なデータを時間順序に配列した年表をレイヤとして重ね合わせ可視化・分析する。

<http://www.hutime.jp>



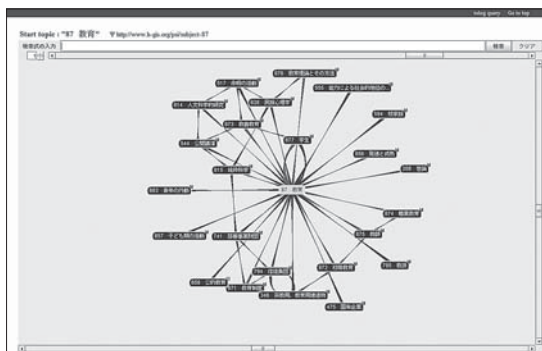
㉔国立国会図書館件名標目表トピックマップ

基本件名標目表トピックマップ (Basic Subject Headings Topic Maps)
 件名とは資料の主題をあらわすキーワードである。しかし同一の主題を表現する言葉には、同義語や類義語が存在するため、適当なキーワードを決めると検索が困難になる。そこで言葉を一定の典拠のもとに統制したものが件名標目である。基本件名標目表 (Basic Subject Headings : BSH) は、図書館における情報検索で用いられる索引語彙を規定して表にまとめた件名標目表の1つであり、日本図書館協会 (JLA) より刊行されている。「基本件名標目表トピックマップ」はオントロジーおよびセマンティックWeb研究の過程で構築されたデータベースであり、BSHのトピックマップ (Topic Maps) によるWebアプリケーションである。本トピックマップは、JLA 頒布のコンピュータファイル (BSH4) から生成したもので、JLA 件名標目委員会に了解をいただいて公開している。
<http://infos.net.cias.kyoto-u.ac.jp:8083/ndlsh/>
 短縮URL : <http://goo.gl/2aYjC>



㉕AGROVOCトピックマップ

農林水産、食糧安全保障およびそれらの関連分野を網羅した多言語対応の構造的シソーラス (AGROVOC) に基づくトピックマップWebアプリケーション。
<http://infos.net.cias.kyoto-u.ac.jp:8083/agrovoc/>
 短縮URL : <http://goo.gl/FPPHs>



Human Relations Area Files (HRAF) トピックマップ

検索結果

トピック

1. 民族学
2. 民族学
3. 民族学
4. 民族学
5. 民族学
6. 民族学
7. 民族学

説明

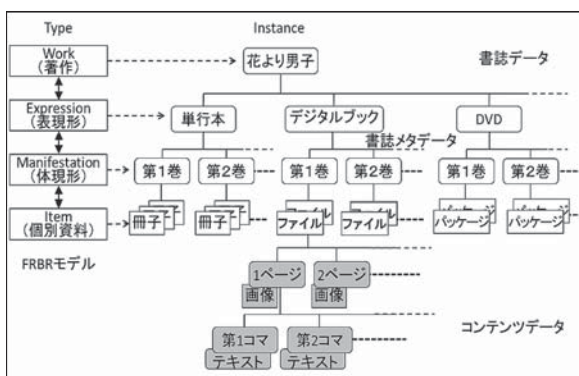
1. 民族学とは、人類の歴史、文化、社会、言語、宗教、習俗、生活様式、およびその変遷を研究する学問分野である。

検索欄

1. 民族学
2. 民族学
3. 民族学
4. 民族学
5. 民族学
6. 民族学
7. 民族学
8. 民族学
9. 民族学
10. 民族学
11. 民族学
12. 民族学
13. 民族学
14. 民族学

⑤4 HRAFトピックマップ

世界中の民族の社会や文化について書かれた文献を地域・民族別に集めてページの内容を分析したファイル資料HRAF（Human Relations Area Files）のトピックマップWebアプリケーション（アクセス制限）。

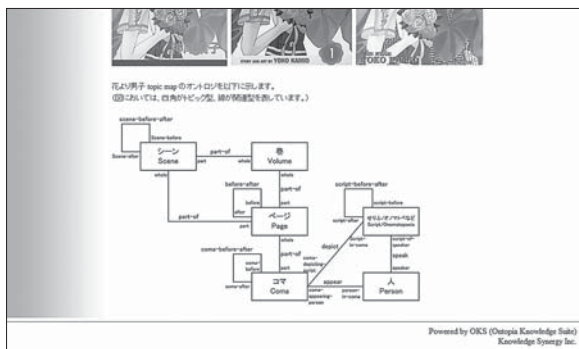


花より男子 topic map

Search word: "thank"

Results Occurrence = 10

Text	Topic
[Ea] Thank you!	ありがとう!
[Ea] Thank you very much!	ありがとうございます!
[Ea] Thank you for your help!	あなたの助けのおかげです!
[Ea] Thank you for everything!	すべてのおかげです!
[Ea] Thank you for your kindness!	あなたのやさしさのおかげです!
[Ea] Thank you for your love!	あなたの愛のおかげです!
[Ea] Thank you for your support!	あなたのサポートのおかげです!
[Ea] Thank you for your advice!	あなたのアドバイスのおかげです!
[Ea] Thank you for your patience!	あなたの忍耐のおかげです!
[Ea] Thank you for your understanding!	あなたの理解のおかげです!



花より男子 topic map

トピックマップ

検索結果

トピック

1. ありがとう
2. ありがとうございます
3. あなたの助けのおかげです
4. すべてのおかげです
5. あなたのやさしさのおかげです
6. あなたの愛のおかげです
7. あなたのサポートのおかげです
8. あなたのアドバイスのおかげです
9. あなたの忍耐のおかげです
10. あなたの理解のおかげです

⑤⑤ 「花より男子」トピックマップ (マンガTOPICMAPS)

(Boys over Flowers MANGA Topic Maps)

日本のマンガは海外でも広く読まれ、週刊誌から単行本・Web・携帯電話など多様なメディアへの展開が活発であり、既に一つの文化ジャンルを確立していると言える。そこで、マンガに関するメタデータの構築とWebによる情報提供についての研究を開始した。マンガメタデータは、①多様な派生関連（例えば週刊誌と単行本の関係あるいは翻訳版など）を記述できること、②容易かつ効率的に作成できること、③画像などのコンテンツデータへの関連付けができることが必要である。「花より男子トピックマップ」は、このようなマンガ用メタデータの研究過程で構築された試行データベースであり、トピックマップ (Topic Maps) によるWebアプリケーションである。「花より男子トピックマップ」では、「花より男子」の日本語、英語、タイ語版の単行本（第1巻）を対象として、①書誌情報、②セリフと画像位置対応（ページとコマ）・発話者・発話属性、③それらのデータの各国版間の対応を構造化している。例えば、日本語セリフから英語やタイ語のセリフや画像への検索等が可能である。

下記のデータベースは非公開であるが、共同研究のために構築し共同研究者間で共有され研究が進められている。

⑥北タイ古文献（貝葉資料）にみる民族間関係

北タイ・西南中国境域で流通していた古文献を現代タイ語字に翻字化、民族、環境、生業、交易などに関わる項目と関連記載の統合型インデックスを作成した。

⑦ Mapping Practice of Theravadins

科研（基盤研究（A））「大陸部東南アジア仏教徒社会の時空間マッピング：寺院類型・社会移動・ネットワーク」代表：林行夫、平成20-22年度）、科研（基盤研究（A）[一般]）「<宗教=社会複合マッピング>からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（代表：林行夫、平成26-29年度）および地域情報学プロジェクト・寺院マッピング班の共同研究の成果。

⑧ アチェ津波被災者証言データベース

アチェ州の津波被災者証言111件に証言者特性や位置情報をつけて収蔵し、バンダアチェ市内の54件について証言を日本語訳した。

3 スタッフの研究活動

1 個人研究

地域関連研究部門 教授

押川 文子 (おしかわ ふみこ)

① 専門分野

南アジア現代社会研究

② 経歴

1977年 アジア経済研究所職員

1995年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授

2000年 同教授

2006年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③ 研究課題

- (1) インドにおける教育と不平等
- (2) インドにおける家族の変容

④ 主要業績

- 2012 「インド都市中間層における『主婦』と家事」落合恵美子ほか編『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会、pp. 81-110。
- 2010 「『教育の時代』の学校改革: 能力主義と序列化」『南アジア研究』(南アジア学会) 22号、pp. 394-404。
- 2000 「インド英字女性雑誌を読む: 90年代都市ミドル・クラスの女性言説」『地域研究論集』3巻2号、pp. 63-93。
- 1998 「『学校』と階層形成: デリーを事例に」古賀正則ほか編『現代インドの展望』岩波書店、pp. 125-148。

⑤ 出版業績

[編書・共編書]

- 2015 『暮らしの変化と社会変動』(激動のインド第5巻)、日本経済評論社(宇佐美好文と共編)。

[分担執筆]

- 2015 「データからみるインド社会の変化」押川文子・宇佐美好文編『暮らしの変化と社会変動』(激動の

インド第5巻) 日本経済評論社、pp.247-271。

- 2014 「ビハール: 出稼ぎと貧困」水島司・柳澤悠編『農業と農村』(激動のインド第4巻) 日本経済評論社、pp.250-272。
- 2015 「学校教育改革: 国家・市場・市民社会の間で」水島司・柳澤悠編『溶融する都市・農村』(現代インド2) 東京大学出版会、pp.259-295。

[翻訳]

- 2014 『インド地方都市における教育と階級の再生産: 高学歴失業青年のエスノグラフィー』(Craig Jeffrey, *Timepass: Youth, Class and Politics of Waiting in India*, Stanford University Press, 2010) 明石書店(佐々木宏・南出和余・小原優貴・針塚瑞樹と共訳)。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2015.2.28 “Education as Individual Experience in India and Japan,” 科研基盤 (B) 「生活世界の変容とジェンダー」、ニューデリー (インド) (南出和余・針塚瑞樹と共同で実行委員長)。

[参加報告]

- 2014.11.8 “Bollywood Films in Multiplex Age: Images of ‘Our Society’ of Urban Middle Class,” International Workshop on ‘Rethinking Indian Cinemas,’ 人間文化研究機構「現代インド地域研究」東京外国語大学拠点、東京。
- 2015.2.28 “Education as Individual Experience: A Japanese Perspective,” Education as Individual Experience in India and Japan, 科研基盤 (B) 「生活世界の変容とジェンダー」、ニューデリー (インド)。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤 (B) 「生活世界の変容とジェンダー: インド高齢女性のライフヒストリーを通して」(2013~2015年度)。

⑩ 海外調査活動

- 2015.2.25-3.7 インドのデリー大学にて、「生活世界

の変容とジェンダー：インド高齢女性のライフヒストリーを通じて」をテーマに調査を実施、研究費。

local practices and economic, social and cultural realities.

⑫社会活動・センター外活動

- 2014年度 日本南アジア学会理事長。
- 2014年度 親密圏／公共圏研究コンソーシアム事務局メンバー。

地域相関研究部門 教授

Wil de Jong (ウィル・デ・ヨン)

①専門分野

Natural resource governance and policy, Community resource management, Forest transition

②経歴

- 1984-1985 Research Associate, National Institute for Agricultural Research, Peru
- 1985-1995 International Fellow and Research Associate, Institute of Economic Botany, New York Botanical Garden, USA
- 1995-2004 Scientist and Senior Scientist, Center for International Forestry Research, Bogor, Indonesia
- 2004-2006 Professor, Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, Japan
- 2006- Professor, Center for Integrated Area Studies, Kyoto University, Japan

③研究課題

- (1) Area Environments and Global Sustainability Challenges
The world society faces dramatic natural resources and environmental global sustainability challenges that an area studies focus on environmental issues may help to overcome. An area environments studies approach can yield important knowledge that can contribute to the solution of global challenges.
- (2) Community Resource Management
Communities are worldwide the de facto stewards of natural resources use and preservation. They are progressively engaged in wider sustainable resource use initiatives, but this engagement is often not well recognized because of inadequate understanding of

④主要業績

- 2012 “Political Theory in Forest Policy Sciences,” *Forest Policy and Economics* 16, pp. 1-6 (doi: 10.1016/j.forpol.2011.07.001), (coauthors: B. Arts, M. Krott).
- 2012 “Strangers Among Trees: Territorialisation and Forest Policies in the Northern Bolivian Amazon,” *Forest Policy and Economics* 16, pp. 65-70 (doi: 10.1016/j.forpol.2011.02.004), (coauthor: Sergio Ruiz).
- 2010 “Forest Rehabilitation and its Implication for Forestry Transition Theory,” *Biotropica* 42:1, pp. 3-9.
- 2010 “Challenges of Community Forestry in Tropical America,” *Bois et Forêts des Tropiques* 303:1, pp. 53-66 (coauthors: B. Pokorny, C. Sabogal, P. Pacheco, N. Porro, B. Loumann, D. Stoian).
- 2007 “A Review of Tools for Incorporating Community Knowledge, Preferences, and Values into Decision Making in Natural Resources Management,” *Ecology and Society* 12:1, p. 5 (<http://www.ecologyandsociety.org/vol12/iss1/art5/>), (coauthors: T. Lynam, D. Sheil, T. Kusumanto, K. Evans).

⑤出版業績

[編書・共編書]

- 2014 *Forests under pressure: Local responses to global issues* (IUFRO World Series Vol 25), (coeditors: Pia Katila, Glenn Galloway, Gerardo Mery, Pablo Pacheco).

[レフリー付論文]

- 2014 “The new face of the debt-peonage system in the Bolivian Amazon: Social networks and bargaining instruments,” *Human Ecology*, DOI: 10.1007/s10745-014-9666-4 (coauthors: W. Cano, P. Zuidema, R. Boot).
- 2014 “Learning from the past: Changes in forest policies and livelihoods in Bolivian forest communities,” *Environmental Science and Policy*, DOI: 10.1016/j.envsci.2014.03.006 (coauthors: M. Zenteno, P. Zuidema, R. Boot).
- 2014 “The Legitimacy of Certification Standards in Climate Change Governance,” *Sustainable Development*, DOI: 10.1002/sd.1568 (coauthors: Coraina de la Plaza Esteban, Ingrid Visseren-Hamakers).

- 2014 “Diverse Local Regulatory Responses to a New Forestry Regime in Forest Communities in the Bolivian Amazon,” *Land Use Policy*, DOI: 10.1016/j.landusepol.2014.02.013 (coauthors: W. Cano, P. Zuidema, R. Boo).
- 2014 “Carbon cowboys in Peru and the prospects of local REDD governance,” *Portes, Revista Mexicana Sobre La Cuenca del Pacifico* (coauthors: Wil de Jong, Dennis del Castillo Torres, Angel Salazar). <http://www.portesasiapacifico.com.mx/index.php?p=articulo&id=282>
- 2015 “Factors Influencing Farmers’ Decisions to Plant Trees on Their Farms in Uttar Pradesh, India,” *Small-scale Forestry*, DOI: 10.1007/s11842-015-9289-7 (coauthors: Jawaid Ashraf, Rajiv Pandey & Bhuvnesh Nagar).
- 2015 “Smallholders and forest landscape transitions: Locally devised development strategies of the tropical Americas,” *International Forestry Review*, DOI: 10.1505/146554815814668981 (coauthors: Benno Pokorny).
- 2014 “The legally allowable versus the informally practicable in Bolivia’s domestic timber markets,” *Forest Policy and Economics*, DOI:10.1016/j.forpol.2014.07.001 (coauthors: W. Cano, M. Zenteno, Marlene Soriano).

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2014.10.9 Smallholder forest landscape transition in tropical America, IUFRO, Salt Lake City, USA (co-organizers, facilitator).
- 2014.10.11 Forest transition in Asia, IUFRO, Salt Lake City, USA (co-organizers, facilitator).
- 2015.1.23 Locating forest certification in legality and sustainability compliance in Asia, CIAS and CIFOR, Bogor, Indonesia (organizer, presenter, facilitator).

[招待講演]

- 2014.10.9 “Policy integration Bolivia,” IUFRO World Congress, IUFRO, Salt Lake City.
- 2014.10.11 “Forest futures: Linking global paths to local conditions,” IUFRO World Congress, IUFRO, Salt Lake City.
- 2014.11.3 “Global environmental politics and impact on local people,” Training Workshop on REDD+: Economics

and Policy Environment, Seoul National University, College of Agriculture and Life Sciences, Seoul.

- 2015.2.22 “Foresight research in environmental sciences and policy,” Workshop on International Cooperation in Forestry Research, Seoul National University, College of Agriculture and Life Sciences, Seoul.
- 2015.3.13 “Global environmental politics and impact on local people,” Invited lecture, Department of Forestry and Natural Resources, Garhwal University, Department of Forestry and Natural Resources, Garhwal University, Shrinagar-Gahrwal, India.
- 2015.3.13 “Forests and local people in the climate change regime,” Invited lecture, Department of Forestry and Natural Resources, Garhwal University, Department of Forestry and Natural Resources, Garhwal University, Shrinagar-Gahrwal, India.

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤 (B) 「地域社会はいかにして国際的な環境制度の成功に貢献できるのか」(2012～2014年度)。

⑩海外調査活動

- 2014.4.2-23 Lima, Iquitos, Peru : Communities and international regimes : JSPP funds.
- 2014.6.22-7.26 Lima, Iquitos, Cusco, Peru : Legality timber sector western Amazon : JSPP funds.
- 2014.10.18-2015.2.22 Jakarta, Bogor, other locations in Indonesia : Legality and certification in Asian region : CSEAS funds, CIAS funds.
- 2015.3.7-31 India, Dehradun, Shrinagar : Forest transition in Asia : JSPP funds.

⑪教育

- November 2014 Lectures at Seoul National University’s training course on REDD+.
- March 2015 Lectures on REDD+ and local communities and Forest Transition at HNB Garhwal University.

⑫社会活動・センター外活動

- 2014年度 Member of the Editorial Board Forest Policy and Economics, Forest Trees and Livelihoods, Tropics
- 2014年度 Member of the steering committee of the IUFRO Special Project World Forests Society and the Environment

帯谷 知可 (おびや ちか)**①専門分野**

中央アジア地域研究、中央アジア近現代史

②経歴

- 1991年 東京大学教養学部助手
 1994年 在ウズベキスタン共和国日本国大使館専門調査員
 1996年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手
 2002年 同助教授
 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) 中央アジア地域研究希少資料のデジタル化と有効利用の諸方策
- (2) 帝政ロシアの構築した中央アジアに関する植民地的知の諸相
- (3) ロシア革命期・ソ連期中央アジアの政治と社会
- (4) 現代中央アジア（特にウズベキスタン）のナショナリズム

④主要業績

- 2012 『朝倉世界地理講座 大地と人間の物語5 中央アジア』朝倉書店（北川誠一・相馬秀廣と共編）。
- 2011 『『フジウム』への視線：1920年代ソ連中央アジアにおける女性解放運動と現代』小長谷有紀ほか編『社会主義的近代化の経験：幸せの実現と疎外』明石書店、pp. 98-122。
- 2005 「英雄の復活：現代ウズベキスタン・ナショナルリズムのなかのティムール」酒井啓子ほか編『イスラーム地域の国家とナショナルリズム』（イスラーム地域研究叢書5）東京大学出版会、pp. 185-212。
- 2005 『中央ユーラシアを知る事典』平凡社（小松久男ほかと共編）。
- 2002 「ウズベキスタン：民族と国家の現在・過去・未来」松原正毅編『地鳴りする世界：9.11事件をどうとらえるか』恒星出版、pp. 97-141。

⑤出版業績

[ワーキングペーパー・報告書の編集]

- 2015 『書誌情報データベースの地域情報学的新展

開を探る』（CIAS Discussion Paper, No. 51）CIAS。

[ワーキングペーパー・報告書等]

- 2015 「社会をよそおうオンナたち：ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔」谷川竜一編『世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす』（CIAS Discussion Paper, No. 50）CIAS、pp.35-43。
- 2015 「書誌情報データベースの新しい形を模索する：石井米雄コレクションとトルキスタン集成の事例から」帯谷編『書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る』（CIAS Discussion Paper, No. 51）CIAS、pp.6-21。

[短文・記事]

- 2015 「小松久男『激動の中のイスラーム：中央アジア近現代史』『イスラーム世界研究』Vol. 8（京都大学イスラーム地域研究センター）、pp.367-370。

⑥情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015 「トルキスタン集成」（地域情報学プロジェクト、個別共同研究ユニット「書誌情報DBの地域情報学的新展開を探る」）。「トルキスタン集成」全594巻を対象に、巻別インデクスとキーワード入力による検索および資料PDF閲覧という基本機能に加え、語彙分析やカテゴリー分類の処理、時空間情報の利用などによってコレクションの全体像の把握を可能にするDB構築手法を検討し、公開準備を整えた。PDFは学内限定公開。書誌およびその原本画像13,409件（柴山守、亀田克彦と共同で開発）。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2014.12.13-14 アジア中東学会連盟（AFMA）第10回大会「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連盟創立20周年」、主催：日本中東学会、アジア中東学会連盟、京都大学（日本中東学会と共同で大会実行委員）。

[招待講演]

- 2015.3.5 「中央アジア関連資料収集の展望：ウズベキスタンを中心に」国立国会図書館関西館説明聴取会、国立国会図書館関西館（京都府相楽郡）。

[その他の役割]

- 2015.3.11 押川文子先生を囲む会（研究懇話会）、押川文子先生を囲む会、京都（押川文子先生を囲む会発起人一同と共同で企画、司会）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤 (B) 「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族：『近代化』再考のための視座の構築」(2012-2015年度)。
- 京都大学教育研究振興財団助成(国際会議開催)「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連盟創立20周年」(2014年度)。

⑩海外調査活動

- 2014.8.1-23 ウズベキスタンにおいて、ウズベキスタン科学アカデミー東洋学研究所などで「中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族の視点から見た社会主義的近代化」をテーマに調査を実施、研究費。

⑪教育

- 2009.4.1- 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (グローバル地域研究専攻イスラーム世界論講座)、協力教員 (准教授)。2014年度は大学院生2名の主指導教員、2名の副指導教員を担当、「中央アジア地域研究論」「地域研究論」(1回)、「グローバル地域研究演習Ⅰ～Ⅳ」「グローバル地域研究論課題研究Ⅰ」担当。
- 2014.4.1-9.30 京都大学大学院文学研究科・文学部、学内非常勤講師、「西南アジア史学 (特殊講義)」「現代史学 (特殊講義)」担当。
- 2014.10.1-2015.3.31 京都大学総合人間学部、学内非常勤講師、「ユーラシア文化複合論B」担当。
- 2014.4.1-9.30 立命館大学国際関係学部、非常勤講師、「ロシア・ユーラシア研究Ⅰ」担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014.4.1-2015.3.31 京都大学イスラーム地域研究センター運営委員、拠点構成員。
- 2014.4.1-2015.3.31 国立民族学博物館文化資源共同研究員。
- 2011.4.1- 日本中央アジア学会編集委員。
- 2013.4.1- 日本中央アジア学会理事。

地域相関研究部門 准教授

村上 勇介 (むらかみ ゆうすけ)**①専門分野**

ラテンアメリカ地域研究、政治学

②経歴

- 1991年 在ペルー日本国大使館専門調査員
- 1995年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助手
- 2002年 同助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) ラテンアメリカ政治研究
- (2) 政治体制比較研究
- (3) ラテンアメリカの国際関係

④主要業績

- 2012 *Perú en la era del Chino: la política no institucionalizada y el pueblo en busca de un Salvador* [フジモリ時代のペルー：制度化しない政治、救世主を求める人々], 2ª. edición, (Ideología y política 27), Lima: Instituto de Estudios Peruanos y Center for Integrated Area Studies, Kyoto University.
- 2004 『フジモリ時代のペルー：救世主を求める人々、制度化しない政治』平凡社。
- 2004 *Sueños distintos en un mismo lecho: una historia de desencuentros en las relaciones Perú-Japón durante la década de Fujimori* [同床異夢のペルー・日本関係：フジモリ期におけるすれ違いの軌跡] (Ideología y política 20), Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology.
- 2000 *La democracia según C y D: un estudio de la conciencia y el comportamiento político de los sectores populares de Lima* [下層の人々が語る民主主義：リマ貧困層の政治意識と行動に関する一考察] (Urbanización, migraciones y cambios en la sociedad peruana 15), Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies.
- 1999 *El espejo del otro: el Japón ante la crisis de los rehenes en el Perú* [他者の鏡：在ペルー日本国大使公邸占拠事件と日本] (Ideología y política 12),

Instituto de Estudios Peruanos y Japan Center for Area Studies.

⑤ 出版業績

[編書]

- 2015 『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』（地域研究のフロンティア5）、京都大学学術出版会。

[分担執筆]

- 2015 「ネオリベラリズム後のラテンアメリカ」村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』京都大学学術出版会、pp.1-20。
- 2015 「ポストネオリベラリズム期ペルーの社会紛争と政治の小党分裂化」村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』京都大学学術出版会、pp.69-98。
- 2015 「ブラジルにおける争点政治による政党政治の安定化と非エリート層の台頭」村上勇介編『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』京都大学学術出版会、pp. 101-118（住田育法と共著）。

[ワーキングペーパー・報告書の編集]

- 2015 『相対的に所得水準の高い国に対する無償援助協力の評価（第三者評価）』国際開発センター、p.121。
- 2015 *Review of Grant Aid for Countries with Relatively High Income*, International Development Center of Japan, Inc., p.16.

[シンポジウム・ワークショップなどの発表原稿]

- 2014 “Los procesos de las elecciones municipales del Perú: Huanta, Ayacucho (1998-2010),” La 6a. Conferencia Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía (CELAO), Kyoto-2014, Faculty of Letters, Kyoto University, p.28.

[短文・記事]

- 2014 「国際犯罪」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』丸善出版、pp.588-598。
- 2014 「分科会4 <政治・政策>」『日本ラテンアメリカ学会会報』No.114、日本ラテンアメリカ学会、pp.16-17。
- 2014 「CELAO第6回大会（京都）開催のお知らせ」『日本ラテンアメリカ学会会報』No.114、日本ラテンアメリカ学会、p.39。
- 2014 山田睦男・中川文雄・松本栄次編『世界地名

大事典9 中南アメリカ』朝倉書店に、ペルーに関する226項目を執筆。

- 2014 「鼎談/地域・環境・情報の出会い3人で歩くフィールド『南米の森と都市の環境問題：国際協力の現場を歩く』」『SEEDer：地域環境情報から考える地球の未来』人間文化研究機構総合地球環境学研究所、pp.64-75。
- 2015 “Comentario,” Instituto Iberoamericano de la Universidad de Sofía ed., *América Latina en la era de Asia-Pacífico* (Simposio Internacional 50 aniversario del Instituto Iberoamericano de la Universidad de Sofía), Instituto Iberoamericano de la Universidad de Sofía, pp.81-83.
- 2015 「コメント」上智大学イペロアメリカ研究所編『アジア太平洋時代のラテンアメリカ』（上智大学イペロアメリカ研究所創立50周年記念シンポジウム報告書）、上智大学イペロアメリカ研究所、pp.161-163。
- 2015 「4. 研究部会報告 2. 西日本部会」『日本ラテンアメリカ学会会報』No.116、日本ラテンアメリカ学会、pp.15-16。

⑥ 情報共有化の業績

[データベース公開]

- 2015（公開予定）「ペルーの社会紛争データベース」（地域情報学プロジェクト）。ペルーの護民官局が作成している社会紛争報告（月刊）をデータベース化し、それを視覚化して見やすい形で提供するとともに、社会紛争の原因とプロセスを分析している。前者の視覚化は、かなり進んでおり、2015年度には公開する予定。
- 2015（公開予定）「センデロルミノソ関連資料データベース」（地域情報学プロジェクト）。マイクロフィルムのPDF化を終了し、公開にむけて、ペルー問題研究所、プリンストン大学図書館と協議中。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2014.7.23-25 The Future of Democracy after Neoliberalism: Social Movements in a Globalizing World、個別共同研究ユニット「社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から」、Inamori Center, Kyoto University（企画）。
- 2014.9.16-18 La 6a. Conferencia Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía (CELAO),

Kyoto-2014, Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía (CELAO), Faculty of Letters, Kyoto University (Vicepresidente del Comité Organizador/ secretario general 実行委員会副委員長/事務局長)。

- 2014.9.19 Academic Workshop in Kyoto “The Arab Gulf States: Authoritarian Regimes and Expatriate,” 個別共同研究ユニット「中東とラテンアメリカにおける体制転換の比較研究」、Inamori Center, Kyoto University (企画)。
- 2014.10.17 Seminario “Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy,” 複合共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から」、Inamori Center, Kyoto University (organizador/組織責任者)。

[参加報告]

- 2015.2.6 「ネオリベリズム後の政治世界：安定化の条件をラテンアメリカの経験からさぐる」第57回品川セミナー、京都大学附置研究所・センター、京都大学東京オフィス。
- 2014.9.16-18 “Los procesos de las elecciones municipales del Perú: Huanta, Ayacucho (1998-2010),” La 6a. Conferencia Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía (CELAO), Kyoto-2014, Faculty of Letters, Kyoto University.

[招待講演]

- 2014.10.23 “Las tendencias actuales de la política de los países andinos centrales,” Conferencia de Mesa Verde, Instituto de Estudios Peruanos, Instituto de Estudios Peruanos, Lima, Perú.
- 2014.12.1 “Amazonía peruana y su importancia frente al desafío mundial de cambio climático,” Conferencia “Conservación de bosques a través de alianzas entre comunidades y empresas: Perspectivas para REDD+, basadas en la experiencia de la JICA,” COP 20 Lima, Perú, Ministerio de Ambiente de la República del Perú, Oficina de JICA en Lima, Pabellón Bosques, “Voces por el Clima,” Jockey Club de Lima, Perú.
- 2015.1.13 「ペルーにおける国家と労働組合：歴史的展開と現状」、[21世紀ラテンアメリカにおける国家と市民社会組織の関係] 研究会、日本貿易振興機構アジア経済研究所、日本貿易振興機構本部。

[その他の役割]

- 2014.6.7 日本ラテンアメリカ学会第35回定期大会分科会4「政治・政策」、日本ラテンアメリカ学会、関西外国語大学・中宮キャンパス (司会)。
- 2014.6.17 Panel C “Política local en América Latina.” La 6a. Conferencia Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía (CELAO), Kyoto-2014, Faculty of Letters, Kyoto University (moderador/司会)。
- 2014.11.6 CIAS Visiting Researcher’s Seminar No.1 “Putin, Ukraine, and the New Border Order,” 京都大学地域研究統合情報センター、Inamori Center, Kyoto University (discussant)。
- 2014.11.14 Segunda Parte “América Latina en la era de la globalización,” 50 Aniversario del Instituto Iberoamericano Simposio Internacional “América Latina en la era de AsiaPacífico,” Instituto Iberoamericano de la Universidad Sofía, Conference Room No. 1702, Building No.2, Sophia University (comentarista/コメンテーター)。
- 2014.11.16 Session 4 “Social Conflicts in Latin America” 第51回ラテン・アメリカ政経学会全国大会、ラテン・アメリカ政経学会、神戸大学六甲台キャンパス第5学舎 (国際協力研究科棟) 大会議室 (commentator)。
- 2014.10.17 Seminario “Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy,” 複合共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、個別共同研究ユニット「社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から」、Inamori Center, Kyoto University (moderador/司会)。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・挑戦的萌芽「新自由主義改革後の中南米における社会紛争：事例の総合的調査研究」(2014～2015年度)。
- 公益財団法人京都大学教育研究振興財団 (研究成果物刊行助成) 『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベリズムによる亀裂を超えて』(2014年度)。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

[書評]

- 2014.6.30 Ignacio García Marín, “América Latina en la era posneoliberal: democracia, conflictos y

desigualdad,” *Reflexión Política*, Bucaramanga, Colombia. コロンビアのブカラマンガ自治大学刊の政治研究誌掲載の書評。対象は、2013年刊の*América Latina en la era posneoliberal*。内容を紹介した後、民政移管から最近までの政治、経済、社会の諸問題の絡みを明らかにした作品と評価。

[新聞・テレビ・ネット]

- 2014.4.25 “A media naranja,” *Hilderbrandt en sus trece*, Lima, Peru (週刊誌)。ペルーのフジモリ派の近況に関する記事で、取材を受けた数名のうちの一者として、発言が3回引用されている。記事では、「フジモリ派を最もよく知る研究者」と紹介。
- 2015.2.16「格差 不満の受け皿必要」『読売新聞』(科学欄)。新自由主義期以降のラテンアメリカ諸国の政治経済動向の分析結果を、京都大学品川セミナーで「ネオリベリズム後の政治世界」と題して発表した内容を紹介。

⑩海外調査活動

- 2014.8.3-9.7 ペルーのペルーアマゾン研究所においてアマゾン地域のコミュニティにおけるREDD+プロジェクト実施のための社会、制度、文化的状況評価を実施、JICA専門家業務委託事業。
- 2014.9.28-10.26 ペルーのペルー問題研究所において新自由主義改革後の国家社会関係に関する現地調査を実施、科研費。
- 2014.11.24-12.14 ペルーのペルー問題研究所において新自由主義改革後の国家社会関係に関する現地調査を実施、科研費。
- 2015.1.16-2.2 ペルーのペルー問題研究所において新自由主義改革後の国家社会関係に関する現地調査を実施、科研費。
- 2015.2.9-3.4 ペルーのペルー問題研究所において新自由主義改革後の国家社会関係に関する現地調査を実施、科研費。

⑪教育

- 2014.4.1-9.30 京都大学全学共通科目「ラテン・アメリカ現代社会論」担当。
- 2014.4.1-9.30 同志社大学法学部「中南米地域研究」担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014年度 独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会専門委員。

- 2014年度 学術誌 *México y la Cuenca del Pacífico* 編集委員会国際委員。
- 2014.4-7 兵庫県阪神シニアカレッジ講師。
- 2014年度 JICAプロジェクト「アマゾン地域のコミュニティにおけるREDD+プロジェクト実施のための社会・制度・文化的状況評価」科学技術研究員。
- 2014年度 ラテンアメリカ政経学会理事 (『ラテン・アメリカ論集』編集担当)。
- アジア太平洋ラテンアメリカ研究協議会第6回京都大会実行委員会副委員長兼事務局長。
- 2015.3.5-3.10 Urrutia, Jaime 客員教員受入 (ペルー Instituto de Estudios Peruanos)。研究テーマ: Estado y sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, etnicidad y descentralización。
- 2015.3.5-3.10 Palomino, Moisés客員教員受入 (ペルー Instituto de Estudios Peruanos)。研究テーマ: Estado y sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, etnicidad y descentralización。
- 2015.3.5-3.10 Sánchez, Artemio客員教員受入 (ペルー Centro de Investigación y Desarrollo Social)。研究テーマ: Estado y sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, etnicidad y descentralización。

地域関連研究部門 助教

福田 宏 (ふくだひろし)

①専門分野

中央ヨーロッパ地域研究／チェコとスロヴァキアの近現代史

②経歴

- 1999年 北海道大学大学院法学研究科 (助手→専任講師)
- 2005年 北海道大学スラブ研究センター (21世紀COE研究員→助手)
- 2007年 在スロヴァキア大使館専門調査員
- 2010年 北海道大学スラブ研究センター (学術研究員→助教)
- 2012年 京都大学地域研究統合情報センター助教

③研究課題

- (1) 中央ヨーロッパにおける広域論・統合論の歴史
- (2) 中央ヨーロッパにおける音楽の比較研究
- (3) 身体文化とナショナリズム

④主要業績

- 2014 「ポスト・ハブスブルク期における国民国家と広域論」池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、2014年、pp. 106-134。
- 2012 「ミラン・ホジャの中欧連邦構想：地域再編の試みと農民民主主義の思想」『境界研究』3号、pp. 45-77。
- 2012 「中央ヨーロッパの小さな原発大国：チェコとスロヴァキア」若尾祐司、本田宏編『反核から脱原発へ：ドイツとヨーロッパ諸国の選択』昭和堂、pp. 375-381。
- 2010 「進化と退化のはざまで：ドヴォルザークの『親しみやすさ』と苦悩」『フィルハーモニー』（NHK交響楽団機関誌）82巻5号、pp. 40-45。
- 2006 『身体の国民化：多極化するチェコ社会と体操運動』北海道大学出版会。

⑤出版業績

[共編]

- 2015 『国民音楽の比較研究に向けて：音楽から地域を読み解く試み』（CIAS Discussion Paper, No.49）地域研（池田あいのと共編）。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015 「『国民楽派』の再検討：チェコのスメタナを一例として」(『国民音楽の比較研究に向けて』(CIAS Discussion Paper, No.49) 地域研、pp.3-7。

[シンポジウム・ワークショップなどの発表原稿（レフリー付でないもの）]

- 2014 「『東欧革命』への『長い』軌跡：『正常化』時代における非言語的象徴の機能」『比較政治学会』東京大学本郷キャンパス。

[短文・記事]

- 2015 「書評：パトリック・オウジェドニーク著、阿部賢一・篠原琢訳『エウロペアナ：20世紀史概説』（白水社、2014年）」『図書新聞』3190号、p.4。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2014.9.27 ワークショップ「国民音楽の比較研究と地域情報学」、主催：共同研究・共同利用プロジェクト「集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのベータベース構築」、共催：「音楽と社会」フォーラム（政治経済学・経済史学会の常設専門部会）、地域研（企画・司会）。
- 2014.11.6 地域研国外客員セミナー、地域研国際交

流委員会、地域研（企画・司会）。

- 2014.11.11 地域研国外客員セミナー、地域研国際交流委員会、地域研（企画・司会）。

[参加報告]

- 2014.6.28 「『東欧革命』への『長い』軌跡：『正常化』時代における非言語的象徴の機能」、比較政治学会、東京大学本郷キャンパス。

[招待講演]

- 2014.10.25 「社会主義下の青春：チェコスロヴァキアの『正常化』時代におけるロックとテレビ」、関西チェコ／スロバキア協会 知遊サロン No.51、関西チェコ／スロバキア協会、追手門大学大阪梅田サテライト。

[その他の役割]

- 2014.8.25 “Summer Workshop in Tallinn,” 科研「東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争」（代表・橋本伸也・関西学院大学）、タリン、エストニア（司会）。
- 2014.9.12 国際ワークショップ「抵抗と解放の身体：ブラジル伝統芸能『カポエイラ』による対話と実践」、共催：NPOグループ・インズィンガ・カポエイラWS実行委員会、京都大学地域研究統合情報センター、地域研究コンソーシアム「地域研究次世代ワークショップ・プログラム」、京都大学学際融合教育推進センター（分野横断プラットフォーム構築企画）、JCAS社会連携「女性地域研究者のライフ・キャリアネットワークプロジェクト」、NPO平和環境もやいネットほか、後援：駐日ブラジル大使館、稲盛記念館・大会議室（司会）。
- 2014.9.16 科研「社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ：旧ソ連・中国・ベトナム」（代表・越野剛・北海道大学）研究会・企画2「合評会：『地域研究』14巻2号特集『紅い戦争の記憶：旧ソ連・中国・ベトナムを比較する』（2014年）」、科研「社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ：旧ソ連・中国・ベトナム」、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（コメント）。
- 2014.9.28 京都大学アカデミックデイ2014（研究者と立ち話コーナー）、京都大学、京都大学百周年時計台記念館（出展）。
- 2014.11.3 京都大学大学院文学研究科 2014年度西洋史読書会大会、井出匠報告「20世紀初頭のスロヴァキア国民主義運動と宗派問題：スロヴァキア人民党の設立を例に」、京都大学大学院文学研究科西洋史研究室、京都大学百周年時計台記念館（司会）。
- 2014.11.24 ワークショップ「理念としての『国民音

楽』：19世紀-20世紀初頭のロシア・中東欧における戦略と受容」、主催：共同研究・共同利用プロジェクト「集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのベータベース構築」、後援：早稲田大学総合研究機構オペラ／音楽劇研究所、早稲田大学早稲田キャンパス7号館（岡本佳子と共同で司会）。

- 2015.2.28 「チェコスロヴァキアの『正常化』体制における娯楽：ポピュラー音楽と市民社会」、第27回西日本・東欧ロシア研究者集会、京都女子大学S校舎207号室（報告）。
- 2015.3.9 「社会主義下チェコスロヴァキアにおける演歌と市民社会」、第8回東欧演歌研究会、信州大学（松本キャンパス）人文学部新棟311演習室（報告）。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2014.6.7 「解説」NHK（番組名「らららクラシック」）。ドヴォジャークについての解説（再放送6月9日、8月16日、8月18日）。

⑩海外調査活動

- 2014.8.24-9.9 スロヴァキア科学アカデミー政治学研究所などを拠点とし、エストニア、フィンランド、オーストリア、スロヴァキア、ハンガリー、チェコにおいて、東中欧・ロシアにおける歴史と記憶の政治とその紛争に関する国際ワークショップへの参加および聞き取り調査・資料収集を実施、科研費。
- 2015.3.3-3.7 台湾（金門島）、「社会主義文化におけるメモリー・スケープ研究」に関する記念碑の調査、科研費。

⑪教育

- 2014年度前期、京都大学文学部「独書購読」
- 2014年度前期、龍谷大学瀬田キャンパス教養科目「西洋近現代史入門」
- 2014年度後期、龍谷大学瀬田キャンパス教養科目「西洋近現代史入門」および同国際文化学部「ユーラシアの歴史と文化B」

⑫社会活動・センター外活動

- 2013.4.1-2015.3.31 北海道大学スラブ研究センター共同研究員。
- 2010.4.1- 学術雑誌『境界研究』編集委員。
- 2014.10.1-11.17 フィンランドのUniversity of Eastern Finland、Jeremy Smithの受入。研究テーマ：

Comparative Perspectives on Succession in Autocratic Dynasties。

情報資源研究部門 教授

貴志 俊彦（きし としひこ）

①専門分野

東アジア地域史

②経歴

- 1993年 島根県立国際短期大学専任講師
- 2000年 島根県立大学総合政策学部（専任講師→助教授→教授）
- 2007年 神奈川大学経営学部教授
- 2010年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 東アジア通信・メディア史研究
- (2) 東アジア・東南アジアにおける太平洋戦争と戦後の記憶と記録に関する研究
- (3) 近現代東アジア文化交流史研究

④主要業績

- 2013 『東アジア流行歌アワー：越境する音 交錯する音楽人』（岩波現代全書15）岩波書店。
- 2012 『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館（松重充浩ほかと編著）。
- 2011 『アジアの自画像と他者：地域社会と「外国人」問題』京都大学学術出版会（編著）。
- 2010 『満洲国のビジュアル・メディア：ポスター・絵はがき・切手』吉川弘文館。
- 2009 『模索する近代日中関係：対話と競存の時代』東京大学出版会（谷垣真理子ほかと編著）。

⑤出版業績

[単著]

- 2015 『日中間海底ケーブルの戦後史：国交正常化と通信の再生』吉川弘文館。

[共編書]

- 2015 『記憶と忘却のアジア』（京都大学地域研究統合情報センター 相関地域研究シリーズI）、青弓社（山本博之・西芳実・谷川竜一と共編）。

[分担執筆]

- 2014 「戦前の満鉄・興亜院による都市インフラ調査

解題』『中国占領地の社会調査2（政治・経済編）別冊近現代資料刊行会、pp.101-122。

- 2015「グラフ誌が描かなかった死：日中戦争下の華北」貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川竜一編『記憶と忘却のアジア』（京都大学地域研究統合情報センター 相関地域研究シリーズI）青弓社、pp.213-243。

[短文・記事]

- 2014「今だからこそ読んで欲しい心に残る一冊」『東方』400号、東方書店、p.21。
- 2015「今日の話題 歴史の記憶の断片」『国際貿易』第2093号、日本国際貿易促進協会、第1面。
- 2015「今日の話題 あらたな開発論への期待」『国際貿易』第2097号、日本国際貿易促進協会、第1面。
- 2015「今日の話題 観光開発の新発想」『国際貿易』第2101号、日本国際貿易促進協会、第1面。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2014「『北支』データベース」戦中の国策会社華北交通株式会社が発行したPR用のグラフ誌『北支』（1939年6月1日～1943年8月1日）の雑誌データベース（瀧下彩子と共同で開発）。<http://124.33.215.236/research/hokushi/hokushi.php>
- 2014「『亜細亜大観』データベース」亜細亜写真大観社の編纂・刊行による市販の写真帳『亜細亜大観』（1935年～1942年）の写真帳データベース（相原佳之と共同で開発）。<http://www.tbcas.jp/ja/lib/lib4/>

[ソフトウェア・システム開発]

- 2015（公開予定）「古写真に位置情報のメタデータを付与するモバイルアプリ『メモリーハンティング』の開発」（西村陽子・北本朝展と共同で開発）。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2014.4.27「京都大学地域研究統合情報センター共同利用・共同研究報告会」主催：京都大学地域研究統合情報センター（複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」、京都大学地域研究統合情報センター（企画）。
- 2014.5.11 追悼イベント「映像民俗学者 姫田忠義さんの軌跡を追う」主催：NPO法人ヒューマン・ビジョンの会、京都大学地域研究統合情報センター、京都・徳正寺（村岡正司と共同で司会）。
- 2014.7.5「琉球列島米国民政府（USCAR）制作フィ

ルム」第3回鑑賞・検討会、主催：（公）東洋文庫・超域アジア研究部門現代中国研究班・国際関係・文化グループ、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」、科研・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、那覇市NPO活動支援センター（企画）。

- 2014.11.23 合同ワークショップ「第二次世界大戦後、東アジアにおける『国民歌謡』をめぐるディスコース」主催：科研・基盤研究（B）「聴覚文化・視覚文化の歴史からみた『1968年』：日本戦後史再考」、科研・若手研究（B）「戦後日本大衆文化における放送と音楽：〈家庭〉の表象を中心に」、科研・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」、大阪大学豊中キャンパス（輪島裕介と共同で企画、総合討論、司会）。
- 2014.12.6 合同研究会「図像資料の研究を考える：戦争と生活」主催：神奈川大学非文字資料研究センター租界班、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」と個別研究ユニット「写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析」、神奈川大学横浜キャンパス（杉村使乃と共同で主催）。
- 2015.3.15 シンポジウム「Remapping Hiroshima：『ヒロシマ』を（再）マッピングする：核時代の到来・起点としての『ヒロシマ』」主催：京都大学地域研究統合情報センター、敬和学園大学戦争とジェンダー表象研究会（科研・基盤研究（C））、広島市まちづくり市民交流プラザ（杉村使乃と共同で企画、コメンテーター）。
- 2015.3.17「華北交通論集第1回協議会」主催：人間文化研究機構現代中国地域研究プログラム・東洋文庫現代中国研究資料室・図画像資料班、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」と個別研究ユニット「写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析」と個別研究ユニット「『乾隆京城全図』と空間画像史料を用いた『華北・北京歴史データベース』の構築」、科研・基盤研究（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、

京都大学人文科学研究所（企画、司会）。

[参加報告]

- 2014.6.5「『20世紀満洲』という視点」、ボン大学2014年度満洲研究ワークショップ、ノルトラインヴェストファーレン州立フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ボン大学アジア研究科、ドイツ・ボン大学。
- 2014.6.5「近現代満洲史研究におけるモンゴルの位置づけ」、ボン大学2014年度満洲研究ワークショップ、ノルトラインヴェストファーレン州立フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ボン大学アジア研究科、ドイツ・ボン大学。
- 2014.7.26「世紀転換期における欧米人による東アジアの旅Ⅰ」、モリソン・パンフレット研究会、(公)東洋文庫・科研・基盤研究(B)「『モリソン文庫』時事資料群の国際的な公開と活用による東アジア近現代史像の刷新」、東洋文庫。
- 2014.12.13「世紀転換期における欧米人による東アジアの旅Ⅱ」モリソン・パンフレット研究会・(公)東洋文庫科研・基盤研究(B)「『モリソン文庫』時事資料群の国際的な公開と活用による東アジア近現代史像の刷新」、東洋文庫。
- 2015.1.31「日中国交正常化と日中間海底ケーブルの再生」第18回東アジア勉強会、京都大学総合研究2号館。

[招待講演]

- 2014.6.5「非文字資料から解析する近現代満洲史研究の可能性」、ボン大学2014年度夏学期公開リレー講座「Die Mandschurei in Vergangenheit und Gegenwart（満洲の過去と現在）」、ノルトラインヴェストファーレン州立フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ボン大学アジア研究科、ドイツ・ボン大学。

[その他の役割]

- 2014.9.2「サハリン州の図画像資料利用の可能性」主催：科研・基盤研究(B)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」、科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、札幌：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（兎内勇津流と共同で企画、趣旨説明）。
- 2014.9.4 サハリン州立郷土博物館との合同座談会、主催：科研・基盤研究(B)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」、科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、ユジノサハリンスク：サハリン州立郷土博物館（兎内勇津流と共同で企画、趣旨説明）。

画、趣旨説明）。

- 2014.9.5 サハリン総合国立大学歴史社会公共政策学部との合同座談会、主催：科研・基盤研究(B)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」、科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、ユジノサハリンスク：サハリン総合国立大学（兎内勇津流と共同で企画、趣旨説明）。
- 2014.9.8 サハリン州立歴史文書館との合同座談会、主催：科研・基盤研究(B)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」、科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、ユジノサハリンスク：サハリン州立歴史文書館（兎内勇津流と共同で企画、趣旨説明）。
- 2014.9.9 日本センターおよびコリアンセンターでの合同座談会、主催：科研・基盤研究(B)「サハリン（樺太）島における戦争と境界変動の現代史」、科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」、ユジノサハリンスク：日本センターおよびコリアンセンター（兎内勇津流と共同で企画、趣旨説明）。
- 2015.3.15 シンポジウム「Remapping Hiroshima:『ヒロシマ』を(再)マッピングする：核時代の到来・起点としての『ヒロシマ』」、主催：京都大学地域研究統合情報センター、敬和学園大学「戦争とジェンダー表象研究会」(科研・基盤研究(C))、広島市まちづくり市民交流プラザ（杉村使乃と共同でコメンテーター）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研・基盤研究(A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」(2013～2017年度)。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2014.7.1「満洲に対する日韓研究者のまなざし：『二〇世紀満洲歴史事典』韓日合同書評国際会議」参加記『東方』401号、pp.2-8（貴志俊彦他編『二〇世紀満洲歴史事典』をめぐって、2014年3月14日に釜山大学を会場に日本側編者・執筆者と、韓国・満洲学会との合同による国際的な書評会の記録）。
- 2015.2.7「『日中間海底ケーブルの戦後史』」『フジサンケイ ビジネスアイ』（『日中間海底ケーブルの戦後

史：国交正常化と通信の再生』書評)。

- 2015.2.17 「近著の図書紹介『日中間海底ケーブルの戦後史』(貴志俊彦・吉川弘文館・2700円+税)『週刊 国際貿易』2098号(第4面)、『日中間海底ケーブルの戦後史：国交正常化と通信の再生』書評)。
- 2015.2.22 「『日中間海底ケーブルの戦後史』貴志俊彦：曲折乗り越えた共同事業の変遷」『日本経済新聞』(『日中間海底ケーブルの戦後史：国交正常化と通信の再生』書評)。
- 2015.3.13 「国交正常化後の貴重な記録：失われつつある資料を丹念に調査」『週刊読書』(『日中間海底ケーブルの戦後史：国交正常化と通信の再生』書評)。

⑩海外調査活動

- 2014.5.31-6.5 ドイツにおいてノルトラインヴェストファーレン州立フリードリッヒ・ヴィルヘルム・ボン大学で「非文字資料から解析する近現代満洲史研究の可能性」をテーマに調査、CIAS情報学プロジェクト。
- 2014.6.6-16 ドイツにおいてライプツィヒ大学他で「非文字資料から考える欧亜史の諸側面」をテーマに調査、CIAS情報学プロジェクト。
- 2014.9.3-10 ロシア・サハリン州においてサハリン国立大学他で「非文字資料から考える樺太・サハリン州の定位」をテーマに調査、科研費。

⑪教育

- 2014.10.1-2015.3.31 京都大学文学部「中国語学中国文学」「東洋史学」「現代史学」(特殊講義)、「二十世紀学」(演習II)、同文学研究科「中国語学中国文学」「東洋史学」(特殊講義)。

⑫社会活動・センター外活動

- 2011.10.1-2014.9.30 第22期日本学術会議連携会員(地域研究委員会地域情報分科会、史学研究委員会歴史資料の保存・管理と公開に関する分科会)。
- 2014年度 日本学術振興会審査会専門委員。
- 2014年度 日本歴史学協会国立公文書館特別委員会委員。
- 2014年度 公益財団法人東洋文庫現代中国研究班研究員。
- 2014年度 人間文化研究機構現代中国地域研究東洋文庫拠点構成員。
- 2014年度 広島史学研究会県外評議員。

- 2014年度 総合地球環境学研究所『Seeder (シーダー)』編集委員。
- 2015.1.5-6.5 Paul D. Barclay客員教授受入(米国Lafayette College教授)。研究テーマ「大日本帝国の植民地と戦争に関する絵葉書の研究」。

情報資源研究部門 准教授

西 芳実 (にしよしみ)

①専門分野

インドネシア地域研究／アチェ近現代史

②経歴

- 2006年 東京大学大学院総合文化研究科特任助手
- 2007年 東京大学大学院総合文化研究科助教
- 2010年 立教大学AIIC助教
- 2011年 京都大学地域研究統合情報センター准教授

③研究課題

- (1) 多言語・多宗教地域の紛争・災害対応過程
- (2) 社会秩序の再編過程における外来者の役割
- (3) 国際協力事業分野における地域研究の知見の活用

④主要業績

- 2014 『災害復興で内戦を乗り越える：2004年スマトラ島沖地震・津波とアチェ紛争』(叢書 災害対応の地域研究2) 京都大学学術出版会。
- 2013 「信仰と共生：バリ島爆発テロ事件以降のインドネシアの自画像」『地域研究』13巻2号、pp. 176-200。
- 2012 「災害・紛争と地域研究：スマトラ沖地震・津波における現場で伝わる知」『地域研究』12巻2号、pp. 181-197。
- 2011 “Among Bangsa, Keturunan, and Daerah: Peace-Building and Group Identity in the Law on Governing Aceh, 2006,” Hiroyuki Yamamoto, *et al.*, eds., *Bangsa and Umma: Development of People-Grouping Concepts in Islamized Southeast Asia*, Kyoto University Press, pp. 166-182.
- 2010 「インドネシアのアチェ紛争とディアスポラ」首藤もと子編『東南・南アジアのディアスポラ』(叢書グローバル・ディアスポラ2) 明石書店、pp. 67-86。

⑤ 出版業績

[共編]

- 2015 『記憶と忘却のアジア』（関連地域研究シリーズI）、青弓社（貴志俊彦・山本博之・谷川竜一と共編）。

[ワーキングペーパーや報告書の編集]

- 2015 『世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から』（JCAS Collaboration Series, No.10）、JCAS（宮原暁・山本博之・石丸次郎・立岩礼子と共編）。
- 2015 『2004年スマトラ沖地震・津波復興史I』（CIAS Discussion Paper, No.54）CIAS（山本博之・篠崎香織と共編）。

[単行本の分担執筆]

- 2015 「記憶のアーカイブ：スマトラ島沖津波の経験を世界に」 貴志俊彦ほか編『記憶と忘却のアジア』青弓社、pp.44-65。
- 2015 「災害の記憶：津波遺構に託される生存者の思い」 牧紀男・山本博之編著『国際協力と防災：つくる・よりそう・きたえる』京都大学学術出版会、pp.153-158。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015 「渚の灰から微笑み返し：2004年スマトラ島沖地震津波と社会の再生」 谷川竜一編『世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす』（CIAS Discussion Paper, No.50）京大地域研、pp.13-19。

[翻訳]

- 2015 映画『海からのメッセージ：アチェ津波10年の記録と希望』（マフルザ・ムルダニ監督、日本語字幕）。
- 2015 映画『海辺の先の物語』（ダラン・ムラティ&エルフィダ・ディアナ監督、日本語字幕）。

[短文・記事]

- 2014 「高校生との共同研究の勧め：スーパーグローバルハイスクールと地域研究」『JCAS News Letter』No.17（JCAS）、p.7。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015 「アチェ津波被災者証言データベース」（災害対応の地域研究プロジェクト）。アチェ州の津波被災者証言111件に証言者特性や位置情報をつけて収蔵。バンドアチェ市内の54件について証言を日本語訳。Myデータベースに登録しプロジェクト内で共有。

[ソフトウェア、システム開発]

- 2014 「アチェ津波モバイル博物館（スマホ版）」（災害対応の地域研究プロジェクト）。現在の津波被災地の景観に重ねて被災直後から復興過程の写真をAR表示し、復興過程を辿れるようにした（山本博之と共同で開発）。
- 2014 「アチェ津波被災地メモリーハンティング」（災害対応の地域研究プロジェクト）。アチェ津波モバイル博物館収蔵の写真の一部をメモハンに登録し、アチェの津波直後と現在の様子の比較を可能にした（北本朝展・山本博之と共同で開発）。
- 2014 「バンドアチェ今昔写真集メモリーハンティング」（災害対応の地域研究プロジェクト）。バンドアチェ市の津波前の写真を登録し、津波前後の街の景観の比較を可能にした（北本朝展・山本博之と共同で開発）。
- 2014 「神戸被災地メモリーハンティング」（災害対応の地域研究プロジェクト）。阪神淡路大震災被災地の被災直後の写真を登録し、復興の過程を比較できるようにした（北本朝展・山本博之と共同で開発）。
- 2014 「アチェ津波アーカイブ（スマホ版）」（災害対応の地域研究プロジェクト）。アチェ津波アーカイブをスマホで表示可能にしたもの（渡邊英徳・山本博之と共同で開発）。
- 2015 「Tsunami Datang」（災害対応の地域研究プロジェクト）。津波被災者の証言をもとにインドネシアの小中学生を対象にした防災教育アプリ（山本博之と共同で開発）。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2014.7.26 JCAS公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」、JCAS、CIASほか、大阪（宮原暁・山本博之・立岩礼子・石丸次郎と共同で企画・組織・実施）。
- 2014.8.4-5 京都マレーシア映画文化シンポジウム「親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語」、CIAS共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」、マレーシア映画文化研究会、日本マレーシア学会、京都（山本博之と共同で企画・組織・実施）。
- 2014.9.10 フィリピン台風災害被災地支援映画上映会、CIAS共同研究『『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり』、京都（山本博之と共同で企画・組織・実施）。

- 2014.9.10 京都シネアドボ・ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」、CIAS共同研究『『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり』、科研・基盤 (B)「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」ほか、京都 (山本博之と共同で企画・組織・実施)。
- 2014.9.15 九州シネアドボ・ワークショップ「映画『ジャングル・スクール』が拓くフロンティア：シネマと地域研究のマリアージュ」、マレーシア映画文化研究会、科研・基盤 (B)「インドネシアの災害後社会の再建と女性」、CIAS共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」ほか、キャナルシティ博多貸会議室 (山本博之と共同で企画・組織・実施)。
- 2014.11.17 “Seminar for Students of Graduate Program on Disaster Management,” Syiah Kuala University, CIAS-シアクアラ大学大学院防災学専攻、バンダアチェ (Bukhari Aliと共同で企画・組織・実施)。
- 2014.12.24 “Information and Communication Technology for Disaster Risk Reduction,” バンダアチェ (山本博之・原正一郎・亀田亮宙と共同で企画・組織・実施)。
- 2014.12.25 「アチェ津波被災地メモリーハンティング講習」、バンダアチェ (山本博之・原正一郎・亀田亮宙と共同で企画・組織・実施)。
- 2015.1.18 「日本の災害対応から何を学ぶか」、CIAS-シアクアラ大学TDMRC-大学院防災学専攻、京都 (山本博之・谷川竜一・亀田亮宙と共同で企画・組織・実施)。
- 2015.3.21 「スマトラ大津波から10年：情報コミュニケーション技術を活用した防災実践と展望」、CIAS-シアクアラ大学TDMRC-京大東南研、京都 (山本博之と共同で企画・組織・実施)。

[参加報告]

- 2014.4.26 「渚の灰から微笑み返し：2004年スマトラ島沖地震・津波と社会の再生」、CIAS共同利用・共同研究ワークショップ「世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす」、CIAS、京都。
- 2014.12.24 “Recording Their Story: Personal Memory and Public Lesson after the 2004 Tsunami in Aceh,” Information and Communication Technology for Disaster Risk Reduction, CIAS-シアクアラ大学TDMRC-大学院防災学専攻、バンダアチェ。

[招待講演]

- 2014.7.19 「災害対応の国際協力を考える：2004年ス

マトラ島沖地震・津波被災地の現場から」、大阪府立北野高等学校スーパーグローバルハイスクール関連講演、大阪府立北野高等学校、京都。

- 2014.8.2 「記憶を記録すること：東南アジア、映画、記憶の継承」、国際交流基金、東京。

[基調講演]

- 2014.6.18 “Persiapan Phisik dan Metal serta Mekanisem Sinergitas Pertolongan Bencana Alam,” インドネシア共和国法務省入国管理局災害対応ユニット設立記念国際セミナー、インドネシア共和国法務省、ジャカルタ。

[その他の役割]

- 2014.7.26 JCAS公開シンポジウム「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」、JCAS、CIASほか、大阪 (宮原暁・山本博之・立岩礼子・石丸次郎と共同で司会)。
- 2014.8.4-5 京都マレーシア映画文化シンポジウム「親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語」、CIAS共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」、マレーシア映画文化研究会、日本マレーシア学会、京都 (山本博之と共同で司会)。
- 2014.9.10 京都シネアドボ・ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」、CIAS共同研究『『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり』、科研・基盤 (B)「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」ほか、京都 (山本博之と共同で司会)。
- 2014.12.24 “Information and Communication Technology for Disaster Risk Reduction,” バンダアチェ (山本博之・原正一郎・亀田亮宙と共同で司会)。
- 2014.12.25 「アチェ津波被災地メモリーハンティング講習」、バンダアチェ (山本博之・原正一郎・亀田亮宙と共同で通訳・講師)。
- 2015.1.18 「日本の災害対応から何を学ぶか」、CIAS-シアクアラ大学TDMRC-大学院防災学専攻、京都 (山本博之・谷川竜一・亀田亮宙と共同で司会・通訳)。
- 2015.3.21 「スマトラ大津波から10年：情報コミュニケーション技術を活用した防災実践と展望」、CIAS-シアクアラ大学TDMRC-京大東南研、京都 (山本博之と共同で司会・通訳)。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤 (B)「インドネシアの災害後社会に

おける生活再建と女性」(2014～2017年度)。

- JST日本・アジア青少年サイエンス交流事業(さくらサイエンスプラン)(2014年度)。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2014.12.10「大津波の記憶 京大がアプリ スマトラ地震」『日本経済新聞』朝刊34面。
- 2014.12.14「津波の記憶アプリに スマトラ地震10年 京大が開発」『京都新聞』夕刊1面。
- 2014.12.14「スマトラ沖地震の津波 被害・復興記録アプリで閲覧」『日本経済新聞』朝刊34面。
- 2014.12.15「津波被災地のアプリ開発 景観変化を記録、京大准教授ら」『じゃかるた新聞』朝刊1面。
- 2014.12.16「スマトラ津波復興アプリに『震災被災地でも活用を』京大准教授開発 街並み写真や証言写真」『京都新聞』夕刊1面。
- 2014.12.25「アチェの津波：津波防災研究センターと京大地域研が津波アプリを公開」(“TSUNAMI ACEH: TDMRC Dan CIAS Universitas Kyoto Luncurkan Aplikasi Tsunami,”*Kabar24*)。
- 2014.12.26「インド洋津波の記憶、アプリで継ぐ 京大准教授ら開発」『朝日新聞』夕刊2面。
- 2014.12.26「アプリで被災経験共有『災害を風化させない』バンダアチェ」『じゃかるた新聞』1面。
- 2014.12.26「津波防災研究センターと地域研の成果物」(“Ragam Produk TDMRC dan Mitra,”*Smong*)。
- 2014.12.27「京大地域研がアチェの津波モバイルアプリを公開」(“CIAS Kenalkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile,”*Serambi Indonesia*)。
- 2014.12.27「シアクアラ大学津波防災研究センターがアチェ津波モバイル博物館を公開」(“TDMRC Unsyiah Luncurkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile Museum,”*Atjeh Post*)。
- 2014.12.27「津波の記憶をとどめる」『朝日新聞(天声人語)』朝刊1面。
- 2015.1.12「日本の研究者がアチェの津波に関するアンドロイド・アプリを制作」(“Doktor Jepang Ciptakan Aplikasi Android “Tsunami Aceh,”*Kompas* [テクノ面])。
- 2015.1.12「二人の日本の博士がアチェの津波に関するアプリをつくる」(“Dua Doktor Jepang Ini Bikin Aplikasi “Tsunami Aceh,”*Kompasiana*)。
- 2015.1.12「日本の研究者、アチェの津波に関するアンドロイド・アプリを制作」(“Peneliti Jepang

Ciptakan Aplikasi Android “Tsunami Aceh,” 『*Serambi Indonesia*』)。

- 2015.1.12「これが日本の研究者が製作したアチェ津波アプリ」(“Inilah Aplikasi Android Tsunami Aceh Buatan Dua Doktor Dari Jepang,”*iBerita.com*)。
- 2015.1.12「日本の研究者がアンドロイド・アプリでアチェ津波モバイル博物館を制作」(“Doktor Asal Jepang Ciptakan Aplikasi Android Aceh Tsunami Mobile Museum,”*SRIWIJAYA POST*)。
- 2015.1.18「神戸の復興 歩いて学んだ 大津波被災インドネシア人学生『母国に生かす』」『日本経済新聞』朝刊39面(さくらサイエンスプラン)。
- 2015.1.30「八つ橋に見た日本のおもてなし」(“Yatsubashi, Timphan ala Japan,”*Serambi Indonesia* [朝刊1面]) (さくらサイエンスプラン)。
- 2015.1.31「インド洋大地震・津波から10年 現地で薄れる防災意識」(ニュースのおさらい)『朝日新聞』夕刊2面(スマホ・アプリ公開)。
- 2015.2.12「メモリーハンティング、アチェから京都へ」(“Memory Hunting, dari Aceh ke Kyoto,”*Serambi Indonesia* [朝刊1面]) (さくらサイエンスプラン)。
- 2015.2.14「被災後の神戸の復興をこの目で見て」(“Mengintip Kebangkitan Kobe Pascabencana,”*Serambi Indonesia* [朝刊1面]) (さくらサイエンスプラン)。
- 2015.3.1「ガヨから日本の神戸へ」(*Lintas Gayo*) (さくらサイエンスプラン)。
- 2015.1.29「スマートフォン・アプリで2004年インド洋津波被災地の記憶を継承」(“Smartphone app helps residents pass on memories of 2004 Indian Ocean tsunami,”*The Asahi Shimbun*)。

⑩海外調査活動

- 2014.4.4-4.14. インドネシア 津波被災地の復興状況についての情報収集、科研費。
- 2014.6.16-6.19. インドネシア インドネシア法務人権省出入国管理総局での招待講演、科研費。
- 2014.11.13-11.20. インドネシア 津波被災地メモリーハンティング実地調査、科研費。
- 2014.12.22-2015.1.7. インドネシア アチェ津波被災10周年関連事業実施、CIAS地域情報学プロジェクト、科研費。
- 2015.3.5-3.10. インドネシア 東南アジアセミナー出席、京都大学東南アジア研究所。

⑫社会活動・センター外活動

- 2010.4.1-2015.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。
- 2010.4.1-2015.3.31 日本マレーシア学会運営委員。
- 2015.1.1-2015.3.31 東南アジア学会理事。
- 2015.1.12-19 インドネシアのシアクアラ大学から Bukhari Aliほか合計6名を日本の情報技術を活用した防災・減災研究のために受入。
- 2015.1.26-30 マレーシアのクラシカメディア、ヌルジアティ氏をイスラム雑誌の情報化のために受入。
- 2015.3.10-26 インドネシアのシアクアラ大学から Syamsidikほか合計3名を日本の情報技術を活用した防災・減災研究のために受入。

情報資源研究部門 准教授

山本 博之 (やまもと ひろゆき)**①専門分野**

マレーシア地域研究／現代史

②経歴

- 1998年 マレーシア・サバ大学講師
 2001年 東京大学大学院総合文化研究科助手
 2003年 在メダン総領事館委嘱調査員
 2004年 国立民族学博物館地域研究企画交流センター助教授
 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) イスラム教圏東南アジアにおける民族と混血概念
- (2) 災害対応と情報
- (3) 地域研究の方法論
- (4) 劇映画に見られる集合的記憶の形成・再編

④主要業績

- 2014 『復興の文化空間学：ビッグデータと人道支援の時代』（叢書 災害対応の地域研究1）京都大学学術出版会。
- 2011 *Film in Contemporary Southeast Asia: Cultural Interpretation and Social Intervention*, Routledge (coeditor: David Lim).
- 2011 *Bangsa and Umma: Development of People-grouping Concepts in Islamized Southeast Asia*, Kyoto University Press (coeditors: Anthony Milner, et al.).

- 2006 『脱植民地化とナショナリズム：英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

⑤出版業績

[単著]

- 2015 『映画から世界を読む』（情報とフィールド科学I）、京都大学学術出版会。

[共編]

- 2015 『記憶と忘却のアジア』（相関地域研究I）、青弓社（貴志俊彦・西芳実・谷川竜一と共編）。
- 2015 『国際協力と防災：つくる・よりそう・きたえる』（災害対応の地域研究3）、京都大学学術出版会（牧紀男と共編）。

[ワーキングペーパーや報告書の編集]

- 2014 『台風ヨランダはフィリピン社会をどう変えるか：地域に根ざした支援と復興の可能性を探る』（CIAS Discussion Paper, No.45）、CIAS（青山和佳と共編）。
- 2015 『世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から』（JCAS Collaboration Series, No.10）、JCAS（宮原暁・石丸次郎・立岩礼子・西芳実と共編）。
- 2015 『カラムの時代VI：近代マレー・ムスリムの日常生活2』（CIAS Discussion Paper, No.53）、CIAS（坪井祐司と共編）。
- 2015 『2004年スマトラ沖地震・津波復興史I』（CIAS Discussion Paper, No.54）、CIAS（西芳実・篠崎香織と共編）。

[レフリー付雑誌論文]

- 2014 “Elections and Rebellions: The 1955 General Election in Indonesia and an Islamic State,” *Dari Warisan ke Wawasan*, Vol.2, pp.8-20.

[雑誌論文（レフリーなし）]

- 2015 「地域に根ざした災害からの復興：『災害対応の地域研究』の主流化に向けて」『Thảm họa và phục hưng（災害と復興）』5, pp.1-19（日本語）。
- 2015 “地域に根ざした災害からの復興：「災害対応の地域研究」の主流化に向けて,” *Thảm họa và phục hưng（災害と復興）*, 5, pp.20-39（ベトナム語）。

[分担執筆]

- 2014 「災害が露にする『地域のかたち』：スマトラの人道支援の事例から」木村周平・杉戸信彦・柄谷友香『災害フィールドワーク論』古今書院、pp.188-203。
- 2015 「家系図の創造：ボルネオの黄龍の子孫たち」

貴志俊彦ほか編『記憶と忘却のアジア』青弓社、pp.68-94。

- 2015「おわりに：アジアの防災モデル確立に向けて」牧紀男・山本博之編『国際協力と防災』京都大学学術出版会、pp.241-252。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2014「大規模災害への対応はフィリピンに『新たな公共』を生み出せるか：信頼できる公的な情報を発信する主体としての地方行政の役割」青山和佳・山本博之編『台風ヨランダはフィリピン社会をどう変えるか：地域に根ざした支援と復興の可能性を探る』(CIAS Discussion Paper, No.45) 地域研、pp.68-70。
- 2015「イスラム雑誌『カラム』の風刺画」坪井祐司・山本博之編『カラムの時代6：近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper, No.53) 地域研、pp.14-16。

[短文・記事]

- 2014 “Book Review “Malay Kingship in Kedah: Religion, Trade, and Society,”” *Pacific Affairs*, vol.87, no.2 (University of British Columbia), pp.387-389.
- 2015「熱帯のすすきが招くキナバルの峰」『Think Asia』第19号(霞山会)、p.9。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015「アチェ津波被災者証言データベース」(災害対応の地域研究プロジェクト)。アチェ州の津波被災者証言111件に証言者特性や位置情報をつけて収蔵。バンダアチェ市内の54件について証言を日本語訳。Myデータベースに登録しプロジェクト内で共有。

[ソフトウェア、システム開発]

- 2014「アチェ津波モバイル博物館(スマホ版)」(災害対応の地域研究プロジェクト)。現在の津波被災地の景観に重ねて被災直後から復興過程の写真をAR表示し、復興過程を辿れるようにした。(西芳実と共同で開発)
- 2014「アチェ津波被災地メモリーハンティング」(災害対応の地域研究プロジェクト)。アチェ津波モバイル博物館収蔵の写真の一部をメモハンに登録し、アチェの津波直後と現在の様子の比較を可能にした。(北本朝展・西芳実と共同で開発)
- 2014「バンダアチェ今昔写真集メモリーハンティング」(災害対応の地域研究プロジェクト)。バンダア

チェ市の津波前の写真を登録し、津波前後の街の景観の比較を可能にした。(北本朝展・西芳実と共同で開発)

- 2014「神戸被災地メモリーハンティング」(災害対応の地域研究プロジェクト)。阪神淡路大震災被災地の被災直後の写真を登録し、復興の過程を比較できるようにした。(北本朝展・西芳実と共同で開発)。
- 2014「アチェ津波アーカイブ(スマホ版)」(災害対応の地域研究プロジェクト)。アチェ津波アーカイブをスマホで表示可能にしたもの。(渡邊英徳・西芳実と共同で開発)
- 2015「Tsunami Datang」(災害対応の地域研究プロジェクト)。津波被災者の証言をもとにインドネシアの小中学生を対象にした防災教育アプリ。(西芳実と共同で開発)

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2014.6.8 第91回研究大会パネル「2013年フィリピン台風災害に見る公共性の越境と再編」、東南アジア学会、南山大学(企画)。
- 2014.7.3 日本・マレーシア合同セミナー「遺産から展望へ：出版物の翻字復刻、電子アーカイブ化と出版・教育・研究への展開」、東京国際ブックフェア、東京ビッグサイト(企画)。
- 2014.7.26「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」、地域研究コンソーシアム、大阪大学(宮原暁、立岩礼子、西芳実・石丸次郎と共同で企画)。
- 2014.8.4-5「親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語」、日本マレーシア学会ほか、京都大学芝蘭会館(企画)。
- 2014.8.19 “Digitization and Transliteration of Jawi Material: Its Importance and Relevance in Contemporary Malaysia”, マレーシア社会科学学会(マレーシア)、トレンガヌ大学(マレーシア)(企画)。
- 2014.9.10「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」、日本マレーシア学会ほか、京都大学稲盛財団記念館(西芳実と共同で企画)。
- 2014.9.15「映画『ジャングル・スクール』が拓くフロンティア：シネマと地域研究のマリアージュ」、日本マレーシア学会ほか、チャンネルシティ博多貸会議室(西芳実と共同で企画)。

- 2014.11.17 Persidangan Pengarkiban Digital (デジタルアーカイブに関する研究会)、国立言語出版局 (マレーシア) (企画)。
- 2014.12.14 『『教育立国』を目指すマレーシア』、日本マレーシア学会、東京大学山上会館 (企画)。
- 2015.1.30 『『カラムの時代』と現代を結ぶ：マレー・イスラム定期刊行物の翻字復刻・電子アーカイブ化』、地域情報学プロジェクト、地域研セミナー室 (企画)。

[参加報告]

- 2014.7.3 “Digital Archiving of Malay Magazine “Qalam”, From Tradition to Vision”, Kota Buku, CIAS, Klasika Media, 東京ビッグサイト。
- 2014.9.28 「津波被災者からのメッセージを読み解け」アカデミックデイ2014京都大学 (学術研究支援室、研究国際部研究推進課、「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ)、京都大学百周年時計台記念館。
- 2014.11.17 “Pengarkiban Digital Majalah Qalam (カラム記事デジタルアーカイブ),” Persidangan Pengarkiban Digital (デジタルアーカイブに関する研究会), DBP, Klasika Media, CIAS, 国立言語出版局 (マレーシア)。

[その他の役割]

- 2014.6.8 第91回研究大会パネル「2013年フィリピン台風災害に見る公共性の越境と再編」、東南アジア学会、南山大学 (趣旨説明)。
- 2014.7.26 「世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から」、地域研究コンソーシアム、大阪大学 (趣旨説明)。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤 (A) 「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」(2011～2014年度)。
- 科研費挑戦的萌芽「学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化」(2013～2015年度)。

⑨受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2014.3.30 「日本の災害研究者らが台風ヨランダの被災地を訪問し、自治体関係者らに助言」『まにら新聞』(台風30号で甚大な被害を受けたフィリピン・サマール島を訪れ、スマトラの津波の経験をもとに被災地で今後起こりうる問題を提示)。

- 2014.4.17 “Majalah Qalam Dwituliskan,” *Berita Harian* (CIASの地域情報学プロジェクトが進めているジャウィ雑誌『カラム』のジャウィ・ローマ字併記版の刊行について紹介)。
- 2014.7.23 “Transliterasi Qalam, Jawi ke Rumi,” *Berita Harian* (CIASの地域情報学プロジェクトが進めているマレー語雑誌記事データベース化プロジェクトの紹介およびCIASとコタブクの学術協力協定締結について紹介)。
- 2014.9.13 “Kompilasi Khazanah Sejarah,” *Utusan Malaysia* (CIASがマレーシアのクラシカメディアと共同で進めているジャウィ雑誌『カラム』のローマ字版の刊行について紹介)。
- 2014.12.2 “Pangkalan Data Melayu Tulisan Jawi,” *Berita Harian* (マレー語雑誌記事データベースに対する協力に関してマレーシアの国立言語出版局 (DBP) と本センターが行った共同記者会見を紹介)。
- 2014.12.10 “Qalam Rekod Sejarah Bangsa,” *Berita Harian* (CIASがマレーシアのクラシカメディアと共同で進めているジャウィ雑誌『カラム』のローマ字版の刊行について紹介)。
- 2014.12.10 「大津波の記憶 京大がアプリ スマトラ地震」『朝日新聞』夕刊6面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.14 「津波の記憶アプリに スマトラ地震10年 京大が開発」『中日新聞』朝刊38面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.14 「スマトラ沖地震の津波 被害・復興記録アプリで閲覧」『日本経済新聞』朝刊34面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.15 「津波被災地のアプリ開発 景観変化を記録、京大准教授ら」『じゃかるた新聞』朝刊1面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.16 「スマトラ津波復興アプリに『震災被災地でも活用を』京大准教授開発 街並み写真や証言写真」『京都新聞』夕刊1面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.22 「スマトラ大津波アチェ 災害記録をアプリで公開 京大が開発防災教育に役立て」『産経新聞』朝刊22面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.23 「スマトラ地震 知るアプリ 京大研究者ら 証言や被災写真」『読売新聞』朝刊33面 (スマトラの津波に関するスマホアプリについて)。
- 2014.12.24 「スマトラ沖大地震 アプリでわかる被災

- 害・復興 発生10年』『毎日新聞』夕刊8面（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
- 2014.12.26 「アプリで被災経験共有『災害を風化させない』バンダアチェ』『じゃかるた新聞』（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.26 「インド洋津波の記憶、アプリで継ぐ 京大准教授ら開発』『朝日新聞』夕刊2面（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.25 “TSUNAMI ACEH: TDMRC Dan CIAS Universitas Kyoto Luncurkan Aplikasi Tsunami,” *Kabar24*（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.26 “Ragam Produk TDMRC dan Mitra,” *Smong*（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.27 “CIAS Kenalkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile,” *Serambi Indonesia*（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.27 “TDMRC Unsyiah Luncurkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile Museum,” *Atjeh Post*（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2014.12.27 「天声人語『津波の記憶をとどめる』』『朝日新聞』朝刊1面（スマトラの津波に関するスマホアプリについて）。
 - 2015.1.10 「映画から読み解くアジアの社会状況 加速する・人・物・情報の“混成化”』『毎日新聞』夕刊2面（混成アジア映画研究会の活動を紹介）。

[テレビ・ラジオ出演等]

- 2014.4.26 「Qalam Moden」 al-Hijrah（番組名「Assalamualaikum」）。CIASの地域情報学プロジェクトがマレーシアのクラシカメディアと協力して進めているジャウイ雑誌記事データベースを活用した教育・出版の取り組みについて紹介。
- 2014.7.3 「Ketengah bahan bacaan pilihan warga Jepun」TV3（番組名「Buletin Utama」）。東京国際ブックフェアで行われた『カラム』データベース化プロジェクトに関するセミナーについて紹介。
- 2014.11.18 「Qalam: Siri Majalah Melayu Lama」RTM1（番組名「Selamat Pagi Malaysia」）。CIASの地域情報学プロジェクトが進めているジャウイ雑誌『カラム』のデジタルアーカイブ化プロジェクトについて紹介。
- 2014.12.24 「Integrasi Buku Di Negara Matahari Terbit」RTM1（番組名「Panorama」）。東京国際ブックフェアで発表された『カラム』データベース化プロジェクトについて紹介。

- 2014.12.25 「インド洋大津波の記憶伝えるアプリ 京大開発」NHK（番組名「おはよう日本」）。

⑩海外調査活動

- 2014.4.29-5.7. フィリピン、科研費。
- 2014.8.15-9.5. マレーシア、科研費。
- 2014.11.15-11.20. マレーシア、CIAS地域情報学プロジェクト。
- 2014.12.22-1.7. インドネシア、マレーシア、CIAS地域情報学プロジェクト、科研費。
- 2014.3.5-3.10. インドネシア、京都大学東南アジア研究所。

⑪教育

- 2014.9.1-2015.3.31. 「地域研究への招待—映画で読み解くアジア」（京都大学ポケット・ゼミ）担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2010.4.1-2015.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。
- 2010.4.1-2015.3.31 日本マレーシア学会運営委員。
- 2011.1.1-2015.3.31 東南アジア学会理事。

情報資源研究部門 助教

谷川 竜一（たにがわりゅういち）

①専門分野

アジア近現代都市・地域空間論、建築史・都市史

②経歴

- 2004年 東京大学生産技術研究所技術職員
- 2009年 東京大学生産技術研究所助教
- 2012年 京都大学地域研究統合情報センター助教

③研究課題

- (1) アジア近現代都市・建築に関する情報プラットフォームの構築
- (2) 建造物を通じた日本・アジア近現代関係史の解明
- (3) 記憶の収蔵庫としてのミュージアム建設やポピュラーカルチャーによるまちづくりの手法分析

④主要業績

- 2011 「東アジア近現代の都市と建築：建築・都市に織り込まれた帝国・国・社会」和田春樹ほか編『岩波講座東アジア近現代通史別巻 アジア研究の来歴

と展望』岩波書店、pp.177-202。

- 2011 “Colonial Structures Veiled in Publicity: Lighthouses, Bridges, and Dams Built by the Japanese Empire in Colonial Korea,” *Our Living Heritage: Industrial Buildings and Sites of Asia*, mAAN(modern Asian Architecture Network) 8th International Conference, Seoul, August 25-27, 2011, pp. 77-87.
- 2010 「京都国際マンガミュージアムにおける来館者調査：ポピュラー文化ミュージアムに関する基礎研究」『京都精華大学紀要』37号、pp. 77-92（村田麻里子らと共著）。
- 2008 「一九三九年、烏口の記憶：京城高等工業学校建築科のある同窓生たちの生涯」『Mobile Society Review』（NTTドコモ／モバイル社会研究所）14号、pp. 30-41。
- 2008 「流転する人々、転生する建造物：朝鮮半島北部における水豊ダムの建設とその再生」『思想』1005号、岩波書店、pp. 61-81。

⑤ 出版業績

[共編]

- 2015 『記憶と忘却のアジア』（関連地域研究シリーズI）、青弓社（貴志俊彦・山本博之・西芳実と共編）。

[ワーキングペーパー・報告書の編集]

- 2015 『世界のジャスティス』（CIAS Discussion Paper, No. 50）、京都大学地域研究統合情報センター。
- 2015 『日本のマンガミュージアム2』（CIAS Discussion Paper, No. 52）、京都大学地域研究統合情報センター。

[レフリー付雑誌論文]

- 2015 「韓国漫画映像振興院における来館者調査：来館者の物理的・社会文化的・個人的コンテクストをめぐって」『人間学研究』13、pp.49-66（山中千恵・村田麻里子・伊藤遊と共著）。

[分担執筆]

- 2015 「往古への首都建設：平壤の朝鮮式建物」貴志俊彦ほか編『記憶と忘却のアジア』青弓社、pp.96-119。

[短文・記事]

- 2014 「2013年度共同研究ワークショップおよび共同利用・共同研究報告会」『人文情報学月報』35号。
- 2015 「アーカイブ時代に何が大切か：情報学の現場を歩く（地域・環境・情報の出会い 3人で歩くフィールドシリーズ）」『SEEDer』（昭和堂）、pp.68-79。

[その他の刊行物]

- 2014 『藤原家解体前調査報告書』京都大学地域研究統合情報センター、p.34。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2015 「チエノワイカル」（地域情報学プロジェクト）。奈良県生駒郡斑鳩町の記憶アーカイブ300件。斑鳩町立図書館においてアーカイブ事業の基盤としてだけでなく、閲覧インターフェースとしても利用中（RADと共同で開発）。

⑦ 研究集会

[参加報告]

- 2014.7.12 「朝鮮市街地計画令と平壤都市計画書」研究会「戦時期朝鮮社会の諸相」研究会、京都大学。
- 2014.10.19 「平壤復興と創造された景観」朝鮮史研究会2014年年次大会、京都府立大学。
- 2014.10.22 “Axis, Modernity, and Colonialism,” Architecture and urbanism in former Spanish colonies in Africa - The creation of a habitat for modernity: a postcolonial definition, 主催：京都大学地域研究統合情報センター、開催地：京都大学地域研究統合情報センター。
- 2015.3.30 「金日成広場の来歴」日朝学術研究会第9回例会、同志社大学。

[その他の役割]

- 2014.4.26 京都大学地域研究統合情報センター2013年度共同研究ワークショップ「世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす」京都大学地域研究統合情報センター、開催地：京都大学地域研究統合情報センター（企画・運営）。
- 2014.8.7 「マンガ文化で熊本を活性化：マンガを活用した民・官・学の取り組み：マンガ文化は地域をいかに変えるのか？」マンガミュージアム研究会、京都大学地域研究統合情報センター、仁愛大学、崇城大学、開催地：崇城大学芸術学部棟D-107（小川剛（崇城大学芸術学部助教）ほかと共同で企画・運営）。
- 2014.10.19 「朝鮮戦争からの復興と都市建築：平壤・咸興の事例から」朝鮮史研究会、京都府立大学（川喜田敦子・富田英夫と共同で企画・運営・司会）。
- 2014.10.23 “Living Street: Connecting the Nodes in the World Heritage City of Georgetown,” 京都大学地域研究統合情報センター、開催地：京都大学地域研究統合情報センター（林憲吾と共同で企画・運営）。

コメンテーター)。

- 2014.10.26「思い出の中の並松」「『斑鳩の記憶』アーカイブ化ワークショップ」、京都大学地域研究統合情報センター、斑鳩町立図書館、開催地：斑鳩町立図書館（斑鳩町立図書館ほかと共同で企画・運営）。
- 2014.11.13 “Architecture and urbanism in former Spanish colonies in Africa - The creation of a habitat for modernity: a postcolonial definition,” 京都大学地域研究統合情報センター、開催地：京都大学地域研究統合情報センター（企画・運営）。
- 2015.1.30「スプロール化した都市の中の隠された智慧：東南アジアにおける都市の『無秩序』を考える」JCAS次世代ワークショップ、地球研、JCAS、開催地：地球研（三村豊と共同でコメンテーター）。
- 2015.3.9「駅周辺の思い出」「『斑鳩の記憶』アーカイブ化ワークショップ」、京都大学地域研究統合情報センター、斑鳩町立図書館、開催地：斑鳩町立図書館（斑鳩町立図書館ほかと共同で企画・運営）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤（B）「20世紀北朝鮮の建築・都市通史の解明」（2014～2018年度）。
- 科研費挑戦的萌芽「博物館建築がポピュラー文化受容に果たす空間的機能の解明とその設計還元に向けた研究」（2012～2014年度）。

⑩海外調査活動

- 2014.8.10-24 ドイツにおいて北朝鮮の戦後復興資料調査を実施した、科研費。
- 2015.1.2-14 韓国において北朝鮮の戦後復興資料調査を実施した、科研費。

⑪教育

- 2014.10.1-2015.3.31 京都外国語大学、非常勤講師、「現代アジア地域事情II」担当。
- 2014.10.1-2015.3.31 京都造形芸術大学、非常勤講師、「西洋建築史」「図学」担当。
- 2014.4.1-2015.3.31 奈良学園高校スーパーサイエンスハイスクール理科課題研究指導委員。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014.4.1-2015.3.31 日本建築学会近代建築史小委員会委員。
- 2014.4.1-2015.3.31 NPOモダンアジア建築アーキテク

チュアルネットワーク東京（mAAN東京）理事。

高次情報処理研究部門 教授

原 正 一 郎 (はら しょういちろう)

①専門分野

情報学

②経歴

- 1989年 学術情報センター助手
- 1991年 国文学研究資料館助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 地域情報学（Area Informatics）の創出
- (2) Humanities GISに関する研究
- (3) デジタルアーカイブに関する研究
- (4) 画像処理、古文書文字認識に関する研究
- (5) 医療情報学（地域看護における情報処理）に関する研究

④主要業績

- 2012『歴史GISの地平：景観・環境・地域構造の復原に向けて』HGIS研究協議会編（川口洋（代表）・石崎研二・後藤真・関野樹・原正一郎）、勉誠出版、288p.
- 2010 “Area Informatics: Concept and Status,” in Toru Ishida, ed., *Culture and Computing: Computing and Communication for Crosscultural Interaction* (Lecture Notes in Computer Science 6259), Springer, pp. 214-288.
- 2009「地域研究のための資源共有化システムとメタデータに関する研究」『東南アジア研究』46巻4号、pp. 608-645。
- 2003「健診情報のための電子的交換規約」『情報知識学会誌』12巻4号、pp. 32-52（杉森裕樹ほかと共著）。
- 2002「国文学支援のためのSGML/XMLデータシステム」『情報知識学会誌』11巻4号、pp. 17-35（安永尚志と共著）。
- 1997 “Markup and Conversion of Japanese Classical Texts Using SGML in the National Institute of Japanese Literature,” *D-lib Magazine*, July/ August 1997 (<http://www.dlib.org/dlib/july97/japan/07hara.html>) (coauthor: Hisashi Yasunaga).

⑤ 出版業績

[レフリー付雑誌論文]

- 2014 「研究者が発信する学術情報の流通促進を目指した情報基盤：京都大学地域研究統合情報センターの試み」『人文科学とコンピュータシンポジウム 論文集』Vol.2014, No.3, pp.185-192。

- 2014 “Application of RDF to Digital Gazetteer,” *PNC 2014 Annual Conference and Joint Meetings Abstract*, CD-ROM.

[短文・記事]

- 2014「アーカイブ」『SEEDer』No.11 (昭和堂/地球研)、p.1。

⑥ 情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2014 「地図データベース」(ライフとグリーンを基軸とする持続型社会発展研究のアジア展開)。地域研、東南研、地球研の地図関連データベース用メタデータの設計、データ作成およびデータベースシステム構築を継続した。画像非公開。

- 2014 「資源共有化システム」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。UCバークレイ東アジア図書館および東京外国語大学OPACの連携。通常版(公開)、多言語版(制限)。

- 2014 「Myデータベース」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。メタデータ自動更新機能の追加と既知の問題への対応。試験公開中。

- 2014 「マンガTOPICMAPS」(複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。動画情報の追加。アクセス制限(内藤求と共同で開発)。

- 2014 「地名辞書」(大学間連携を通じた広域アジアにおける地球環境学リポジトリの構築)。地名辞書のRDF化実験。アクセス制限。

[ソフトウェア、システム開発]

- 2014 「HuMap」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。Social Networkの可視化機能の追加、アフィン変換機能の追加。公開中。

- 2014 「MyデータベースAPI」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。JSON出力機能の追加。公開中。

[データベース作成のための資料収集・整理活動など]

- 2014 「HuMapマニュアル」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。

- 2014 「Myデータベースマニュアル」(地域情報学プロジェクト、複合共同研究ユニット「地域情報学の展開」)。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2010.10.21-23 PNC 2014 Annual Conference and Joint Meetings、中央研究院(台湾)、ECAI, University of California Berkeley (USA)、National Palace Museum, Taipei, Taiwan (運営委員会委員)。

- 2014.12.13-14 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2014」、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会(SIG-CH)、国立情報学研究所(東京)(プログラム委員会委員)。

- 2014.6.27 Pre-Symposium on Research Collaboration between ASEAN and Kyoto (Session: Area Informatics) 京都大学ASEANセンター、Hotel Grand Millennium Sukhumvit (柴山守と共同でオーガナイザー)。

[招待講演]

- 2014.9.16 “Development of Database System for Community Strengthening at Tambon Level in Thailand, KCU-CSEAS Conference on Rural Northeast Thailand in Transition: Land Use, Farming Systems and Households, 東南アジア研究所(京大)、コンケン大学(コンケン、タイ)(copresenter: Khanitta Nuntaboot)。

- 2014.9.29 “Full-text Database of “Historical Earthquake Documents in the Ancient and Medieval Ages in Japan” - IT Approaches to Disaster Data -,” Workshop on “Human-Environment Interaction in Indo-Pacific History: The Inter-relationship between Geophysical and Meteorological Systems and Historical Events, c.500BCE to the Present,” History and Southeast Asian Studies, Murdoch University, Murdoch University (Perth, Australia)。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費データベース「東南アジア地域研究史資料集成データベース」(2014年度)。

⑨ 受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2014.11.18 「Qalam: Siri Majalah Melayu Lama」RTM1 (番組名「Selamat Pagi Malaysia」)。CIASの

地域情報学プロジェクトが進めているジャウイ雑誌『カラム』のデジタルアーカイブ化プロジェクトについて紹介。

⑩海外調査活動

- 2014.6.24-30 タイのASEAN拠点にて京都大学 ASEAN 拠点開所式に参列、京都大学事務本部。
- 2014.8.26-9.3 アメリカ合衆国University of California Berkeley East Asian Library, Center for Japanese Studies, Electronic Cultural Atlas Initiativeにて日本古典史料の英日全文連携検索システムの設計と構築、地図・地名データベースとの連携に関する研究を実施、科研費。
- 2014.9.14-17 タイ国のコンケン大学農学部にKKU-CSEAS Conference on Rural Northeast Thailand in Transition: Land Use, Farming Systems and Householdsのために滞在、東南アジアにおける持続型生存基盤研究。
- 2014.9.27-10.2 オーストラリアのMurdoch UniversityにてHuman-Environment Interaction in Indo-Pacific History: The Inter-relationship between Geophysical and Meteorological Systems and Historical Events, c.500BCE to the Presentに参加、先方負担 (Murdoch University, Asia Research Institute・James Warren)。
- 2014.10.20-24 台湾故宮博物院にてPNC 2014 Annual Conference and Joint Meetingsに参加、先方負担 (台湾中央研究院)。
- 2014.11.16-19 マレーシア国立言語出版局、マレーシア・イスラム理解研究所、マレーシア国立図書館にて学術協力協定に基づく研究について打ち合わせを実施、教育研究事業費。
- 2014.12.17-27 マレー大学 (マレーシア)、タイ (ASEAN拠点)、シアクアラ大学 (インドネシア) 等にて、The 4th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversityへの参加、タイのデジタル地図に関する検討、被災10周年記念公式行事への出席などを行った、研究拠点形成事業 (京都大学総合博物館)、科研費および頭脳循環アセアン・プログラム (京都大学東南アジア研究所)。
- 2015.1.4-10 タイ国のSilpakorn UniversityにてANGISに出席、科研費。
- 2015.2.28-3.6 タイ国のGrand Millennium Sukhumvit Bangkok, BITEC Convention Centerにて、京都ASEANフォーラム予備会議2015、Thailand Community Management of Local Government in ASEANに出席、

科研費。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014.4.1-2015.3.31 人間文化研究機構研究資源共有化事業委員会委員。
- 2014.4.1-2015.3.31 人間文化研究機構人間文化研究情報資源共有化連携企画部会会員。
- 2014.4.1-2015.3.31 人間文化研究機構国文学研究資料館電子情報委員会委員。
- 2014.4.1-2015.3.31 人間文化研究機構総合地球環境学研究所地球環境学リポジトリ事業運営委員会委員。
- 2014.4.1-2015.3.31 情報知識学会編集委員会委員。
- 2014.4.1-2015.3.31 情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会連絡員。
- 2014.4.1-2015.3.31 ECAI (Electronic Cultural Atlas Initiative), Executive Committee Member.
- 2014.4.1-2015.3.31 PNC (The Pacific Neighborhood Consortium), Steering Committee Member.
- 2014.4.1-2015.3.31 JADH (Japanese Association for Digital Humanities), Executive Board Member.

高度情報処理研究部門 教授

林 行夫 (はやし ゆきお)

①専門分野

東南アジア仏教徒社会の地域研究、文化人類学

②経歴

- 1988年 国立民族学博物館研究部助手
- 1993年 京都大学東南アジア研究センター (現東南アジア研究所) 助教授
- 1996年 京都大学大学院人間・環境学研究科併任助教授
- 1998年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科併任助教授
- 2001年 京都大学博士 (人間・環境学)
- 2002年 京都大学東南アジア研究所教授
- 2002年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科併任教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター教授

③研究課題

- (1) 大陸部東南アジア仏教徒社会の動態をめぐる地

域間比較研究

- (2) 宗教活動と生活空間の編制に関する歴史・地域情報学的研究
- (3) 文化表象の地域人類学的研究

④主要業績

- 2011『新アジア仏教史4 スリランカ・東南アジア：静と動の仏教』佼成出版社（奈良康明ほか監修、編集協力／共著）。
- 2009『〈境域〉の実践宗教：大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会（編著）。
- 2003 *Practical Buddhism among the Thai-Lao: Religion in the Making of Region*, Kyoto/ Melbourne: Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
- 2002 *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*, Bangkok: Amarin Printing and Publishing (coeditor: Aroonrut Wichiankeo).
- 2000『ラオ人社会の宗教と文化変容：東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会。

⑤出版業績

[ワーキングペーパー・報告書の編集]

- 2015『積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究：東アジア・東南アジア地域を対象として』(CIAS Discussion Paper, No.46)、地域研究統合情報センター（長谷川清と共編）。

[レフリー付雑誌論文]

- 2014 “Why Theravada Buddhism is a Living Religion: Some Observations from Mapping the Practices of Theravadins of Southeast Asia,” *Journarl of International Buddhist Studies*, volume 5, pp.195-212 (coauthor: Shibayama Mamoru).

[雑誌論文（レフリーなし）]

- 2014「上座仏教徒が伝えること：東南アジア地域の調査から」『龍谷史壇』139号、pp.26-40。
- 2014『石井米雄コレクション』の経緯と展望』『SEEDer』11号、pp.22-29。

[分担執筆]

- 2014「功德を食べる人びと：東南アジア上座仏教徒の宗教と食」南直人編『宗教と食』（食の文化フォーラム）ドメス出版、pp.155-176。

[シンポジウム・ワークショップなどの発表原稿（レフリー付でないもの）]

- 2014 “Searching for Practice among the Theravadins:

Towards A Comparative-Regional Analysis of the Dynamics of Buddhist Cultures in Mainland Southeast Asia,” International Seminar at The Buddhist Research Institute of Mahachulalongkornrajavidyalaya University, The Buddhist Research Institute of Mahachulalongkornrajavidyalaya University, タイ国アユタヤ市（配布レジュメとパワーポイント集）。

[短文・記事]

- 2015「境域の東南アジア仏教」パーリ仏教文化学会編『パーリ仏教文化事典』めこん、(印刷中)。
- 2014「身体知と教養知を往還し、東南アジア学の礎を築いた石井米雄（モノ語る京大の歴史：ふりかえれば未来）」『紅菖』26号（京都大学）、pp.18-20。

⑥情報共有化の業績

[データベース公開]

- 2015「石井米雄コレクション」（地域情報学プロジェクト）。蔵書と日誌、旅券、写真などの非図書資料、蔵書約1万2千点を部分的に一般公開（柴山守と共同で開発）。

[データベースの作成]

- 2015「Mapping Practice of Theravadins」（地域情報学プロジェクトおよび2014-2017年度科研（基盤研究（A）[一般]）「<宗教=社会複合マッピング>からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」（代表：林行夫）。共同研究者間で共有（柴山守と共同で開発）。
- 2015「北タイ古文獻（貝葉資料）にみる民族間関係」（「タイ古文獻データベースの構築」（代表・柴山守）。北タイ・西南中国境域で流通していた古文獻を現代タイ語字に翻字化、民族、環境、生業、交易などに関わる項目と関連記載の統合型イッデックス。共同研究者間で共有（Aroonrut Wichiankeoと共同で開発）。

⑦研究集会

[招待講演]

- 2014.7.1 “Searching for Practice among the Theravadins: Towards A Comparative-Regional Analysis of the Dynamics of Buddhist Cultures in Mainland Southeast Asia,” International Seminar at The Buddhist Research Institute of Mahachulalongkornrajavidyalaya University, The Buddhist Research Institute of Mahachulalongkornrajavidyalaya University,

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費基盤研究 (A) 一般「<宗教=社会複合マッピング>からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容」(2014-2017年度)。

⑩海外調査活動

- 2014.6.29-7.5 タイ国The Buddhist Research Institute of Mahachulalongkornrajavidyalaya Universityでの集中講義と資料収集を実施、先方負担 (タイ国立マハーチュラーロンコーン仏教大学)。
- 2014.8.2-8.18 スリランカ (コロンボ、ゴール)、東北タイにおける寺院マッピング調査を実施した、科研費。
- 2014.9.21-10.3 タイ国Chulalongkorn Universityを拠点に東北タイにおける寺院マッピング追跡調査を実施、科研費。
- 2014.12.8-14 タイ国Chulalongkorn Universityを拠点に東南アジア<宗教=社会複合マッピング>にかかわる1900年初期のタイ統計資料調査を実施、科研費。
- 2015.2.21-24 台湾の東和禅寺・臨濟寺等を拠点に、台北、台南における東南アジア、日本関連寺院の調査・資料収集を実施、科研費。
- 2015.3.1-8 タイ国のNational Archives of Thailandにおいて東南アジア<宗教=社会複合マッピング>にかかわるタイ1930-45年の統計資料調査を実施、科研費。

⑪教育

- 2014年度 龍谷大学 (文学部・非常勤講師)。
- 2014年度 早稲田大学 (大学院アジア太平洋研究科・博士論文副指導教員)。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014年度 味の素・食の文化センター共同研究員。
- 2014年度 マハーチュラーロンコーン大学仏教文化研究所 (タイ) 紀要編集委員。
- 2014年度 マハーサラカーム大学東北タイ芸術文化研究所 (タイ) 客員教授。
- 2014年度 云南民俗大学大学院東南アジア言語文化研究所 (中国) 永年名誉教授。
- 2014年度 日本学術振興会関連プログラム選考委員会評価委員・選考委員。
- 2014年度 大同生命地域研究賞推薦委員。

①専門分野

農業生態学、ベトナム地域研究

②経歴

- 1999年 京都大学東南アジア研究センター (現東南アジア研究所) 助手
- 2006年 同助教授
- 2006年 京都大学地域研究統合情報センター助教授
- 2007年 同准教授

③研究課題

- (1) ベトナム紅河デルタ村落研究
- (2) 東南アジアの土地利用変化に関する研究

④主要業績

- 2012 「自然科学分野の地域研究：地域情報の限定性を克服するために」『地域研究』12巻2号、pp. 116-130。
- 2009 「東南アジア生態史」東南アジア学会監修・東南アジア史学会40周年記念事業委員会編集『東南アジア史研究の展開』山川出版社、pp. 156-171。
- 2006 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・東南アジア研究所編『京大式フィールドワーク入門』NTT出版。
- 2004 “Development Process of Cash Crops in the Northern Mountains Region of Vietnam: A Case Study in Moc Chau District of Son la Province, Vietnam,” in Hisao Furukawa, *et al.*, eds., *Ecological Destruction, Health, and Development: Advancing Asian Paradigm*, Kyoto University Press, pp. 467-479.
- 2004 「ベトナム紅河デルタにおける農業生産システムの変化と合作社の役割」『年報村落社会研究 東アジア農村の兼業化：その持続性への展望』40号、pp. 247-268。

⑤出版業績

[分担執筆]

- 2014 「土地とその改変」落合雪野・白川千尋編『ものづくりの植物誌』臨川書店、pp.56-76。
- 2014 「ベトナム国境域」落合雪野編『国境と少数民族』めこん、pp.33-41。
- 2014 「漢人・地方政府と結びついた農業生産」落

合雪野編『国境と少数民族』めこん、pp.95-104。

- 2014「ベトナムと中国の国境域」落合雪野編『国境と少数民族』めこん、pp.105-133。

[雑誌論文 (レフリーなし)]

- 2014「市場経済移行下ヴェトナム紅河デルタの行政と農村社会：2011～12年現地調査に基づく試論」『青山国際政経論集』第92巻、pp.53-95 (藤田幸一・大野明彦と共著)。

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015「巻頭言 社会と学問、あるいは成果主義と地域研究」川上桃子・塩谷昌史・柳澤雅之編『地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン』(JCAS Collaboration Series, No.11)、地域研究コンソーシアム・京都大学地域研究統合情報センター・日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所、pp.3-4 (川上桃子・塩谷昌史と共編)。

[シンポジウム・ワークショップなどの発表原稿 (レフリー付でないもの)]

- 2014「インドネシア・ジョクジャカルタ近辺での炭製造と木質材料の循環」『第12回木質炭化学会・特別講演』立命館大学朱雀キャンパス大講義室、pp.57-58。
- 2014 “Interaction between institutional setting and local activities for landscape making in Vietnam,” the 6th international conference of The Latin American Studies Council of Asia and Oceania (CELAO), Fac. of Letters, Kyoto University, p.47.
- 2014 アジア農村研究会第22回調査実習報告会『経済成長下のベトナム農村の社会経済：メコンデルタ・ティエンザン省一農村の事例』東海大学代々木キャンパス。

⑥情報共有化の業績

[データベースの作成]

- 2014「フィールドノート・データベース」(地域情報学プロジェクト)。高谷フィールドノートから、スマトラ、フィリピン、中国南部のデータを追加した。それ以外に、データの追加が可能なCSV形式のデータセットを、ロンボクと東ジャワ、スマトラ、ミャンマー、インド、南インドの記述について作成した(高田百合奈と共同で開発)。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2014.9.12 アジア農村研究会報告会、アジア農村研

究会、ベトナム、ミトー市(組織委員長)。

- 2014.9.30「地域研究と情報の読み解き」地域研究コンソーシアム・情報資源部会&地域研究方法論部会合同研究会、東京大学東洋文化研究所(組織委員長)。
- 2014.10.3「地域研究と情報の読み解き」地域研究コンソーシアム・情報資源部会&地域研究方法論部会合同研究会、京都大学地域研究統合情報センター(組織委員長)。
- 2014.10.9「地域研究と情報の読み解き」地域研究コンソーシアム・情報資源部会&地域研究方法論部会合同研究会、京都大学地域研究統合情報センター(組織委員長)。
- 2014.10.17 東南アジアの自然と農業研究会第167回例会、東南アジアの自然と農業研究会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(組織委員長)。
- 2014.11.15 アジア農村研究会第22回調査実習報告会「経済成長下のベトナム農村の社会経済：メコンデルタ・ティエンザン省一農村の事例」、アジア農村研究会、東海大学代々木キャンパス(組織委員長)。
- 2014.12.19 東南アジアの自然と農業研究会第168回例会、東南アジアの自然と農業研究会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(組織委員長)。
- 2014.12.21 東南アジア学会・桜井由躬雄先生追悼シンポジウム「第二部 アジア農村研究会の回顧と展望、1992～2014」、東南アジア学会、立教大学(アジア農村研究会と共同で顧問)。
- 2015.2.13 東南アジアの自然と農業研究会第169回例会、東南アジアの自然と農業研究会、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科(組織委員長)。

[参加報告]

- 2014.4.27「CIAS所蔵資料の活用」CIAS共同利用・共同研究報告会、CIAS、京都。
- 2014.6.1 “Toward a New Corporation between Logging Company and Local People: From a Case Study of the Dayak in a Concession Area of Central Kalimantan, Indonesia,” 14th Congress of the International Society of Ethnobiology, the International Society of Ethnobiology, Bhutan.
- 2014.9.17 “Interaction between institutional setting and local activities for landscape making in Vietnam,” the 6th international conference of The Latin American Studies Council of Asia and Oceania (CELAO), The

Latin American Studies Council of Asia and Oceania (CELAO), Fac. of Letters, Kyoto University.

- 2015.3.17 “Potential Conflict under the Rapid Socio-economic Change in Mountain Region of Central Kalimantan: Sustainable Forest Management in Kalimantan,” Sustainable Forest Management in Kalimantan, Indonesia: Forwarding a step from sharing research findings to further collaboration between logging company and academic society, CIAS, Pontianak, Indonesia.
- 2014.11.15 「メコンデルタ村落における農村社会の変容：テーマ報告のアウトライン」、アジア農村研究会第22回調査実習報告会「経済成長下のベトナム農村の社会経済：メコンデルタ・ティエンザン省一農村の事例」、アジア農村研究会、東海大学代々木キャンパス。

[招待講演]

- 2014.6.13 「インドネシア・ジョクジャカルタ近辺での炭製造と木質材料の循環」第12回木質炭化学会・特別講演、木質炭化学会、立命館大学朱雀キャンパス。

[その他の役割]

- 2014.6.14 トヨタ財団 研究助成プログラム助成対象者ワークショップ、トヨタ財団・CIAS、京都大学（コメント）。
- 2014.12.21 東南アジア学会・桜井由躬雄先生追悼シンポジウム「第二部 アジア農村研究会の回顧と展望、1992～2014」、東南アジア学会、立教大学（司会）。
- 2015.2.14 「現代アフリカにおける植物利用と地域植生の持続可能性」CIAS共同研究個別ユニット「アフリカにおける地域植生と植物利用の持続可能性」、京都大学稲盛財団記念館（コメンテーター）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費基盤研究（A）「森林の包括的利用システムの地域間比較研究」（2010-14年度）。
- 大学間連携を通じた広域アジアにおける地球環境学リポジトリの構築：自然と調和した社会構築を目指す新たな知の拠点形成事業「フィールドデータベース」（2013-15年度）。

⑩海外調査活動

- 2014.5.12-17 Tien Giang大学を拠点として「ベトナム南部村落における農村社会の変容」について調査

を実施、科研費。

- 2014.5.27-6.8 ブータン農林省森林公園サービス局にて国際会議に参加、個人研究費。
- 2014.8.30-9.14 Tien Giang大学を拠点として「ベトナム南部村落における農村社会の変容」について調査を実施、科研費。
- 2014.12.9-13ベトナム農業システム研究所を拠点に「紅河デルタ村落の農村金融調査」を実施、科研費。
- 2014.2.17-27 ミャンマー林業省を拠点に「ラカイン州のマングローブ保護林における保全と開発」について調査を実施、科研費。
- 2015.3.15-25 インドネシアのタンジュンプラ大学、リアウ大学を拠点に、ポンティアナックでの国際会議主宰およびスマトラでの広域調査を実施、科研費。

⑪教育

- 2014年度 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程院生の博士論文指導（副査）担当。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014.4.1-2015.3.31 地域研究コンソーシアム運営委員。

高次情報処理研究部門 助教

亀田 堯宙 (かめだ あきひろ)

①専門分野

情報学

②経歴

2013年 情報・システム研究機構 特任研究員

2014年 京都大学地域研究統合情報センター 助教

③研究課題

- (1) 学術資料、論文からの情報抽出とその構造化
- (2) 研究におけるデータベースの利活用支援

④主要業績

2013 Akihiro Kameda, Kiyoko Uchiyama, Hideaki Takeda, Akiko Aizawa “Extraction of Semantic Relationships from Academic Papers using Syntactic Patterns,” The Fifth International Conference on Information, Process, and Knowledge Management.

2013 Akihiro Kameda, Fumihiko Kato, Utsugi Jinbo, Ikki Ohmukai, Hideaki Takeda: Integrate Japanese Red List into LOD of Species, PNC Annual Conference and Joint Meetings 2013.

⑤ 出版業績

[ワーキングペーパー・報告書など]

- 2015 「外の知識から見た「トルキスタン集成」」 帯谷知可編『書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る』(CIAS Discussion Paper, No.51) CIAS、pp.22-29。
- 2015 「カラムデータベースにおける理解支援」坪井祐司・山本博之編著『『カラム』の時代VI 近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper, No.53) CIAS、pp.10-13。

⑦ 研究集会

[参加報告]

- 2014.10.17 「Linked Open Dataによる絶滅危惧種情報共有の試みと国際化の展望」H-GIS 研究会、地域研。
- 2014.11.17 “Pengarkiban Digital Majalah Qalam (カラム記事デジタルアーカイブ),” Persidangan Pengarkiban Digital (デジタルアーカイブに関する研究会), DBP, Klasika Media, CIAS, 国立言語出版局 (マレーシア)。
- 2014.12.24 “Information and Communication Technology for Disaster Risk Reduction,” バンダアチェ。
- 2015.1.24 「知識・言葉の情報学と地域研究」第105回人文科学とコンピュータ研究会情報処理学会 人文科学とコンピュータ研究会、大阪国際大学守口キャンパス (大阪府守口市)。
- 2015.2.12 「データの可視化と問題発見／書誌情報データベースの新しい形を模索する：石井米雄 コレクションとトルキスタン集成の事例から」。

⑩ 教育

- 2013.10-2014.9 湘南工科大学 コンピュータ応用学科 非常勤講師 テキストマイニングやデータベース構築の実習。

白眉センター 特定准教授

王 柳蘭 (おうりゅうらん)

① 専門分野

文化人類学、東アジア、東南アジア地域研究

② 経歴

- 1994年3月 神戸女学院大学文学部英文学科卒業
- 1996年3月 京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了
- 1996年4月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程進学
- 1997年～2000年 タイ国チェンマイ大学留学
- 2003年11月 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程退学
- 2003年12月 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助手
- 2007年4月 同助教 (～2009年)
- 2009年4月～2012年11月 日本学術振興会特別研究員 RPD
- 2013年4月 白眉センター特定准教授

③ 研究課題

移民と宗教、医食文化、華人 (中国、タイ、台湾、日本)

④ 主要業績

- 2014 『下からの共生を問う：複相化する地域への視座』(CIAS Discussion Paper, No. 39) (編著)。
- 2011 『越境を生きる雲南系ムスリム：北タイにおける共生とネットワーク』昭和堂。
- 2011 「民族関係から『華』を考える：北タイ国境における雲南系回民を事例に」『中国研究月報』65巻2号、pp. 42-54。
- 2010 [特集企画代表] 「越境と地域空間：マイクロ・リジョンをとらえる」『地域研究』10巻1号。
- 2009 「北タイにおけるイスラーム環境の形成過程：中国雲南系ムスリム移民の事例から」林行夫編『〈境域〉の実践宗教：大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、pp. 729-781。

⑤ 出版業績

[ワーキングペーパー・報告書などの編集]

- 2015 『子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか：感じ方の育みと総合的理解の視点』(JCAS Collaboration

- Series, No.9)、CIAS、全119頁(飯塚宣子と共編)。
[ワーキングペーパー・報告書など]
- 2015「神戸華人キリスト教徒社会の形成：宣教師と華人の関係性に着目して」小島敬裕編『移動と宗教実践—地域社会の動態に関する比較研究』(CIAS Discussion Paper, No.47)、CIAS、pp.55-65。
 - 2015「下からの共生にもとづくネットワーク生成：タイに越境した雲南系ムスリムを事例に」(福谷彬・中山大将・巫靚共編『京都大学アジア研究教育ユニット報告書2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』、No.7) 京都大学アジア研究ユニット、pp.64-72。
 - 2015「基于“自下而上的共生”而形成的联系网络—以移居到泰国的云南穆斯林为例」(福谷彬・中山大将・巫靚共編『京都大学アジア研究教育ユニット報告書2014年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ報告論文集』、No.7) 京都大学アジア研究ユニット、pp.129-136。
 - 2015「刊行にあたって」、飯塚宣子・王柳蘭編『子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか：感じ方の育みと総合的理解の視点』(JCAS Collaboration Series, No.9)、CIAS、pp.3-4。
 - 2015「育みとしての地域研究—フィールドの成果を次世代に架ける試みについて」、飯塚宣子・王柳蘭編『子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか：感じ方の育みと総合的理解の視点』(JCAS Collaboration Series, No.9)、CIAS、pp.112-114。

⑦ 研究集会

[企画・実施]

- 2014.9.5-14 カポエイラ・アンゴラ国際交流イベント 2014「ジンガ・インズィンガ」、CIAS他、京都大学他(企画)。

[招待講演]

- 2014.11.11「移民・難民の創造力：越境する中国ムスリムの多文化共生」第86回京都大学サロントーク、京都大学渉外部広報・社会連携推進室、時計台1階京大サロン。
- 2014.12.18「異文化が運ぶメッセージ：フィールドワークの挫折と学びを通して」地域研究コンソーシアム・オンデマンド・セミナー・プログラム、京都市立西京高等学校。

[参加報告]

- 2014.11.11 “Halal Food, Identity and Negotiation among Chinese Muslim in Northern Thailand,” Annual

Conference of East Asian Anthropological Association, Panel 5-1: Everyday Strategy of Negotiating and Coexistence: Food, Self and Culture (Chair: WANG-KANDA Liulan), YeungNam University, Gyeongsan, South Korea.

- 2014.12.5-7 “Bottom-up Coexistence: The Negotiation of Chinese Ethnicity, Islam and the Making of Ethno-religious Landscapes among Yunnanese Muslims in the Thai-Myanmar Borderland,” International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness, 科研費基盤研究(B)山田孝子代表, National Museum of Ethnology and Kyoto University.
- 2014.4.26「正義を食べチャイナ」京都大学地域研究統合情報センター2013年度年次報告会「世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす」、京都大学地域研究統合情報センター、京都大学稲盛財団記念館。

⑧ 競争的資金獲得状況

- 科研費・研究活動スタート支援「アジアにおける中国系ディアスポラの宗教と越境空間の再構築に関する比較研究」(2013~2014年度)。

⑨ 受賞、書評、新聞・テレビ・ネットでの報道・出演など

- 2015.3.21「生きづらさ学」『朝日新聞』(朝刊28面)。

⑩ 海外調査活動

- 2014.4.30-5.6 タイ国バンコクのチャイナタウンにて華人系キリスト教徒調査を実施、科研費。
- 2014.11.13-17 韓国テグにてAnnual Conference of East Asian Anthropological Associationに参加、個人研究費。
- 2015.1.27-31 タイ国バンコクのチャイナタウンにて華人系キリスト教徒調査を実施、科研費。
- 2015.3.15-23 タイ国チェンマイにてムスリムハラール食品調査を実施、科研費。

⑪ 教育

- 2014年度 ポケットゼミ「変動するアジア太平洋を読み解く」(西本希呼・中西竜也・加藤裕美と共同担当)。
- 2014年度 全学共通科目「現代人類学」後期担当(加藤裕美と共同担当)。

⑫社会活動・センター外活動

- 2014年度 JCAS運営委員。
- 2014年度 京都大学学術情報メディアセンターコンテンツ作成共同研究「異文化と地域研究の『知』を子供に伝えるマルチ・コンテンツ作成」。
- 「生きづらさ学旗揚げワークショップ」実行委員。第1回2014年12月20日、第2回2015年2月14日（白眉センター）。
- 朝日新聞日曜版Globe特集「イスラムのアジアに行く」（2014年8月3日）、同BS朝日「いま世界は」（2014年8月3日放送）への取材協力。
- 2015.2.26-27「白眉映像ワークショップ」（白眉センター学際融合ワークショップ企画）（Dr. Jennifer Coatesと共同企画）。

特任教授／研究員（特別教育研究（一般））

柴山 守（しばやま まもる）**①専門分野**

地域情報学

②経歴

- 1982年 京都大学東南アジア研究センター助手
- 1988年 大阪国際大学経営情報学部助教授
- 1993年 同教授
- 1996年 大阪市立大学学術情報総合センター教授
- 2003年 大阪市立大学大学院創造都市研究科教授
- 2003年 京都大学東南アジア研究センター教授
- 2004年 京都大学東南アジア研究所教授
- 2012年 京都大学地域研究統合情報センター特任教授／研究員

③研究課題

- (1) 地域情報学の創出とHumanities GISに関する研究
- (2) 東南アジア上座仏教徒社会における寺院マッピングと僧侶の移動遍歴
- (3) 大陸部東南アジアの東西回廊とアジア文明に関する情報学的研究
- (4) ハノイ都市形成過程に関する情報学的研究

④主要業績

- 2012『地域情報マッピングからみる東南アジア：陸域・海域アジアを越えて地域全体像を解明する研究モデル』勉誠出版。

- 2010「時空間概念に基づく地域・歴史事象の写像と知識獲得：地域情報学の視点から見る歴史知識学」『人工知能学会誌』25巻1号、pp. 42-49。
- 2009『地域研究のためのGIS』古今書院（水島司と共編著）。
- 2009「地域情報学：地域研究と情報学の新たな地平 序論」『東南アジア研究』46巻4号、pp. 481-491。
- 1990 *The Computer Concordance to the Law of the Three Seals, Thailand*: Amarin Publications（coauthor: Yoneo Ishii, Aroonrut Wichenkeo）。

⑤出版業績

[ワーキングペーパー・報告書等]

- 2014「地域情報学と仏教実践の時空間マッピング」林行夫ほか著『宗教実践を可視化する：大陸部東南アジア上座仏教徒の寺院と移動』（CIAS Discussion Paper, No. 42）地域研、pp. 29-40。

⑦研究集会

[企画・実施]

- 2014.3.8 ワークショップ「地域研究スピリッツの継承：石井米雄を語る」主催：地域研、京都大学稲盛財団記念館（企画・実施）。

⑧競争的資金獲得状況

- 科研費・基盤（B）「オントロジー指向による考古遺跡情報の知識体系化：東南アジア大陸部を事例に」（2014～2017年度）。
- 科研費・基盤（B）（海外学術）「古代・中世東西回廊：ミャンマー・タイ跨境における文化交流・交易網の歴史的動態」（2014～2016年度）。

⑩海外調査活動

- 2014.5-2015.3 タイ国京都大学ASEAN拠点にて東南アジア大陸部における東西回廊研究を実施。

⑫社会活動・センター外活動

- 2010年 文化遺産国際協力コンソーシアム東南アジア部会委員（～現在）。
- 2003年 JVG日本ベトナム空間情報学コンソーシアム代表幹事（～現在）。
- 2014年 日本学術会議第23期連携会員（～現在）。
- 2014年 京都大学ASEAN拠点所長（～現在）。

2 外部資金による研究活動

科学研究費補助金による研究

森林の包括的利用システムの地域間比較研究

研究代表者 柳澤 雅之

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2010年度～2014年度

●研究目的と内容

東南アジアにおける森林の多面的機能を最大限発揮できるための新しい森林の包括的利用システムを提案する。そのためにまず、多様な樹種で構成される森林の保護とその利用を歴史的に両立させ、森林面積を維持あるいは増加させてきた事例のインベントリーを作成する。その中から、地方政府・企業・ローカルコミュニティという、異なる主体によって保護と利用が達成されている事例を取り上げ、森林が生み出す社会的・経済的・文化的利益の配分と維持管理コストの分担について比較検討する。これにより、地域の自然環境条件に応じた森林育成方法とそれをサポートする制度的枠組みについて通地域的に適用可能な知見をえて、森林を長期に利用する上で地方政府・企業・ローカルコミュニティの全体にとって利益のあるような役割分担を明らかにする。

科学研究費補助金による研究

災害対応の地域研究の創出

「防災スマトラ・モデル」の構築とその実践的活用

研究代表者 山本 博之

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2011年度～2014年度

●研究目的と内容

2004年のスマトラ沖地震津波（インド洋津波）と2009年の西スマトラ地震を主な事例として、地域研究と防災・人道支援が共同で復興過程を調査研究することで、(1)「被災前に戻す」ではなく「被災を契機によりよい社会をつくる」という観点からスマトラの復興過程を明らかにする、(2)スマトラの事例をもとに防災・人道支援の技術や経験を他地域の被災地に適用するためのスマトラ・モデルを提示する、(3)災害発生時に現地語のオンライン情報を自動で収集・整理して地図上で提示する災害地域情報マッピング・シ

ステムを構築する。これらにより、スマトラの復興過程を明らかにするとともに、防災・人道支援の実務者にも活用可能な「災害対応の地域研究」の方法論を提示する。また、東日本大震災の復興過程の調査を行い、スマトラで得られた知見と経験に照らして日本における復興過程を検証し、状況に応じて創造的復興のあり方を提案する。

科学研究費補助金による研究

新自由主義改革後の国家社会関係

中南米における社会支出予算決定過程の比較研究

研究代表者 村上 勇介

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2012年度～2014年度

●研究目的と内容

本研究の目的は、これまでおこなってきた政党に関する研究をふまえ、社会支出予算の決定過程を事例とする比較分析を行い、新自由主義改革以降の国家社会関係の形態とその分析枠組みを考察することである。対象地域は、発展途上地域で最も早く新自由主義経済改革を経験し、現在、ポスト新自由主義の新たな国家社会関係を模索する中南米（ラテンアメリカ）である。最終目標は、新自由主義改革を経た世界各地の国家社会関係を分析し、その将来のあり方を検討するとともに、その分析枠組みを一般化することにある。それにむけ、本研究では、まず、歴史的背景や構造問題を含め多角的な観点から、中南米諸国を対象に綿密な調査分析と比較研究を実施する。そして、他地域と比較する予備的作業を行い、事例分析の結果と枠組みを検証し理論化への方向性を探る。

科学研究費補助金による研究

中央アジアのイスラーム・ジェンダー・家族

「近代化」再考のための視座の構築

研究代表者 帯谷 知可

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2012年度～2015年度

●研究目的と内容

本研究は、旧ソ連中央アジアで、ソ連解体から20年以上を経た今再び「近代」とは何かが問われ、深刻な社会的混乱を招きかねない状況が生じていることを念頭に置きつつ、旧ソ連中央アジア、特に現在のウズベキスタンの領域を研究対象地域として、ソ連期に重点を置きながら、ソ連的=社会主義的「近代化」の過程におけるイスラーム、ジェンダー関係、家族関係の複合的な変容、そのための装置や内的論理の転換過程の多角的検討を通じて、ソ連型社会主義における中央アジアの「近代化」の特質を明らかにし、その上で、ソ連解体後の「近代」からの後退とも受け取れる状況を視野に入れながら、ソ連解体後の激動、市場経済化と民主化という課題、権威主義体制、伝統回帰、イスラーム復興などに揺れるこの地域の「近代化」を今なおアクチュアルな問題群としてとらえなおし、現在の中央アジアを見渡す視座を構築することを目的とする。

本研究は、海外共同研究者B. ババジャノフ氏（ウズベキスタン、東洋学研究所）との国際共同研究として展開する。日本側では研究代表者、2名の研究協力者（いずれもウズベキスタンで調査を行った経験のある若手研究者）ならびに科研研究員1名から成る研究グループを形成し、イスラーム・ジェンダー・家族に関連する「伝統」と「近代」をめぐって、ロシア帝政期ならびにソ連期の民族誌的記述と現代のフィールドワークの成果とを批判的に照合する。ウズベキスタン側では文書館等資料研究とソ連時代を生きた人々へのインタビュー調査を有機的に結合させて、ソ連期に中央アジアに設置されイスラームを統括する役割を担ったムスリム宗務局の活動とそれにまつわる人々の記憶について研究を進める。それらを総合することによって中央アジアの「近代化」を現在の視点から考える分析枠組みを検討する。また、社会主義のもとでの「近代化」を表象する資料を幅広く収集する。

科学研究費補助金による研究

地域社会はいかにして国際的な環境制度の成功に貢献できるのか (How can local communities contribute to the success of international environmental regimes?)

研究代表者 Wil de Jong

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2012年度～2014年度

●研究目的と内容

Countries implement international environmental regimes (CBD, FCCC, UNFF, CITES) through legislation, policies, and multiple projects, reaching all the way until lower levels of government. In known cases these regimes negatively affect smallholder community natural resource use without offering appropriate alternatives. This study compares five cases in three tropical regions how IERs affect communal resource management and how communities respond to their impact. The study contributes to the academic understanding of international regimes and identifies options for community friendly implementation to increase their intended outcomes.

科学研究費補助金による研究

生活世界の変容とジェンダー：インド高齢女性のライフヒストリーを通して

研究代表者 押川 文子

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2013年度～2015年度

●研究目的と内容

2000年代に入って加速した経済成長のもとで、消費社会化などインド社会の変化に注目が集まっている。その背景には、すでに1970年前後から、家族のなかの世代やジェンダーの関係、子育てと教育、そして高齢者のあり方など人々の「生活世界」が、地域社会や国全体の動きと呼応しながら少しずつ変化してきたことがある。本研究は、インドの「生活世界」の過去数十年の変化を、女性の視点から記録し、分析しようとするものである。

生活世界の変化については、全国標本調査 (NSS) や全国家族保健調査 (NFHS) など大型統計による全体的な傾向分析と特定地域やコミュニティを対象とした人類学的研究が蓄積されてきた。本研究では、その「中間の領域」、すなわち生活の直接の基盤である村や都市レベルで社会経済や生活環境の変化と個人の生活世界との関わりに注目する。そのために、経済発展の異なる3地域の農村・都市を取り上げ、60歳代以上の女性、すなわち1950年前後に生まれ70年代から80年代にかけて家族形成した女性を対象に詳細な

聞き取り調査を行い、衣食住、結婚と出産、子育てや教育、家族関係などについて記録を残すとともに、生活世界の変化を地域の社会経済の変化の中に位置付ける分析を予定している。

科学研究費補助金による研究

博物館建築がポピュラー文化受容に果たす空間的機能の解明とその設計還元に向けた研究

研究代表者 谷川 竜一

研究種目 挑戦的萌芽研究

研究期間 2012年度～2014年度

●研究目的と内容

異なる意図、異なる文化同士の邂逅によって、建築空間は歴史的にダイナミックに変容してきた。本研究では博物館を対象とし、そこで起る現在の変容を明らかにすることで、文化受容のための建築設計に貢献することを目的としている。

具体的にはフランス及び韓国のマンガ・ミュージアムを対象に、各建築内の展示空間がどのように構成され、来館者がどのように展示を見ているかという、建築空間と来館者の観覧体験の相互関係の分析を行う。博物館建築は、歴史的には西洋で完成し、見習うべき手本＝確立された建築類型としてアジアに入ってきた。そこに、アジア（主に日本）で洗練された大衆文化かつメディア・アートでもあるマンガが展示される時、博物館が建築空間としていかに対応し（時に齟齬をともなって）、それぞれの場で成立しているのかを明らかにしたい。クールジャパンなどの威勢のよいかけ声とは裏腹に、マンガとの向き合い方を空間的に議論した研究は少ない。建築学、博物館学、社会学、民俗学の領域から総合的に考察することで、建築単体の議論にとどまらず、マンガを用いた地域振興やマンガ文化そのものへの貢献へつなげることを目的とする。

科学研究費補助金による研究

東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く

研究代表者 貴志 俊彦

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2013年度～2016年度

●研究目的と内容

東アジア域内では、歴史認識問題や領土問題を契機として、相互イメージが悪化し、さまざまな面で緊張した局面が発生している。この種の政治的、社会的な対立が激化する一方で、各地では協調、融和的な社会を築こうとする意識が働きつつあることも忘れてはならない。本共同研究では、近100年間に東アジアで起こった歴史的な事件、あるいは時代の画期となるトピックをとりあげ、それぞれの局面で登場した非文字史料が果たした役割とその受容者の解釈を検討することを目的とする。具体的な方法としては、複数の地域で製作された非文字史料を比較対照するとともに、(a) 図像解釈学的分析、(b) 語彙分析による情報処理、(c) コミュニケーション・パターン分析等を導入して、紛争・協調の時代イメージと非文字史料との因果関係を明らかにする。むしろ非文字史料を表象論的にとりあげるだけでなく、とりわけコミュニケーションの“ねじれ”現象の基幹的要因と考えられる個人のメンタリティや集合的記憶（コメモレーション）について検証することに留意している。

科学研究費補助金による研究

<宗教＝社会複合マッピング>からよむ大陸部東南アジア仏教徒社会の動態と変容

研究代表者 林 行夫

研究種目 基盤研究 (A)

研究期間 2014年度～2017年度

●研究目的と内容

大陸部東南アジアの上座仏教徒社会の宗教実践をめぐる地域間比較研究。2008-2010年度に実施した中国雲南省（西双版纳と徳宏）、タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマーでの9区画での悉皆調査で得たデータ、2012年度からのスリランカ、各地の補足調査で収集する資料を統合して比較分析するとともに、各地域社会に関わる法制度や文献資料と関連させて可視化することにより、地域社会と宗教実践の動態、その変容と持続のメカニズムを解明する。仏教寺院を主とする宗教施設、出家者や在家者の個人史と移動遍歴、聖地の立地や人のネットワーク等のデータを基礎資料としつつ、センサス、宗教法令、教育政策、地域史、生業経済の情報を統合した<宗教＝社会複合マッピング>を構築し、グローバルな社会変化のただ中にある実践の諸相を多面的かつ統一的に解析する。さらに、

その手法をモデル化することで、宗教と文化の動態についての新たな地域間比較研究のパラダイムを創出する。なお、本研究は、同じ時期に異なる地域の上座仏教徒社会で臨地調査を行い、実践を軸にパーリ仏教の現実を捉える実証研究としては、世界初のものとなる。

科学研究費補助金による研究

インドネシアの災害後社会における生活再建と女性

研究代表者 西 芳実

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2014年度～2017年度

●研究目的と内容

本研究は、災害後社会の生活再建において女性がどのような課題に直面し、それをどのように克服してきたかを検討することを通じて、女性を社会の「脆弱性」と捉えるのではなく、むしろ社会の脆弱性を克服し、社会のレジリエンスを高めて災害や紛争に強い社会の再建に積極的な役割を担っている側面を明らかにする。そのため、2004年インド洋津波の救援・復興過程に関する研究の蓄積をもとに、現地調査により日常生活に組み込まれた災害対応の実践の抽出を試みる。

初年度にあたる2014年度は、研究基礎資料の収集、作業用データベースの作成を進めた。とりわけ、被災から10年目となる2004年インド洋津波被災地であるアチェ州における調査ならびに資料分析を重点的に行った。(1) アチェ州公文書館が編纂した『津波と彼らの物語』に収録されている津波生存者の証言11件について、証言内容をテキストデータ化したうえで、性別・年齢・職業・被災場所もしくは被災時の居住地をもとに分類した作業用のデータベースを作成した。このうちバンダアチェ市の被災証言48件については日本語への翻訳を行った。また、これらの証言データベースの作成過程で得られた知見をもとに論文を執筆した。(2) シネアドボ・ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」を実施し、インドネシアの女性映像制作者が制作・監督した映像作品『天国への長い道』ならびに『海辺の先の物語』をもとに家族を失う痛みや津波被災との復興に亀裂を入れる太平洋戦争の不発弾問題に対する対応を検討した。(3) スマトラとジャワで現地調

査を行うとともに、研究代表者や研究分担者がそれぞれ国際ワークショップで口頭発表を行った。

科学研究費補助金による研究

20世紀北朝鮮の建築・都市通史の解明

研究代表者 谷川 竜一

研究種目 基盤研究 (B)

研究期間 2014年度～2018年度

●研究目的と内容

本研究は、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の近現代建築意匠の変遷と主要都市空間変容の解明を通して、同国における20世紀の都市・建築の通史を描くものである。具体的には、1945年以前の当該地域において「近代化」が最も進んでいた都市である平壤、咸興、興南を対象都市とし、日本・ドイツ・ロシア・アメリカ・韓国などで戦後も含めた図像・文献資料調査を行いながら、研究を推進する。最終的には20世紀の北朝鮮建築・都市に関する通史を描くことを目的としている。

科学研究費補助金による研究

学術論文のマッピング・システムを通じた地域情報の統合と共有化

研究代表者 山本 博之

研究種目 挑戦的萌芽研究

研究期間 2013年度～2015年度

●研究目的と内容

地域研究の学術論文（地域誌）を、本文中で言及される地名等をもとに地図上に表示し、これにより地名から学術研究の動向（どのような研究が行われているか）や研究者情報（誰がどのような研究を行っているか）を検索できるようにし、特定地域に関する地域研究の知見の蓄積（＝「地域の知」）を統合的に可視化するシステムについて、対象地域をマレーシアに絞ってプロトタイプを開発する。細分化された分野ごとになされる傾向がある学術研究の蓄積を、地理情報を活用して研究対象地域ごとに分類することで、特定地域に関する情報の全体像を把握することを可能にする。これにより、研究者どうしでの研究成果の相互参照を助けるだけでなく、研究者以外で特定地域の情報を必要とする人々（たとえば報道、外交、行政、

企業などの各分野の実務者)が地域研究の知見を活用しやすくなることが期待される。萌芽研究である本研究では、特定地域に関する情報が網羅的に収容されたデータベースの作成そのものを目的とするのではなく、情報技術にそれほど通じていない(ワード、エクセル、メール、ウェブ閲覧等ができる程度)の研究者でも比較的簡便な操作により自身の研究対象地域に関する地域情報を収集・整理し共有できるように仕組みを作成・公開することを目標とする。

科学研究費補助金による研究

新自由主義改革後の中南米における社会紛争：事例の総合的調査研究

研究代表者 村上 勇介
研究種目 挑戦的萌芽研究
研究期間 2014年度～2015年度

●研究目的と内容

本研究は、新自由主義改革後のラテンアメリカ(中南米)において増加する社会紛争の発生原因と展開過程を調査分析し、その終結や予防の方策ならびに実施過程について考察することをめざし、ラテンアメリカでも社会紛争の発生件数が多いペルーを対象に調査研究をおこなう。具体的には、(a) 数量的、質的双方の手法をもちいた、紛争の発生と展開過程の総合的な動態分析の実施、(b) その成果をふまえた、紛争の終結と予防のあり方ならびにその実施過程についての考察、(c) 他の中南米諸国との比較検討による、事例分析によってえられた知見の理論化の探究、といったことを実施する。

科学研究費補助金による研究

アジアにおける中国系ディアスポラの宗教と越境空間の再構築に関する比較研究

研究代表者 王 柳蘭
研究種目 研究活動スタート支援
研究期間 2013年度～2014年度

●研究目的と内容

本研究は、東アジアと東南アジアをつなぐ中国系ディアスポラを対象に、国境を越えた人の移動、とくに宗教・文化のネットワークを通して生成されていく共同体の姿と地域のダイナミズムとそのメカニズムを解明することを目的としている。とりわけ、中国雲南省、

タイ、台湾に跨る雲南系華人の相互作用に着目する。具体的には、①イスラームがローカルなコミュニティに果たす役割、②異なる宗教間の接触にともなう相互受容や他民族との共生関係、③それを通じて紡ぎだされるトランスナショナルな地域空間の生成の動態と国家との相互作用の事例をとりあげた。また、越境にともなう民族・宗教文化があらたな地域の創出や社会のあるべき共生に果たす役割を考究するため、日本における移民コミュニティや他地域の越境社会との地域間比較に関する共同研究や国際学会における共同発表を行った。

科学技術振興機構による研究助成

日本・アジア青少年サイエンス交流事業

研究代表者 西 芳実
助成種目 さくらサイエンスプラン
助成期間 2014年度

●研究目的と内容

2014年12月に2004年スマトラ島沖地震津波被災から10年目を迎えるインドネシア・アチェ州では、被災と復興の経験の継承という課題に直面している。本交流事業では、アチェ州から大学院生(地方政府・NPO職員などの社会人大学院生を含む)4名ならびに教員2名を招聘し、①被災から20年目を迎える阪神淡路大震災被災地訪問、②京都ならびに神戸の防災教育施設の実地体験、③情報技術を活用したアチェ津波モバイル博物館の制作に関するワークショップを実施した。

受入れ機関である地域研は災害地域情報マッピングシステムの開発を行っており、送り出し機関であるインドネシア国立シアクアラ大学とともに2004年スマトラ島沖地震津波被災地の復興過程の経年変化を記録するデジタル・アーカイブを共同で開発してきた。本交流事業では、日本における情報技術を活用した災害リスク管理や防災教育の実例を学ぶとともに、実地研修を踏まえた具体的な技術講習を行った。

実施にあたっては、英語を通じた国際交流をはかるだけでなく、地域研究者がインドネシア語=日本語通訳を行うことで、より踏み込んだ意見交換や情報交換をめざした。2015年1月17日には阪神淡路大震災被災20年目を迎えた神戸市街地を大阪府立北野高校のスーパーグローバルハイスクール・プログラムに参加する高校生4名とともに歩き、地域研が開発した防災

教育スマートフォン・アプリ「阪神淡路大震災被災地メモリーハンティング」を活用して、被災当時の神戸市の様子と現在の神戸市の様子の比較・検討を行った。この様子は日本経済新聞で報じられたほか、インドネシアの日報『スランビ・インドネシア』にも掲載された。最終日には日本での研修を踏まえた成果報告会を公開で行った。

京都大学教育研究振興財団による研究助成

『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』

研究代表者 村上 勇介
助成種目 研究成果物刊行
助成期間 2014年度

●研究目的と内容

新自由主義改革後のラテンアメリカにおける政治変動についての共同研究の成果を『21世紀ラテンアメリカの挑戦：ネオリベラリズムによる亀裂を超えて』と題する論文集にして刊行する事業に対する助成で、論文集では、新自由主義改革期から新自由主義改革期後にかけてのラテンアメリカの政治変動を分析する枠組みを提示したうえで、政党政治が安定化したグループと不安定化したグループに分けて、それぞれの代表的な事例を3つずつ提示した。安定化と不安定化の分かれ目は、新自由主義改革後の段階における中道左派勢力の有無にあること、またその中道左派勢力が、民主化の過程と深く関わっていることを提起した。

京都大学教育研究振興財団による研究助成

アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連盟創立20周年

研究代表者 帯谷 知可
助成種目 国際会議開催
助成期間 2014年度

●研究目的と内容

京都大学教育研究振興財団国際会議開催助成を受け、「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連盟創立20周年」と題して、アジア中東学会連盟第10回大会を開催した。アジア中東学会連盟 Asian Federation of Middle East Studies Association (AFMA) は、日本、韓国、中国、モンゴル各国の中

東学会による連盟であり、2年に一度各国持ち回りで研究大会を開催している。今回は京都大学においてその第10回大会が行われる運びとなり、2014年12月13日（土）、14日（日）の両日、百周年時計台記念館において、国内から43名、国外から39名の参加を得て開催された。ネリー・ハンナ教授（カイロ・アメリカ大学、エジプト）、サラ・シャリアティ教授（テヘラン大学、イラン）という中東研究の国際的権威による2つの基調報告に続き、16の分科会において合計43件の学術報告が行われた。加盟学会のみならず、中東や欧米諸国からも報告者があり、また質の高い学術水準を持つ若手研究者・女性研究者の参加が非常に顕著な大会であった。

4 シンポジウム・ワークショップ・研究会等

共同研究ワークショップ

世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす

日時

2014年4月26日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

世界の様々な地域には、多様な正義が存在する。規範や価値観となる正義もあれば、個人的な美学や倫理といった観点から意識される正義もあるだろう。そんな正義を携えて、私たちは生き、移動し、出会い、そして混淆する。しかし、人と人の遭遇や混淆は、それぞれの正義の揺らぎと衝突もまた引き起こす。それは個人の内面で起こる場合もあるし、社会と社会の紛争という大きな形でも現れうる。衝突や紛争は、すぐさま問題というわけではない。それぞれの正義、それぞれの価値観が衝突する際に露出するのは、むしろ正義そのものに潜む問題であったり、価値観それ自体が生み出してしまう矛盾であったりする。つまり、衝突や紛争の瞬間に、自分自身や自らの社会が抱える問題が露出するのだ。そう考えれば、正義の様相や絡まり合いのメカニズムを描き出すことは、私たちが生きる地域の課題と向き合い、地域の明日を捉えることにもつながっていくだろう。前回の「世界のエスキス」に続く今回の地域研ワークショップ「世界のジャスティス」では、地域における多様な正義の様相を、科学、宗教、食文化、災害、都市と農村、ファッション、歴史などのキーワードと結びつけて具体的に議論する。その議論の先に見据えているのは、地域の未来だ。複数の正義の中で、人も地域も揺らぐ。その揺らぐ地域こそ、私たち地域研の知的挑戦の場所であり、新しい正義が生まれる希望の場所に他ならない。

プログラム

はじめに 原正一郎（地域研）

趣旨説明 谷川竜一（地域研）

- ・平野（野元）美佐（京都大学アフリカ地域研究資料センター）「その王は都市で作られた：カメルーンのパミレク首長制社会と都市エリート」

- ・西芳実（地域研）「渚の灰から微笑み返し：2004年スマトラ島沖地震津波と社会の再生」
- ・王柳蘭（地域研）「正義を食ベチャイナ：タイ中国系スリムのハラールフードをめぐる展開と交渉」
- ・星川圭介（地域研）「科学がタイ立するなんて！：多チャンネル化する科学的見解と自然災害」
- ・帯谷知可（地域研）「社会をよそおうオンナたち：ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔」

コメントおよび総合討論

コメント 河合英次（河合塾）

幡谷則子（上智大学）

門司和彦（長崎大学大学院）

総合討論

追悼イベント

映像民俗学者 姫田忠義の軌跡を追う

日時

2014年5月11日

会場

徳正寺

主催

NPO法人ヒューマン・ビジョンの会

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

1928年神戸に生まれ、2013年7月29日逝去した姫田忠義は、若き日、民俗学者の宮本常一との出会いをきっかけに、“ほんとうの自分を求めて”日本各地への旅を始めた。地方の山村や漁村が大きく姿を変えつつあった高度成長期の1961年より、庶民の生活とその生活文化の足元（基層文化）を映像で記録する活動をスタートさせ、その後1976年には東京で民族文化映像研究所を設立、活動の基盤を広げた。『アイヌの結婚式』『イヨマンテ：熊送り』『椿山：焼畑に生きる』などに代表される119本の労作は数々の賞を受賞、また仏政府から芸術文化勲章・オフィシエを授与されるなど、海外でも高く評価を受けている。

姫田忠義がみずからの半生をふりかえりつつ、後に続く世代のために書き起こした初めての著作『ほんとうの自分を求めて』（1977年発刊、ちくま少年図書館36・心の相談室）は、ながく絶版になっていたが、その生き方に共感した若い世代のボランティアの手で本文をすべて入力し直し、3年にわたる編集作業をへて

「まだ知らない日本に会う、人生という旅のみちしるべ」叢書、クリエ・ブックス第1巻として2013年12月に新版再刊された。当催しは、姫田忠義が旅を通して、そして映像を通して見つめ続けたものを追ひ、私たちのこれからのビジョンを考える道しるべとなり得ればという思いを込めて企画した。

なお京都会場では、初の試みとして、江戸浄瑠璃新内研進派三代目家元・八代目新内志賀、重森三果による語りと新内節により、“ほんとうの自分を求めて”人生の旅を続けた姫田忠義の心象風景を抒情豊かに表現する。

プログラム

第一部 作品上映『アイヌの結婚式・日本の姿版』（1971年、東京都教育映画コンクール奨励賞、イタリア・ポポリ映画祭入賞）

スピーチ 姫田蘭（映像プロデューサー）

第二部 重森三果（江戸浄瑠璃新内研進派三代目家元・八代目新内志賀）語りと新内節『ほんとうの自分を求めて』スピーチ 姫田蘭

日本・マレーシア合同セミナー

遺産から展望へ：出版物の翻字復刻、電子アーカイブ化と出版・教育・研究への展開

日時

2014年7月3日

会場

東京ビッグサイト会議棟 103 & 104

主催

京都大学地域研究統合情報センター

ブック・シティ・コーポレーション（コタブク）

クラシカ・メディア・アカデミー・ジャウイ・マレーシア

趣旨・目的

マレーシア（1957年独立）の建国期にジャウイ（アラビア文字）を用いて書かれていた現地語出版物をローマ字に翻字して紙版・電子版で再刊行するとともに、誌面を電子アーカイブ化してインターネット上で利用可能にし、出版・教育・研究に役立てる取り組みが日本とマレーシアの関係機関の協力により進められている。

雑誌はそれぞれの社会が歩んできた時代を映す文化遺産である。誌面に託された思索の蓄積をデジタル技術等により現代に甦らせ、教育・研究に役立てる新しいビジネス・モデルとしても期待されている。

電子アーカイブ化担当の京都大学、マレーシアでの

出版・教育を担当するブック・シティ（現地名：コタブク）ならびにクラシカ・メディアより、それぞれの取り組みと協力・連携の経験を紹介する。

プログラム

開会 司会 ラムジ・モハメド・キール（ブック・シティ・コーポレーション）

開会挨拶 原正一郎（地域研）

サイド・ムナワル（ブック・シティ・コーポレーション CEO）

講演1 山本博之（地域研）「マレー語月刊誌『カラム』デジタル・アーカイブの意義と展望」

講演2 ムハマド・シュクリ（クラシカ・メディア・アカデミー・ジャウイ・マレーシア代表）「イスラムを根づかせ広める：ジャウイ文書のデジタル化とローマ字翻字」

質疑応答

閉会式

通訳 光成歩（地域研共同研究員）

ワークショップ

「琉球列島米国民政府（USCAR）制作フィルム」第3回鑑賞・検討会

日時

2014年7月5日

会場

那覇市NPO活動支援センター

主催

（財）東洋文庫・超域アジア研究部門現代中国研究班・国際関係・文化グループ

京都大学地域研究統合情報センター共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」

科研・基盤（A）「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」

【協賛】

琉球放送株式会社

プログラム

司会 貴志俊彦（地域研）「開催にあたって：USCARフィルムの収集状況報告」

講演 新里勝彦（元琉球放送カメラマン）「映像から見るアメリカ世（ユー）」

上映会 ①琉球放送所蔵「琉球ニュース」②USCARフィルムに関する琉球放送制作番組

報告1 名嘉山リサ（国立沖縄工業高等専門学校）「『起ちあがる琉球』にみるアメリカの思惑」

報告2 貴志俊彦「米国本土の視点：“The Big Picture – Okinawa: Bastion in the Pacific”をめぐって」

総合討論 司会 泉水英史（神奈川大学）

公開シンポジウム

世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から

日時

2014年7月26日

会場

佐治敬三メモリアルホール

主催

地域研究コンソーシアム

アジアプレス・インターナショナル

京都大学地域研究統合情報センター

京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所

調査報道NPOアイ・アジア

大阪大学グローバルコラボレーションセンター

【共催】

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「官公庁や民間企業やマスコミと接合される地域研究の方法論の検討」(代表：立岩礼子)

趣旨・目的

韓国人や中国人を標的とした民族差別、排外主義を煽動するヘイト言辭がネット空間に溢れている。東京・大阪などでは、しばしば憎悪とデマを拡散させることを目的としたデモや演説が行われるようになった。人が傷つき、憎しみ合い、剥き出しの暴力が飛びかうことにならないか、日本社会の将来を多くの人が心配し始めている。

レイシズム、ヘイト行動は、世界の多くの場所で人と人が諍い、争う原因となってきた。それは時に、民衆どうし、隣人どうしが暴力を応酬し、大勢の人の命が失われる悲劇をまねいた。一方で殺しあいや虐殺が発生した地域では、対立を和らげ、憎悪が発生・増幅していった原因を探って再発を防ごうという努力がなされている。地域研究者とジャーナリストは、世界の現場でそれらを目撃してきた。各地で起こった民族、人種、宗派の違いによる対立・葛藤や、その克服の事例を報告する。

日本でもくすぶり始めたレイシズムと憎悪犯罪。世界の経験から我々は何を学ぶべきか。地域研究者とジャーナリストは、立場や方法の違いを超えて課題に取り組む必要がある。このシンポジウムを未来に向けた協働の第一歩としたい。

プログラム

第1部 世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：現場からの報告

- ・小峯茂嗣 (大阪大学)「ルワンダのジェノサイド：『民族対立』はいかにして作られたのか」
 - ・佐伯奈津子 (早稲田大学アジア研究機構)「インドネシア・アチェ：和平後に台頭する排外主義」
 - ・坂本卓 (アジアプレス・インターナショナル)「コンボ、クルディスタン、イラクの民族・宗教対立」
 - ・米村耕一 (毎日新聞外信部)「『反日デモ』から考える中国」
- 第2部 日本はレイシズムとどう向き合うのか：さまざまな立場

コメント 金千秋 (NPO法人エフエムわいわい)
康有新 (大阪大学)
武田肇 (朝日新聞大阪社会部)

総合討論

司会 西芳実 (地域研)
石丸次郎 (アジアプレス・インターナショナル)

京都マレーシア映画文化シンポジウム

親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語

日時

2014年8月4日～5日

会場

芝蘭会館山内ホール

主催

マレーシア映画文化研究会

京都大学地域研究統合情報センター

趣旨・目的

マレーシア映画の新潮流を牽引してきたヤスミン・アフマド監督がこの世を去って5年が経つ。これまで本研究会では命日である7月25日の前後にヤスミン監督を追悼する上映会とシンポジウムを行い、ヤスミン監督とマレーシア映画の魅力に迫ってきた。

5回目となる今回は、8月4日、5日の二日間をかけてヤスミン監督の作品に触れながらヤスミン監督からのメッセージに思いを巡らせる。

宗教・言語・民族が混じり合った混成社会マレーシアを舞台に出自や立場の異なる人々の結びつきの積極的な面に目を向けて「もう一つのマレーシア」を美しく描いたヤスミン作品は、民族や国籍の違いに対する過度な反応が懸念される今日、あらためて見直されるべき意義を持っているように思われる。

ヤスミン監督の長編作品であるオーキッド三部作(『細い目』『グブラ』『ムクシン』)、遺作となった『タレントタイム』、映画監督として知られる前にCM制作者として知られていたヤスミン監督がマレーシアやシンガポールで制作したCM作品を通じて、「多民族共生」

「自立と支援」、「父と娘」、「老いと絆」の四つのテーマについて考える。

ヤスミン亡きあと、マレーシア映画界は『イスタンブールに来ちゃったの』『ブノハン』『黑夜行路』『The Journey』のように多様な展開を見せているが、それについては別の機会に譲り、今回は映画制作の現場でヤスミン監督にもっとも近かった二人の監督、ホー・ユーハンとシャリファ・アマニの作品を振り返る。ユーハン作品に登場するヤスミンの姿を見ながら在りし日のヤスミンを偲ぶと共に、アマニが作品に託したメッセージを探る。

プログラム

8月4日

開会挨拶

- ・『タレントタイム』（ヤスミン・アフマド、2009年、120分）に見る多民族共生
- ・『ミン』（ホー・ユーハン、2003年、80分）に見る父と娘
- ・『RAINDOGS／太陽雨』（ホー・ユーハン、2004年、94分）に見る自立と支援
- ・『心の魔』（ホー・ユーハン、2009年、94分）に見る母と息子

8月5日

- ・『チョコレート』（ヤスミン・アフマド、2009年、3分）、『サンカル』（シャリファ・アマニ、2010年、22分）、『カンボン・バンサー』（シャリファ・アマニ、2012年、15分）に見る母と娘
- ・ヤスミンCMに見る多民族共生
- ・『細い目』（ヤスミン・アフマド、2004年、104分）に見る多民族共生
- ・ヤスミンCMに見る自立と支援
- ・『グブラ』（ヤスミン・アフマド、2006年、110分）に見る老いと絆
- ・ヤスミンCMに見る父と娘
- ・『ムクシン』（ヤスミン・アフマド、2007年、95分）に見る母と息子
- ・ヤスミンCMに見る老いと絆

閉会挨拶

国際交流ワークショップ

抵抗と解放の身体：ブラジル伝統芸能「カポエイラ」による対話と実践

日時

2014年9月12日

会場

稲盛財団記念館

共催

Grupo Nzinga カポエイラWS実行委員会

京都大学地域研究統合情報センター

京都大学学際融合教育研究推進センター

地域研究コンソーシアム「地域研究次世代ワークショップ・プログラム」

NPO法人平和環境もやいネット

JCAS社会連携プロジェクト「女性地域研究者のライフ・キャリアネットワークプロジェクト」ほか

【後援】

駐日ブラジル大使館

趣旨・目的

ブラジルは北東部を中心に発達したアフロブラジル文化（アフリカ起源のブラジル文化）の代表的な芸能表現、カポエイラ。アフリカの様々な地域から強制的に奴隷として連れてこられた人々の、固有の音楽や宗教、文化などの混淆より生まれた、ブラジル特有の芸能（音楽・踊り）である。カポエイラの教えは口承と実践を通し今日にまで伝わり、今ではブラジルのみならず、世界中で愛好されている。カポエイラはその教えを通して、人々の生活をより心豊かにし、より良い社会を築く一助となっている。抑圧された社会の中で、一種の抵抗として形成されてきたカポエイラは、社会のあり方の不断なる再考を促すシステムとして機能してきた。それは、グローバル化する社会の中で必要不可欠となる多様性への理解と尊重、他者との協調性やコミュニティのあり方等のアクチュアルな問題意識にも該当する。今回は、ブラジルのサルバドールに本部を持つグループ・インズィンガ（Grupo Nzinga）から師範三名を招聘することで、日本ではまだ認識が浅いカポエイラ・アンゴラ（いくつかあるカポエイラの流派の内、最も伝統的とされるもので、Nzingaの実践する流派）の本質やその多様性に対する理解を深めると共に、アフロブラジル文化に対する見識を深める機会を創出したい。

プログラム

カポエイラの実演

時間 12:30～13:00

場所 稲盛財団記念館中庭

ワークショップ

時間 14:00～16:30

場所 稲盛財団記念館3F大会議室

講演者

- ・ホザンジェラ・アラウージョ（バイア連邦大学）
- ・パウラ・バハット（バイア連邦大学）

コメンテーター

- ・宇野邦一（立教大学）
- ・輪島裕介（大阪大学）
- ・ウスビ・サコ（京都精華大学）

司会

- ・福田宏（地域研）

パフォーマンス（Roda de abertura）

時間 18:30～19:30

京都シネアドボ・ワークショップ
フィリピン台風災害被災地支援映画上映会

日時

2014年9月10日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり」

科研費基盤 (A) 「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」

科研費基盤 (B) 「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」

マレーシア映画文化研究会

【共催】

日本マレーシア学会

趣旨・目的

2013年11月8日から9日にフィリピン中部を台風30号(フィリピン名ヨランダ)が襲ってから10か月が経とうとしている。この台風による死者は6000人を超え、倒壊家屋は約65万棟、被災者は約200万人に上った。被災地を襲った高潮はしばしば東日本を襲った津波と重ね合わせられ、日本からも多くの支援が行われてきた。いまなお、復興に向けて懸命の努力が続けられているが、再び台風のシーズンを迎えようとしている。

この上映会では、フィリピン・ルソン島北部のバギオ市で暮らす映画監督今泉光司氏と、仙台出身のジャズミュージシャン梅津和時氏らがレイテ島で行っている被災地支援活動の様子を紹介する。梅津氏はチャリティ・コンサートをしながら被災した各地の学校に楽器を寄贈する支援活動を行っている。その様子は被災地のこれまでの被災と復興の様子とともに今泉氏によってドキュメンタリー映画「2013年11月8日フィリピン・レイテ島、巨大台風ヨランダ上陸」(35分)にまとめられた。テーマ音楽「東北」は梅津和時氏が作曲し、おおたか静流氏が作詞した。作品には、梅津氏のサクソ吹き語りバージョンとおおたか静流氏が歌うフルバンドバージョンが収められている。

上映後は今泉さんによる現地報告も予定している。

プログラム

上映「2013年11月8日フィリピン・レイテ島、巨大台風ヨランダ上陸」

トーク「台風ヨランダ被災地支援現地報告：映像と音楽が広げる当事者性」

話し手 今泉光司(NPO法人サルボン、映画監督)

聞き手 清水展(京都大学東南アジア研究所)

京都シネアドボ・ワークショップ

越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ

日時

2014年9月10日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり」

科研費基盤 (A) 「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」

科研費基盤 (B) 「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」

マレーシア映画文化研究会

【共催】

日本マレーシア学会

趣旨・目的

東南アジア各地で製作されたドキュメンタリー、劇映画をもとに、国や地域を越えてもたらされる危機が社会がどのように受け止め対応しようとしているのか、また、映像を通じてどのように課題を共有しようとしているのかを考える。

※シネアドボとは、フィクション、ドキュメンタリーを問わず映像作品を通じて世界の課題を考え、よりよい社会づくりをめざすシネマ・アドボカシーの略称である。

プログラム

・セッション1 バリ島爆弾テロ事件：家族を失う痛みを受け止める

課題作品 「楽園への長き道」(Long Road to Heaven、エニソン・シナロ監督、インドネシア、2007年、120分)

・セッション2 津波被災地の復興に亀裂を入れる太平洋戦争の不発弾

課題作品 「海辺の先の物語」(*Hikayat dari Ujung Pesisir*, ダラン・ムラティ&エルフィダ・ディアナ監督、インドネシア、2013年、21分)

- セッション3 東南アジア三国間の領有権問題とヘイトスピーチ

課題作品 「誰にでも言い分はある」(*No One is Illegal*, ホー・ユーハン監督、オランダ・マレーシア、2011年、30分)

- セッション4 経済危機がもたらす出会いと別れ

課題作品 「ILO ILO」(*Ilo Ilo*/爸媽不在家、アンソニー・チェン監督、シンガポール、2013年、99分)

- セッション5 フィリピン台風災害：映像と音楽が広げる当事者性

上映 「2013年11月8日フィリピン・レイテ島、巨大台風ヨランダ上陸」(今泉光司監督、日本・フィリピン、2013年、35分)

- トーク 今泉光司 (NPO法人サルボン) & 清水展 (京都大学東南アジア研究所)

九州シネアドボ・ワークショップ

映画『ジャングル・スクール』が拓くフロンティア：シネマと地域研究のマリアージュ

日時

2014年9月15日

会場

キャナルシティ博多

主催

マレーシア映画文化研究会

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「映画に見る現代アジア社会の課題」(代表者：篠崎香織)

北九州市立大学

【共催】

日本マレーシア学会

【協力】

アジアフォーカス・福岡国際映画祭

趣旨・目的

経済開発を受け入れて森を切り拓くか、それとも孤立を恐れず自然環境や伝統を維持するか。経済か環境かという問いの裏には、社会が自立するにはどの程度の規模が必要かという問いが貼り付いている。有史以来繰り返されてきたこの問いに対して、二者択一の罫から抜け出す道を探るには、外と内の世界をつなぐコミュニケーションと、そのための教育が大切だ。

しかも、今日では、少人数の試みであっても、たとえば映画と結びつくことで世界にその意義が伝わることもなる。スマトラの熱帯林を舞台に、調査対象である「森の人」に読み書き計算を教えた女性教師ブレット。その実話をもとにした映画『ジャングル・スクール』

(リリ・リザ監督作品、インドネシア、2013年)に見られるように、地域事情に通じている地域研究者が介在して映画の作り手と地域住民が手を取りあうことで、見る側と見られる側の区切りはますます融解していく。

このワークショップでは、アジアフォーカス・福岡国際映画祭で来日中のグンナール・ニンプノ (Gunnar Nimpuno) 氏 (『ジャングル・スクール』撮影監督) と、東ティモールやスマトラのアチェなどでNGOによる支援活動に携わってきたインドネシア地域研究者の亀山恵理子氏 (奈良県立大学准教授) をお招きし、スマトラ版『綴方教室』ともいべき『ジャングル・スクール』の魅力と意義に迫りたい。

国際大会

アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会 (CELAO)

日時

2014年9月16日～18日

会場

京都大学

主催

京都大学文学部・大学院文学研究科

京都大学地域研究統合情報センター

【後援】

日本ラテンアメリカ学会

ラテン・アメリカ政経学会

日本文化人類学会

趣旨・目的

“Tradición y modernidad en América Latina: perspectivas y reconsideraciones”

“Tradição e modernidade na América Latina: perspectivas e reconsiderações”

“Rethinking the Tradition and Modernity in Latin America”

メインテーマは次の3点を念頭に置いている。

(1) 参加者は、過去に取り組み多様な議論や研究に基づいて、新たな視点や歴史的な視点について再考し、深化させることが求められる。

(2) 近年、新しい世紀の始まりにおいて、新自由主義期後のラテンアメリカの現況を議論する研究が登場してきている。日本が2011年の震災の悲惨な経験の後に大きな挑戦に立ち向かわなければならなくなっている

るように、ラテンアメリカ、カリブやそのアジア大洋州との関係について、その現在性を議論することが求められている。

(3) 京都は、日本でも最も伝統的な都市のひとつであり、また同時に、近代的な文化や科学の中心地でもある。まさに刷新・洗練された思考を求めて常に変化する象徴と言える。京都での会議は、参加者に新しい視点を見つけたすきっかけを与えることだろう。

プログラム

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/celao/programa%20CELAO%202014%20140912.pdf> 参照。

ワークショップ

国民音楽の比較研究と地域情報学

日時

2014年9月27日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター共同研究・共同利用プロジェクト「集合的記憶と中東欧地域の音楽：比較研究に向けてのデータベース構築」

【共催】

「音楽と社会」フォーラム（政治経済学・経済史学会の常設専門部会）

プログラム

趣旨説明 福田宏

- ・松本彰（元・新潟大学）「国歌に歌われたドイツ：プロイセン、オーストリア、ドイツとその国歌の歴史」
- ・白木太一（大正大学）「18世紀末から19世紀初頭のワルシャワの作曲家と音楽会活動：近代ポーランド国民音楽形成に関する基礎的考察」
- ・吉村貴之（早稲田大学イスラーム地域研究機構）「『アルメニア近代音楽の父』コミタスをめぐる諸問題」
- ・河瀬彰宏（国立国語研究所）「日本民謡の計量分析」

コメントおよび総合討論

コメンテーター 伊東信宏（大阪大学）
姉川雄大（千葉大学アカデミック・リンク・センター）

CIAS Visiting Researcher's Seminar No.1

Putin, Ukraine, and the New Border Order

日時

2014年11月6日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター国際交流委員会

【共催】

京都大学地域研究統合情報センター複合研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」

プログラム

Speaker: Prof. Jeremy Smith, Professor, University of Eastern Finland

Discussant: Yusuke Murakami (CIAS)

CIAS Visiting Researcher's Seminar No.2

Comparing problems of dynastic succession in autocracies: Russia's Romanovs and Japan's Tokugawa

日時

2014年11月11日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター国際交流委員会

【共催】

京都大学地域研究統合情報センター複合研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」

プログラム

Speaker: Prof. Jeremy Smith, Professor, University of Eastern Finland

Discussant: Prof. Yulia Mikhailova, Professor Emeritus, Hiroshima City University

セミナー

Seminar for Students of Graduate Program on Disaster Management, Syiah Kuala University

日時

2014年11月17日

会場

バンダアチェ

主催

京都大学地域研究統合情報センター

シアクアラ大学大学院防災学研究所

趣旨・目的

2015年1月、科学技術振興機構の日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）によりインドネシアのシアクアラ大学から防災研究を志す若手研究者を招聘するにあたって、シアクアラ大学大学院防災学専攻の大学院生を対象に西芳実が防災教育セミナーを開講し、地域研が開発したアチェ津波メモリーハンティングの実地研修を行った。また、大学院生を対象に防災エッセイ・コンテストを実施し、バンダアチェ市の洪水災害、バンダアチェ市の経済復興、ハザード・マップによる防災教育、津波避難シミュレーションをテーマにした大学院生を招聘学生として選抜した。

セミナー

Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy

日時

2014年11月17日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター複合共同研究ユニット「ポストグローバル化期における国家社会関係」、京都大学地域研究統合情報センター個別共同研究ユニット「社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究：ラテンアメリカの事例から」

プログラム

1. "La reforma agraria en América Latina: su aplicación en el pasado y lecciones para enfrentar la situación actual de la tenencia de tierra"
Sergio Gómez (Asesor de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Alimentación y la Agricultura-FAO para América Latina y el Caribe)
2. "Participación social en las reformas educativas: el caso de Chile y Mexico"
Marcela Gajardo Jiménez (Asesora de la Oficina Regional de la Organización de las Naciones Unidas para la Educación, la Ciencia y la Cultura-UNESCO para América Latina y el Caribe)

Comentario : Noriko Hataya (Universidad de Sofia)

Moderador : Yusuke Murakami (Universidad de Kyoto)

合同ワークショップ

第二次世界大戦後、東アジアにおける「国民歌謡」をめぐるディスコース

日時

2014年11月23日

会場

大阪大学

主催

科研・基盤 (B)「聴覚文化・視覚文化の歴史からみた『1968年』：日本戦後史再考」

科研・若手 (B)「戦後日本大衆文化における放送と音楽：〈家庭〉の表象を中心に」

科研・基盤 (A)「東アジア域内100年間の紛争・協調の軌跡を非文字史料から読み解く」

京都大学地域研究統合情報センター共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」

プログラム

総司会 輪島裕介 (大阪大学文学部・文学研究科)

1.沈載謙 (東京大学東洋文化研究所)

「大衆の歌：戦後の日本と韓国における大衆音楽と冷戦の主体」

2.黄惟愷 (大阪大学)

「『アジアの歌姫』テレサ・テンと複数のナショナリズム」

討論司会 貴志俊彦 (地域研)

合同研究会

画像資料の研究を考える：戦争と生活

日時

2014年12月6日

会場

神奈川大学

主催

神奈川大学非文字資料研究センター租界班

京都大学地域研究統合情報センター共同利用・共同研究プロジェクト・複合研究ユニット「非文字資料の共有化と研究利用」

京都大学地域研究統合情報センター個別研究ユニット「写真雑誌に見る第二次世界大戦期の記憶とジェンダー・エスニシティの表象分析」

【共催】

敬和学園大学戦争とジェンダー表象研究会 (科研基盤 (C)「大衆メディアに見る第二次世界大戦期と戦

後秩序の中のジェンダー・エスニシティ」]

プログラム

開催趣旨説明及び参加者紹介 孫安石 (非文字資料研究センター)

報告

- ・杉村使乃 (敬和学園大学) 「イギリスの写真雑誌『ピクチャー・ポスト』に見る第二次世界大戦下の『ニッポン』」
- ・松本ますみ (室蘭工業大学) 「占領者日本の『支那』女性像と抗戦中国の女性像：『北支画刊』・『北支』と『良友』から考える」

コメント 加納実紀代
池川玲子
孫安石

- ・大里浩秋 (神奈川大学) 「雑誌『兵隊』(1939年～1944年)の図像資料について」
- ・須崎文代 (神奈川大学非文字資料センター) 「日本の家庭科教科書と台所の文化の変容」

コメント 内田青蔵
村井寛志

討論及び質疑応答

The 10th Conference of Asian Federation of Middle East Studies Associations (AFMA)

“De/Re-constructing Middle East Studies from Asian Perspectives: Towards the 20th Anniversary of the AFMA”

アジア中東学会連合第10回大会「アジアの視点から中東研究を脱・再構築する：アジア中東学会連合創立20周年」

日時

2014年12月13日～14日

会場

京都大学百周年時計台記念館

主催

日本中東学会Japan Association for Middle East Studies (JAMES, currently AFMA presidency)

中国中東学会Chinese Association for Middle East Studies (CAMES)

韓国中東学会Korean Association of Middle East Studies (KAMES)

モンゴル中東学会Mongolian Association of Middle East Studies (MAMES)

*日本学術振興会科学研究費および京都大学教育研究振興財団から助成を受けた。

趣旨・目的

アジア中東学会連合 Asian Federation of Middle East Studies Association (AFMA) は、中東研究の学会連

合としてはアジアから発信する初の試みとして、日本、中国、韓国、モンゴル各国の中東学会によって結成され、隔年各国持ち回りで研究大会を開催してきた。アジアにおける中東研究者の国際的交流を促進し、最先端の研究成果を共有することがその目的である。本年は日本中東学会が大会幹事となり、京都大学において、AFMF設立20周年を記念する第10回大会を開催した。

プログラム

Dec.13

Opening Remarks: Mari OKA (head of AFMA organizing committee, JAMES)

Welcome Remarks: Prof. Yoshiko KURITA (JAMES)

Remarks from Member Associations of AFMA: Prof. Pan Guang (CAMES), Prof. Byung Ha Hwang (KAMES), Prof. Nyamzagd Sukhragchaa (MAMES)

Congratulatory Speech by Guest of Honor: Prof. Falah al-Assadi (President, Mustansiriya University, Baghdad-Iraq)

Keynote Lectures:

Prof. Nelly Hanna (American University in Cairo)

“Alternative Ways of Studying Middle East History before Colonialism”

Prof. Sara Shariati (University of Tehran)

“The Self: Return or Reconstruction? Rereading Shariati’s Theory of ‘Return to the Self’ from a Postcolonial Perspective”

Panel A-1: On Syria / Panel B-1: Economy I / Panel C-1: Broad Networks in Asia / Panel D-1: Rise and Fall of the Global Power

Panel A-2: On Egypt / Panel B-2: New Industrial Challenges in Middle East / Panel C-2: The Israeli-Palestinian Conflict / Panel D-2: The Role of Japan in Arab/Muslim Societies

Dec.14

Panel A-3: On Turkey / Panel B-3: Political Economy and Contemporary Social Issues / C-3: “Arab Spring” and Social Situation in the Arab World / Panel D-3: Arts and Literature

Panel A-4: Security, Conflicts and Refugees / Panel B-4: Modern Political Thought / Panel C-4: Zionism and Islam in Policymaking in the West / Panel D-4: Modern Islamic Thought

(プログラムの詳細については<http://www.mideast.site90.com/afma/10thProgramme.html>参照)

ワークショップ

アチエ津波被災10周年記念ドキュメンタリー「海からのメッセージ」上映会

日時

2015年1月18日

会場

稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター
インドネシア共和国シアクアラ大学津波防災研究センター

【共催】

科研費（基盤A）「災害対応の地域研究の創出：『防災スマトラ・モデル』の構築とその実践的活用」（代表：山本博之）

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「『小さな災害』アプローチによる紛争・災害に強い社会づくり」（代表：西芳実）

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「建築を通じたポピュラー文化の記憶の場の構築力の解明」（代表：山中千恵）

京都大学地域研究統合情報センター共同研究「災厄からの再生のための記録と記憶の〈場〉：災害・紛争後の記憶をつなぐ実践・支援とその可能性」（代表：寺田匡宏）

プログラム

開会挨拶 原正一郎（地域研）

趣旨説明 山本博之（地域研）

上映「海からのメッセージ」（“Pesan Sang Samudera: Catatan dan Harapan 10 Tahun Tsunami Aceh”、マフルザ・ムルダニ監督、インドネシア語・アチェ語、日本語・英語字幕、21分、DVD上映）

監督挨拶（マフルザ・ムルダニ監督）

質疑応答

Workshop**Locating forest certification in legality and sustainability compliance in Asia****日時**

2015年1月23日

会場

Bogor, Indonesia

主催

CIAS, CIFOR and Research Institute for Humanity and Nature

趣旨・目的

Explore progress of legality verification and forest certification in the Asian region, with special focus on Indonesia and Malaysia as producer countries and China and Japan as consumer countries.

Program. Six topical presentation by international and

Indonesian Scholars. One introductory presentation by de Jong and one synthesis presentation and plenary discussion chaired by de Jong and final summing up by Pablo Pacheco (CIFOR).

プログラム

Opening of the meeting: Steven Lawry, CIFOR

Background and objectives: Wil de Jong, Kyoto University

“How is sustainability compliance addressed in the EU FLEGT Action Plan? How does this impact producer country legality verification schemes?” Andy Roby, Forest Law Enforcement, Governance and Trade Adviser, DFID

“Lessons from early implementation of SVLK in Indonesia” Ahmad Dehrmawan, CIFOR

“Forestry legality compliance in China: status and issues forward from an importer and producer perspective” Ning Li, Helsinki University

“Japan’s legality verification system -implications for the certification market” Momii Mari, Global Environmental Forum, Japan, Deepgreen Consulting

“Progress towards and prospects for natural forest management certification in Indonesia” Ruslandi, University of Florida

“Certification, legality compliance and social standards in Malaysia” Naito Daisuke, CIFOR

“Take home lessons of the day and future steps” Pablo Pacheco

Closing: Wil de Jong

ワークショップ**「カラムの時代」と現代を結ぶ：マレー・イスラム定期刊行物の翻字復刻・電子アーカイブ化****日時**

2015年1月30日

会場

京都大学稲盛財団記念館

主催

京都大学地域研究統合情報センター地域情報学プロジェクト

趣旨・目的

1950年代から60年代に東南アジアのムスリム社会で広く読まれていた雑誌『カラム』(Qalam)の記事をローマ字翻字したデータベース「Qalamデータベース」の制作をマレーシアの関係機関と協力して進めてきた。

総合雑誌である『カラム』はシンガポール、マレーシア、インドネシアなど国境を越えて東南アジアのムスリム社会で読まれ、豊富な写真資料などから当時のムスリム社会の生活や思索の跡をたどれるだけでなく、1950年代末からは東南アジアのムスリム同胞の事実上の機関紙となるなど、貴重な史料であるが、ジャ

ウィ（アラビア文字表記のマレー語）で書かれていたこともあり、これまで十分に活用されてこなかった。

本ワークショップでは、マレーシア側の協力機関であるクラシカ・メディアの専門家を招き、ジャウイで書かれた定期刊行物のローマ字デジタルアーカイブ作成の意義と今後の展望を考える。

プログラム

開会挨拶 原正一郎（京都大学地域研究統合情報センター・センター長）

報告

ノルジアティ・モハマド・ロスマン（Norziati Mohd Rosman, クラシカ・メディア）

坪井祐司（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

コメント 柳澤雅之（地域研）

ワークショップ

データの可視化と問題発見／書誌情報データベースの新しい形を模索する：石井米雄コレクションとトルキスタン集成の事例から

日時

2015年2月12日

会場

稲盛財団記念館

主催

第1部：京都大学地域研究統合情報センター共同研究個別ユニット「CIAS所蔵資料の活用」

第2部：京都大学地域研究統合情報センター共同研究個別ユニット「書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る」

趣旨・目的

第1部では、GoogleEarthを用いてフィールドノートや調査記録、雑誌・新聞記事を可視化し、時空間上での課題発見の試みについて検討する。

第2部では、膨大な資料の海から連関する意味を探りながら検索する手法について検討する予定である。

プログラム

第1部 「データの可視化と問題発見」

- ・フィールドノートDB
- ・ペルー社会紛争DB
- ・災害関連DB
- ・寺院マッピング

スピーカー 渡邊英徳（首都大学東京）
原田真喜子（首都大学東京）
高田百合奈（首都大学東京）
柳澤雅之（地域研）

第2部 「書誌情報データベースの新しい形を模索する：石井米雄コレクションとトルキスタン集成の事例から」

スピーカー 柴山守（地域研）
亀田亮宙（地域研）
帯谷知可（地域研）

シンポジウム

Remapping Hiroshima: 「ヒロシマ」を（再）マッピングする：核時代の到来・起点としての「ヒロシマ」

日時

2015年3月15日

会場

広島市まちづくり市民交流プラザ

主催

京都大学地域研究統合情報センター

敬和学園大学戦争とジェンダー表象研究会（科学研究費補助金・基盤研究（C））

【協力】

ひろしま女性学研究所

趣旨・目的

2015年は第二次世界大戦終了、広島・長崎原爆投下から70年。この間、原爆、核開発の経験は、「被害国」、「加害国」の双方で、どのように伝えられ、記憶されてきたのだろうか。戦争とジェンダー表象研究会は、これまで第二次世界大戦参戦国のメディアにおけるジェンダー・民族表象について研究を重ねてきた。その成果をふまえ、核時代の起点であるこの地ヒロシマにおいて、原爆投下と核開発が日本・アメリカ・イギリスの大衆メディアにおいてどのように表象されてきたかを報告する。

また、原爆体験の風化がいわれて久しいが、いまや体験者の消滅を目前にして、その体験・記憶の共有には一刻の猶予も許されない。そのためのひとつの方法として、ヒロシマ・アーカイブ、ナガサキ・アーカイブ主宰の渡邊英徳氏を招き、記憶の共有に関する実践と展望についてともに考えたい。

プログラム

開会・趣旨説明 桑原ヒサ子（敬和学園大学）

第一部 司会 松崎洋子（敬和学園大学名誉教授）

基調講演

・講師 加納実紀代（ジェンダー史 元敬和学園大学）「『原爆』表象とジェンダー・エスニシティ」

パネル：写真雑誌にみる「核時代の到来」

・平塚博子（日本大学）「アメリカの『ライフ』」
・杉村使乃（敬和学園大学）「イギリスの『ピクチャー・ポ

スト』

第二部 司会 池川玲子（実践女子大学）

講演

- ・講師 渡邊英徳（首都大学東京、ヒロシマ・アーカイブ、ナガサキ・アーカイブ主宰）「多元的デジタルアーカイブズと記憶のコミュニティ」

総合討論及び質疑応答

司会 松本ますみ（室蘭工業大学）

コメンテーター 貴志俊彦（地域研）

木村尚子（広島市立大学）

挨拶 高雄さくえ（ひろしま女性学研究所）

閉会の言葉 神田より子（敬和学園大学）



Ⅲ. 国際交流

1. 国外客員教員招へいプログラム
2. 学術交流協定
3. 国際ハブ形成

地域研究統合情報センター（地域研）は、地域研究の分野において国際的交流のセンターとしての役割を果たすため、国内のみならず、国際的な研究協力と交流を幅広くまた活発に実施している。近年では、地域研究に関する史資料の現地との共有化の要請が高まっており、この分野での交流や協力も期待されている。このような交流や協力を実現するためには、地域研の目的や関心を共有する世界各地の研究機関ならびに個々の研究者との間に地域研のスタッフが持つネットワークを制度化していくことが特に重要である。

こうした制度化の試みは、具体的には、学術交流協定の締結、国際共同研究の実施、成果公開のための国際研究集会の組織などによって進められている。並行して、国外客員教員招へいプログラム（CIAS International Visiting Scholars Program, CIAS IVSP）を定め、これによって国外客員教員の招へいが行われている。さらに、2009年度から、地域研究の国内外の結節点としての機能を強化する目的で国際ハブ形成の事業を始動した。

1 国外客員教員招へいプログラム

地域研究の分野での国際的研究交流の活性化を目的に、国外客員教員を招へいするための制度として、2008年度より国外客員招へいプログラムが開始された。このプログラムに従って、公募または推薦によっ

て毎年1~2名程度の外国人研究者を選考し、3~6ヶ月の間、地域研に招いて研究を行う機会を提供している。2014年度は国外客員教員招へいの実績はなし。

2 学術交流協定

海外の研究機関との間で部局間の学術交流協定を締結することによって、共同研究の実施、国際研究集会の組織、研究者交流、史資料の共有化などの国際的学術交流活動を進めている。2015年3月末までに地域研の締結した協定は20件となった（締結機関の所在国・地域と件数は、インドネシア 4、カンボジア 2、タイ 3、ペルー 2、オランダ 1、台湾 1、ネパール 1、フィンランド 1、ブータン 1、マレーシア 2、ラオス 1、英国 1）。2014年度には、英国のレスター大学地理学部（The Department of Geography, University of Leicester）、マレーシアのコタブク（Perbadanan Kota Buku）、およびタイ王国のシラパコーン大学大学院（The Graduate School, Silpakorn University）との協定を締結した。今後も国際的な学術協力協定を拡充していく予定である。

部局間学術交流協定締結機関との交流活動として2014年度の実績は以下の通りである。

クラシカ・メディアおよびコタ・ブク（ともにマレーシア）との協力関係においては、雑誌『カラム』のローマ字翻字版記事データベースが完成し、7月に東京国

際ブックフェアで、11月にマレーシアの国立言語出版局（DBP）でそれぞれ公開セミナーを行い、データベースを披露した。また、2015年1月には国際ワークショップ「『カラムの時代』と現代を結ぶ」を開催した。

シアクアラ大学津波防災研究センター（TDMRC）（インドネシア）との学術交流の一環として、2014年12月~1月、地域研との共催により第5回京都=アチェ国際ワークショップを開催し、ワークショップ「情報コミュニケーション技術を用いた防災実践」、JST日本・アジア青少年サイエンス交流計画（さくらサイエンスプラン）によるアチェ津波モバイル博物館ならびに被災地メモリーハンティング発表会・講習会、アチェ津波被災10周年記念ドキュメンタリー映画上映会など一連の研究集会をインドネシアと日本の双方において行った。

ペルー問題研究所（ペルー）との学術交流の一環として、2015年3月国際ワークショップ「現代ペルーの国家と社会—暴力、エスニシティ、地方分権化」を京都大学において実施した。

3 国際ハブ形成

地域研は、その前身である国立民族学博物館地域研究企画交流センターが、ペルーで最も歴史のある人文社会系の研究機関であるペルー問題研究所 (Instituto de Estudios Peruanos) と学术交流協力協定を締結して実施してきた国際共同地域研究「現代ペルーの総合的地域研究」(通称ペルー・プロジェクト)を引き継ぎ、ラテンアメリカ研究の国際ハブ形成を目指した「ペルー・プロジェクト」を2009年度まで実施してきた。2010年度からは、この事業を地域研究の国際ハブ形成と位置づけなおし、国際研究集会の組織を柱とする活動を開始している。

2014年には、アジア大洋州ラテンアメリカ研究協議会 (Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y

Oceania-CELAO) の第6回研究大会(京都)を、9月16日(火)～18日(木)の3日間にわたり、京都大学文学部校舎において開催した。また、7月23日(水)～25日(金)にWorkshop “The Future of Democracy after Neoliberalism: Social Movements in a Globalizing World”、11月17日(月)にSeminario “Reformas en la América Latina contemporánea y sus lecciones para hoy” (セミナー「現代ラテンアメリカの諸改革—その教訓と課題」)、2015年3月7日(土)にTaller “Estado y Sociedad en el Perú contemporáneo: violencia, etnicidad y descentralización” (ワークショップ「現代ペルーの国家と社会—暴力、エスニシティ、地方分権化」)を、京都大学稲盛財団記念館において実施した。



IV. 広報・出版

1. 出版

- 1 CIAS 叢書《地域研究のフロンティア》
- 2 CIAS 叢書サブシリーズ
「災害対応の地域研究」
- 3 CIAS 叢書サブシリーズ
「相関地域研究」
- 4 CIAS ブックレットシリーズ
「情報とフィールド科学」
- 5 CIAS Discussion Paper Series
- 6 JCAS Collaboration Series
- 7 地域研究資料集
- 8 スタッフの刊行物

2. 情報発信

1 CIAS叢書《地域研究のフロンティア》

京都大学地域研究統合情報センター(地域研)では、2010年度から「地域研究のフロンティア (Frontiers of Area Studies)」というシリーズタイトルを冠した叢書の刊行をスタートした。本シリーズは、地域研の共同利用・共同研究拠点活動の一環として、国内外の優れた研究成果を募集し、学外有識者を含む編集委員会による審査、および査読を経て、京都大学学術出版会から商業出版として刊行するものである。とくに、地域間の比較や関係性に着目した研究、地域研究にかかわる情報の共有化や地域情報学など、新しい地域研究の開拓を視野にいたった意欲的な研究成果を刊行し、地域研究の「フロンティア」を模索する国際発信チャンネルとなることをめざしている。

地域研究のフロンティア5
21世紀ラテンアメリカの挑戦：
ネオリベラリズムによる亀裂を
超えて
村上勇介 編
京都大学学術出版会
菊上製・188頁・税込 3,024円
ISBN: 9784876989003
2015年3月



2 CIAS叢書サブシリーズ「災害対応の地域研究」

地域研では、2013年度よりサブシリーズを発刊し、その第一弾として「災害対応の地域研究」(全5巻)の刊行を開始した。本年度は第三巻『国際協力と防災：つくる・よりそう・きたえる』(牧紀男・山本博之編著)を刊行した。

災害は、平常時から切り離された特別な時間・空間ではなく、その社会が平常時に抱える潜在的な課題が極端な形であらわれている状態である。したがって、災害からの復興とは、被災前の状態に戻すことではなく、被災を契機に明らかになった社会の課題に働きかけ、よりよい社会をつくることである。そのような創造的復興を可能にするためには、災害による被害を物理的に抑え込みさえすればよいと考えるのではなく、災害が発生したときに社会が柔軟に対応するという社会の強靭性を高めることが大切となる。また、被災社会が被災前にどのような状況にあり、どのような課題を抱えていたかを知る必要がある。「災害対応の地域研究」の意義はここに存在する。

自然災害が起こると国境を越えて人道支援を行うことが一般的となった今日、災害対応の現場では地域の事情に根差した防災や復興が求められており、地域研究の知見はますます重要となっている。「災害対応の地域研究」シリーズでは、災害対応の現場での防災・人道支援の実務者との連携や、近年進展が著しい情報技術の利用などにより、異業種・異分野の専門家に開かれた「地域の知」をめざしている。

災害対応の地域研究3
国際協力と防災：つくる・より
そう・きたえる
牧紀男・山本博之 編著
京都大学学術出版会
A5並製・278頁・税込 3,456円
ISBN: 9784876985005
2015年3月



3 CIAS叢書サブシリーズ「相関地域研究」

2014年度よりCIAS叢書サブシリーズ「相関地域研究」の刊行を開始した。本シリーズは、地域アイデンティティを新たに構築するための視点・思考を磨き上げるCIASの成果を中心にまとめる。

21世紀の地域とは、連動し、影響しあい、それゆえ容易に変化する空間である。こうした急激に変化する地域を理解するためには、各地域の特性を明らかにするとともに、その地域がある種のアイデンティティを持ち得ていることを捉え、同時に、連鎖する複数地域とともに、世界においていかなる役割と意味をもっているのかについて、比較と関係性という二つのキーワードを用いて研究を試みるのが「相関地域研究」の手法のひとつである。



相関地域研究1
記憶と忘却のアジア
貴志俊彦・山本博之・西芳実・谷川
竜一 編著
青弓社
A5 並製・256頁・税込2,808円
ISBN: 9784787233844
2015年3月

4 CIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」

2014年度よりCIASブックレットシリーズ「情報とフィールド科学」の刊行を開始した。本シリーズは、京都大学地域研究統合情報センターの地域情報学プロジェクトの成果を踏まえている。

コンピュータを駆使した最新の情報技術では、設計者は満足させられたとしても多様な現実世界を十分に捉えることは難しい。世界には情報処理や通信のインフラが十分に整っていない地域があることに加え、社会に置かれた事物を扱う以上は機械的に計測可能な情報だけでなく人々の思惑も考慮せざるを得ないためでもある。このような考えのもと、現場の利用者にとって意味がある情報処理の方法を分野や素材ごとに集め、主に大学の新生向けに研究生生活のガイドの意味を込めてまとめたものが「情報とフィールド科学」シリーズである。



情報とフィールド科学1
映画から世界を読む
山本博之 著
京都大学学術出版会
A5 並製・62頁・税込756円
ISBN: 9784876988754
2015年3月

5 CIAS Discussion Paper Series

地域研の教員や研究員などの研究成果や共同研究の成果を、迅速に公開することを目的として刊行するシリーズである。論文のみならず、調査報告、資料、文献解題、ワークショップやシンポジウムの記録など多彩な研究成果を、執筆者（编者）の地域研究統合情報センター教員の責任のもとに随時公開している。

No. 45

フィリピンの台風災害に関する緊急研究集会報告書
台風ヨランダはフィリピン社会をどう変えるか：地域に根ざした支援と復興の可能性を探る
山本博之・青山和佳 編著
A4判 72頁
2014年4月



No. 46

積徳行と社会文化動態に関する地域間比較研究：東アジア・大陸東南アジア地域を対象として
長谷川清・林行夫 編
A4判 135頁
2015年3月



No. 47

移動と宗教実践：地域社会の動態に関する比較研究
小島敬裕 編
A4判 131頁
2015年3月



No. 48

GENOCIDIO EN LOS ANDES, EL SILENCIO DE LOS VIVOS Y EL GRITO DE LOS MUERTOS
TESTIMONIOS DE MUERTES EN PUTIS Y OTRAS COMUNIDADES ALTOANDINAS Y AMAZÓNICAS
Artemio Sánchez Portocarrero
A4判 86頁
March, 2015



No. 49

国民音楽の比較研究に向けて：音楽から地域を読み解く試み
福田宏・池田あいの 編著
A4判 77頁
2015年3月



No. 50

世界のジャスティス：地域の揺らぎが未来を照らす
谷川竜一 編
A4判 67頁
2015年3月



No. 51

書誌情報データベースの地域情報学的新展開を探る
帯谷知可 編
A4判 55頁
2015年3月



No. 52

日本のマンガミュージアム2：マンガミュージアムを介した地域力の再生／地域力によるマンガ文化の創出
谷川竜一・山中千恵・伊藤遊・村田麻里子 編
A4判 122頁
2015年3月



IV
1 広報・出版
2

No. 53

『カラム』の時代 VI
近代マレー・ムスリムの日常生活②
坪井祐司・山本博之編著
A4版 36頁
2015年3月



No. 54

2004年スマトラ沖地震・津波復興史 I
山本博之・西芳実・篠崎香織 編
A4版 362頁
2015年3月



6 JCAS Collaboration Series

地域研では、地域研究コンソーシアムと共同し、活動成果を2010年度より『JCAS Collaboration Series』として刊行している。

No. 9

子どもたちは多様な地域に何を学ぶのか
：感じ方の育みと総合的理解の視点
飯塚宜子・王柳蘭 編
発行
地域研究コンソーシアム
京都大学地域研究統合情報センター
NPO法人平和環境もやいネット
A4判 51頁
2015年3月



No. 10

JCAS公開シンポジウム報告書
世界はレイシズムとどう向き合ってきたか：地域研究とジャーナリズムの現場から
宮原暁・山本博之・石丸次郎・立岩礼子・西芳実 編
発行
地域研究コンソーシアム
京都大学地域研究統合情報センター
アジアプレス・インターナショナル
大阪大学グローバルコラボレーションセンター (GLOCOL)
京都外国語大学京都ラテンアメリカ研究所 (IELAK)
調査報道NPOアイ・アジア (IASIA)
A4判 47頁
2015年3月



No. 11

JCAS公開シンポジウム報告書
地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン
川上桃子・塩谷昌史・柳澤雅之 編
発行
地域研究コンソーシアム
京都大学地域研究統合情報センター
日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所
A4判 76頁
2015年3月



7 地域研究資料集

地域研究を推進するにあたり、資料の記録・保全・共有は大変重要な課題でもある。地域研では、そのために「地域研究資料集」と題して様々な資料を収集・再編しながら刊行している。

QALAM No. 78-83
1957年1月-1957年6月
山本博之監修
A4判 553頁
2014年3月
京都大学地域研究統合情報センター



QALAM No. 84-85
1957年7月-1957年8月
山本博之監修
A4判 188頁
2014年7月
京都大学地域研究統合情報センター



QALAM No.91
1958年2月
A4版 97頁
Klasia Media-Akademi Jawi Malaysia
京都大学地域研究統合情報センター



QALAM No.92
1958年3月
A4版 80頁
Klasia Media-Akademi Jawi Malaysia
京都大学地域研究統合情報センター



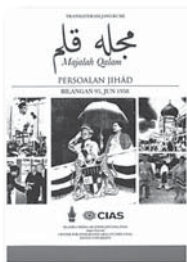
QALAM No.93
1958年4月
A4版 93頁
Klasia Media-Akademi Jawi Malaysia
京都大学地域研究統合情報センター



QALAM No.94
1958年5月
A4版 101頁
Klasia Media-Akademi Jawi Malaysia
京都大学地域研究統合情報センター



QALAM No.95
1958年6月
A4版 97頁
Klasia Media-Akademi Jawi Malaysia
京都大学地域研究統合情報センター



8 スタッフの刊行物

地域研の教員や研究員などによる刊行物。センターの研究対象地域の拡がりに比例した広範なエリア、トピックを扱っている。専門書から一般書まで幅広い読者に向けて、研究成果を発信し、研究の社会還元を目指している。

IUFRO World Series Volume 32.
Forests under pressure - Local responses to global issues

EDITORS: P.Katila, G.Galloway,
W.de Jong, P.Pacheco, G.Mery

International Union of Forest Research Organizations/Vienna

A4判・561p

ISBN: 9783902762306

2014



The International Forestry Review
Vol. 17 (S1), 2015

Special Issue: Smallholders and forest landscape transitions:
Locally devised development strategies of the tropical Americas

EDITORS: B. Pokorny, W. de Jong and A.J. Pottinger

The Commonwealth Forestry Association

A4判・146p

ISSN: 14655498



日中間海底ケーブルの戦後史：

国交正常化と通信の再生

貴志俊彦 著

吉川弘文館

四六判・254頁・定価2,700円（税別）

ISBN: 9784642082679

2015年1月



2 情報発信

地域研究統合情報センター（地域研）は、ウェブサイト (<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>) やニュースレター等を通じて、同センターが主催・共催するシンポジウムや各種研究会等の活動、また図書ならびに映像資料等の所蔵、データベース公開に関する情報提供を行っている。地域研の各種出版物については、デジタル・アーカイブ化により、ウェブサイト上で公開を行っている。

また、新聞・雑誌の取材を受けたり、テレビ・ラジオ等に出演したりした地域研の教員や研究員等の記事（カッコ内に名前を記載）は以下のとおり。

2014年4月4日

「漫画、博物館で楽しむ」『福井新聞』（谷川）

2014年4月17日

“Majalah Qalam Dwituliskan,” *Berita Harian*（マレーシア）（山本）

2014年4月26日

“Assalamualaikum,” *al-Hijrah*（マレーシア）（山本）

2014年6月5日

「家族で楽しめるマンガ美術館ガイド」『女性セブン』（谷川）

2014年7月3日

“Buletin Utama,” TV3（マレーシア）（山本）

2014年7月23日

“Transliterasi Qalam, Jawi ke Rumi,” *Berita Harian*（マレーシア）（山本）

2014年9月13日

“Kompilasi Khazanah Sejarah,” *Utusan Malaysia*（マレーシア）（山本）

2014年11月18日

“Selamat Pagi, Malaysia,” RTM1（マレーシア）（山本・原）

2014年12月2日

“Pangkalan Data Melayu Tulisan Jawi,” *Berita Harian*（マレーシア）（山本）

2014年12月10日

“Qalam Rekod Sejarah Bangsa,” *Berita Harian*（マレーシア）（山本）

2014年12月10日

「大津波の記憶 京大がアプリ スマトラ地震」『朝日新聞』夕刊（西・山本）

2014年12月14日

「津波の記憶アプリに スマトラ地震10年 京大が開発」『中日新聞』（西・山本）

2014年12月14日

「スマトラ沖地震の津波 被害・復興記録アプリで閲覧」『日本経済新聞』（西・山本）

2014年12月15日

「津波被災地のアプリ開発 景観変化を記録、京大准教授ら」『じゃかるた新聞（*The Daily Jakarta Shimbun*）』（西・山本）

2014年12月16日

「スマトラ津波復興アプリに 『震災被災地でも活用を』 京大准教授開発 街並み写真や証言写真」『京都新聞』夕刊（西・山本）

2014年12月22日

「スマトラ大津波アチェ 災害記録をアプリで公開 京都大が開発防災教育に役立て」『産経新聞』（西・山本）

2014年12月23日

「スマトラ地震 知るアプリ 京大研究者ら 証言や被災写真」『読売新聞』（西・山本）

2014年12月24日

「スマトラ沖大地震 アプリでわかる被害・復興 発生10年」『毎日新聞』夕刊（西・山本）

2014年12月24日

“Panorama: Integrasi Buku Di Negara Matahari Terbit,” RTM1（マレーシア）（西・山本）

2014年12月25日

“TSUNAMI ACEH: TDMRC Dan CIAS Universitas Kyoto Luncurkan Aplikasi Tsunami,” *Kabar24*（インドネシア）（西・山本）

2014年12月25日

「NHKニュースおはよう日本『インド洋大津波の記憶 伝えるアプリ 京大開発』」NHK（西・山本）

2014年12月26日

「アプリで被災経験共有 『災害を風化させない』 バンダアチェ」『じゃかるた新聞（*The Daily Jakarta Shimbun*）』（西・山本）

2014年12月26日

「インド洋津波の記憶、アプリで継ぐ 京大准教授ら開発」『朝日新聞』夕刊（西・山本）

2014年12月26日
 “Ragam Produk TDMRC dan Mitra,” *Smong* (インドネシア) (西・山本)

2014年12月27日
 “CIAS Kenalkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile,” *Serambi Indonesia* (インドネシア) (西・山本)

2014年12月27日
 “TDMRC Unsyiah Luncurkan Aplikasi Aceh Tsunami Mobile MuseumM,” *Atjeh Post* (インドネシア) (西・山本)

2014年12月27日
 「天声人語 津波の記憶をとどめる」『朝日新聞』(西・山本)

2015年1月10日
 「映画から読み解くアジアの社会状況 加速する・人物情報の“混成化”」『毎日新聞』夕刊 (山本)

2015年1月12日
 “Doktor Jepang Ciptakan Aplikasi Android “Tsunami Aceh”,” *Kompas* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月12日
 “Dua Doktor Jepang Ini Bikin Aplikasi “Tsunami Aceh”,” *Kompasiana* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月12日
 “Peneliti Jepang Ciptakan Aplikasi Android “Tsunami Aceh”,” *Serambi Indonesia* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月12日
 “Inilah Aplikasi Android Tsunami Aceh Buatan Dua Doktor Dari Jepang,” *iBerita* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月12日
 “Doktor Asal Jepang Ciptakan Aplikasi Android Aceh Tsunami Mobile Museum,” *SRIWIJAYA POST* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月18日
 「神戸の復興 歩いて学んだ」『日本経済新聞』(西・山本)

2015年1月29日
 “Smartphone app helps residents pass on memories of 2004 Indian Ocean tsunami,” *The Asahi Shimbun* (国際) (西・山本)

2015年1月30日
 “Yatsuahashi, Timphan ala Japan,” *Serambi Indonesia* (インドネシア) (西・山本)

2015年1月31日
 「ニュースのおさらい インド洋大地震・津波から10年 現地で薄れる防災意識」『朝日新聞』(西・山本)

2015年2月12日
 “Memory Hunting, dari Aceh ke Kyoto,” *Serambi Indonesia* (インドネシア) (西・山本)

2015年2月14日
 “Mengintip Kebangkitan Kobe Pascabencana,” *Serambi Indonesia* (インドネシア) (西・山本)

2015年2月16日
 「格差不満の受け皿必要—ネオリベラリズム後の政治世界—安定化の条件をラテンアメリカの経験からさぐる」『読売新聞』(村上)



2014年度の記録

- 2014年 4月26日 共同研究ワークショップ「世界のジャスティス」開催
- 2014年 4月27日 共同利用・共同研究報告会開催
- 2014年 5月19日 第1回運営委員会
- 2014年 5月26日 第1回協議員会
- 2014年 7月 3日 コタブクPerbadanan Kota Buku（マレーシア）との部局間交流協定（学術協力協定）締結
- 2014年 7月 5日 「琉球列島米国民政府（USCAR）制作フィルム」第3回鑑賞・検討会
- 2014年 7月22日 ワークショップ「社会紛争の総合分析に基づく解決・予防の研究」
- 2014年 7月30日 第2回運営委員会
- 2014年 7月31日 第2回協議員会
- 2014年 8月 4日 京都マレーシア映画文化シンポジウム「親星子星一番星：よそ者どうしが織りなす家族の物語」
～ 5日
- 2014年 9月10日 京都シネアドボ・ワークショップ「越境する危機と分かち合う記憶：東南アジアを襲う不況・台風・爆弾テロ」開催
- 2014年 9月12日 国際ワークショップ「抵抗と解放の身体：ブラジル伝統芸能『カポエイラ』による対話と実践」
- 2014年 9月16日 Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía-CELAO第6回研究大会（京都）
～18日
- 2014年 9月27日 ワークショップ「国民音楽の比較研究と地域情報学」開催
- 2014年10月 1日 亀田克宙助教着任
- 2014年11月 1日 地域研究コンソーシアム 2014年度年次集会・シンポジウム「地域から研究する産業・企業：フィールドワークとディシプリン」開催
- 2014年11月17日 セミナー「Reformas en la America Latina contemporanea y sus lecciones para hoy」開催
- 2014年12月 7日 International Workshop on Migration and the Remaking of Ethnic/ Micro-Regional Connectedness
- 2014年12月24日 京都＝アチェ国際ワークショップ「情報コミュニケーション技術を用いた防災実践」
- 2015年 1月18日 ワークショップ「アチェ津波被災10周年記念ドキュメンタリー『海からのメッセージ』」上映会開催
- 2015年 1月23日 Workshop「Locating Forest Certification in Legality and Sustainability Compliance in Asia」（インドネシア）
- 2015年 1月30日 ワークショップ「『カラムの時代』と現代を結ぶ：マレー・イスラム定期刊行物の翻字復刻・電子アーカイブ化」開催
- 2015年 2月 9日 第3回運営委員会
- 2015年 2月12日 ワークショップ「データの可視化と問題発見／書誌情報データベースの新しい形を模索する：石井米雄コレクションとトルキスタン集成の事例から」開催
- 2015年 2月13日 第3回協議員会
- 2015年 3月31日 押川文子教授退職
- 2015年 3月31日 福田宏助教離任（愛知教育大学地域社会システム講座講師）

京都大学
地域研究統合情報センター年報2015(第9号)

発行日 2015年6月30日

発行者 京都大学地域研究統合情報センター
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL : 075-753-7302 (代表)
Fax : 075-753-9602
<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

印刷 株式会社 田中プリント
〒600-8047 京都市下京区松原通藪屋町東入
TEL : 075-343-0006
Fax : 075-341-4476

Annual Report 2015



Center for Integrated Area Studies, Kyoto University

京都大学地域研究統合情報センター年報2015(第9号)

発行日 2015年6月30日

発行者 京都大学地域研究統合情報センター

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

TEL:075-753-7302(代表)

Fax:075-753-9602

<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/>

CENTER FOR INTEGRATED AREA STUDIES, KYOTO UNIVERSITY